

夕焼けと不良少年【完結】

shinp

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

バンド活動を認めない父との親子喧嘩で飛び出した美竹蘭が辿り着いたのは不良集団がたむろしている路地裏だった。

捕まり、連れてこられた先にいた不良グループのリーダーは昔別れ、音信不通になっていた幼馴染みだった。これは、過去の傷を隠す幼馴染みに蘭がバンドメンバーと共に寄り添おうとする物語である。

※某少女漫画に影響されて、もしも舞台が違う場所でやったらどうなるか×バンドリで自分好みの設定のオリ主が居ないので書いてみるか！で、悪魔合体して出来た作品です。

目次

1話	再会	1
2話	変化	8
3話	悩みの種	13
4話	傷	21
5話	女子高の七不思議(前編)	27
6話	女子高の七不思議(中編)	34
7話	女子高の七不思議(後編)	40
8話	玲と昇太(前編)	48
9話	玲と昇太(後編)	54
10話	鬼	62
11話	祭り	66
12話	黒豹の狩り	75
13話	喧嘩	82
番外編	モカ誕生日	92
14話	トラウマ	97
15話	フリオウとブシ	106
16話	ホラー鑑賞／豪雨のある日	114
17話	捨て子(前編)	120
18話	捨て子(後編)	125
19話	風邪	131
20話	合同合宿(前編)	139
21話	合同合宿(中編)	149
22話	合同合宿(後編その一)	158
23話	合同合宿(後編その二)	168

24話	合同合宿（後編その三）	176
番外編	ひまり誕生日	185
25話	由美、合同ライブに行く。	194
26話	迷惑な配信	203
27話	コミュニケーション大作戦（前編）	215
28話	コミュニケーション大作戦（後編）	222
29話	いつも通り	233
30話	暗雲	242
31話	過去	255
32話	少しの変化	265
33話	狼煙	275
34話	反撃	283
35話	危機	297
36話	思わぬ助っ人	308
番外編	つぐみ誕生日	318
37話	屋上で	329
38話	新たないつも通りへの一歩	340
39話	幼馴染みを知るために（前編）	348
40話	幼馴染みを知るために（後編）	358
41話	自由へ	374
42話	アキレウスの踵	386
43話	決戦前夜	409
44話	戦い	426
45話	決闘	438
46話	戦いの結末	446

47話	夕焼けと…	452
最終話	新年	469
番外編	蘭誕生日	488
番外編	巴誕生日	505

1話 再会

「おい、お前さん、どこのシマの奴だ？」

やってしまった。美竹蘭は心のなかでそう吐き捨てた。

幼馴染みとクラスが別になってしまった自分の為に結成したバンドを認めない父と喧嘩して飛び出して行く宛もなくふらついていたら花咲川の危険人物がいると言われている路地裏に入ってしまったのだ。逃げようとしたが地の利がある不良グループに先回りされてしまい今囲まれて尋問を受けている最中だ。

「だんまりか。どうする？」

「んー、ボスに頼るしかないかあ。」

どう逃げようか考えている間に段々不良たちの間で話が進んでいく。流石にヤバいと思い逃げだそうも後ろもガツチリと固められて逃げ出せない。

「よし、じゃあお前。今からボスん所に行くぞ。逃げようなんて変な気起こすなよ？」

路地裏の先にある雑居ビルに連れて来られた蘭は死を覚悟した。

「ボスーボス、怪しい奴が入ってきたんで連れてきたぞー！」

「おう。今行く。」

ボスと呼ばれた人物の声を聞くまでは。

「…え？」

現れたのは濡れ鳥の羽のような黒髪に整った顔立ちで色気がある、他の部下と同じ不良とは思えない美少年だった。その顔に蘭は覚えがあった。

「あんた…玲!？」

蘭に玲と呼ばれた少年も蘭の顔を見て目を見開いた。

「お、お前もしかして、美竹蘭か!？」

「いやー、驚いたな。お前がこんな所に、それも髪の毛に赤メツシユなんか掛けているなんてな。イカしてるぜ。」

小学生の頃、見せてくれた笑顔そのままの玲は蘭に炭酸飲料のペットボトルを冷蔵庫から出してもてなしていた。後ろでは不良たちがひそひそ喋っているのが聞こえる。

「それはごっちの台詞。あんた小学校卒業目前で別れて以来今まで何してたの？連絡も寄越さなかったじゃん。」

蘭がいつも通りに喋ると後ろで覗き見ている不良たちがざわつく。蘭の耳に届いたのは「マジかよ…。」とか「タメじゃねーか…。」とか。驚きと戸惑いの声だ。

「それを話すと長くなるな。まあ、早い話が中学中退だ。」

ホントに何があったんだ。蘭の頭の中はその言葉で一杯だったが、玲は笑顔を浮かべてる辺り気にもしていないようで今これ以上聞いても何も出てこなさそうだ。

「それで、蘭はどうしたんだ？こんな時間にふらつくとかお前の頑固な親御さんが許可するとは思えないけどな。」

その言葉に蘭はさつきまで衝撃的な事が起こったので忘れていた事を思い出した。

「…別に。あんたには関係ない。」

目をそらしながら答える蘭。今その事を話したくなかったのだ。

「…そうか。じゃあ深くは聞かねえよ。俺がいない間、他のみんなはどうだったんだよ？モカとか巴とかひまりとかつぐみとか。良かったら聞かせてくれ。」

「…まあ、それくらいなら。」

蘭は玲に促され幼馴染みたちがバンドを結成したことを話すと玲は前のめりになって聞き入った。この時の顔は昔と変わらないなと思えば蘭は笑みを溢す。

「はは、そうか、みんなもお前も色々やってんだな…ライブはいつやるんだ？」

玲がバンドの事に聞いてくるまでは。

「それは…。」

「…もしかして、親が認めてくれないとかか？」

玲に言われて凶星になり、ポツポツ話始める。蘭の親は古くから続

く華道の親元で口煩くバンドを辞めて後を継げと言われ続けて来たのだ。他のメンバーと喧嘩して、仲直りして、つぐみが倒れたりと色々あったりもしたが父親に演奏を聞いてほしいと言っても聞く耳持たずだったのだ。

「…そうか。そりゃあ、辛かったな。」

「アタシ…アタシもうどうしたらいいのか分からなくて…。」

「蘭。お前のバンド、Afterglowはお前のために結成されたバンドだろ？じゃあ、モカたちを巻き込んでしまいな。」

「でも、これはアタシの家の問題だから！アタシが解決しなきゃ…！」身を乗り出し反論する蘭に玲はデコピンをした。蘭はデコピンをされた箇所を両手で覆いながら玲を睨み付ける。

「何すんの…!?!」

「落ち着け蘭。華道を継ぐ継がないは確かに家の問題だが、バンドを辞める辞めないはお前だけの問題か？もう一度言うぜ？お前のために結成されたバンドだ。お前一人で解決できなかつたらモカとかひまりとかつぐみとか巴とか巻き込んでしまいな。」

そう言われた蘭は黙って座る。

「あの、ボス。」

話しに区切りが着いたところで部下が蘭の携帯を持って現れた。

「どうした？」

「この子の携帯から着信がずっと来てるんすけど、どうしましょう?」

玲は部下の報告を聞くと蘭にどうするか目で問う。

「…出て。まだ気持ちの整理がついてない。」

やはりまだ踏ん張りがつかないのだろう。そこは昔と変わらないなど肩を竦めつつ玲は部下に携帯を自分に渡すよう手で示して受け取った後、ここは俺と蘭の二人きりにしてくれと言うと部下は外で様子見していた他の部下を掃いていってヒソヒソ声が聞こえなくなつた後、通話ボタンを押し、スピーカーに切り替えた。

「蘭！蘭！聞こえるか!?今何処にいるんだ!?!」

スピーカーから聞こえる父親の声に蘭はぎよつとする。玲の顔はフツと笑みを浮かべている。確信犯だ。

「だ、そうだ娘想いのいい父さんじゃん。」

「信じられない！何でスピーカーにしたの!?!」

「今、男の声が聞こえたぞ!?!蘭！大丈夫…あ、君!」

「蘭ちゃん！男の声が聞こえたって…！大丈夫なの!?!」

「…つぐみ。」

「蘭！聞こえるか!?!おい、電話出た奴！蘭に何かしたら許さないからな!」

「らくん。モカちゃんは心配なんだよ。」

「蘭！大丈夫!?!何かされてない!?!」

「…。」

次々と掛けてくる幼馴染みたちの心配する声で視線を下に向ける蘭に変わって玲は携帯を手に取り話しかける。

「…あー、もしもし？俺は蘭を保護したものだ。蘭は大丈夫だ。でもどうしてこうなったのかちよつと蘭の親父さんと話してみたらどうだ?」

「…あれ?…この声、もしかしてれー」

モカの声が玲を特定しかけた所で玲は慌てて通話を切った。

「…侮れないなモカの野郎。」

玲が久しぶりに会って初めて動揺した顔を見た蘭はクスツと笑う。
「やっぱアンタも変わってないよ。モカには弱いところとか。それじゃあ正解ですって言ってるようなものじゃん。あとモカは野郎じゃないよ。」

「あいつは掴み所がないから苦手なんだよ…。」

参ったと言った感じに頭をかく癖も昔と同じで蘭の緊張はほぐれた。

「…ほら、どうするんだ?戻るのか?戻らないのか?」

玲は狼狽えた所を見られて恥ずかしいのか話を進める。蘭の答えは決まっていた。

「戻るよ。あそこはアタシの居場所だもん。」

「そうだな。じゃ、送るぜ。もう夜遅いし夜道に一人じゃ変な虫が来るかも知れないしな。」

「…ありがと。」

夜道、空には星空が煌めいている下で玲と蘭は二人で歩いていた。他愛のない思ひ出話をしながら歩いていると問題が来た。

「ねえ、そのカワイコちゃんたち。どこ行くんだ？」

いかにもナンパしに来た柄の悪い男が話しかけてきた。玲は男のはずだが美少女と見間違う風貌と体つきのせいで間違えられたらしい。玲は蘭の制服の裾を引っ張り無視するよう促し、蘭もそれに従った。

「あれ？無視なんてひどくね？ちょっと俺と楽しんじゃいなよ。」

しつこく付いてきて蘭はイラついてきたがそれでも玲は無視している。むしろ蘭を守るように男との間に入って蘭に絡まないようにしていた。男の手が玲の腕に触れた瞬間、

「汚ねえ手で触ってくんじゃねえ！クソ野郎！」

裏拳を放ち、男の顎を殴った直後に足と足の間蹴りを入れた。

男は何が起こったか分からないまま金的を食らい、白目を向いてうずくまってしまった。いきなり躊躇なしの流れるような反撃に出た玲に蘭は啞然とした。

「ね、ねえ、やりすぎじゃ…。」

「大丈夫。気絶させたただけだ。それに、あいつの股、蘭を見るとき膨らんでいたし、目がやる目だったからな。」

何でそんな事が分かるのだろうか。あの小学生の頃の突然の別れの後、彼の身に何があったのか。疑問は尽きなかったが今は答えてくれないだろう。黙って玲の後を付いていった。

「あれがお前ん家だろ？」

玲が指さした先にはいつもの、でも深夜にも関わらず居間に電気が点いている我が家だった。

「変わってねえな。ま、華道の本家の家だ。早々変わることはないだろ。」

玲は適当な感想を言うのと踵を返した。

「待って、行かないの？モカとひまり、つぐみと巴もアンタに会いたがってるんだよ。」

「…あんまり徹夜明けはしたくない主義なんぞな。じゃあな。またどっかで会おうぜ？」

振り向くことなくひらひらと手を振って夜の闇に消えていく玲の後ろ姿を見ていると蘭はもう二度と会えないような気がした。思わず呼び止める。

「待って、玲。今日あったことはモカたちにも話すからね。だからあんたも、アタシたちのライブに来て。」

蘭は玲に駆け寄りライブのチケットを玲の手に渡す。玲は黙って蘭の話聞き、チケットをポケットに突っ込んだあと言葉を返すことなく闇の中へと消えていった。蘭は姿が見えなくなるまで見送った。

(受け取っちゃまったなあ…。)

玲はポケットに突っ込んだチケットを手で弄びながら愚痴った。

(もうあいつらとは住む世界が違うってのにな…。ああくそ、何で今になって思いだしちまうんだ?)

「おい！見つけたぞてめえ！」

「あ？」

玲は不機嫌な声で振り返ると先ほど気絶させた男がいた。よく見ると内股になっている。

「あー…もつと強めに蹴つといた方が良かったか？」

「ふざけんじゃねえ！俺の股を蹴ってくれた礼をしてやる！」

男は逆上してナイフを取り出した。だがそれに対する玲の態度は全く変わらなかった。

「あーらら、そんなもん出しちゃって。ビビると思ってるの？」

「ナメてんのかてめえ…！ぶっ殺してやる！」

男が恐喝すると玲の目の色が変わった。

「殺す？…へえ、殺す。それはマジで言ってるの？」

相手をからかうような声から底冷えするような低い声に。顔は

笑っているが目は笑っていなかった。しかし、頭に血が昇っているのか様子が変わったことも気付かないまま男は怒鳴る。

「ああ!?!当たり前だろが!」

「…殺すつてのはな。」

玲がそう言った瞬間、男の懐に入り腹にボディブローを叩き込んだ。突然の衝撃に男は思わずナイフを落としてしまう。落としたナイフを拾おうと屈んだ瞬間、顔面に蹴りを入れられた。歯の何本かは吹っ飛び、口と鼻から血が出て男の顔が赤く染まる。

「こうやるんだよ。」

そう言っつてナイフを拾い笑いかける玲の姿を見た男は戦意が消失し、今になって後悔した。

翌朝、道の真ん中でボコボコにされ白目を向いてズボンを濡らし気絶していた男が発見され、病院へと搬送されたがそれは別の話である。

2話 変化

ガルジヤムにやって来た玲はライブ会場で親友かつ商店街の若きホープの蓮昇太と駄弁っていた。主に昇太が話しかけてくるのを返しているだけだが。

「いやー、まさかお前が巴の幼馴染みだったなんてな。ビックリしちまったぜ。」

「別に、話すことじゃないと思っただけだ。」

「全く、素直じゃねーなお前。」

「うるさいな。ん、次か。」

ふとチラシのプログラムに目を落とした玲は次のバンドがAfterglowなのに気付き、前を向く。すると昨日見た顔と小学生以来見ていないメンバーがいた。

「お、来たぜ。」

「分かってる。」

蘭が一呼吸をおいて演奏が始まると玲は目を見開いた。ずっと聞いている。そう思えるほどの力強い演奏が玲の心を、会場を、突き動かしていた。隣にいた昇太もノリノリになってきている。

(…はは、何がいつも通りだよ…。お前らも随分変わったじゃん。)

玲の口角が上がる。それほど玲に心地よい音楽が流れる。そして最後の曲を歌い終わったとき、蘭と目が合った。蘭は少し驚いたような顔をして笑みを浮かべるとステージを後にした。

「ビュービュー！いやー、最高だったな！流石蘭ちゃんだ！」

昇太は熱が冷めないのかまだ興奮している。

「…さて、帰るか。」

「ああ、そうだ…って帰るう!？」

「?どうしたんだ？」

「お、おいおい、蘭ちゃんたちとは会わねえのか？」

「俺とあいつらとは住む世界が違うんだよ。あいつらは輝いている。こうやって大勢の人から称賛を受けている。それに対して俺は日陰者。疎まれる存在だ。どうやって交わらねえだろ？」

「まあたお前はそう言つて…。あのな、今のステージはける時の蘭ちゃんの顔見たか？あれは多分お前の感想聞きたいんだよ。だつたら行つてやったらどうだ？どうせ場所もバレてんだろ？」

昇太の言うことも一理ある。蘭には自分の居場所を知られてしまっているので今行かなかつたら後でAfterglowのメンバーで突撃してくるかも知れない。そう考えた玲はガリガリと頭をかくと面倒くさそうに言つた。

「…わあつたよ。行けば良いんだろ？行けば…。」

そう言つて会場を出て渋々昇太と一緒にAfterglowの楽屋へ向かう。通路を歩いていると昇太が不意に足を止めた。

「あ。」

「どうした？」

「あの着物のおっさん…蘭の親父さんだ…。」

「…呼んでたのか。」

玲たちの前に行く蘭の父親の顔には厳格ながらも穏やかな笑みが見えていた。

「む、君たちは…。」

蘭の父親がこちらに気付く。それに対し昇太は軽く、玲は頭だけを下げて挨拶をする。

「どーも、蘭の親父さん。」

「…どうも。」

蘭の父親は二人の前で止まると玲に視線を向けた。

「玲くん。見ない間に大きくなつたな…。それと、うちの娘を、無事帰してくれてありがとう。」

「…俺はそんな大層なこととはしてないですよ。」

「いや、せめてお礼は言わせてくれ。そして、蘭たちをこれからよろしく頼む。」

「…考えときます。」

少し会話をしたあと、蘭の父親は去つていった。

「何か満足そうな顔してんな。あの堅物親父さんがああいう顔するつてこたあ蘭ちゃんのバンド活動認めたつてのか？」

「さあな。」

玲はそう言つて楽屋のドアに視線を向ける。すると昇太が玲に Afterglow のメンバーがいる楽屋のドアを開けるようジェスチャーを送る。

「さ、玲、お前から入りな。」

「…は？」

「幼馴染みたちとの久しぶりの再会だ。行きなよ。」

「…分かったよ。つたく、お前は俺の保護者か？」

昇太に促されドアノブに手を掛け、意を決したように開ける。

ドアの開ける音に振り向く面々、そして玲を見て蘭以外の全員が固まる。

「…その、良いライブだった。じゃ。」

すぐに閉めて帰ろうとした瞬間、昇太にドアを顧客を逃さまいとするセールスマンのごとく足で止められてしまう。

「つて、ちよいちよいちよい！何帰ろうとしてんだ!？」

「おー…、れーくんだー。」

「れ、玲？」

「玲くんだ…。」

「蘭から聞いてたけど戻ってたんだな…!」

モカ、ひまり、つぐみ、巴が呟く。

「よっ！巴！今日こいつと一緒にライブに来てたんだが見ての通りでな！付き添ってきちゃったぜ！」

「昇太!?!お前、玲といつ知り合つたんだ!?!」

「昇太さんそれ私も知りたい！」

「ど、どうどうどう。俺、聖徳太子じゃないから落ち着け。」

「お、落ち着いてひまりちゃん、巴ちゃん！昇太さん困ってるから！」

昇太に詰め寄る巴とひまりにつぐみがなだめる。そんな中、モカは玲の方に近づいて話しかけていた。

「れーくんおひさ〜。」

昔と変わらないテンションで話しかけるモカ。そんなモカに苦笑いをする玲は久しぶりと返す。

「変わんねえな、お前。」

「れーくんはかつこよくなったねえ。」

「玲。その、アタシたちのライブはどうだった？」

「さつき言っただろ。良かったって。」

「駄目。それだけじゃ足りない。父さんの方がもつと感想言っただ。」

「あー…、その、最初はそんな期待はしてなかった、けど、蘭が歌い始めた瞬間にすげえって思ったよ。お前たちは変わってないかと思っただけど、あれほど観客のハートがっちり掴めるほどになってるとは思わなかったよ…。…以上だ。」

辿々しく感想を言い終わると蘭は赤くなっていた。

「…ありがとう。」

「おう。蘭が赤くなっておりますな。」

「何でリーダーのお前が赤くなるんだよ…。」

「う、うっさい！それと、アタシリーダーじゃない！」

「は？てつきりボーカルのお前がリーダーだと思ったんだが、違うのか!？」

「玲！私だよ！リーダーはあ！」

「え、ひまり？お前がリーダーなの？嘘だろ？」

「もー！玲の意地悪う〜！」

ひまりが頬をフグのように膨れると他のみんなが笑い合う。その様子を眺めていた昇太はふと、玲の方を見ると思わずサングラス越しの目を見開いた。

（あいつ…あんな顔もするのか…。）

無邪気に笑うその顔は年相応とも言っても良いほどの笑顔だった。その顔はこの町に来てから昇太が見せたことがない顔だった。だが、それも一瞬だけ。すぐに元の顔に戻り踵を返す。

「じゃ、お前らと出会えて良かったよ。またな。」

「あ…！」

蘭が待ったをかける前に玲は楽屋を出ていった。

ライブハウスを出た玲は一人公園のベンチで黄昏ていた。

（全く、こんな下らねえやり取りで笑ってしまうなんてな。俺も変わってないって事か。）

ふと、自分が今いる公園が昔の記憶と被った。

（そういや、昔みんなと公園で遊んでいたな…。あの頃の俺は…止めよう。思い出したら余計苦しくなる。）

玲は臭いものに蓋をするように頭を降り、立ち上がると自分の住処である雑居ビルへと歩いていった。

3話 悩みの種

日曜日。それはこの現代社会において殆どの者が仕事を休み、各々の時間を謳歌する日である。玲は自宅兼不良の溜まり場である雑居ビルの最上階の一室にあるベッドで寝転がって昼寝をしていた。休日以外の日は花咲町のあちこちを歩き回って昇太と共に商店街のパトロールに勤めているが今日は非番だったのでこれを好機にと寝転がっていたのだが：

「ボ、ボス……」

申し訳無さそうに入ってくる部下。思わず不機嫌になり睨み付ける。

「……何だ？俺は緊急時以外は居留守にしろと言っただろ？」

「あ、あの、氷川の奴がまた……」

部下が報告を入れようとした瞬間、部下をすり抜け水色の髪の少女が飛び込んできた。

「あー！やっぱりいた！玲くーん！遊びに来たよー！」

「……………お前か。」

飛び込んできた少女は玲を見つけると笑顔で近づいて来る。その少女を見た玲はまるで諦めたかのように溜め息を吐き、起き上がる。

少女の名は氷川日菜。所謂天才少女であり、玲にとっては悩みの種でもある。

そんな二人の初会合は玲の気まぐれだった。

玲が偶々いつもとは違う散歩ルートに入った時、人目に付かない路地裏で揉め事のような声と音が聞こえた。

「やだー離してよーヘンタイー！」

それは氷川日菜が複数の男に地面に押し付けられている風景だった。

「うお!?こ、こいつ、暴れんなつての!」

「威勢が良いねえ。こういう娘を力づくで振じ伏せてやるのって興奮するんだわ俺。」

「俺、どっちかってーとあの逃げてったギャルの娘が良かったかなー。何か美味しそうじゃん?」

「な、あんたたちー!リサちーにも変な事したらタダじゃおかないよ!今にリサちーが助けを呼んで:!:」

日菜が脅しを掛けようと開いた口に指が突っ込んできた。

「何がどうタダじゃおかないんだ?ええ?」

(ヤバい:アタシ、どうなっちゃうの:?:怖いよ:助けてお姉ちゃん!)

日菜が姉に助けを求めたその時、それは現れた。

「あんたらさあ、一人の女の子に複数人とか恥ずかしくないの?」

日菜も男たちも、声がした方に向けてと、そこには黒髪で中性の美少年が呆れた白い目で男たちを非難していた。

「あ?何だお前。」

日菜を押さえつけていた一人が近付く。

「俺らのお楽しみを邪魔すんなよ男女が:!:」

突然現れた少年に一番近かった男が脅迫しようとして近づいた男が突然崩れ落ちた。他の男は何が起こったか分からなかったが日菜には見えていた。

(この人:急所を蹴ったんだ!)

「な!?:て、てめえ!」

仲間がやられた現実に気づき我に帰った他の男が少年に襲い掛かる。

だが、少年は表情を変えることなく襲いかかってきた男たちをまるで昔見たカンフー映画のように殴って、蹴って、倒していく姿に日菜はまるでヒーローショーを見てるような気分になった。

すると、残った男がナイフを持って日菜の首元につき出した。

「う、動くなあ!こいつがどうなってもいいのか!」

人質を取って場を乗りきろうとしている男に玲はあっさりと手を

止めた。

「よ、よーしいいぞ…動かすよ…?」

男は玲が抵抗しないと云わんばかりに両手を上げる姿に安心して
いたが日菜は疑問をもった。

(どうして急に手を止めたんだろ…。)

「いいか!そこから一步でも動いたら刺すぞ!本気だからな!」

「ああ、言われなくても分かってるよ。俺は一步も動かさねーよ。俺は
な。」

そう言った瞬間人質を取っていた男が突然倒れた。

「はあ、お前な。せめて俺の到着を待てよ。」

男の後ろ、別の道に続いている所から鉄パイプを持ってサングラスを
掛けた青年が友人のリサを連れて現れた。

「日菜!大丈夫?変な事されなかつた?」

リサが呼び掛けると日菜は笑顔で大丈夫だと伝えた。

そして玲に向き直る。玲は首をかしげていると日菜は目を輝かせ
ながら玲に迫ってきた。

「ねえねえ!きっきのヘンタイたちをばったばった倒してるのすつご
いるん♪って来たんだ!アタシにもどうやったらそんな護身術身に
付けられるか教えて!」

全く怖じ気づかず伸びている男たちを踏みつけながら距離を詰め
て来る日菜に玲は思わず後退りした。

「お、おい、近い。近いから離れろ。それにそんな簡単に身に付くも
んじゃないぞ。おい昇太!何見てんだ早くどうにかしろ!」

まるで羽虫を払うかのように手で制する玲にもお構いなしに詰め
寄る日菜。そして全く加勢に出来ない親友を呼ぶ。

「はっはっは、何だお前、日菜に気に入られたな。悪いが俺には止めら
れねえよ。」

「てめえ、後で覚えてろよ!」

この時、玲はこいつは助けられない方が良かったかも知れないと思った。自分がゆっくり休む時に限って突撃してその度に突っぱねていたが全く諦める様子はなく、一度自分しか知らない逃走経路を作り日菜が来る前に逃げ出した事もあったがあっさり逃走経路の隠し場所を見破られ捕まったこともあった。

遂に折れた玲は好きにしろと言って過去習った護身術や人体のどこのツボを叩けば無力化できる事を教えてやると瞬く間に2、3日でマスター。自分の部下の不良たちを実験台に無力化するまでに至った。それ以降、玲は必要以上の事を教えるのを止めようと誓った。あれは天才だ。凡人には至ることも理解することもできず、また彼女も凡人の考えや境地を理解できないギフト。もし必要以上教えてしまえば誰も止められなくなる怪物。それが彼女なんだと。

「それで、今日は何の用だ？居眠りしてる俺を起こしたんだ。それなりの訳があるんだろ？」

面倒くさそうに玲が喋ると日菜は元氣よく答えた。

「うん！今日ねー、玲くんを落としたいなーって。」

「…誤解される言い方はよせ。」

どうやら習った武術や護身術で玲を倒したいらしい。おそらく自分の部下だけでは物足りなくなっただのだろう。

「俺にやるより、昇太の方がいいだろ。」

あっさりと親友を売る。

「えー、昇太君はいい人だけど全然るん♪って来ないもん。」

さらっとデイスられる親友。

「はあ、じゃあちよつと待ってる。着替えてくる。」

「うんー下で待ってるよー！」

日菜はそう言うのと部屋を飛び出して行った。そんな日菜を見送った部下が疑問をぶつける。

「ボス、俺が言うのもなんですけど何でつまみ出さないんすか？近づいて来る奴ナイフとか威圧やらで脅してるじゃないすか。」

玲は部屋着から動きやすい服装に着替えながら部下の疑問に答え

る。

「…俺に近づく奴は俺のおこぼれにあやかろうとする奴か不意打ちで名を上げようとしてる奴、それかお遊びがほとんどだ。だから俺はそういうやからには失せろと言ってるんだがあいつは違う。お前も見たる？あいつには純粋な好奇心と興味しかない。脅しても良い理由にはならないし多分本気で脅してる訳じゃねえのも見抜かれるかも知れない。お前だって俺がいないって言ってもあつさり見抜かれたんだろ？」

「…そつすね。即答で嘘だつて返されたつす。」

「まあ、あいつが俺に組み手挑んだ事を後悔させてやるさ。いくら天才でも俺には敵わねえ事を教えるつもりさ。」

「相手は女の子つすから程々にしてくださいつすよ。」

「そう言つてあつさり気絶させられたのはどこの誰だ？」

「…ボス、ひどいっす。」

「…蘭。ここが、玲の家？なんだよな？」

afterglowのメンバーは玲の家兼不良の溜まり場の雑居ビルに来ていたが入口に不良がたむろしており近寄りがたい雰囲気醸し出している光景に巴が蘭に確認する。

「うん、見た顔もいるし、あのビルだから絶対ここだよ。玲の家。」

「で、でも怖い人がいるよお…。」

「ひ、ひまりちゃん、多分、話しかけてみたら案外いい人かもしれないよ…。」

「そう言ってるつぐも震えてるよ…？」

「とりあえず、アタシが話してくるから。待ってて。」

「ら、蘭！気を付けろよ！」

巴の心配を背中受けて止めながら入口にたむろしている不良に近づいていく。その内の一人の顔は玲と再開した夜、引き合わせた不良だったので覚えているだろうと思ったのだ。

「や、やっぱり不安だよ…。」

ひまりがそう呟く。

「だな。やっぱりアタシも一緒に…」

巴も蘭一人だけに向かわせるのが不安だったようで一緒に行こうとしたとき後ろから声をかけられた。

「お前ら何やってんの？」

「ねえ。玲はいる？」

蘭が意を決して話しかけると見覚えある一人が（え？来たの？）と言いたげな顔をしていたが見覚えのない不良が噛み付いてきた。

「ああん？何だてめえ。ボスに何の用だ？」

凄んで来る不良に一瞬引き気味になるがすぐに言い返す。

「アタシは玲の幼馴染みの。ここにいるんでしょ？」

「てめえ…どこのシマの者か知らねえがボスは生憎手が離せねえ状況だ。用があんなら俺らが聞くぜえ…？」

「お、おい、よせ。」

指の骨を鳴らしながら詰め寄る不良。見覚えがある不良がなだめるも一触即発の状況に他の声が聞こえてきた。

「おい、そこまでにしときなよ？こいつは真正正銘、玲の幼馴染みだ。」

声が出た方を見ると昇太がいた。その後ろにはモカたちがいる。

「しよ、昇太のアニキ！え、マジですか？」

「ああ、それとも何だ？玲の親友である俺の言葉が信じられないってか？」

「め、滅相もないです！」

「コロッと態度が変わった不良にモカは「ほく。」と言う。

「すごいですな。しよーくんは。」

「へっ、もつと誉めても良いんだぜ？」

「うーん、今の発言はすごくないかも。」

「ひでえ!?ま、まあ、それは置いといてだ。今、玲はいるか？」

昇太が不良に話しかけると不良たちは互いに気まずそうに視線を合わせた。昇太が首を傾けていると不良の一人が口を開いた。

「その…、今は止めといた方がいいかと。」

「あ？何でだ？今日特に何も無いだろ？」

「と、とにかく、昇太のアニキでも今はダメです！帰ってください！」
必死に帰るよう促す不良に蘭は疑いの目を向ける。

「怪しい…。邪魔するよ。」

「あ、ちよつと！」

ずかずかと入っていく蘭に不良が呼び止めるも蘭は歩みを止めない。
い。

すると二階の一室に叫び声が聞こえた。そのドアの前には見張りがいた。

「ちよつと。アタシたち玲に会いに来ただけだ。」

「あ、あんたは…いいいや、今は、ダメっすよ。ホントに。」

「聞き覚えのある悲鳴が聞こえるんだけど玲はこの中にいるんだよね？何やってんの？」

「い、いやあ、そのお…。」

妙に歯切れが悪い部下に蘭は詰め寄る。追い付いた昇太は聞こえてくる悲鳴を聞いて察した。これは蘭には見せられないと。

「とにかく何やってるか見せて！」

蘭が見張りを押し退けその扉を開けると

「痛い痛い痛い！そこは止めてよ玲くん！」

「いや、止めねえ。俺の安眠妨害した罰だし、組み手で俺に負けたから妥当だろこれは。そろそろ、ここか？ここが痛いんだろ？」

「っくく!？」

日菜に足つぽマッサージをして笑ってる玲がいた。しかも、日菜はミニスカートを履いているため玲が足の裏のツボを押す度に悶えると同時にスカートがはだけて前部分にリボンがついた可愛い水色と白のストライプショーツが見えている。

「…何してんの？」

そんな光景を見た蘭は低い声で玲に話しかける。声を聞いた玲は手を止め錆び付いた機械のようにゆっくりと振り返った。

「…蘭？」

「あ、蘭ちゃん！やつほー♪」

この世の終わりかのように固まる玲と対称的にいつも通りに話し

かける日菜。玲は死を覚悟した。

「最悪、アイドルをいじめてしかもスカートの中丸見えにさせるとかひどいでしょ。最低。クズ。変態。鬼畜。サディスト。」

「玲、お前一回絞られてみるか…?」

「玲のバカ!あの時変わってないって思ってた私を返してよ!」

「れーくんにそんな嗜好があったなんてモカちゃんは悲しいよ。よ
よよ。」

「玲くん…流石にこれは、私も擁護できないかな…。」

「い、いや、待て。これには訳があつて…」

「言い訳なんて聞きたくない。」

「ま、まあ待て蘭。こいつと日菜はあんたらが想像してる関係じゃないから…。」

A f t e r g l o wのメンバーに囲まれ、縮む玲を見かねた昇太が助け船を出す。

「アタシたちは玲に話してるの。邪魔しないで。」

「うい…。」

「あはは、こんな玲くん初めて見たかも!面白ーい!」

あつさり引き下がる昇太に他人事のように笑う日菜。結局最後は玲が高級スイーツを奢ることで許してもらったのであった。そして、A f t e r g l o wには怒らせないようにする事を玲の不良グループ暗黙の掟となった。

4話 傷

夢を見ている。これは昔の自分だ。裸に近い状態でベッドに寝かされ、照明を当てられ、沢山のカメラに向けられている。そこに一人の男が部屋に入ってきた。下卑た笑みを浮かべた脂ぎった偉そうな中年男性だ。

(あれが今日の相手か…。)

そう思ってるうちに男が脱ぎ、息を荒げながら覆い被さってきた。

目を覚ます。この花咲町に来てからよく見かける天井だ。

(…久し振りに、見たな。)

玲は天井を見ながらそう思い返した。昔は繰り返すように見ていた悪夢、トラウマ、汚れた過去。そのせいで全く眠れない時期もあつたりしていた。だが今は見るものが少なくなった。正確には、蘭たちと再会してから。

(まさか、俺は蘭たちに救われているのか? いや、そんな事はないだろ。偶々この町に来て懐かしいからだろ。)

玲はそう自己完結すると寝間着から着替えて見回りを兼ねた散歩に出た。

昼はそれほど気を配る必要はないが放課後になる夕方は気を引き締める。一人で下校していたり、女の子を狙ったナンパを止めたりするためである。

商店街の人通りが少ない路地を中心に見回り、怪しい者がいないか目を光らせる。その時、玲は後ろから来る気配を感じた。

「玲くん?」

気配の正体は玲の幼馴染みの一人、羽沢つぐみだった。玲は声を掛

けられ振り向く。

「やつぱり、玲くんか。見回りをしてるの？」

つぐみは笑顔で隣に駆け寄ると玲は歩く早さをつぐみに合わせる。

「ああ、そんな所だ。つぐみは何だ？今日バンドの練習はしないのか？」

「今日は生徒会のお仕事があったから、このまま帰るかな。」

「へえ、俺の記憶が確かならつぐみはしっかり者だからこの後すぐバンドの練習に行くかと思ったら意外だな。」

「あはは…前、ツグリ過ぎて倒れちゃったから…。」

「ツグリ過ぎて？」

突然出てきた謎の単語に玲は首をかしげる。

「あ、今のはモカちゃんが作った言葉で私が忙しい時の事をツグってるって言ってるみたいなの。」

「プ、アハハハ、なるほど、よく分かったよ。モカのセンスも中々だな。」

玲が笑う表情が昔と変わらないのを見てつぐみは内心ホツとする。

（良かった…何だか美人になって別人になっちゃったかなって思ったけど蘭ちゃんの言う通りだ…。この笑顔見てたら安心しちゃった…。…ってあれ？急にどうしたんだろう？）

急に玲の表情が笑顔から険しい目付きに変わった。その目はまるで獲物を狙う豹の目のようだ。

「れ、玲くん？」

「つぐみ、後ろを振り向かず俺についてこい。」

そう言いながら足早に曲がり角へ歩く玲。つぐみは慌てて後を追いかける。曲がり角に入ると今度は玲がUターンしてつぐみの横を通り過ぎた。突然の行動につぐみはどうしたのか聞こうと振り向いた瞬間。玲の前に知らない太った男性が飛び出して曲がり角を曲がろうとしていた。

「何か用？」

驚く男に玲は問い掛ける。その声はさっきまでつぐみと話していた時とは全然違う冷たさを感じる声だった。

「く、くそ！ボクのつぐみちゃんだぞ！何近づいてんだ！」

男は訳のわからない事を言いながら玲に殴りかかろうとした。だが、玲は殴ろうとした腕を掴んで一本背負いで倒し、関節技で固めた。「い、痛い痛い痛いいいい!!」

じたばたもがく男。片手で押さえながらも片方の手で淡々とスマホに連絡を入れる玲。つぐみは状況の目まぐるしい変化に付いてこれず混乱する。

「え？ええ？玲くん？え？あの、どちら様ですか？何で私の名前を…？」

「つぐみちゃん助けてえ！」

男は自由なもう片方の手をつぐみの足に伸ばして助けを請う。思わず引くと後ろやさつき通った道から不良たちがつぐみを守るようにやって来た。

「ボス！こいつがそうっすね！」

「ああ、連れてけ。後で確認のために被害者を呼び出して面会させとけよ。」

不良と玲の間で話が進んでいく。つぐみは取り残されポカンとしていると男は不良たちに立たされ連行されていった。男は最後までつぐみに助けを求めていた。

「あ、あの、玲くん？何がどうなってるの？あの男の人は一体…？」

つぐみが混乱しながら聞くと玲は置いてけぼりにして悪かったと謝った後、説明を始めた。

どうやら先程の男はストーカーの変質者らしく、数人の女性の下着を盗んでいたらしい。どうやら次はつぐみを標的に入れていたとのこと。説明をしている内に二人は羽沢珈琲店の前に辿り着いた。

「そ、そうなんだ…。狙われてたんだ私…。あ、ありがとう玲くん。」
「別に、鬱陶しかったただだし、ちよつと仕事をしたただけだ。じゃ、俺はここで。」

そう言いながら玲はつぐみの横を通り過ぎ、夕日に向かって歩いていった。その後ろ姿を見送るつぐみは今日見せた玲を思い出す。昔

から変わらない笑顔。獲物を狙う猛獣のような目。そして今のどこか儂げな印象の後ろ姿の玲。

(結局、どれが本当の玲くんなんだろう…？何だか今の玲くん、寂しそうに見えるなあ…。)

結局この日つぐみは答えを得ることは出来なかった。

後日、玲は昇太に連行したストーカーがどうなったのか聞いてみた。

「そーいや昇太。あの変態豚はどうなったんだ？」

「ああ。あいつはどうかやら大企業のやり手サラリーマンだったらしい。あの後、被害に会った人たちが集まってな、眼力で殺さんばかりに睨まれながら必死に謝っていたぜ。いやー、腹肉を震わせながら脂汗びっしりで謝罪してて笑うのこらえるのがキツかったぜ。」

「盗んだものは？」

「…まあ、あつたぜ。あつたけど俺はあいつが盗んだもので何してたのか想像しちまって吐きそうになっちまったよ。」

「…どんな感じだ？」

「俺の口から話したくねえから写真で判断してくれ。」

そう言つて昇太はスマホを玲に渡す。玲がカメラを見ていくと寝室と思わしき場所ではそれぞれ盗撮したと思われる女性の写真、その写真の前には女性の下着が入ったかごがあった。さらに、かごの横にあるゴミ箱のティッシュの山から何をしてたのか容易に想像できる。玲は眉間にシワを寄せる。

「反吐が出るな…。つぐみもこの中の一人になりかけていたのか…。」

「ああ、この部屋を見た被害者の親が豚を殴ろうとしたからな。気持ちちは分かるが法的に裁かれるのを待てつて説得するのに苦労した

ぜ。」

「…もつと殴つとけば良かったな。」

玲は忌々しげに呟く。それを見た昇太はフツと笑う。

「…なーんか、最近のお前変わったような気がするぜ？前にも似たようなゲス野郎の話を聞いたときもあつたけどお前眉ひとつ動かさなかつたじゃねーか。」

「そうか？」

玲は首をかしげる。全く自覚ない顔に昇太は笑う。

「もしかして、蘭ちゃんたちがこいつの毒牙に掛かったらとか思つてただろ？」

「そんなんじゃねえよ！冗談はやめろよ昇太！」

玲は机を叩いて脅すが昇太はどこ吹く風だった。

「まあまあ、落ち着けて。ま、どの道この豚は出世街道から転落していくだけだ。体も丸いから止まらねえかもな。」

「…まあ、そうだろうな。…じゃ、俺はそろそろ見回りに行くぜ。じゃあな。」

「おう。」

話に一区切りが付いたところで玲は席を立ち部屋から出ていこうとする。

「あ、なあ、玲。」

ドアノブに手を伸ばそうとした所で昇太が呼び止める。

「ん？何だ？」

「…いや、やっぱ何でもないわ。すまねえ。」

「？ 変な奴。」

そう言つて出ていく玲。見送つた昇太は足音が遠ざかっていくのを聞きながら天井を仰ぎ見て思い出す。

それは被害者と共にストーリーカー宅に来たときパソコンのそばにあつた何も書かれてないDVDがあつたのだ。最初は気にもしていなかつたがストーリーカーの性癖が明かされていく内に気になったのだ。

(そういや、これはAVの類いか？何も書かれちゃいないが…。)

昇太は興味本意でDVDをパソコンに入れて再生した。するとまだ未成年の男児が大人の男と絡んでいる映像が映し出される。

(うわ…児童ポルノかよ…なんちゅー物見てんだあの豚。)

昇太はバイだったのかと思いい、映像を消そうとした瞬間。犯されている子供の顔を見て硬直した。

濡れ鳥のような黒髪に細い手足、華奢な体軀、まるで美少女と見間違ってくるくらいに整った顔立ち。男が動く度に声を上げるその少年はどう見ても自分の親友の子供の頃の姿だった。

「…言えるわけ、ないよなあ…。」

確実に、玲の過去に関係する物なのだろう。だが、蘭たちの話を聞く限りでは正義感があり、自分より大きいいじめっ子に向かっていくほど強い子だったらしい。その子が何故こんな事をして、今現在不良グループのリーダーをしているのか、親は何をしていたのか。疑問は尽きなかったが話さないだろうし距離をとられると思いい、昇太はこの話題を出すのは後回しにするようにした。

5話 女子高の七不思議（前編）

季節は夏。時期的に夏休みではあるが日菜や蘭たちが通う学校はこの日は登校日である。容赦なく照りつける太陽、そして喧しく大合唱をするセミの声が響き渡る。玲は邪魔者が今日は午前中からいなくてゆつくりできるかと思っていたがそうではない。

雑居ビルの一室で玲はぐったりしていた。タンクトップに通気性がいいズボンを履いて汗ばみ、前髪が額に張り付き半目で寝転がる姿には色気が感じられる。

「くそつたれ…夏なんてくそつたれだ…。雨も嫌いだが降った後の夏の快晴も嫌いだ…。」

玲はベッドの上で寝転がりながらぼやく。

そう、今の外は昨日まで降っていた雨が止み、所々でできていた水溜まりが蒸発してもわつとした湿気とジリジリした熱気のダブルパンチなのだ。

「よう、あっちいなー。」

ドアを開けて入ってきたのはクーラーボックスに入れた賄いを持ってきた昇太だった。

「今日の賄いは何だ？」

暑さでイライラ気味の玲はベッドからのつそりと這い出てくる。

「ああ、今日はこんな猛暑だからな。ウチの店、夏期限定でアイスクリーム出すんだがお前の意見が聞きたくてな。」

「へえ、お前にしちやが利くな。」

昇太の賄いがアイスクリームと知った瞬間、イラついた声が鳴りを潜めた。そういう所は子供っぽいなどと笑う昇太。

「お前にしちやは余計だろ？」

そう言いながらクーラーボックスを開けてアイスクリームを取り出す昇太。アイスクリームの冷気が容器から溢れだすその様子はよく冷えていることが分かる。

「んじや、ありがたくいただくぜ。」

玲はスプーンでアイスクリームを掬い、口の中に入れた。キンとし

た冷たさと口内で溶けてじんわりした甘さが広がるのを噛み締めながら玲は感想を言う。

「んー、冷たさに文句は無いけどもう少し乳臭さは消せないかな？それが無くなれば俺は満足かな。」

玲の感想に昇太は真剣にメモを取る。

「ありがとよ。あとはひまりちゃんにつぐみちゃん、あとモカちゃんにも聞いてみるわ。」

「おう、ありがとよ。うまかったぜ。」

昇太はクーラーボックスを担ぐと出ていった。玲はもう一眠りするかと横になって目を閉じた。

夢を見ている。また昔の自分だ。動きやすい服装に身を包み、目の前の男に様々な状況下に置いての体術、護身術を叩き込まれる。そして、男は言った。

「いいかい？武道だとかそういうものは実戦には向いていないんだ。空手だとか柔道は礼儀を重んじている所がある。そうやっている間に相手も礼をしてくれると思うかい？」

昔の自分は首を横に降る。

「よし、なら今から教えるのは確実に相手を仕留める技術だよ。ちゃんと付いてきてよ。」

そう言っただけで構える男、瞬間、視界が暗転した。

目を覚ます。どうやらうたた寝していたようだ。玲はゆっくり起き上がるとスマホを取り連絡を確認する。昇太から連絡が一件入っ

ていた。玲は昇太に通話をいれる。

「もしもし、昇太か？」

「お、玲か！今大丈夫か？」

「すまん、ちよつとうたた寝していた。どうしたんだ？」

「あー、口じやちよつと説明が難しいな…。羽沢珈琲店に来れるか？」

「？ ああ、分かった。」

「じゃ、待ってるぜ。」

玲は通話を切るとすぐに出る準備をして羽沢珈琲店へと向かった。

「で、手伝いたいってのはひまりたちの宿題か？」

「いやー、助かったぜ。俺じゃ解けねえからさ。」

じとりと睨む玲。だが昇太はサングラス越しにどうせ暇だろ？と言いたげな目で返す。

「でも玲は大丈夫か？学校行ってないんだろ？」

巴が尤もな事を言う。だが言われっぱなしの玲ではない。

「言ったな巴、見てろ。ひまり、ちよつと宿題見せてみる。」

「ふえっ!?う、うん！」

玲は近くにいたひまりの隣に座り宿題を見る。突然美形になった幼馴染みが急接近してきたひまりは顔を赤らめる。その光景に蘭はどこか不機嫌な様子になった。

「んーと、ここの公式は違うな。ここはこうやって…。」

すらすらと解いていく玲に昇太以外の面々は目を丸くする。

「す、すごい…。」

「おー、れーくん、モカちゃんの宿題も見て〜。」

「お前は終わってんだろ？。甘えるなモカ。」

「ちえ〜。れーくんのけちんぼ〜。それにひーちゃんばかりに構っちゃって〜。蘭が拗ねちやうよく〜？」

「バツ、す、拗ねてなんかない！」

即座に反論する蘭を見て玲はいたずらっぽい笑みを浮かべる。

「ん？どこが分からないんだ？俺が手取り足取り教えてやるからさ…。」

玲は色っぽい声を出しながら蘭のそばに近寄る。

「ち、近い！近い！そんな声出さないで！あと手取り足取りって何!?意味わかんない！」

赤くなりながら押し退ける蘭。玲が見せた色気ムーブに昇太以外の面々も赤くなる。すると巴が昇太に尋ねた。

「なあ、昇太。玲の奴、一体どこであんな色っぽい動き身に付けてきたんだ？アタシらもドキツとしちゃったよ…。」

「あ？さあ、俺も聞いてみたことあったけどよく分かんねえんだ。すまん。」

昇太はさらりと嘘をつく。聞いてみても分からなかったのは事実だがあんな事を今この場で話す物ではない。

「にしても玲くんって教えるの上手いんだね。ビックリしちゃったよ。」

「まあ、参考書があればもつと分かりやすく説明できるけどな。ひまわり、持ってるか？」

「あ、そうだね！ちよつと待ってね。今…。」

玲の提案にひまわりはバッグの中を探すが探す内にひまりの表情は固まっていた。

「どうした？」

「参考書…学校に忘れて来ちゃったかも…。」

「全く、学校に忘れるとかなんだよお前…。」

「だからゴメンってばあー！」

頭を掻きながら愚痴る玲にひまりは謝る。

ひまりの参考書学校に忘れた宣言のあと、明日以降完全閉鎖される忘れた参考書がある学校まで取りに戻ることになったのだが夜道は

暗いし危険なので玲や昇太も巻き込まれる形になったのだ。

「…にしても夜の学校かあ…。」

昇太は暗くなった羽丘女子学園を見て昇太は尻すぼみする。

「何だ昇太、ビビってのか？」

「な、なーに言っただけだ!?ただ参考書取りに行くだけだろ!」

「…別に女子高の中まで付いて来いなんて言っただけだろ。」

「いや、れーくんも入っていいかもよ。」

「は?いや、女子高だろ?」

「れーくん女の子っぽいから大丈夫だよ。いけるいける。」

「俺は?俺はどうなんだよ?」

昇太が突っ込みを入れる。

「お前入りたいのか入りたくないのかどっちだよ…。」

「だって!夜の学校の校門前で一人とか怖すぎんだろ!」

「めんどくせえ…。」

玲は面倒くさがり、頭を掻きながら夜の学校へと入っていった。

「な、なあ、あつたか?ひまりちゃん?」

廊下で待機している昇太は生まれたての小鹿のように玲にしがみついて震えながら確認する。

「…離れるよ。」

玲はうんざりしたような顔で払い除けようとする。

「うわあ!」

「ひぎやあ!!」

突然蘭の叫び声が教室から聞こえた。その叫び声に反応して昇太も悲鳴を上げ、玲に引付く。玲はコアラのように抱き付いた昇太を引き剥がしながら教室に入った。

「うわ!?どうした蘭!」

「モカが、モカがいきなり後ろから話しかけてくるから…!」

「モ、モカ！止めろよな！俺がビツクリする！」

「昇太の言う通りだぞ。止めろよそういうの。」

「いやいや、蘭が怖がってたからリラックスさせようとしただけだよ。」

ビビった昇太と巴に注意されるもマイペースで答えるモカ。すると

「あつた！あつたよー！」

ひまりが参考書を発見したようだ。昇太の顔に余裕が出てくる。

「よし帰ろうもう帰ろうもうこんな怖いところ出て帰ってさつさと宿題終わらせて家に帰ろう。」

「しょーくん帰ろう言い過ぎ〜。」

心に余裕はないようだ。

「さて、さつさと出るぞ。」

玲は昇降口のドアに手をかけて開けようとする。だが、

「…。」

ビクともしないドア。

「つ…こっのつ…!!」

力任せに押ししたり引いたりしても全く動かないドアにイラついた玲はドアを蹴る。しかし、ガラスにもヒビが入らない。

「くそつたれ！何で閉まってんだよ！」

「も、もしかして…警備員さんが…!？」

つぐみの推測に血の気が引く玲とモカ以外の面々。玲は落ち着かせるように提案する。

「落ち着けよ。二階から飛び降りれば済む話じゃん。」

「あ！そうか！俺と玲が先に飛び降りてあんたたちを受け止めてやりや充分だ！」

「そ、そうだよね！玲と昇太さんが受け止めてくれたら…。」

ひまりが名案と言わんばかりに喜ぶとモカが待ったをかけた。

「…れーくん、しょーくん、ここで問題です。今の私たちは学校の制服を着ています。れーくんたちが降りて受け止め役になったとき、二階

から飛び降りる私たちの何がれーくんたちの目に写るでしょーか？」
「あ？そんな、の…。」

「…あー。」

玲と昇太はモカの問題の答えに気付き気まずい顔をする。そしてモカ以外の面々も察して赤くなつてスカートを押さええたり、侮蔑の目を向けたりした。

「玲と昇太さんのエッチ！スケベ！」

「最悪。」

「お、落ち着け。俺はそこまで考えてなかつたんだよ。つーか今は俺ら男を罵倒してる場合じゃないだろ!？」

「ま、まあ、蘭もひまりも！玲の言う通り今はここを出ることが先決だろ？」

巴が軌道修正することで何とか事なきを得た。

「で、どうやって出るんだ？男である俺はここの事は全く分からん。」

「んーと、確か、体育館に部活で遅くなった生徒のために開いている非常口があるんだ。そこへ行こう！」

「よっしゃー！じゃあ行こうぜ！」

巴の情報に乗った昇太が我先に行くといひまりが不安げに呟く。

「ここから、体育館って結構距離、あるよね？そこまでを歩くの？」

ひまりの疑問に我先に行っていた昇太が早歩きで戻ってきた。

「…そんな歩くの？」

嘘だと言ってくれよ。

昇太の顔はそう物語っていた。

6話 女子高の七不思議（中編）

「ああ〜…あああ〜…。」

「うるせえよ昇太。あと、歩きにくい。」

体育館に向かう道中、まだ昇降口からそれほど離れてないのに奇声を発しながらしがみつくと昇太にうんざりする玲。もうその部分の毛根が傷つくんじゃないかと思うほど頭を搔く。

「でも、非常用の懐中電灯借りれて良かったよね。…無断だけど。」

「始業式の日に戻せば大丈夫だよ。…多分。」

「そこは言い切ろうぜ蘭。」

「ひゃああ!?!」

「うわああああ!?!ど、どうしたひまり!?!」

♪◇○△○♪□♪☆○!?!」

他愛ない会話していると突然ひまりが叫びだす。それと同時に巴と昇太も驚くと言う悪循環が出来上がっていた。しかも昇太に至っては文字では表現しにくい声になっている。

「い、今、窓に顔が映らなかつた!?!」

ひまりは震えながら窓を指差す。しかし、そこに映っていた物を見て玲は呆れる。

「ひーちゃんよく見てよく。映ってるのつぐだよ〜?」

「へ!?!あ、ホントだ…。」

モカのツツコミにひまりは落ち着きを取り戻しホッとす。

「な、なんかごめん。」

「まったく、ひまりちゃん、驚かせんなよ…。幽霊とかいるわけないじゃん…。」

「そうだぞ。幽霊とかいないからな!」

「…そう言う昇太さんも巴も大きな声出してたじゃん。」

自分を鼓舞するように言う巴と昇太に対して蘭は冷静に指摘する。

「あ、あれはひまりが大きい声を出すから…!」

「音といえばさ〜、ウチの学校の音楽室って夜な夜なピアノの音が聞こえてくるんだよね〜。」

「えっ、なにそれ…。」

「何いきなりいらん情報ぶっ混むのお!？」

突然モカからの怪談情報にひまりは震え、昇太はガクガクしだす。

「羽丘女子学園に伝わる七不思議ってやつ。聞いたことない?？」

「知らねえよ!？俺はそんなの知らねえよ!？つか今この状況で言う!？」

「その話、聞いたことあるかも…。人体模型が動き出すとか、鏡に知らない人が映るとか、確かそんなやつだよな?？」

「そーそー、他には、階段が一段増えてるとか、体育館でドリブルの音がするとか?？」

「た、体育館!？」

「は、ははは…まさか、そんな、噂だろ…?？あり得ないって…!？」

「はたしてそうかな?？それが有り得るかも?？」

突然始まった七不思議トークにひまりと巴は青ざめ、昇太は膝が疲れるんじゃないかと言うくらいガクガク震えだす。

「確か、グラウンドに井戸があるよね。そこを覗きこむと…。」

「…こむと?？」

「中から手が出て引きずり込むんだって?？」

「うわああああ!？」

次々飛び出す怪談トークに耐えきれなくなった蘭は玲に飛び付く。ずっと昇太に飛び付かれてうんざりしていた玲のイライラも臨界点に達しつつあった。

「ねえ二人とも!？それ今話していいことかなあ!？」

「そ、そうだよ!？この話ここで止めよう!？つぐも乗らない!？」

「ご、ごめん…。」

「モカ、今度また脅かしたら強めに殴る。」

「正直俺、すっげえイライラしてんだよ…。」

モカに振り回された蘭とそれに巻き込まれた玲はモカを睨む。

「ヤバイ!？蘭と玲、マジだよ!？モカ!？」

「ごめんて。ほんのモカちゃんジョークだよ。」

ひまりに警告を受けてモカはゆるく謝る。

「…あれ?？七つ目の噂ってなんだっけ?？」

が、残りの七不思議の一つを思い出そうとしていた。

「何も聞こえない何も聞こえない何も聞こえない何も聞こえない。」

昇太はまるで壊れた機械のように繰り返して呟く。

「あと一つ何だっけ〜？つぐ、覚えてる〜？」

「なあ、この話止めようぜ？そもそも、俺ら参考書を取りに来たんだ。微塵も興味がない七不思議を聞かされてビビりに取りつかれる身にもなれよ。」

玲は右手が昇太、左手が蘭で塞がってる状態で止めに入る。

「そ、そうだよな！アタシたち、別に七不思議解明しに来たわけじゃないんだからな！早く脱出しないと……！」

「そ、そうだね！じゃあ体育館へレッツゴー！」

ひまりが音頭を取るが誰も進もうとしない。

「……………」

沈黙が流れる。

「ど、どなたか先頭を…。玲？」

「いやひまり。俺、ここからどうやって体育館行くのか知らないぞ。」

「じゃ、じゃあ、蘭？」

「え、アタシ!？」

振られると思ってなかった蘭は驚く。

「だって、蘭はいつも先に行っちゃやうじゃくん。ど〜ぞ？」

「そっ、そう、だけど…。」

尻すぼみする蘭だが玲はさっさと離れて欲しかった。蘭が腕をガッチリ抱き締めているせいか、何だか腕の感覚が鈍くなってきた。

「じゃ、じゃあ私が先頭を歩くよ！みんな、ついてきて！」

結局つぐみが先頭を歩くようになり、ひまりの提案で全員くっついて移動するようになった。

「おい、歩きにくいだろ。」

「れーくん、そう言っても満更じゃなさそう〜。へへ〜。」

「…暗いからそう見えるだけだ。」

玲はモカから視線を反らしながらそう返した。

その後、二階の渡り廊下を渡って、実習棟から行く方が一番の近道らしい情報をつぐみから聞く。そして渡り廊下に行くための階段に到達したが…。

「…さて、このビビリ二人をどうするか…。」

玲はモカの七不思議情報を思い出してしまったビビリ（主にひまりと昇太）をどうするか頭を抱えた。

「だ、だってえ！」

「モカちゃん、俺は上がりたくねえよお…。」

縮こまって震える二人に玲は溜め息を溢す。

「アホ臭い。大体、階段の段数が増えたからなんだ？それで呪われるってのか？」

「てゆうか、普段の階段の段数とか知らないし。」

モカと玲の発言で他の面々も冷静になっていく。

「…確かに。」

「モカ、たまにはいいこと言うじゃん。」

「モカちゃん実はいつつもいいこと言ってるんだけどなく。」

「学校の階段は、確か12段だったと思うよ。生徒会の仕事でよく校内清掃するんだけどしているうちに覚えちゃって。」

「……………つぐみちゃん…。今、その情報聞きたくなかったよ…………。」

「階段の数、知ってしまった…。」

「あつ…ぶ…つぐめん！」

つぐみの気遣いがいらぬ所で発動してしまい、頭を抱える玲。しかもつぐみは悪気無く言っているのが更に玲をイラつかせた。

「…ねえみんな。階段の数、数えてみない？そしたら七不思議を解明できるよ。」

蘭がこの現状を打開する案を出す。

「へえ、いいところじゃん蘭。」

ずっと自分の腕を締め上げうっ血させようしていただけ蘭を玲は見直す。

「で、でも、13段あったら…?。」

「そ、その時はその時！て言うか、玲が言ってたけどアタシたちの身に何かが起こることじゃないじゃん！」

不安がるひまりを説得する蘭。そして全員横一列に並び一段ずつ数えながら上ることにした。

半分過ぎた後も特に何も起こらず所々から安堵の息が漏れる。遂に12段を上がった瞬間、

「13!」

「!？」

巴の声が13と言ったのとほぼ同時に玲が咄嗟に振り向く。

「おい、巴、お前数え間違えんなよ。」

昇太がつっこむも巴はキョトンとしている。

「へ？アタシはちゃんと12で数えたぞ？」

「え？」

「え？」

「……」

血の気が引く昇太と巴をよそに、モカはずっと後ろを睨み付けている玲が気になった。

「ねー、れーくんはどうしたの〜？」

「…俺ら、横一列に並んでたよな。」

「う、うん。」

玲の確認につぐみが頷く。

「さっき巴の声が13を数えた瞬間、俺の後ろに何かの気配を感じたぞ。」

人通りの多い中、ストーカーの気配を察知するほど感覚が鋭い玲の

言葉に全員顔を見合わせ黙り込む。

「…先進もう！」

「あははそうだね！先進もう！ゴーゴー！私は何も聞いてない！」

「あばばばあばばあばばあつばあば！」

さっさと進もうとする蘭、目がぐるぐるになって明るく喋るひまり、ガクガクしながら初心者が動かすマリオネットのような動きで後を追う昇太。

「ひーちゃんとしょーくんが壊れちゃった…。」

「この先、何も起きないといいなあ…。」

精神崩壊を起こしてしまったひまりと昇太を嘆くモカと何も起これないことを願うつぐみも後に続く。玲はしばし階段の踊り場を睨み付け、蘭たちの後を追っていった。

7 話 女子高の七不思議（後編）

「ああ〜…あああ〜…ワヴウ！」

「お前大丈夫か…？」

階段を足早に離れた一行。だが、急に犬のうなり声のような奇声を出すなど昇太が段々壊れてしまっていた。かつて、花咲町の不良をまとめていた人物とは思えない壊れっぷりに玲は少し心配になる。

先ほどの階段の出来事から主にビビり組が一步進む度にビクビクしてしまい、思うように体育館に向かえなくなっていた。

「うう〜…、ほ、本当に体育館に向かつてるの？」

「ほ、ホントに合ってるんだよな？」

ひまりはともかく男前で頼りになるなる巴までこんな状況だから玲は先が思いやられる気がした。

「うん、こっちだと思おうよ。だってこっちこっちうって声が〜。」

「あーあーあー！わーわーわー！聞こえない聞こえない！！」

「うわああああああああああ!!血だああああ!!血の臭いがするぜえええええええええええああああああああ!!」

モカの冗談に巴は耳を塞ぎ昇太は血に飢えたバンパイアみたいな何かになった。おそらく自分を鼓舞しているつもりだろうが体が震えまくっていて効果は薄く感じる。

「…モカ。」

「…。」

「…もうしません。」

玲と蘭の睨みに冗談が過ぎたと気付いたモカは素直に謝る。どう落ち着かせようか考えた時、

「ねえ、みんな！みんなで歌いながら進んでいくのはどう!？」

つぐみがそう提案してきた。この中で一番頼れるのはもう玲とつぐみしかいないのだ。

「確かに！それなら他の音も聞こえなくなりそう！」

「やってみるか？」

つぐみはすうと息を吸い込み a f t e r g l o w の持ち歌を歌い

始めた。

「ほら！玲と昇太さんも！」

ひまりが催促する。だが玲はこんな暗いところで大声で歌ったら端から見たら変人じゃなからうかという気持ちが大きかったが、

「お、狼なんて怖くない！怖くない！怖くない！」

昇太には効果覲面だった。だが歌が違う。

afterglowの持ち歌を合唱しながら進んでいくと次第に恐怖も薄まってきたのか昇太もいつの間にかafterglowの持ち歌を歌い出す。そしてその楽しさに感化されたのか玲も口ずさむようになった。

「っ…!?」

のもつかの間。ひまりが急に息を飲む。

「どうしたんだ、ひまりちゃん？」

昇太が様子を見ると玲は何かを感じ取った。

「…なあ、何か聞こえないか？」

「え？」

耳をすますと聞こえてきたのはピアノの音。それもさつき歌っていた曲を弾いている。

「こ、これ、って…。」

「例の七不思議って奴か？」

「こ、この曲、アタシたちがさつき歌っていた…！」

「ろろろろろろ録音だろお!？」

「じゃあなんでアタシたちの曲が流れてるの!？」

段々パニックになっていく。もうこうなっては収集つかないだろう。玲は諦めたように上を向く。

「もう無理！無理無理無理！アタシもう帰る!!」

「おい蘭。俺ら帰るためにここまで来たんだろ？」

「もうやだあゝ！っていうかこのピアノの音いつまで続くの!？」

「知るかあ！おいピアノ！止まれええ！」

「…それで止まるの？」

「この音聞いていたくない…。音が聞こえない方に逃げよう！」

蘭が玲の腕から離れるとあらぬ方向へ走って逃げていく。

「あっおい蘭！つつ!？」

締め付けていた腕が元に戻ったせいかわかると玲の腕にピリツとした刺激が伝わる。

「あつちか!?あつちに行けばいいのか!？」

「置いてかないでえ〜!」

「あ”ー!あ”ー!I, mベーコン!I, mベーコン!I, mバート
リエルジエーベトオオオオオ!!!」

そうしている間にもビビり四人組は暗闇へと消えていく。

「ああ!四人とも!」

「行っちゃった!」

「蘭の野郎…。俺の腕を絞めすぎだ!」

「ど、どうしよう…。四人とも懐中電灯持っていないのに!」

「追いかけるしかないだろ。つたく、めんどくせえ!」

「玲くん。腕は、大丈夫?」

「こんなの、正座の痺れみたいなものだ。しばらくしたら戻る。」

「よし、じゃあつぐ、れーくん。ダツーシュ。」

「蘭ちゃん!ひまりちゃん!巴ちゃん!昇太さん!…ダメかあ。今度はあつち行ってみよう!」

逃げたビビり四人組を探し回るもどこまで逃げたのか分からずと
りあえず呼び掛ける。そして鏡の前を通った瞬間、

「?つぐ、ちよつと待って。」

モカが待ったをかけた。

「え?どうしたの?モカちゃん、玲くん。」

「つぐみ、ちよつとそこに立ってくれ。」

「この、鏡の前?」

つぐみは言われるままに鏡の前に立つ。すると玲とモカは顔をしかめる。

「…やっぱりつぐだ。」

「…だな。」

「あ、あの、どうしたの？二人とも…。」

つぐみは何故か鏡の前に立たされてやっぱりつぐみだと言われて不安になる。

「さっきこの鏡の前を通ったとき明らかにつぐじやない人が映った気がしたんだよね。」

「モ、モカちゃん…。冗談、だよな？ね、玲くん？」

「あ、また映った。」

「え…。」

「つぐがこつち振り向いた瞬間また…。」

「いやあああああ!!?」

恐怖が限界値に達したつぐみが逃げようとした瞬間、玲が咄嗟につぐみの体を抱き締める。

「落ち着け！俺らも悪かった！だから落ち着いてくれ！」

玲に抱き締められじたばたしていたつぐみは次第に落ち着きを取り戻していった。

「落ち着いたか？」

「う、うん。ありがとう…。」

玲に背中をポンポン叩かれながら落ち着きを取り戻すつぐみ。

「…おー。熱いですなー。」

「はっ!?きやああああ!!」

モカに冷やかされ我に帰ったつぐみは思わず玲を押し退ける。押された玲はよろめき、そのまま後頭部を壁にぶつけた。

「うお!?あいつつう…。」

「あーご、ごめん！玲くん！痛かった？」

「いや、大丈夫…俺もデリカシーがなかった、すまん…。」

「にしても思い出しますなあ。」

頭をさすっているとモカがそう言い出す。

「? 何をだよ。」

「こう暗い道で歩いていると、ハロウィン事件を思い出さない?」

「あつ！あの時の事件か！」

「…あれか。」

モカとつぐみが覚えていたことに玲は顔をしかめる。それは小学生の頃、たまたまハロウインの知識を知った玲がハロウィンごっこやろう!と言い出し、仮装衣装を着てやっていたときに起こった事件で、玲が五人組には忘れて欲しかった事件でもあるのだ。

「あの時途中で玲くんがいなくなって大騒ぎだったもんね。」

「蘭もひーちゃんもつぐも泣いちゃって大変だったよね。」

「でも、私のお父さんに頼もうとしたとき、もう私の家にいたもんね。あの時どこにいたの?」

つぐみが尋ねると玲は目を反らして黙り込んだがモカとつぐみの無言の圧力に耐えきれなくなって他の奴には言うなよと前置きをしたあと語り始めた。

「…あー、あの時は、な。実はこっそり先回りして驚かせようとしたんだ…。けど、全然お前たちが来なくてな不安になって探そうと立ち上がった瞬間にカボチャのお化けが出てきてな。」

「え!?!」

「それでビビっちゃまってつぐみの家に飛び込んで来ちゃったって訳。」

「そ、そうだったんだ…。」

「でもさあ。そのカボチャのお化けってなんだったの?」

モカの質問に玲は少し黙って絶対喋るなよと釘を刺したあと意を決したように喋り出した。

「実は、後になって気付いたんだが、あのカボチャのお化けの正体、俺の仮装だったんだ…。俺の仮装が偶然家のガラスに映りこんでそれを見た俺は勘違いしちゃったって、オチで…。」

「ぶっあははは。」

「そうだったのか。道理でそれ以降カボチャ食べなくなったのか。」

「ほらな!…こんな反応するから誰にも喋りたくなかったんだよチクショウ!ほら!他の奴等探すぞ!どこ行きやがったクソ昇太あ!」

玲は自暴自棄になったように、八つ当たり気味に昇太を探し始める。その姿に安堵を覚えるつぐみとモカだった。

何とか全員見つけて合流できた後、体育館の入り口まで来れた。

「はあ、長かった…。」

「やっつつと出られるんだあ…！」

疲れたように溜め息を吐く玲と安堵して肩の力を抜く昇太。ちなみに昇太の頭には玲に八つ当たりされるときにできたたんこぶがある。

「ここから出られる、んだよね？」

「あ、ああ、えーと、開いてる非常口は…。」

と、巴が確認していると懐中電灯が二、三回点滅した後、真っ暗になった。

「ここにかよ…。」

玲の勘弁してくれと言いたげな声が聞こえる。

「ど、どうするの!？」

「と、とりあえず落ち着け!みんな離れるな!」

昇太の声が指示を飛ばす。

「お前、慣れたのか？」

「…慣れたくなかったけどな。」

「こ、この後どうすんだよ?昇太!」

「いいか?こういうときは壁を伝ってドアに当たったら開けるんだ。」

「そうか!やるじゃん昇太!」

「へ、いっつもビビってる昇太じゃねえぞ!」

「と、ビビった末に頭にでかいたんこぶ作った男が申しております。」

「…悪かった。」

玲が右手で壁を伝い進んで、左手で(多分)蘭の手を繋いで進む。だが、今進んでいる方向が非常口なのか少し自信が無くなる。すると「こつちこつちく。こつちだよ。」

謎の声が聞こえた。玲は警戒心を最大限まで引き出したが、

「え?こつち?」

「わあ、つぐ。急に動かないでよ。」

つぐみが離れてしまったらしい。玲が探そうとした瞬間に、

「あ、明かりが…。」

「接触が悪かったのかな？」

懐中電灯が戻ったようだ。そして目の前にある扉を見て、昇太は希望を取り戻す。

「あっこれって非常口じゃねーのか!？」

「あ！ホントだ！」

「もうさっさと出よう…！あれ？」

扉に手をかけた巴が固まる。

「…鍵が掛かってんのか？」

「外側からだな。こっちじゃ開かない！」

「詰んだく！さすがにもうだめだく！」

巴の言葉にモカが諦めを見せる。

「…どけ。この際非常時だ。ドアを蹴破ってでも出るぞ。」

「ちよ、玲！それはダメだって！」

玲も若干冷静さを失っており、蘭に止められる。

「誰かー！開けてくださいーい！まだ人がいまーす！」

「おーい！開けてくれえー！」

がちやり。

つぐみと巴のSOSが届いたのか鍵が開く音がした。

「あ！警備員さんが来てくれたのかな!？」

「…昇太。俺ら怒られるつもりでいろよ。」

「…おう。」

「すみません！開けていただいております！」

そしてつぐみがドアを開けてくれたであろう人物に感謝を伝えたいが…。

「…外、誰もいないよ？」

「え？じゃあ、誰が開けて？」

「ホントにもう勘弁してよ…！」

蘭が涙目になって玲に引っ付く。

「…思い出した。七不思議の七つ目。」

「…モカちゃん？」

「夜な夜な生徒の幽霊がうろついているんだって。遊び相手を探して

…」

瞬間、風が吹いた。しかし、それは風と呼ぶには違和感があるものだった。そうそれは、

「…なあ。今、何か横切らなかつたか？」

昇太が震え声で確認する。

全員沈黙したあと、

「うわあああああ!!!」

玲を除く全員が飛び出して行った。

一人残った玲は頭を掻きながら後ろを振り向く。誰もいない体育館。だが、玲は確かに何かの気配があるのを感じた。

「ここからは俺の独り言だぜ？実は俺、あんたの事は前、部下から聞いたことがあったんだ。あの時は聞き流していたけど、昇降口閉めたのも、階段のやつとか、ピアノとか、全部お前の仕業だろ？けど、俺もビビらせるつもりだったなら残念だったな。俺は死んだ人間よりも生きてる人間が一番怖いと思ってるんでね…。」

そう言っただけ玲が体育館を出た瞬間、橙色の丸い物体が飛び出してきた。

「っ…！」

それはカボチャだった。おそらく、文化祭の備品の作り物なのだろう。それが転がって追いかけて来たのだ。

「う、うわあああ！ちくししょう！てめえ俺のあの話聞いていやがったなあ!？」

もう一生涯、蘭たちの学校には近づかない。

玲は心のなかでそう誓った。

8話 玲と昇太（前編）

「なー、昇太はさー、いつ玲とああい関係になったんだよ？」

羽沢珈琲店の昼下がり。客足もまばらになりつつある中、巴と昇太はテーブルを挟んで駄弁っていたら巴から質問が来た。

「あん？玲といつ知り合ったか？」

「あ、それ、私も気になる。」

店の手伝いをしていたつぐみも会話に入ってくる。

「あー、つぐみちゃん。休憩は入れられるか？ちよつと長い話になるんだが…。」

「ちよつと待つてね。父さんに確認してくる。」

つぐみが厨房にいる父に確認して休憩に入れた後、昇太は語り始める。今、花咲川の黒豹の肩書きを持つ少年との出会いを。

それは1年前、突然やって来た。昇太が不良グループのリーダーをしているとき、今現在は玲の住みかとなっている雑居ビルで夏祭りの見張りの配置に首を捻らせていたときの事である。

「大変だ、昇太！敵襲だ！」

昇太の腹心の部下である大崎が切羽詰まった表情で入ってきた。敵襲のワードに昇太は気を引き締めて傍らに置いてあつた金属バットを持つ。

「何！どこだ！どこのグループだ!？」

「それが、一階が他所から来たガキ一人に押されている！」

「はあ？ガキ一人い？」

大崎の報告にすつとんきような声を上げながら一階に降りるとそこには死屍累々の光景が広がっていた。廊下を埋め尽くす部下の不良たち。その中に少女と見間違うほど華奢な身体、整った顔立ち、艶やかな黒髪の美少年がポツンと立っている。

「な…。」

昇太が言葉を失っていると少年は昇太の視線に気付き、こつちを向く。

「ねえ、あんたがここのボス？」

まだ幼さが残る声は町内会の知り合い、宇田川巴と同年代である中学生の声だった。

(まさか、あいつ一人でこいつらを…!?中坊なのにか?)

「昇太、下がってろ…。こいつはヤバいぞ。」

大崎がナイフを取り出し、昇太を庇うように前に出る。それに対する少年の態度は平然としていた。

「俺さ、寝泊まりできる場所がほしいだけなんだけどこいつら話を聞いてくれなくてさ。」

困ったように頭を掻きながら倒れ伏す部下たちを見下すその姿に昇太は息を飲んだ。

(なんだこいつ…。立ち振舞いに無駄がない…。喧嘩で強くなるために空手を習った俺からすりやどう動いても詰みだよこりや…。)

「ふざけんじゃねえ! わざわざ俺の部下を殺しておいて寝泊まりさせるだど? 寝言は寝て言いな!」

大崎が少年に襲いかかると、少年は素早く大崎の足を払い、顎に掌底を叩き込んだ。気絶した大崎を一瞥したあと、昇太に向き直る。

「はあ。ねえ、あんたは話聞いてくれる?」

そう言いながら距離を詰める。何かしようとしても対処できる距離だ。

「…ああ、分かった。話を聞こう。」

「つてのがアイツとの出会いだっただな。」

一旦話終えた昇太は珈琲を一口すすった後一息着く。

「す、スゴい…。」

「つーか、ちよつと待て。あんたの部下が殺したつってたけど本気で殺したのか？」

巴が切羽詰まった表情で身を乗り出す。

「いや、殺しちゃいなかったよ。ただ大崎の確認不足で全員気絶させられてただけだつてのが後で分かったよ。」

「なんだそうだったのか…。」

巴はホツとしたように席に着く。自分の知らないところで幼馴染みが殺人に手を出したとなればそうなるだろう。

「まあ、俺も面子があるからな。泊まらせてやる代わりに俺らと活動しろつて約束したんだ。でも口約束だけじゃ不安だったから自前の契約書にサインさせたよ。あの時の余計な知識身に付けていやがつつて顔を見て正解だったなつて思ったよ…。でもな、活動に参加させるだけでも苦労が多かつたんだよ…。」

「もしかして、玲くんが問題を…!？」

「あ、違う違う。いや、違つてもいないが…納得いかない部下がいたんだ。そうだな、そこら辺も話すか。」

「えー、つーわけで今日からの見回りは神前玲も参加させる。いいな？」

昇太が部下たちの前でそう告げると部下の間にとよめきが起きる。

「おい待て！何でそんな怪物を見回りさせやがる！」

大崎が真つ先に反論をしてきた。大崎はあの日以降、玲の事が気に入くないようであるごとに玲に因縁付けている場面をよく見かけていた。

「安心しろ大崎。お前の班には入れない。俺と一緒に回るぜ。道案内を兼ねてな。じゃ、見回り開始だ！」

昇太が説得すると大崎は渋々と言つた感じに出ていった。その姿を見た昇太は溜め息を吐く。

「溜め息なんか吐いてたら幸せが逃げるよ。おにーさん。」

「誰のせいだと思ってるんだよ…。可愛くねえ奴…。」

「そりゃどーも。」

全く笑いもしないその顔に昇太は不思議に思いながらも道案内を始めた。

「まずはここだな。」

昇太が最初に案内したのはショッピングモールだった。

「ここは人が多いからな。トラブルが起こりやすいんだ。どの階に何屋があるか覚えときな。」

「あれ？昇太？」

昇太がそう言いながら無表情の玲を連れてぶらついていると声をかけられた。

「ん？お、リサじゃねーか。小物買いか？」

声をかけたのはギャル風の女の子。昇太の個人的な知り合いの今井リサだ。

「うんうん！友希那に似合いそうな物がないかなーって。昇太は何してんの？」

「ああ、ちよつと新入りがいてな。ここら辺を案内してんだ。」

「へえー、新入りってどんな？」

昇太はリサの隣を指さす。リサは不思議そうに昇太が指さした方向を見て驚いた。新入りの不良がまるで雑誌モデルをやっているような中性的な美少年だったから無理もない。

「え!?!し、新入りって、この子!?!」

リサの声に玲は驚く。いや、正確には新入りというワードに反応したことだ。昇太は外堀を埋めようとしているのに気付いたのである。

「やだー！こんなかわいい子が!?!」

そう言って抱きつくリサ。それに対する玲はうんざりした表情になった。しかし昇太は予想していた反応と違う反応で面食らう。

（ありゃ？このお年頃の子ならリサみてえな子に抱き付かれたら赤く

なると思っただがな?)」

不思議そうに首をかしげる昇太。まるでちやほやされる子猫のようにリサになでくり回された後、玲は仕返しにリサに一言。

「ねえ、おねーさん。あのおにーさんとはこういう関係?」

そう言っつて片手で人差し指と親指で輪を作り、もう片方の手で人差し指を輪の中に入れ入れるジェスチャー。昇太とリサはしばしフリーズした後、

「ば、バカ野郎! 止めろよそんなの! どこで覚えてきたんだ!」

「あんたは俺の親父か?」

昇太は思わず怒鳴るがあっさり流された。その後、顔を赤くしてオーバーヒートを起こしてるリサに昇太は謝る。

「すまんリサ。まさかこんな事言う奴とは思わなかった。…リサ?大丈夫か?」

「え?! あ、あうん! 大丈夫大丈夫!」

「…もしかして、おねーさんってうぶなの?」

まるで面白いおもちゃを見つけた子供ののように、それでいてまるで色気がある肉食系男のようにリサに詰め寄る玲。

「え、あ、いや、その。ち、近い、かな…。」

リサは顔を赤くしながら壁に追い詰められ、壁ドン状態になる。段々と詰め寄る距離。思わず目をつむると、
「はい、もう止めとけ。年上をからかうな。」

キスしそうな距離まで詰められた瞬間、昇太が襟首を掴み引き離れた。

「あ、ありがと…昇太…。」

リサはまたオーバーヒートしてしまった。

「…あいつりサさんにそんな事やってたのか…。」

巴は額に青筋を浮かべながら話を聞く。隣にいるつぐみも笑顔だけど全く目が笑っていないかった。昇太はここは話さないでおくべきだったかと思つたがああの時の玲はやり過ぎだったし、注意してもどこ吹く風のような態度だったので別にいいかと考え直した。

「にしても昇太が話したときの部下の態度と今の部下の態度全然違ふよな。何があつたんだ？」

「そうだな…ここからだな。俺とあいつが今のような関係になつたのは。」

昇太のその発言でまた前のめりになる巴。

すると、ドアベルが来客を告げる。

「あー蘭ちゃん！モカちゃん！ひまりちゃん！こつちだよ！」

どうやらAfterglowの面々が集合したようだ。昇太は偶然にしちやおかしいと思つてたら

「えへへ、玲ちゃんと昇太さんの過去を今話してるって言つたらみんな来るって言つちやつて…。」

つぐみはそう言つてAfterglowのグループチャットを見せるとそれぞれの返事で来ると言つていた。

「昇太さん！玲とどうやって仲良くなつたんですか！」

「モカちゃんも気になつちやいました。話さないと夜気になつて眠れないかもしれせんよ〜？」

「別にアタシは…モカとひまりが行こうって言つて言うから仕方なく…。」

三者三様の反応に昇太はニツと笑う。

「あー、今から話すよ。悪い巴、つぐみちゃん。また同じ話するけどいいか？」

「ああ、別に構わないぞ。なんだつたらりサさんとの出来事も話しまえ！」

「？ りサさんと会つてるの？れーくんは？」

こりや明日から修羅場だぞ？

昇太は明日の玲の運命に心の中で合掌した後、語りだした。

9話 玲と昇太（後編）

「…今すぐ玲のバカを呼び出して。今すぐに。」

「蘭々落ち着きなよ。明日なら休みだと思っから逃げ場が無いところて問い詰めよ〜?」

「何やってんのよ玲のバカー!」

リサとのトラブルを話した結果、案の定A f t e r g l o w全員で玲を問い詰めるのが確定した。

「まあまあ、ここまでが俺と玲の馴れ初めだな。あいつには手を焼かされたって訳よ。」

「でも、今の昇太と玲の関係見ると違うような気がする…。」

「そうだな。決定的になった出来事があったのさ。それは去年の夏祭り前日の時だったな。」

「さて、俺がリーダーの座を降りた後、誰に譲るかあ…。」

昇太は雑居ビル最上階の一室にあるベッドに寝転び、自分が作った不良グループのリーダーの座を誰にするか決めあぐねていた。元々このグループを作った理由は素行やら服装やらの理由で理不尽に退学させられた学生を救うために通っていた学校を止めてまで作ったのだ。

（大崎、はダメだ。あいつは頼りになるがこのグループの在り方を理解していない節がある。となると、有力候補は…神前玲、かあ…。でもなあ、あいつ何だか怖いし、誰も信用していないような所があるからなあ。）

昇太は頭を抱え唸る。もし、神前玲に取っつきやすさがあるなら文句はないが、残念ながら彼にはそれが無い。

（いっそのこと多数決で決めるかあ?）

昇太はそう考えたが、玲がどのような手を使って投票を操作してくるか予測がつかない。結局どちらをリーダーにするかは決められない

かった。

その次の日、夏祭りの見回りのシフトを組んでいるときに玲が入ってきた。

「ん、どうした？玲。シフト表ならまだ未完成だが…。」

「そのシフト表、大崎の班だけ偽のシフトにしてくれ。」

玲の提案に昇太は目の色を変える。

「…どういう事だ？」

「大崎と奴に賛同している奴らが秘密裏に俺を処分しようとしている。」

「…そのソースは？」

昇太が努めて冷静に玲に聞くと玲はポケットからボイスレコーダーを取り出した。再生すると大崎と大崎に賛同している数人の声がどうやって玲を引きずり下ろし、叩きのめすか密談している声が聞こえた。

「どうやってボイスレコーダーを？」

「簡単さ。大崎の仲間の奴に色気使って詰め寄ってその隙にポケットの中に入れたのさ。それに、大崎に関する面白い情報も手に入れた。」

玲が得た情報は大崎の親は弦巻グループの会社の部長らしい。親バカらしく過去、大崎がやらかした騒動があるらしいが被害者の意見を金の力で揉み消していたらしい。

(大崎が自分の家族構成を聞いても言わなかったのは親に虐待されるかと思っていたが違ったと言うわけか…。多分奴は上から人を操る存在になりたい。そう考えている。)

昇太は大崎の思惑に気付きボス候補に除外する事に決めた。すると玲が喋り出す。

「全く、バカらしいね。大崎の部下の奴らは。ちよつとカマ掛けたらすぐコロツといきやがる。」

その発言に昇太はサングラス越しに玲を睨む。

「…気に入らねえな。」

「…あなたの部下とは言っていないだろ？」

「それでもだ。あんたはあんたが言ってたバカをのぼせさせて、道具

にしようとしてた。」

昇太は感じ取った。この少年は親にも道具としてしか見られなかったんだろうと。

「…それがどうした。お互い様だろ？ 奴らも俺を処分してボスになる道具にしようとしていたんだぞ？ 俺の気持ちなど知らないで…！」

玲のポーカーフェイスが崩れる。その感情を吐き出す様は初めて会った時とは全く違う印象だった。

「そうだ！ 俺に心があるなんざ思っちゃいないんだよ！ お前に何が分かるんだ！」

まるで自暴自棄になっている子供のようにつぶやく。その叫びを受けて昇太は言う。

「分かるぞ。」

「嘘こけ！ 分かってねえだろ！」

反論される。だがそれでも昇太は言わずにおれなかった。

「それでも言うぞー！ 人の気持ちを、心を弄んでんじゃねえ！ そんな事したらお前は堕ちるとこまで堕ちていくだけだぞー！」

その説得がトリガーとなったのだろう。玲はハツとした表情となり身体を震わせるそして、

「…うるせえ！ おせっかいグラサン野郎！ 似合ってねえんだよ！」

そう言っ出ていった。

「おせっかいグラサン野郎って…。」

一人残った昇太はサングラスを変えようか迷ってしまった。

夏祭り当日。昇太は集まった不良グループのメンバーにシフト表を配る。

「んじや、今からシフト表を配るぞー。」

昇太はそれぞれの班に見回りシフト表を渡していく。そして、大崎の班にだけは偽のシフト表を渡した。

シフト表を確認した大崎は一瞬勝ち誇ったような笑みを浮かべた。昇太はその瞬間を見逃さなかった。どうやら確定である。そして、玲

にもシフト表を配った後、解散となった。

そして不良たちが見回り兼祭りを楽しむのを見送った後、運営本部に向かう。

「お、昇太の坊主！いつも見回り頼んでくれてありがとうな！」

「いやいや。毎度毎度イベント事に呼んでくれるだけ有り難いっすよ〜！」

運営委員である町内会のオヤジと適当に駄弁って時間を潰す。

しばらく時間が経った。どうなるだろうか、大崎はどう動くのか、玲は無事か。そう考えていると後ろから声を掛けられた。

「よお昇太！」

「んお？おお、巴じゃん！今年もイカしてんな！」

現れたのは法被姿に身を包んだ巴だった。

「へへっ、だろお？いつも見回り頼んでくれるお陰でアタシも安心して太鼓が叩けるってもんよ！」

巴は玲とそう話し合う。

「そりや良かった。俺はこのままトラブルが起きなかつたら見に行くからよろしくな！」

「おう！最高の演奏で盛り上げてやるさ！」

そう言つて巴は太鼓演奏の準備へと向かつていった。その直後、携帯が震え部下から連絡が入った。

「もしもし、俺だ。」

「た、大変です！ボス！玲が、玲が大崎とその部下と一緒に神社裏に連れて行かれたっす！」

来たか！そう心の中で叫んだ昇太はすぐに席を立つ。

「わりいおっちゃんたち！トラブル発生したんで行ってきます！」

運営本部を飛び出すと後ろで商店街のオヤジたちの激励が聞こえる。その声を背中で受けた後、昇太は報告にあつた神社へと飛ばした。

神社に辿り着いた昇太は裏手の方に気配を感じて向かつて行くとそこには

「て、てめえ、やっぱり化け物か!？」

全滅している大崎の部下。そして無傷で腰を抜かしている大崎を見下す玲の後ろ姿だった。

(ありや、杞憂だったか?)

そう思った昇太は踵を返す。すると、

「ふええく…。ここ、どこおおく？」

突然聞こえた少女の声に昇太は振り向く。どうやら自分以外にも来てしまった人がいるようだ。

その声を聞いた大崎は立ち上がると声を出した少女を人質にとつた。

「動くなー…こいつがどうなってもいいのか!？おっと、声をあげるなよお嬢さん？声を出したら手が滑ってその綺麗な着物を切り裂いちやうかも知れないからな？」

「…!」

大崎に捕まりナイフで脅される少女は目に涙を溜め震えている。無関係の人間を巻き込む大崎の姿を見た昇太は決意した。

(よし、ブチのめすか。)

こっそりと大崎の後ろへ回り込む昇太。幸い、大崎は目の前にいる玲だけに注意を向けている。音を出さないように後ろから忍び寄る。

「はっ、結局お前もいい子ちゃんでしかなかったな！感謝しろよ？お嬢さん。あの坊主はお前の身代わりになってボコボコになるんだからな！」

「そうか。感謝するぜ？俺はあんたを遠慮なく殴り飛ばせるわけだ。」

昇太は後ろからそう言うと同時に振り向いた大崎の顔に正拳突きをお見舞いした。人質が大崎の手から離れた隙に昇太は人質の女の子の手を握る

「走るぞ！お嬢さん！できるだけ人が多いところに！」

「は、はい！」

神社を出た後、昇太は女の子を無事保護者に会わせてお礼を言われた後、また神社裏に戻った。そこには原型がないほど顔をボコボコに

された大崎が横たわっていた。

「うつひや。派手にやったなあ。」

「必要以上に殴っちゃったけどいいかな？」

「なーに充分充分。後はこっちで何とかするよ。お前はこの祭りの名物イベントの太鼓の演奏がそろそろ始まるから聞いておきな。」

「…分かったよ。」

そう言つて玲は一人歩いていった。

その後、昇太は部下に大崎とその賛同者を雑居ビルの地下室に閉じ込めておけと命じた後、度々お世話になつている御嬢様に連絡。そして大崎とその父親の問題を見つけ出し、黒なら左遷してほしいと頼んだ。

連絡をし終えた後、昇太が太鼓演奏の場へ戻ると、人混みから少し離れた場所のベンチに腰かけて目を閉じ耳を澄ましている玲を見つけた。ただ一点に集中して巴の演奏を聞いている。一体どのような感情で聞いているのかは予測できないが昇太は玲に話しかける。

「見事だろ？この太鼓が祭りの目玉なのさ。」

「…そうか。」

玲はそう一言、呟く。そしてどどんと締めめの音が鳴り演奏が終わると歓声が響き渡った。玲は立ち上がる。

「…じゃ、俺帰る。疲れた。」

「そうだな。お前はもう帰れ。後の処理は俺たちがしておくからよ。」
昇太がそう言つと玲は手をぶらぶら振つて答えた。

祭りの後、大崎の人質騒動は不良たちの間に知れ渡り、信用は失墜した。

そして、その大崎を下した玲はヒーロー的な扱いを受けたが本人は居心地が悪そうだった。そしてあの口喧嘩以降、玲は感情を表に出すようになつた。昇太は次のボスの座は誰にするか決まり、肩の荷が下りた気分になつた。

そして、大崎の父親はパワハラ、セクハラ問題を度々起こしており、大崎の父の部署はブラックで最悪の空気だった事が発覚。平社員降格の上、左遷させられたらしい。

「それ以降だな、今みたいな関係になったのは。あー、喋った喋った。」
話終えた昇太はコーヒを啜って喉を潤す。

「あの太鼓の演奏…玲聞いてたのか…。」

巴はしみじみに呟く。

(玲くんのあの後ろ姿…分かってくれる人が少なかったんだね…。)

つぐみはいつか見た玲の後ろ姿を思い出し、納得する。

するとモカがうーんと首をかしげる。

「そーいえばれーくんの両親って何の仕事をしてたんだろ？誰か聞いてない？」

モカの疑問に全員首を振る。玲が自分のことを分かっちゃいないと吐露するまでの精神状態になったとき親は何をしていたのか。答えられるものはいなかった。

「ま、今は詮索しないでおいた方がいいかもな。あいつにとっちゃ辛い過去かも知れないからな。」

昇太は椅子の背もたれに突っ掛かりながら話を切り上げる。

「あいつとはこれからもいつも通りに接してくれよ？お前たちに再会してからあいつ何だか嬉しそうだからさ。」

昇太のお願いに全員笑顔になる

「当たり前じゃん！玲も昇太さんもいてこそそのAfter glowなんだから！」

「おお？俺も入れてくれるの？嬉しいねえ、リーダー直々に仲間入りさせてくれるなんて。」

この子たちなら玲の過去の傷も癒してくれるだろう。After glowが笑い合いながら歩くなかに玲が加わっている未来を想像した昇太は笑顔になる。

「まあ、まずは。」

「明日リサさんにセクハラしたことを問い詰めないとね。」
後日、昇太のスマホに玲から大量のSMSが届いたが昇太はあえて無視をした。

10話 鬼

氷川紗夜は最近、よく出掛けている妹が気になっている。

最初はそれほど気にならなかった。ただ散歩に行くんだろうと思っていた。だが、最近はギターケースも背負わずにオフの日には必ずと言っていいほど外に出て行く。大方、アイドルバンドとやらのメンバーと一緒にいるのだろうか一体どこへ行つて何をしているのだろうか？

気になった紗夜はこっそり日菜の後を付けてみることにした。日菜は心なしかいつも以上にご機嫌な様子で歩いている。紗夜はその後をじつと付けていると段々不安になってきた。

(日菜…一体どこへ向かつてるの？確かこの先は…。)

そう、その先は花咲町で最も恐れられている不良の溜まり場。紗夜は日菜が不良になり来ているのではないかという不安に駆られる。そして紗夜は見てしまった。

入り口に見張りがある雑居ビルに何事もないように入っていく妹の姿を。それに見張りの不良も引き止める事はしていない。

(ひ、日菜…いあなたは…！)

道を外そうとしている妹を姉として止めなければ。紗夜は今日まで妹とはあまり関わってこなかった。姉としてのプライドが許さなかったからだ。でもまさか、その代償で日菜が不良になってしまうとは。説得しに行こうにも中の様子はうかがえないし、入り口には見張りがある。今はランプ遊びで暇を潰しているようでその隙に入るだろうかと考える。

(迷ってなんか入られないわね…。そうこうしている内に日菜はますます墮落していくんだから…。)

覚悟を決めた紗夜はこっそりと気付かれないように入り口に近づく。

「あーくそーまた負けちまったよちくしょう！」

「へっへー。どんなもんよ！」

「ちくしょうもう一回だ！今度こそ俺の裏技で勝つてやる！」

トランプゲームに夢中になっっているのかこっさり入っていく紗夜に気付かない。紗夜はチャンスを探いサツとビルに入ると早歩きで、それでいて音をたてないように探していく。

(日菜…:お願いだから、不良の仲間入りにならないで…。)

紗夜の脳裏にはヤンキー座りで水色の特攻服を身に包み、サングラスを掛けてチューインガムを噛んで「夜露死苦」と喋って改造されたオートバイに乗る日菜の姿が浮かび上がる。

すると、日菜の喋り声が聞こえた。誰か他の男と話しているようだ。紗夜は妹の声が聞こえるドアに耳を当てて聞き耳を立てると男性の何かを教えている声も一緒に聞こえてくる。まさか不良の心得でも刷り込まれているのでは? そう考えた紗夜はドアを開ける。

「日菜…:あなたは何をしているの!?!」

紗夜が見たのは大量に倒れている不良たちに中性的な美少年と組手をしている日菜の姿だった。

「…誰だ?」

「あれ? おねーちゃん?」

「そういう事でしたか…。」

後から聞いた話、日菜はただ護身術を習っていて暇潰しに不良たちを相手に身体を動かしていたようだ。

「お前もなんで言っていないんだよ…。」

「だって、おねーちゃんが襲われたときに助けて驚かせたかったんだもん…。」

シユンとする日菜。どうやら本気で姉が襲われたときに助けに行きたかったらしい。

「まあ、不純な動機でないなら私もとやかく言いませんが、次からはちゃんと報告しなさい。」

「はーい。おねーちゃん。私、おねーちゃんを守れるように強くなるよ!」

紗夜は注意するが悪いことはせず、自分の為に動く日菜を見て内心

ホッとしていた。

「あ、ねえねえ。今日は足つぽ無し?」

日菜が玲に話しかける。

「ダメだろ。お前今スカートじゃん。」

「えー?前はスカート履いててもしていたのに?」

「はい?」

日菜の発言で紗夜の表情が凍る。足つぽマッサージ?スカート履いててもしていた?

「ぼっ、お前、それ言うんじゃねえよ……!」

「あ、ねえねえ、今度はリサちーにやった口説きつての、教えてよ!女の子同士でやったらどうなるか試してみたいんだ!」

自分のバンドのベース担当を口説いた?不純異性交遊を教唆?

「…ちよつといいですか?リーダーさん?」

「…何だよ?日菜の姉。あと俺の名は神前玲だ。」

「氷川紗夜です。神前さん。その話、詳しく聞かせてくれませんか?

日菜も、そこに座りなさい。」

「お、おねーちゃん……?」

「よーす、戻ったぜー……?」

昇太が見回りからやまぶきベーカリーのパンを入れた袋を持って帰ってくるのと廊下で縮こまつてる部下たちを見かけた。

「おい、どうしたんだ?」

「あ、しよ、昇太のアニキ…。あの、今は入らない方がよろしいかと

…。」

「今来てんのは日菜だろどーせ。ずっと倒されて来たのに今更、何ビびってんだよ？」

昇太は笑いながらドアを開けようとするのと部下が止めてきた。

「マジで今は止めといた方がいいっす！鬼がいるんすよー！」

小声で止めてくる部下。しかし昇太は大丈夫と不用心に開ける。開けてしまった。

「おーす、日菜！れ…い…。」

そこには日菜と玲に正座をさせ、腕を組んで睨み付ける日菜と同じ髪と目の色をした鬼がいた。

「…何か？」

鬼が睨み付ける。昇太は笑顔からヒクついた笑いになる。

「や、あの…、何でもないすわ…。」

昇太は撤退した。

「おねーちゃん、もう足の感覚がないよおー…。」

「ダメです。反省しなさい。」

（かれこれ一時間以上座らされてるぞくそつたれ…。日菜よりも姉の方がヤバいんじゃないのか？）

この日、玲のグループに新たな掟が加わった。

『氷川紗夜の前では猥談、おふざけは禁止』

11話 祭り

遠くで何かを建てる音や指示を飛ばす声が聞こえる。玲はこの日が来たかと心の中で呟く。今朝、昇太からスポドリはまかせとけという連絡が来たので心配する必要は無いが念には念を入れる。

「さて、一応俺も何か買って置くか。」

玲は自分の分のスポーツドリンクを買いに偶然目にはいったコンビニに入る。

「しゃーませー。」

気の抜けた、それでいて聞き覚えのある声が迎える。玲がレジに目を向けるとレジに立っている店員と目が合った。

「おー、れーくんだ〜。」

レジに立っていたのは幼馴染みのモカだった。

「…そういうや昇太が言ってたな。モカはコンビニでバイトしてるって。」

「今日のれーくんは何のご用かな〜?」

「買い物だ。それしかないだろ。つーか俺客だぞ?」

そんな会話をしながらドリンクコーナーに向かい、適当なスポーツドリンクを取る。そしてレジに持っていくとまたも聞き覚えがある声が聞こえた。

「モカ? 誰か知り合い?」

レジ奥の事務室から出てきた店員に玲は顔をしかめる。

「そうですね。れーくん。紹介します。同じバイト仲間です。学校の先輩、今井リサさんです。」

現れたのは、一年前辱しめたギャルだった。玲の顔を見たりサは身構える。

「あ、あなたは…昇太の…。」

「…どうも。」

気まずい。そう思いモカに助けを求めるよう視線を送るとモカは面白そうにニヤついていた。その顔は「謝ったらどう〜?」と言いたげだった。

「あ…、その…。去年の、初対面のときは、スイマセンデシタ。」

「しよーくん、適当に謝っちゃダメだよー？」

「うるせえよモカ…！」

「え、えーと。モカ、この子とは知り合い？」

モカとのやり取りを見たりサはモカに尋ねる。するとモカは更にニヤリを笑ってりサに話した。

「んーとねー。モカちゃんどれーくんは、泥だらけで絡み合った仲なのでーす。」

「いや、待て。言い方。」

「え、っ、つまり、それって…。」

「あー、その、誤解、です。あの、その、誤解与えるような事してすいませんでした！」

「れーくん、どうしたの？ほんのモカちゃんジョークだよー？」

「お前なあ…！」

すると、りサが笑いだす。

「あはは、やっぱりモカの言った通りだね、とつてもいい子じゃん☆」
急に笑いだしたりサにキョトンとしてモカを見るとモカはいつも通りのテンションで話す。

「実はれーくんちにみんなで突撃した次の日りサさんにれーくんの事を話してたのさ。ネタばらし。てってーん。」

「ごめんね？アタシもあの時やられっぱなしなの癪だったからさ、一枚噛ませてもらったの☆」

してやられた。確信した玲は不機嫌になる。

「れーくんそんな怖い顔しちやダメだよ。スマイルスマイル。」

「誰のせいだと…！」

やっぱりモカは苦手だ。玲はギリツと歯ぎしりしたあとスポーツドリンクをやけくそ気味にレジに渡して金を払ったあと、足早にコンビニから出ていった。

玲が出ていった後、いたずら成功と言わんばかりに笑い合うモカとりサ。

「神前玲くんかあ。弄ると面白そうじゃん？」

「止めといた方がいいですよ？モカちゃんたちAfterglowに弱いだけでリサさん一人だけで行ったら逆に弄られると思いますよ〜？」

「そ、そうかもね…。」

賑やかな喧騒。煌々と照らす屋台。あちこちから聞こえる肉や油を焼く音。そして、響き渡る祭囃子。夏祭りが行われている中、町内会からの依頼で部下の不良たちと共に見回りをする玲。去年からの参加だがこれまでの活動ですっかり町内会の人々からは信頼されており、時々屋台の人が呼び止め食べ物を無料でくれる。見回りなのにこんなのでいいのかと思ったが昇太がリーダーの頃から変わってないそう。結果、両手に食べ物を一杯持って祭を満喫している人のような姿になってしまった。

「玲くん！」

貰われた食べ物をどうしようか考えていると名前を呼ばれて振り向く。そこには浴衣を着たつぐみ手が振っているのが見えた。蘭とひまりも一緒のようだ。

「ん、お前らか。」

玲は足を止め、蘭たちに向き直る。

「昇太から見回り中って聞いたんだけど、玲、あんた仕事ほっぽって楽しんでんの？」

「違えよ。お節介なおっさんどもから押し付けられたんだよ。お前らは巴の太鼓か。」

「うん！あ、じゃあアタシが持つところかな。玲も気を付けてね。」

ひまりが玲が持っている焼きそばや綿菓子といった祭りの定番を持ってつぐみや蘭に配る。ようやく両手が自由になれた玲は感謝する。

「ありがとよ、ひまり。お前も屋台の食べ物食い過ぎに気を付けろよ

？」

「なつ、玲〜！乙女にその話は禁句〜！」

玲はちよつとした八つ当たりで申し訳なく思うも笑いながらその場を後にする。すぐに意識を見回りに切り替えた。

ひまりたちと別れた後見回りを再開した玲は祭りの中を見回って道行く人々を観察する。親子、あるいは友人と共に笑い合いながら祭りを楽しむ人。ただ、気まぐれで訪れた人。食べ物制覇目当てで張り切る人と、まさしく十人十色な風景。玲はそんな人々を羨ましそうに眺めながらもすれ違う人の目や一挙手一投足に目を光らせながら歩いていく。すると、玲の携帯が震えだす。玲は携帯を取り出すと部下からの通信であることを確認して電話に出る。

「もしもし、俺だ。」

「あ、ボス！実は迷子の連絡でして、見失った場所がボスが見回りをしているエリアが近かったんで掛けました！」

「そうか、分かった。特徴はどんな子だ？」

「ええ、えーと、特徴はっすね、女の子で水色のウェーブで背中まで伸びてて、」

玲の脳裏に鬼が浮かび上がる。

「それで大人しめで困ったとき口癖のようにふええと言うらしいっす。あ、あと、名前は松原花音っていう子っす。」

「…了解だ。すぐに探す。」

鬼から小動物になった。一年前のこの頃、大崎の事件の時巻き込まれた被害者でもあり、ふええと言う特徴的な口癖もよく覚えていた。なのでまたあの神社に迷っているのだらうと考え、億劫ながらも神社の方へ向かった。

「…変わってねえな。まあ、神社なんてそうそう変わるもんじやないだろな。」

ぼやきながら去年と変わらない静けさの神社にやって来た玲は感覚を研ぎ澄まし、探す。

「ふええ…またここに来ちゃった…。」

見つけた。件の少女は階段に座り込んでしよぼんとしている。玲はその少女に近寄り声をかける。

「えーと、きみ?」

「ふえ!?は、はい!あ、あなたは…。」

声をかけられて跳び跳ねるように反応した少女は玲を見てハツとする。

覚えていたか。玲は心の中で舌打ちをした。こうなるとおそらく自分のせいでやられそうになったから謝りたいと言うタイプなのだろうと推測する。

「あ、あの、あの時、私の方向音痴のせいで…。」

「ストップ。別に俺は謝罪されたくないんだよ。ま、それであんたの気が済むならいいけどさ。」

玲は花音の謝りを遮って必要ないと言う。あの時の事で謝らなければならぬのは自分の方だ。玲は大崎に連れて行かれた時、あの神社裏に連れていってと頼んだのだ。だから松原花音が来るのは予想外だったのだ。あの時は昇太が救援に来てくれて助かったが来なかつたらと考えると億劫になる。だから思い出さないようにしていたのだ。玲は逃げるように携帯に先ほど連絡をした部下に繋げる。

「もしもし、俺だ。今祭りに近い神社にいる。そこで見つけたから依頼主にもそう伝えてくれ。」

「はい!あ、こっちから行くそうです。そこで待機してもらっていいですか?」

「…おう、分かった。じゃ。」

そして通話を切る。玲は一人分のスペースを空けた花音の隣に座る。

「…あんたの友達。こっちに來るってさ。」

「あ、そうなんですな…。」

「……。」

「……。」

沈黙が流れる。お互いにとって気まずすぎる沈黙。

(ど、どうしよう…これって私から話しかけた方がいいのかな…?)

「…なあ。」

沈黙の耐えれなさに話しかけようか考えていた時、話しかけられて花音は少し驚く。

「ふえっ…。」

「去年の事だな…。」

去年の出来事を話題に引き出した。花音は怒られるだろうと思いい目をつぶる。

「その…、怖い思いをさせてすまなかった。」

「…えっ？」

怒られなかった。むしろ謝ってきたのだ。視線は合わせてないがその後ろ姿はもうこの話は終わりとやわんばかりの雰囲気を出していた。

(もしかして…この人…。)

花音は玲があの時どう思っていたかに気付きかけたその時、

「ねえ、君ら二人だけ？」

二人組の男に話しかけられた。おそらくナンパだろう。「すみません。ちよつと友人を待ってるんです。」

玲は男にやんわりと誘いを断る。その仕草と声は自分に話しかけた時の態度とは全く違う。まるで女の子のようだった。

「えー、いいじゃん。なんならその友人も一緒に楽しんじゃおう？」

それでもしつこく話しかける男たち。

「いえ、大丈夫ですよ。」

「そっちの彼女もどう？」

「ふえっ、わ、私は…。」

「おい。」

花音も絡まれて戸惑っていると男たちの後ろから低い声が聞こえ

た。男たちが振り向くとそこには強面の大きな体の男が立っていた。「ウチの女に何か用か？」

そう言つてギロリと睨みを効かせる男。

「あ、いや、何でもないっす…は、はは…。」

ナンパをした男たちはすつかり怖じ氣付いてしまつてそそくさと退散していった。ナンパ男たちが見えなくなると睨んでいた顔が疲れたような顔に変わる。

「ボス、勘弁してほしいっすよ…。ボスの事を自分の女だとか言うのすつごい緊張するんすから…。」

「いいじゃん。お前、中々似合つてたぞ？」

「すつごい嬉しくないっす…。」

さつきまでの態度とはうつつで変わった態度をする部下。さつきまでの演技を見ていた花音は玲が男なのか女なのか分からなくなっていた。

「それより、ボス。この子が例の迷子で？」

「ああ、ご友人もいるんだろ？じゃ、俺は行くところがあるから後は頼んだぞ。」

そう言つて退散する玲。花音はその後ろ姿を見送つた。そしてすれ違いざまに同じバンドメンバーの奥沢美咲と北沢はぐみがやってくる。

「かのちゃん先輩！大丈夫？置いてっちゃつてごめんね！」

「花音さん、大丈夫でしたか？」

「あ、うん。大丈夫。」

（あの人、花咲町の黒豹、かあ。）

「花音さん？どうしたんですか？」

「あ、ううん、何でもない。」

噂に聞いた危険人物は男なのか女なのか分からないがそれほど危険ではないのかもしれない。花音は心の中でそう思った。

「はあ、慣れない事をした…。」

玲は頭を掻きながら祭りのある場所に向かっていった。謝るなんてことはしたくはなかったがしなくちや胸のモヤモヤも晴れないような気もしたのだ。だが、いざ謝ってみたらものすごく気恥ずかしくなってそっぽを向いていた。そんな時にナンパ男が来たのは幸運だった。おかげでまぎらわせる事ができたし、いいタイミングで部下も来てくれた。だが、やっぱり思い返すと恥ずかしい。

「はあ、憂鬱だ…。」

「何がそんなに憂鬱なの…？」

突然後ろから話しかけられて玲は驚いて振り向く。そこにはバイトを終えて来たであろうモカがいた。

「モカか…。ビツクリするだろうが。」

「れーくんまるで猫みたいだったね。何か食べてる最中にキュウリ置いたら飛び上がるかな…？」

「飛び上がんねえよ。ほら、もう蘭たちが席確保してると思うから行くぞ。」

「らじやー。びゅーん。」

ある場所とは、巴の太鼓演奏が繰り広げられる場所だ。そこへたどり着いた玲とモカは蘭たちを探すと手を振るひまりの姿があった。

「遅いよー！モカも玲もー！もう巴の演奏始まっちゃうよー！」

「いやーメンゴメンゴ。」

「俺は迷子の面倒を見てただけだ。別にいいだろ、間に合ったんだから。」

「そういうのは10分くらい前に着いてるものなの！」

「…そういうもんか？」

「あー始まるよー！」

つぐみが言うのと玲はやぐらの方を見る。そこには髪を纏めて鉢巻きを頭に巻き、青い法被を着た巴がバチを持って太鼓の前で精神統一をしていた。そして辺りが静かになったあと、巴がバチを振りかぶ

る。

「…すごい。」

玲は無意識のうちに呟く。去年聞いていたはずなのに。幼馴染みが演奏しているのを見るだけでこうも印象は変わるのか。太鼓を叩き続ける巴と力強く響く太鼓の音。玲の心は初めて見たAfter glowのライブとはまた違った心の情動が沸き起こる。そして、最後に巴が締めめの音を鳴らすと歓声が沸き起こった。

「ひゅーひゅー。もちろんカッコいいよ。」

「ウチのドラムは世界一の太鼓奏者なのだー！」

「かつこよかったでしょ、玲くん！」

「…ああ、そうだな。」

今日くらいは素直になろう。玲はそう思い、拍手を送る。

あの後、巴や昇太に演奏どうだったと問い詰められ良かったと言返すと蘭たちにもつとないのかと退路を塞がれたのは別の話である。

12話 黒豹の狩り

見回りが休みの日、玲は特にすることもなくベッドに寝転がっている。日菜もアイドルとしての仕事があるのか顔を出して来ない。正直安心したが来なかつたら来なかつたで何故か寂しく感じる。そんな食い違う感情のモヤモヤの中、ポケットに入れていた携帯が鳴る。巴からだった。

「もしもし、どうしたんだ？巴。」

「玲か。今、いいか？」

電話口の巴の声はいつもの竹を割ったような声ではなく神妙な雰囲気だった。

「…おう。」

ただ事ではない。そう感じた玲はベッドから起き上がり、応じる。「さっき、あこから聞いたんだが、あ、あこつてのは妹の事だが覚えてるか？」

あこ。その言葉で思い出すのは巴の後ろを付いて走ってくる元気な女の子。巴の妹だ。

「ああ、覚えてる。今もお姉ちゃんっ子か？」

「ああ！そうなんだよ！昔と変わらず、じゃなかった。今その事で電話したんじゃないんだ。」

巴ののろけ話で話がズレるかと思った玲はホツとする。

「実は、あこの友人が狙われているみたいなんだ。」

「…分かった。今は何もすることが無かったからちようどいい。今から伺いに行くがいいか？」

玲が尋ねると声が遠くなり話す声が聞こえる。おそらく妹とその友人に確認しているようだ。しばらくしてまた巴の声が聞こえる。

「大丈夫だ。」

「じゃ、今からそっちに向かう。」

玲はそう告げた後、電話を切りベッドから降りる。そしてメモやペンを持って宇田川宅へと向かった。

久しぶりに宇田川宅に来た玲。ドアを開けたとき何が起こるか想像しつつ呼び鈴を押す。

「玲にいちやん！お久しぶりー！」

玄関から飛び出してきたのはツイントールの少女。巴の妹宇田川あこだ。

「おう、久しぶりだな。」

玲は飛び込んできたあこを身体で受け止めながら頭を撫でる。

「うわ、玲にいちやんガタイいいじゃん！あこビックリした！」

直に玲の身体を触ったあこは驚きながらも玲の腹筋を触る。

「はは、くすぐったいぞ、あこ。」

「こら、あこー！玲は遊びに来たんじゃないぞー！」

遅れて玄関から巴が出てくる。その後ろにはビクビクしながら様子をうかがう黒髪の少女がいた。制服から察するに花女の子だろう。

「白金さん。この人がアタシが頼りになるかもしれないって言った幼馴染み、神前玲だ。」

巴の後ろに隠れていた女の子は前に出てくる。

「あ、あの、白金燐子、です。」

「神前玲だ。よろしく。さて、ここで立ち話もなんだ。中で聞こう。」
玲の言葉に巴は頷くと家の中へ入れてくれた。

宇田川宅の居間に来た後、話を聞くことにした。すると白金燐子はおずおずとしながら事情を話した。

「実は、ここ最近誰かに後をつけられてるような気がして…。」

「…なるほどな。ストーカーか…。」

玲は出されたお茶を飲みながら耳を傾ける。

「はい…。おそらく、ですけど。」

「それで、あこたちRoseliaと一緒に帰っている時も誰かにつけられてるって言うんですよ！あげくの果てには脅迫状とかまで来

てぎ！玲にいちちゃん、どうにかならないかな？前にズバーン！と投げ飛ばしてギリリつと締め上げたんでしょ？」

玲はメモをしながらどうするか顎に手を当て考える。おそらくあこが擬音混じりに言っているのはつぐみを狙ったストーカーの事だろう。

「そう、だな。白金さん。あんたの通学ルートに公園はあるか？」

玲は地図を広げて燐子に見せる。

「は、はい。あります…。」

燐子は通学ルートのここら辺にと印をつける。

「よし。後は、そうだな。ちよつと作戦を練るから後日、連絡するよ。それまでの間、常に誰かと一緒にいること。一人で人気がないところには絶対行くなよ？」

「は、はい。分かりました…。」

「え、玲にいちちゃん、それだけ？ほら、前みたく気配を察知してカツコよくつていうのは…。」

「あこ。ストーカーつてのはな、捕まえるのが難しいんだよ。つぐみを狙つてた奴は前から捕まえてほしいって依頼が来てたし、顔も割れてたからな。それに、相手を確認しようとするところちがストーカー扱いされてしまうこともある。おまけに俺らは不良だ。たとえ見つけて問い詰めてもしらを切るし難癖つけてるようにも見えてしまう。だからストーカーは難しいんだよ。」

「じゃあ、どうするんだよ？」

巴の質問に玲は不敵にニヤリと笑い、答える。

「それを、これから考えるのさ。安心しろ。せいぜい明日の朝ぐらいに白金さんに捕まえる作戦を伝える。そう長引かせねえよ。」

玲は雑居ビルに戻るとすぐに取りかかった。比較的まともな外見の不良数人を呼び出し、燐子の通学ルート付近を気付かれないように偵察して、作戦を伝える。決行日はあらゆるケースに対応するよう細

かく指示した。

「分かりました。でも、いいんですか？それだとボスが危険な目に会うかもしれないんですけど…。」

「おいおい、俺を誰だと？安心しなよ。それに、これは俺じゃないとできない仕事だ。」

自分の身を心配する部下に玲は部下の肩を叩く。

「ま、何はともあれ、俺のシマで勝手なことをやってるんだ。制裁を加えるまで逃がさないつもりだ。」

玲の言葉に不安そうにしていた部下たちも表情を引き締め頷く。

「じゃ、今から行動開始だ。」

玲の目が、笑みが変わる。その顔は蘭たちとは幼馴染みの関係である神前玲の顔ではなく、花咲町の黒豹として恐れられている神前玲の顔だった。

次の日の放課後、燐子は朝届いた玲からの連絡に従い、通学途中の公園に向かった。

(まさか、こんな作戦なんて…。)

今朝伝えられた作戦を思い出して顔が赤くなりかける。燐子は公園のトイレに入った後に怪しい人影が燐子が入ったトイレに入ろうとする。

「おい、そのあんた。それ女性用だぞ？」

声を掛けられた人影が振り返ると白い目で見ている男がいた。どうやら公園にいたらしい。

「あ、すいません。間違えました。」

人影はヘコヘコ謝ると男性用トイレに入っていく。その様子を見ていた男は携帯で電話をする。

「もしもし、ボスですか？今ストーカーらしき男が女性用トイレに入ろうとしてました。注意したら顔しかめてましたよ？」

「ああ、分かった。ありがとな。」

この男は玲の部下。玲の作戦で公園のベンチに座り、違和感無いように見張っていたのだ。

すると隣子がトイレから出て、公園の外へ行く。

その後を追うように人影も出ていく。そして、人影が見えなくなった後、玲の部下はトイレの外から声をかけた。

「おーい、白金さん。大丈夫?」

「は、はいい…。」

そう言っ出てきたのは玲が着ているシャツとジーンズを身に付けた隣子だった。

「すみません。こんな作戦で…。」

「い、いえ、大丈夫、です…。」

玲が考えた作戦は、玲と隣子の着ている服を入れ換えて玲がストーカーを撃退すると言うものだった。いくら玲が細いからと言って無茶じゃないかと思っしたが、ウィッグを付け、髪の毛を整えた玲を見て誰も文句を言えなくなっだったので採用したのだ。

「まあ、後はボスがコテンパンにボコっ戻ってきますよ。それまで…。」

そう言っ部下が男が出ていった方を見ると怪しげな車、所謂ハイエースがゆっくりと公園の入り口前の道路を通り過ぎて行った。

「…なるほど。白金さん、あなたホントに危なかつたですよ?」

「え…?」

「これは一人の犯行じゃない。複数人絡んでいやがる。」

「そ、それっ、神前さんは大丈夫なんですか!?!」

複数の人間が車に連れ去る。それはもう誘拐ではないのか?隣子は自分の身代わりになった美少年の身を案じる。その顔を見た部下は落ち着かせるよう笑顔で答える。

「大丈夫ですよ。ボスがこのようなケースを考えてないわけがない。ちゃんと対策とってあるんですからね!」

燐子に扮している玲はわざわざ人気がない道へと進んでいた。そして隣にハイエースが走ってきた瞬間、ドアが開き、魔の手が伸びてきた。

「バレバレだったの。」

のを玲は懐に隠していたスタンガンで対応した。

「こ、こいつ！目当ての女じゃねえ！」

中にいた仲間が叫ぶとすぐにドアを閉じてそのまま去っていった。玲は作業のようにナンバープレートを携帯で撮ると玲のグループのチャットに拡散し、後ろを振り向く。

そこにはずつと後ろを付けていた男。おそろく、取り逃がした時の補助でつけていたのだがそれが裏目に出たようだ。

「さーて、ちよつとあの車に乗ってる怖い人たちについて知ってること教えてくれるかな？オニーサン？」

玲は笑う。その顔はまさに美少女とも美少年とも呼ぶに相應しい顔だが、目は獲物を逃がさんとばかりに睨み付け、スタンガンをちらつかせる。男はただ、震えることしかできなかつた。

その後、玲からストーカーとその一味は確保したと連絡が来た以降、燐子の後を付けてくる気配は無くなった。

ようやく怯えずに済むと胸を撫で下ろした燐子は玲に助けくれたお礼をしに行きたくなって巴から教えられた住所へ向かう。するとそこには外で巴に正座をさせられている玲がいた。

「なあ、玲。アタシは確かにあこからの頼みで白金さんを助けてくれって頼んだよ？でもな、欺くためだからと言って着ていた制服を着るか普通!?!」

巴が玲の頭を両手グーで挟みグリグリする。挟まれた玲は苦悶の声を上げながら反論する。

「ぐ、ぐおとおおお…！け、結果的に助かったからいいじゃん…！」

燐子は花咲町の黒豹の噂を小耳に挟むことがあり、その時の印象は、昔見たギャングアニメのボスのようなイメージだった。だが、今の姿はただただ、男勝りな女の子に説教されている少年だ。

「はあ、だから危険な目に会うかもって言ったのに…。」

呆れ果てる部下。あの時謝ってきた部下だ。燐子はその部下に話しかける。

「あ、あの…。」

「ん？ああ、白金さん。あれからはどうですか？」

「はい、大丈夫です。あの、一つ、いいですか？」

「どうぞ何なりと。」

「神前さんって、いつも、あんな感じなんですか…？」

燐子の質問に部下は困ったように笑う。

「あー、実はつい最近まであんな姿は見せなかったんですよ。ずっと冷徹でどんな奴が相手でもボコボコに叩きのめす。まさに黒豹でしたよ。」

「そうなんですか…。」

「Afterglowと関わりはじめてからですかねえ…。何だか前以上に絡みやすくなった気がするんすよ。」

「この事、蘭たちにも知らせるからな！」

「な、ふざけんな！止めるマジで!？」

事の顛末を見守る部下。燐子も部下の視線の先を見ると蘭たちにも知らせると言われ慌てふためく玲の姿。その姿は黒豹というより、飼い主に怒られごはんのお預けくらった猫みたいだった。

13話 喧嘩

玲は雨が嫌いだ。理由としてはごく単純で濡れるのが嫌なのと傘を持つと緊急時の動きに邪魔になるからだ。巷ではドローンのように頭上を飛んで付いてくる傘が開発中らしいが遠い外国での事だ。日本国にいる、それに不良である玲には何ら関係もない。

しかし、見回りのシフトは玲だ。たとえ雨の中だろうと見回りはしなくちや部下に示しがつかない。億劫になりながらも傘をさし、歩く玲。舗装された道や傘に落ちる雨水がずっと同じ音楽を奏でている。落ちる場所によって音が変わるのを聞き、天然のドラムだなどらしくないことを考えてしまう。

(そういや、こんな感じの天気之歌があったな…。)

玲はふと、思い出す。思い出したくない記憶の中の一つだが確か、昔の映画で自分と同じ不良グループのリーダーが歌っていた歌だったか。そしてとても暗い内容の映画なのにあまりにも明るい歌。シユールなシーンだったので覚えている。

(…こんな、歌詞だったか?)

記憶をたどりながら歌を歌う。その歌はただ自分は嬉しさがこみ上がっているから雨の中歌うのさというポジティブすぎる歌詞だった。

(…確かに、これ歌つてると楽しいかもな。)

今の自分は嬉しさに満ちている実感はないがこの歌を歌っていたら気分が晴れやかになる気がした。

「ねえ！そのききみ！」

それで気が抜けたせいだろう、呼び止められた。思わず振り向く。「…あん？」

呼び止めたのは猫耳のような特徴的な髪の毛をした女の子だった。隣にいるツインテールの子が関わらないよう呼び止めてるがこちらに近づいてきている。

面倒くさそうなものに目をつけられた。そう感じた玲は逃げ出す。後ろから件の少女が追いかけてきているのを気配で感じる。玲は少

女の目を見て察した。あれは日菜と同じ純粋な興味しかない目だ。

(ああくそー！今赤信号かよー！)

心の中で舌打ちする。さっきまで青だった信号が横断歩道前で赤になったのだ。そしてその後はもちろん、

「はあー、やっと追い付いた！ねえあなたがさつき歌っていたの何の歌なんですか？すつごく雨に似合いそうな歌でしたよ！」

猫耳のような髪の毛の少女に追い付かれた。

「おーい！香澄ー！ちよつと待てー！」

それに遅れて切羽詰まったツインテールの子も追い付く。

「あ、有咲。どうしたの？」

「どうしたの？じゃねえよ！あいつが誰なのか分かってて話してんのか!？」

どうやらツインテールの子、有咲は自分が何者か分かってるようだ。玲は内心安堵する。

「あいつはな、この辺り一帯を仕切ってる不良の親玉。ほら、聞いたことないか？花咲町の黒豹つて奴！」

有咲に教えられ、体を震わせる猫耳少女、香澄。しようがないだろう。町の治安維持とはいえ恐れられている存在なのだから。玲はそのまま自分が危険人物であることを分かった上で去ってほしいと思っただら、

「すつごくーい！そんなスゴい人が私の目の前に！」

予想外の反応に思わず玲は有咲と一緒にずっこける。不良と言われたらいいイメージは抱かない筈だがこの子の頭は花畑でもあるのだろうか？

「お、お前、私の話聞いていたのか？こいつは！札付きの！超やべえ不良なんだよ！機嫌損ねたら何されるか分からねえぞ!？」

有咲の反論に頷きたくなる。だが、本人の前で言わないで欲しい。「でも、ホントに悪い人かな？私、そうとは思えないんだよね。」

この周辺にはこんな能天気な奴ばっかなのか？玲は頭を抱えたくなった。

「だって、さつき歌を歌つてるときの顔、とても悪いことをしているよ

うには見えなかつたもん。」

そろそろ信号が青になりそうだから逃げる準備をしよう。そう考え徐々に香澄から離れる玲。

「ねえ、黒豹さん！きつき歌ってたのって何て言う歌なんですか？」

逃げられなかった。名前を教えないから黒豹なのは仕方ない。こういう奴は指摘すると余計に面倒なことになりそうだ。こちらから突き放すことにした。

「うるっせえな…。この歌は俺もあまりよく知らないんだよ。ほら、さっさと帰った帰った。」

玲は手でシツシツと払うように動かす。

「ほら、香澄。あいつもこう言ってるんだ。行くぞ。」

香澄は有咲に手を引かれてそのまま離れていった。玲は有咲と呼ばれた少女に感謝しつつ見回りの続きをするのだった。

夜。ベッドで寝転がる玲は目が覚めてしまった。その理由は、

「…あの歌、何て映画に出てきた何て言う歌だっけ？」

気にもしていなかった事が気になりだしてしまった。これも全部あの香澄とか言う奴のせいだ。

「なあ、蘭。」

「何、玲。」

練習が休みの日で他の面々がバイトやら手伝いやらで一緒にならない日。玲は蘭にずっと気になっている事を聞いた。

「ちよつと歌でどんな映画に出たのか思い出せない歌があるんだが聞いてくれるか？」

「ん、いいよ。」

蘭からの了承を得た玲は例の歌を歌う。蘭は耳を傾け顎に手を当て、考えるような仕草をする。

「ここまでしか覚えてないんだが、どうだ？」

「それって、雨に唄えば、じゃない？」

「雨に唄えば、か。」

蘭から聞かれたタイトルを復唱する。冒頭の歌詞が雨の中歌っているというからそのまますぎるだろうと思った。

「なるほどな。で、どんな内容だ？」

「んー…、アタシもよく覚えてないけど、多分ミュージカル映画だったような気がする。映画俳優が雨の中、傘を差さずに歌って踊ってた。」

「…は？」

おかしい。自分の記憶と全く違う。不良のリーダーが歌ってた歌じゃないのか？そう考えた玲は指摘する。

「いや、違うんじゃないのか？不良が歌ってた歌じゃないのか？」

「…え？いや、何言ってるの？そんな場面一つもないよ？」

玲の指摘に蘭は一瞬何を言っているのか理解できなかつた。そんな場面があつたのだろうか？お互いに同じ疑問が出てくる。

「でもな、俺が見たやつだと確かにあつたんだよ。しかも不良が二回も歌う場面があつた。映画俳優なんかえの字も出てきてなかつたぞ！」

「それだったらアタシが見たのも不良のふの字も出てきてない！アンタ記憶違いしてない!？」

「いやー！確かに歌ってた！歌ってたぞ！不良が歌ってた！」

「悪趣味すぎるでしょ！玲のバカ！ミュージカルなのに何でそんな場面があるわけ!？」

「バカってなんだバカって!？」

激しくなる口論。その音量は部屋の外にいた部下の耳にも届いた。恐る恐る中の様子を覗く部下たち。

「蘭！お前ガキの頃からずっとそうだよな！自分が気に入らないことがあつたらずっと石みたいに動かなくなりやがってこの頑固者!？」

「そういう玲こそ、自分の意見が通らなかつたからってずっとネチネ

チネチネチ後を引きずって！アンタ男でしょ!? 割り切りなさいよ！」
「うるっせえよ！ただモカたちとクラス離れただけで寂しかったり
しやがって！ウサギかお前？」

「それは関係ないでしょ！そういうアンタこそ、日菜さんの下着を丸
出しにさせたり白金さんの制服を着たりして、この変態！」

「あー、もうやだ！とつとと帰れお前！今日はもうお前の顔も見たく
ない！」

「そうさせてもらおう！さよなら！」

そう言つて蘭は鞆を持つて立ち上がると早歩きで部屋から出て
いった。不機嫌で出ていった蘭の後ろ姿を見送る部下。

「おい。」

玲の一声で部下に緊張が走る。

「今日はもう疲れた。お前らも帰れ。」

「は、はい…。」

ふて寝するようにベッドに寝転がる玲。こうなつてしまつては玲
は動かないし無理に動かそうとすると鉄拳が飛んでくる。部下たち
は恐る恐る雑居ビルを後にした。

次の日、蘭はどうにも気分が優れなくて屋上で授業をすつぽかして
た。昨日、玲とくだらない理由で口喧嘩をしまつて絶賛自己嫌悪
中だった。どうしてムキになつてしまつたんだろう。冷静に話し
合つていればあんな口喧嘩をしないで済んだかもしれないのに。そ
んな考えがずっと脳内でぐるぐる回る。今日の練習は中止するしか
ないかもしれない。そう考えているとチャイムが鳴つた。気付けば
もうお昼時だった。でも食欲もない蘭はこのまま時間を潰そうか考
えた瞬間、

「おっ昼ー！」

天才が屋上に現れた。

「あれ？蘭ちゃんじゃん！どうしたのそんな暗い顔してー。」

「日菜さん…。いえ、何でも、ないです。」

「うーん、何でもなくないよねその顔。どうしたの？」

言おうかどうか迷っているのと更に屋上のドアが開く音がした。

「あー、蘭はっけくん。」

「蘭ちゃんどうしたの？午前中ずっとクラスにいなかったから心配したんだー！」

「蘭、今朝から何かおかしいよ？昨日何があつたの？」

「べ、別に…。」

「別について訳じゃないだろ？もしかして、玲絡みの事か？」

目を反らそうにも反らせない状況。蘭は観念して昨日玲と口喧嘩してそのまま別れてしまったことを白状した。

「しよーもないねー。」

口喧嘩の理由を聞いたモカがバツサリと斬る。

「んーと、蘭ちゃんは『雨に唄えば』って答えたけど玲くんが言つてたのってアタシ見たことあるよ?。」

「え?。」

「アタシはあの映画、千聖ちゃんから演技の勉強で見せられたことがあつて、あんまりるん♪つて来なかつたけどそういう場面があつたの覚えてるよ。だからどっちも正解だよ。」

「そ、そんな…。」

日菜は自分の事に素直だ。素直だから時にはトラブルを起こすこともあるが嘘を言ってるわけではないのでそれを知ってる蘭は愕然とする。

「蘭、やっちゃいましたな〜。」

「あ、謝りにいかなきゃ!。」

「落ち着け蘭!せめて放課後にしろ!もう慣れたとはいえあそこは不良の溜まり場だぞ!今一人で行ったらどうという目で見られるか…!」「アハハ、それだったらアタシたちもおんなじだよー!。」

何とか蘭を押さえる事ができたモカたちは放課後、いつもの雑居ビ

ルへと向かう約束をした。

玲の目覚めは最悪だった。あまりにも不機嫌な顔で佇むその姿に他の部下はビビってしまつて玲を怒らせないようにする緊張が漂う空気を醸し出していた。

ここにおいても気が晴れない。そう考えた玲はビルから出る。緊張していた部下たちは玲が出ていったことで胸を撫で下ろし、口々に喋り出す。

「ひええ…めっちゃ怖かった…。」

「なあ、ボスがああなつた原因なんだ？誰のミスだ？」

「ああ、何でもAfterglowの美竹蘭さんとケンカしたそう
だ。」

「ケ、ケンカあ!?あのボスと!?!」

「やべえ…蘭の姉御って呼んだ方がいいか？」

「いや、それよりも蘭さんとは幼馴染みで仲良しだろ？何があつたんだよ?」

「うーん、昨日あの場にいた奴の話だと歌に関する事らしい。」

「蘭さんはAfterglowのボーカルだからなあ…。ボスと意見が衝突しちまつたんだろ。」

「バンドマンによくあるやつじゃねーの？ほら、方向性の違いとかなんとか。」

「そうかあ…。俺は好きだけどなあ。Afterglowの歌。」

「こればかりは時間で解決するしかないかあ…。」

「ねえ、何の話をしてるの?」

部下たちが会話を区切つたところで話しかける声があった。その声は部下たちにとつてよく聞く声だ。振り向くと予想通りの人物と先程の会話に出た人物だった。

「あ、日菜さんとAfterglowの皆さん。今日はボスは外出中ですよ。」

「あれま。れーくん見回り中だったか?」

「え、そうなの?」

蘭がどうしようと言いたげな顔をする。

「あの、玲くんがどこに行ったか分かりますか?」

つぐみが尋ねると不良たちは目を見合わせ、覚悟したように頷く。

「じゃあ、ちよつと付いてきて欲しいっす。」

たどり着いた先は図書館だった。不良である玲の行き先とは思えなかったので少し呆気に取りられるAfterglow。

「ここに、玲がいるのか!」

「ええ、そうっす巴さん。ボス是不機嫌な時と一人になりたい時はよくここに行くんすよ。」

「ふーん、ここで何してるんだろ?」

「それは俺らにも分からないっすよ。」

「でも、ありがと。教えてくれて。あとはアタシ一人で行く。」

「あ、気を付けてくださいっすよ!ボス、一人の時間を邪魔されるの大っ嫌いなんすから!」

不良の心配に手をあげて答える蘭はそのまま図書館の中に入っ
いった。

図書館の中。大量の、様々なジャンル分けされた棚が並んでいる。その間を蘭は玲がいそうな場所を探して行く。玲ならどこへ行くか。

蘭は図書室の読書スペースへ向かうとそこに玲はいた。不良とは無縁そうな空間の中、頬杖をつきながら本を読むその姿はある種の美しさが出ていたが、蘭はそんな玲の姿がとても寂しそうに見えた。

意を決し、蘭は無言で玲と向かいの席に座る。

「……。」

「……。」

玲がそっぽを向く。まだ根に持っているんだろうか。

「その、昨日は、ごめん。」

蘭は謝る。玲はまだそっぽを向いたままだ。

「あのあと、アタシも調べてみたんだ。そしたら、玲の言う通りだった…。」

玲はほれ見ろと言いたげな顔をしていた。

「でも、アンタにも見せて欲しいところがあるの。…来れる?」

その後続いた蘭の言葉に首をかしげる玲。何を見せるのだろうか？だが、一人で謝りに来た蘭の意思を尊重しようと思った玲は本を閉じ、元の場所に戻した後、外に出た。

「あーやつほー♪玲くーん!」

外に出ると氷川日菜とモカたちがいた。

「お前らなんでここに…って、あいつらか…。」

玲は頭を掻きながらこの場を教えた不良たちの姿を思い浮かべ、舌打ちをする。

「れーくん、聞いてくださいな。日菜先輩が喧嘩の原因にもなった歌を検証してくれました。」

モカが後ろから押す。日菜はスマホを持って準備していた。

「よーし、じゃ再生するねー♪まず玲くんが見たって言うやつ。」

日菜が再生ボタンをタップするとそこには不良たちがやりたい放題している場面だった。

「そう、これだ。これだよ!」

玲はそら見たことかと言いたげな目で蘭を見る。だが蘭は特に悔しがりもしていなかった。不審に思っていると、

「で、蘭ちゃんが言ってたやつがこれだね。」

日菜が再生ボタンをタップすると、スーツの男が雨の中踊りながら歌っていた。蘭が言っていた通りの状況が映像で流れて玲の目が見開かれる。

「嘘だろ…。」

「れーくん、蘭ちゃん、両成敗。」

「玲、お前次に何すべきか分かってるだろ?」

愕然としている玲にモカと巴が追い討ちをかける。玲はぎこちな

く蘭と向かい合う。

「あー、その、俺の、知識不足だった…。すまん…。」

「…ん、いいよ。許す。」

蘭はそっぽ向きながら玲の謝りに応えた。そしていつも通りの雰
囲気に戻る。

「よし、今日はこのまま練習に行くか!」

「ひーちゃんみたく丸く収まったしね。」

「あはは!モカちゃんに座布団一枚!」

「上手いね…って日菜さん!モカー!それどういう意味!?!」

「あはは…落ち着いてひまりちゃん。」

「…結局いつも通りだな。」

「うん…それがアタシたちだから。」

いつも通り。それがAfterglow。そしてそのいつも通り
の中に自分も入ってることに玲は気付かなかった。

番外編　モカ誕生日

「れーくん、今日はモカちゃんに一日中付き合ってもらいたいのだよ。」

「…急になんだお前。」

青葉モカ。玲の幼馴染みの一人であり、afterglowのギター担当。小学生の頃から変わらずマイペースで独特な話し方をする女の子。そして玲が苦手とするタイプの性格である。

その青葉モカが玲の部屋に急にやって来たのだ。玲は今日も部下も数人が外に出払っている中午後までゆっくりする予定が丸潰れになる予感がした。

「実は最近蘭ちゃんたちが急によそよそしくなっちゃってしまっちゃ寂しくて死にそうなのです。よよよ。」

「はあ、分かったよ。今日は何も予定無しだから付き合ってる。どこに行きたいんだ?」

「ん。まずは。」

モカが行きたいところ。それは真つ先に商店街のパン屋、やまぶきベーカリーだった。

「おつす。」

「あ、モカいらっしやーい。あれ、玲さんも一緒なんですか?」

モカはこのやまぶきベーカリーの常連で看板娘の山吹紗綾とは気軽に話し合う仲なのである。そして玲との関係は昇太経由である。

「モカに今日一日付き合えと言われたんだよ。ほらモカ、何買うんだよ。」

「れーくんせつかちだなく。パンは逃げないよ?」

「もしかして玲さん照れてる?」

「うっせえ。こちとらゆっくりしようとしたのに全部台無しになつて機嫌が悪いんだよ。」

「その割には満更でもないよね〜？」

「いいからさっさと選べ。って、おいこら、そんなに買って食えんのかお前?..」

「ありがとうございましたー。」

やまぶきベーカリーを出た後の玲の手には大きな袋があった。持ち手に食い込んでいて早くも置きたい気分だった。

「なあ、ずっと思つてたんだが、お前こんなに食つてその体型つて食つたものどこに消えてんの?..」

「ふっふっふー、実はひーちゃんにカロリーを送っているのだ〜。」

「悲惨だなひまり。…さて、次はどこに行くんだ?..」

「次は公園に行つてみよ〜。」

次は公園に着いた。公園には子供たちがサッカーをしていて楽しんでる姿が見える。モカはベンチに座ると玲もその隣に腰を下ろす。

「あー、手が痛い。」

プラプラと大量のパンを持っていた右手を振る。

「お疲れさーん。じゃあ、一緒に食べよ〜。」

モカはおもむろに袋の中のパンを取り出すとかぶりつく。やまぶきベーカリーのパンは地元の人からは大層愛されている。焼きたてのパンの香ばしい香りと食感。玲も嫌いではないのだ。

「んー、やつぱりこういう場所で食べるパンは一味違いますよ〜。」

「ふーん、そんなもんか?..」

二人でパンを食べる。ただただ食べる。黙々と。すると口に余裕ができたのかモカが喋る。

「なんていうか、私たちと玲つてここから始まったよね〜。」

「…おう。」

どうやら思い出の公園に来ていたようだ。玲は口にパンを含んだまま応える。

「あの時上級生に立ち向かっていくれーくんがいたから一緒になれたんだよ。」

モカが言っているのは子供の頃の事だろう。玲も思い出す。

出会ったきっかけは上級生の無垢かつ残虐な遊びからだ。子猫の体を砂場に埋め、顔だけを出しその近くに石を投げれた者が勝つという遊びだった。その遊びが始まろうとしたとき待ったをかけ飛び込んだのが蘭たちだった。

しかし、力で叶う訳がなくあつさりと押さえられ遊びが再開され、石を投げられた瞬間、子猫を庇う少年が出てきた。少年は石が当てられてるにも関わらず子猫を手で掘り起こすとすぐに逃がした。上級生が文句を言うが少年は振り返って言い放った。

「あんなかわいいねこが何をしたんだ！いじめるのは俺が許さない！」

そう言つて上級生に噛みつく少年。しかし、悲しいかな。当時の蘭たちと同じ年齢で上級生に対抗できる手段はなくぼこぼこにされた。が、現場を見た大人たちにより上級生は親に説教される羽目になり後日、蘭たちに謝りに行った。

「あの日以降知り合つて色んな事して遊んだね。」

「…そうだな。」

玲は思い返す。夏は保護者つきで沢登りにキャンプ。冬は雪だるまや雪合戦と、色んな遊びをとにかくした。

「できればまたしたいよね。」

「…ああ、そうだな。」

すると公園で遊んでいた子供が何か叫んだ。モカが前を向くと眼前にサッカーボールが迫っていた。

「あぶねえー！」

のを玲がキャッチした。

「…おー。れーくんナイスー。」

状況把握が追い付いたモカはパチパチと手を叩く。ボールが飛んできた方向を見るとさっきの玲のガードに興奮した子供がもう一回とせがんでいるのが聞こえる。玲はボールを子供たちに投げ返しながら

「悪いが一日一回が限度だよ！」

と丁重にお断りした。

「ふう、大丈夫だったか？モカ。」

「いや〜。ありがとれーくん。おかげでモカちゃんはパンを一つも犠牲にすることなく食べられるよ〜。」

いつも通りなテンションのモカに呆れ果てる玲。だがその顔は笑顔だった。

公園で駄弁りながらパンを消費していると蘭から連絡があった。ライブハウスC i R C L Eに来て欲しいとの事だった。

「なんだろね〜？」

「さあ、俺が知るかよ。」

そう言っつてモカを連れてC i R C L Eに来た玲はドアを開けると「モカ、お誕生日おめでとー！」

蘭たちや部下の声とあちこちからなるクラッカー。そして眼前には様々な料理が並ぶテーブルがあった。

「…はっ？」

「おー、そうだった。今日はモカちゃんの誕生日だったよ〜。」

それで玲はようやく理解する。

(そうか…：そういうや、モカの誕生日、今日だったな…。)

「なんか、モカちゃんがいつも通りだから玲がサプライズ食らったみたいになってんな。」

クラッカーを持った昇太がそんな感想を漏らす。

「ほー、モカちゃんの誕生日はれーくんの誕生日でもあった…?」

「何だその哲学は。」

「ごめんなモカ。バレちゃいけないと思ってさ。」

「ふっふっふ。こんなサプライズを用意してくれたのだ。許すぞ。」

「さ、モカ様の許しを得たことでパーっと祝おうぜ!」

昇太の音頭で一気に食べ始める面々。その様子を後ろから眺める玲にモカが手を引つ張って来た。

「れーくんも来なよ。早くしないと無くなっちゃうよ?」

「…俺はここでいい。」

「今日のモカちゃんはスペシャルなんだよ。この機会を逃したら後悔しますぜ。」

「はいはい。」

玲はモカには敵わないなどと苦笑しながらパーティーの輪の中に入っていくのだった。

14話 トラウマ

玲は秋の風を受けながらジーンズにパーカーを着てフードを被り目的地に歩く。行き先は羽沢珈琲店。幼馴染みの羽沢つぐみの親が経営する珈琲店である。店は定休日のように入口にはcloseの文字がある。玲は建物を回り、従業員用の入口をノックする。

「つぐみ。来たぞ。」

玲は客として来たのではなくつぐみからのSOSを受けて来たのだ。

「玲くん！来てくれてありがとう！早く入って。」

ドアが開き、つぐみが入るよう促す。

「で、一体何の用件だ？店の手伝いか？」

「ううん、そうじゃないんだ。ちょっと助けて欲しい人がいるんだ。」

そう言っつぐみは自分の部屋に案内する。

「イヴちゃん。助っ人、連れて来たよ！」

つぐみが部屋のドアを開けるとそこには女の子らしい部屋の真ん中に人形のような外国人の女の子がいた。

「あ、ツグミさん！その方がツグミさんの幼馴染みのレイくん、ですか？」

「うん！玲くんは頼りになる人だから相談に乗ってくれるよ！あ、玲くん、紹介するね。この人は若宮イヴちゃん。ここでバイトしているんだ。」

「そうか、俺は神前玲だ。よろしくな、若宮。」

「はい！若宮イヴです！お見知りおきを！イヴって呼んでも構いませんよ。」

そう言っつて笑顔で玲と握手をするイヴ。

「さて、早速だが用件は何だ？」

握手をしたあと玲は本題に入る。

「はい。実は…。」

若宮イヴの話によると最近来ているガラの悪い客の目がイヤらしく、つぐみやイヴにボディタッチをしようとしてきたところをつぐみ

の父親が出禁にさせたらしい。だが、出ていかされた時の表情からまだ終わってないような気がして玲に頼った。というのが経緯だ。

「なるほど。逆恨みに何をしてくるのか分からないから俺に頼みに来たって訳か。」

「はい…。あの時の表情からまだ何かしてきそうな気がするんですけど…。」

そう言っただけでシユンとするイヴ。

「玲くん。どうにかできないかな？」

玲はしばし頭の中で策を考え、よし。と短く呟く。

「分かった。この件は持ち帰って部下たちと共有しとくよ。つぐみが困ってるって知ったらあいつら張り切るだろうさ。」

「れ、玲くん。大袈裟だよ…。」

「スゴいですツグミさん！フリオウたちの心を驚掴みにする。まさしく玉藻の前です！」

「そ、それはちよつと違うかも…。」

イヴのどこかズレてる誉め言葉に苦笑いをするつぐみ。

「イヴ。玉藻の前って奴は男をダメにする妖怪で…いや、あながち間違いないかもな…。」

「玲くんまで何なの!?もー!」

沈んだ空気が和んだ気がした。

「じゃ、俺が送っていくよ。」

話し合いが終わったあと、玲はイヴを送り届ける事にした。

「今日はありがとね。玲くん。」

つぐみは玄関前までお見送りをしている。そこで玲はイヴに対して聞きそびれていた事を聞いた。

「そーいや、イヴって何人だ？日本語が上手だけど」

「はい！日本人のお父さんと、フィンランド人のお母さんの HALF です！」

「あ、ああ、うん。何でもない…。何でも…。」

そう言つて気丈に振る舞うも声が震える。

もう終わったことだ。奴は捕まった。世間からも制裁を受けた。こいつはお前を傷つける者ではない。もう苦しめる者はいない。誰にも、何処にも。だから、震えるな。怯えるな。俺はもう誰にも襲われない。大丈夫。大丈夫。大丈夫。大丈夫。

「…玲くん。」

するとつぐみが優しく抱きしめる。

暖かい。優しい匂いが玲を包む。玲はつぐみに寄り添い、震えが収まるまでの間、ずっと離れなかった。

偶然その場を目撃した昇太によりイヴを送り届けてもらうことになった。玲はすまなそうに昇太に頼む。

「悪いな…、昇太。イヴを頼む。」

「いいってことよ！俺は羽沢珈琲店の常連だし親友の頼みとあつちや断れねえからな。玲、今日お前はつぐみちゃんちに泊まっていきな。部下には俺が話しくからさ。」

つぐみに抱かれてた事情を深くは聞かない。そんな親友の気遣いに感謝しつつ自分がやろうとしていたことを引き継ぐ。

「じゃ、イヴちゃん行くか。」

そう言つて昇太はイヴを送つていった。

「あの、シヨウタさん。」

「んー？どした？」

玲の姿が見えなくなったところでイヴが尋ねる。

「レイさんってとても強いつて聞いていたんです。学校でも、とても怖がられている人つて聞きました。…でも、実際に会つてみたら全然怖くなくつて、むしろ噂とは正反対のお人でした。どうして、あんな

噂が広まったんでしようか？」

「ああ、あの噂はな、玲が流せって言ったんだ。俺を怖がってくれたらバカなことをしようとする奴は減るからってな。実際効果覷面だったもんな。いじめの現場に出会うといじめっ子をぼこぼこにして成敗したらこの辺りでのいじめはまるつきり聞かなくなっただしな。」

「スゴいです…！弱きを助け、強きを挫く！まさしくブシドーです！」
「あつはつは。あいつはそんな武士道精神なんか考えちゃいけないけどな。イヴちゃんはいいつと仲良くなりたいのか？」

「…でも、怖がらせてしまったようです。」

「…こればかりは、時間が解決するしかないか。」

昇太は空を仰ぎ見て、考える。

イヴの両親の事であのような状態になった。と、するとおそろく蘭たちと別れた後、児童ポルノに出演していたとき、外国人に何かをされたのだろう。

「でも、大丈夫だと思っぜ。イヴちゃんがとても優しい子だったのは知ってるようだったから絶対仲良くなれるさ。」

「そうですね…！はい！私、頑張ります！」

イヴが張り切る表情を見て昇太はニツと笑う。

そんな二人の後ろに怪しい影が近づいていた。

玲はそのまま羽沢家にお泊まりをすることになった。つぐみの父と母は玲を歓迎してくれて玲もぎこちないながらも会話をした。そして、夜。寝ることになったがそこで問題が発生した。

「俺は別の部屋で寝るからいいだろ？」

「ダメだよ！今の玲くんを一人にはできないよ！」

そう。寝る場所だ。つぐみが部屋に一緒に寝ようと言い出すと玲は飲んでいたお茶を吹きそうになり、つぐみ父は複雑そうな微妙な顔

をしていた。母は微笑ましそうに見守っていた。今はどこで寝るか
の論争に発展したのだ。

「だーかーらー。俺はもう平気だったの。」

「昔は一緒に寝たのに?」

「ガキの頃だろそれは!今は違うだろ!?つーか、年頃の女の子の部屋
にいる俺の気持ちも考えやがれ!」

お互い平行線の主張。その状況を打破すべくつぐみは奥の手を
使った。

「…カボチャ。」

「うっ…。」

「一緒に寝なかったらひまりちゃんや巴ちゃんに玲くんのカボチャ嫌
いの元凶をバラしちゃうよ?」

ひまりや巴にカボチャ嫌いの元凶をバラす。そうなるとひまりは
口が軽いからすぐ言いふらすし、巴は弄ってくるだろう。酸素を求め
口をパクパクする金魚のごとく狼狽しているとポケットに入れてい
た携帯が鳴った。宛先は昇太からだった。

「すまん、つぐみ。昇太から電話だ。」

そう言っただけで電話に出る玲。

「もしもし、どうしたんだ昇太。」

「ああ、玲か?イヴちゃんを狙ってた奴らの件だけだよ。もう解決し
ちまったわ。」

「…は?」

昇太からの報告で玲は思わず首をかしげる。

「いやー、実はな、帰ってる最中に…」

イヴを送り届ける最中、後ろから誰かの気配を感じた昇太は振り向
く。

そこにはイヴの話に聞いていた外見そっくりの男二人がいた。手
には鉄パイプやバットを持っている。

「なあ、あんちゃん。その可愛いお嬢さんをこちらに譲ってくれないかねえ？」

「イヴちゃん。こいつらか？」

「は、はい…。」

「下がってる。こいつらの相手は俺がする。」

イヴから確認がとれたところで昇太は素早くスマホを取りだしマップの位置情報を部下のグループチャットに送ろうとしたその瞬間、鉄パイプを持った男が襲いかかってきた。

「うおっ！くそつたれ！」

すんでの所で避けた昇太はイヴの手を取り、走り出す。

「逃げるぞイヴちゃん！今は部下に情報送る時間がない！」

「は、はい！」

昇太はすぐさま別の端末を取りだしボタンを押す。

(今の玲には頼れないから…、ああくそ、これでまたあのお嬢様に借りを作っちゃった。本人気にしちやいないだろうけどな…。)

そして走り続けて昇太とイヴは路地裏の行き止まりに入ってしまった。

「シヨウタさん…。行き止まりです…。」

「ああ…、そうだな…。」

昇太は振り向くと二人組が追い付いた。

「おいかけてこは終わりかい？兄ちゃん。」

「…ああ。終わりだ。」

昇太はイヴを守るように前に出る。それを見た男はヘラヘラと笑う。

「おかしかったら笑えよ。俺だってこいつを守る意地があるんでな。」

「へえ…随分カッコ付けてんじゃない…。そういうの一番腹立つんだよ！」

バットを持った男が殴り掛かろうと振りかぶった瞬間、

「確保！」

突然、男たちの後ろから黒服たちがタックルをしてきた。

「うおっ！何だこいつら！」

突然現れた黒服に戸惑う男たち。それを見て昇太は苦笑いをする。

「いやー、相変わらず仕事が早い…。」

「昇太様、イヴ様。お怪我はありませんか?」

「は、はい…。」

「おう、助かったぜ。」

黒服と昇太が会話しているのを見てイヴは目を点にする。

「いえ、あなたはこころ様のご友人でいらつしやいますから。」

「シヨウタさん…もしかして、ココロさんとお友達なのですか!?!」

驚くイヴに昇太はニツと笑った。

「つてな訳でな。」

事の顛末を聞いた玲は溜め息を吐く。

「今さらお前の人脈には突っ込まねえよ…。さてはあの雑居ビル、弦巻の差し金で買ったな?」

「いや、造った。」

「…もう何も言わねえ。で、その男どもは?」

玲が聞くと昇太は困ったような声で話す。

「いやー、今は地下に閉じ込めてるんだが、別に拷問やつてるわけじゃねえのに叫んでんだよ。どうしたんだろな?」

「…さあな。」

叫んでいるわけを知っている玲は適当にはぐらかす。例の学校の幽霊がいると知ったら昇太は男と部下をほったらかして逃げ出してしまうかも知れなかったからだ。

「じゃ、切るぞ。つぐみちゃんや喧嘩すんなよ?」

耳が痛いことを言い残して昇太は電話を切った。

「…くそつたれ昇太め。」

思わず呟く。

「昇太さんからなんて?」

「もう件の奴ら捕まったってさ。じゃ、俺は」

「帰ったらカボチャだよ?」

玲の足が止まる。そして頭をガリガリ搔いた後やけくそ気味に叫んだ。

「ああくそ!好きにしゃがれ!」

説得されてつぐみの部屋に入った玲は雑念を捨てるように眠ってしまった為、それほど会話もできなかった。

夜が更けた頃、つぐみは目を覚ます。何かの呻き声が聞こえたからだ。

「…玲くん?」

呻き声が聞こえる方を見ると床に布団を敷いて寝ている玲が汗をかきながら呻いていた。

どんな夢を見ているのかつぐみには分からないが、とても辛い夢なのだろう。つぐみは玲の布団の中に入り玲を優しく抱きしめ背中をさすった。すると玲の呻き声は鳴りを潜め、静かな寝息に変わっていった。寝顔は苦しそうな顔から穏やかな寝顔になり、涙がこぼれる。

(玲くん…。私には玲くんがどんな事を経験してきたのかは分からない。けど、私たちAfterglowは玲くんを守るから…。)

つぐみは玲の涙を指で拭い、そのまま眠りについた。

15話 フリヨウとブシ

昇太は見回りがてら羽沢珈琲店へ入る。解決した以後、異常が無いが確認と休息を兼ねて入口のドアを開けると元気な声が出迎えた。

「ヘイラツシャーン!!」

場違いな出迎えをしたのはバイトとして働いている若宮イヴ。相変わらずズレた日本観で昇太を迎え入れる。だが、昇太は全く気にすることなく笑顔で挨拶する。

「よお、イヴちゃん! とりあえずコーヒー一つ!」

「ハイ、ヨロコンデー!」

「イヴちゃん、昇太さん。ここは寿司屋でも居酒屋でもないから…。あと、席についてから注文してください。」

つぐみは苦笑いをして突っ込みを入れる。昇太は悪い、悪い。と言いながら空いている席に座る。

「あれからどうだ?何か問題は起こったか?」

「いえ、特に異常はありません!これもシヨウタさんのお陰です!」

「そっかそっか!そりゃ良かった。イヴちゃんには日本の良いところ一杯見てもらいたいからな。」

「はい、恩に着ます!」

それほど客は入っていない時間なので余裕でイヴと会話する昇太。入ってる客も昇太の人柄の良さを知っているため気にしていない。

「そういえば、シヨウタさんってフリヨウのオヤブン。なんですよね?」

「おう、元だけだな。それがどうしたんだ?」

イヴが唐突に出した不良の話題に昇太はさりげなく聞いてみることにした。

「シヨウタさんってボンタンとか、リーゼントとかしないんですか?私、日本の勉強で見ていたフリヨウの映画やドラマにそういう人たちを見ました。けど、シヨウタさんのグループでそのようなファツションをしている人がいなかったたので気になったんです。」

「…あー。なるほど。」

昇太は心の中で頭を抱えた。今の世代。そういう格好をしている不良はあまりいない気がするし、もしいたとしても来てくれるかどうか分からない。だけど、依頼人である一人の少女を喜ばせたい。そう考えた昇太は色々考えた結果、

「よし、任せろ！イヴちゃんが見たい不良の劇をやる！それまで時間がかかるから待つてくれねえか？」

昇太がそう言うといヴは目を輝かせた。

「はい！楽しみにしてます！」

そして数日後、イヴはこれ以上なくご機嫌だった。アイドルバンドのトレーニングでライブ以上に楽しそうにキーボードを弾く姿はイヴが所属しているアイドルグループ、Pastel*Paletteのメンバーも困惑気味だった。

「イ、イヴちゃん。」

「オス！なんでしょうアヤのアネキ！」

「あ、姉貴!？」

「ものすごい上機嫌ね…。一体どうしたの？」

いつもと違う呼ばれ方をして戸惑うボーカル担当丸山彩に変わってベース担当の白鷺千聖が話を聞く。

「はい！実は私がバイトとしている羽沢珈琲店の常連さんが今日、私のために舞台劇をするんです！」

イヴの為の舞台劇。その時Pastel*Paletteのメンバーが想像したのは侍や戦国武将が主人公の時代物だと思った。

「へえー、それってジブンたちも見せてもらえないっすかね？」

「うーん、そうですね、ちよつと確認します。」

ドラム担当の大和麻弥が尋ねるとイヴはスマホで電話して確認をする。そして通話を切るとイヴは満面の笑みで答えた。

「大丈夫です！皆さんの席も用意してくれるそうですよ！」

「やったあ！良かったね、千聖ちゃん！」

「こら、彩ちゃん。浮かれないの。」

彩は無邪気に喜ぶ。千聖もこの後の予定はオフだったので演技の勉強がてら見てみようかと思っていたのだ。

そんな中、ギター担当の氷川日菜は引つ掛かるところがあった。

（うーん、何だろ？時代物にしては違う言葉遣いだけど…ま、いつか。）
特に気にすることもなくついて行くことにした。

「ね、ねえ、イヴちゃん…。こつちであつてるの…？」

「はい！こちらです！」

今現在、Pastel*Palettesのメンバーは舞台劇が行われる場所に向かっていた。しかし、その道は一部メンバーを除けばあまり来たくない道だったのだ。

「イヴちゃん…。そつちには何があるか、分かつてるの？」

「た、確か、この先つて、花咲町の黒豹がいるつて場所じゃ…。」

（玲くんつて舞台劇するの？あ、でもそれはそれで面白そうかな♪）

彩と麻弥が震えだし、千聖が怪訝な顔、その先頭をご機嫌に歩くイヴと何かに期待してる日菜。それぞれの思惑の中、目的の場所に到着した。

「着きましたー！ここです！」

あつたのは雑居ビルだ。まるでギャング映画にも出てきそうな雰囲気。団気に約三名は息を飲む。

「イ、イヴちゃん？騙されてるんじゃないや…。」

「タノモー!!」

彩が止めようとするといヴは大声で叫んだ。

「ぎゃー！ー！？イヴさんそれはまずいっすよー！ー！？」

麻弥が軽いパニックを起こすとビルの入口のドアが開かれる。顔を出したのは所々歯が抜け、鼻が潰れた不良だ。

「あんたが、若宮イヴさんとそのご友人四名かい？」

「はい！そうです！」

歯抜けの質問にイヴはすぐに答える。すると突然歯抜けが叫ぶ。

「山！」

「ひ!？」

突然叫ぶ不良に彩はビビる。

「川！」

だが意図を察したイヴは自信満々に答える。

「よし、入っていいぞ。地下一階の階段を下ってくれ。」

そう言っつて扉を開ける不良。今のは時代劇でよく見る合言葉なのだろう。更に目を輝かせるイヴと一緒に戸惑い気味に入るメンバー三人。

最後尾の日菜は歯抜けの不良に話しかける。

「ねえ、何やるの？」

日菜の質問に不良は困ったように答える。

「イヴさんの好きそうな要素を詰め込んだ劇ですよ…。」

地下一階に降りるとそこには一部カーテンで隠された部屋に五人分座れる広さの畳に、お菓子や飲み物が用意されていた。

その構図に千聖は見覚えがある。養成所通いの後輩役者の演劇を見に行ったときのビルの一部を借りて行った演劇場とそっくりだったのだ。

(演劇をやるって言うのは本当のようね…。)

疑いが晴れない千聖は恐る恐る畳に座る。

「な、何が始まるんだろ…？怖いよ千聖ちゃん…。」

「大丈夫よ、彩ちゃん。いざとなったら私が守るから…。」

「日菜さん、何でそんな余裕なんすか？」

「んー？秘密ー♪」

そう話していると急に音楽が掛かった。

「あ、始まるのかな？」

彩は舞台を見るが麻弥が首を傾げた。

「ん？これって時代物の音楽にしちゃおかしくないっすか？」

そう。流れてきたのは一昔の学園青春ものに流れてそうな音楽。一体何が始まるんだと思ったら、どこかで聞き覚えがある気取ったナレーションと共に演者が出てきた。

「時は昭和…。あらゆる不良が横行している正に世紀末と呼ぶにふさわしい儂き時代…。関東不良連合の頂点に立つ儂き不良がいた…。」
「俺の名はショー…。この辺で恐れられるグラサンのショーとは俺のことよ。」

現れたのはボンタンに丈が短い学ランを来た昇太だった。ナレーションの昭和と言うワード、いきなり現れた昔の不良に呆気にとられる彩、千聖、麻弥。

（え、あれ？時代物じゃない？）

（何で昔の不良映画風なのかしら…。？…。というかこのナレーション…。）

（にしてもあの衣装よく見つけましたっすね…。）

「彼らは部下たちと共に儂き青春を謳歌して実に平和な日々を送っていたそんなある日のことだった…。」

「大変だ！ショー！関ヶ原学園の連中が！」

「何だ?! あいつら俺たち関東不良連合を征服しに来やがったな!？」

（関ヶ原学園って何よ…。）

すると、袖から現れたのは手作りの段ボールで作った戦国武将の鎧を着た玲と部下たちだった。おそらく関ヶ原学園の者らしい。

「どういう設定よこれ!？」

思わず千聖が突っ込む。昔の不良映画風の世界に戦国時代の武将。あまりにも時代錯誤が甚だしい。

「ち、千聖ちゃん。落ち着いて…。」

彩がどうしようと落ち着かせる。

「あっはははははは！玲くん何それ!？お腹痛いよあっははははは!!」

「ひ、日菜さん、黙ってみましょ…。」

理解が追い付かない千聖に大爆笑の日菜。そんな二人を落ち着かせる彩と麻弥。そんな中イヴは

「はあく…！スゴいです！」

まるで大好きな特撮ヒーロー二人が共演したのを見ている子供のようになつていた。

「我は戦国武将、本田忠勝の魂を受け継ぐ本田刃無勝…。関東の征服しに参つた…。」

「てめえ…、俺たちのシマに入ったこと、後悔させてやらあ!!」

「も、もうダメ…息が苦しい…。ハムカツ…ヒツヒツ…。」

「日菜さーん!?!」

玲が扮する本田刃無勝の言葉に日菜が崩れ落ちる。

「彩ちゃん…今、私は夢を見ているのかしら?」

「しっかりと千聖ちゃん!現実だよ!」

「くっ…おのれやるな!グラサンのショー!」

「そういうアンタこそ…本田刃無勝!」

それなりに迫力ある戦闘のあと、舞台には昇太が扮するグラサンのショーと玲が扮する本田刃無勝が残った。背景も赤照明で夕焼けのように赤く染まっている。

「長く儂い戦いの最中、二人の間には奇妙な友情が芽生え始めていたのだ…!」

「うおおおおお!」

「おりやあああ!」

グラサンのショーと本田刃無勝の拳が交差し、互いの顔に激突する。そしてしばしの沈黙のあと、二人は崩れ落ちた。その直後に舞台の幕が降りる。

「こうして、関東不良連合と関ヶ原学園の間に架け橋ができ、二人の名は末長く、儂く轟いたのであった……！」

最後にナレーションの締めで物語は完結した。

「ど、どういうことだったんだろう……。」

「……今日見たことは記憶から消したいわね……。」

「あー……、お腹痛かった……。苦しい……。」

「や、やっと、終わったんすか……。」

あまりにもベタな、突っ込みどころ満載なカオス演劇が終わりを告げ解放されるPastel*Paletteの面々。そんな中、イヴは感激していた。

「素晴らしいです……！感動しました！」

「なんか、色々スゴい劇だったね……。」

「今日はもう帰って次の仕事に専念したいわ……。」

「あー、可笑しかった！本田ハムカツって面白すぎるよー！」

「にしても、不良なのにお見送りするって礼儀正しかったっすね……。イヴさんは面白かったですか？」

「はい！フリオウとブシの友情……とても素晴らしかったです！」

口々に感想を言いながら帰って行くPastel*Paletteを見送る部下たち。その後ろから声をかける者がいた。

「やあ、君たち。今回の舞台、アウトローな君たちの儂い努力に私は心を打たれたよ……！」

声をかけたのは紫髪の芝居がかった喋りをする美青年。

「よお、瀬田！今日はありがとな。」

その美青年に昇太は話しかける。

「何、こころの親友の頼みだ。無下に断るわけにも行くまい。さて、刃無勝を演じた美しい彼にも会いたいが、彼は今、何処にいるんだ？」

「あー……、今はそつとしておいてやってくれ。あいつ、見られたくない

やつに見られちゃったらしくてな…。」

「そうか、それは残念だ。彼の演技はこの私の目から見ても見張るものがあつたからね。」

「後で伝えとくよ。スゴかつたつてな。」

「ああ、そうしてくれ。」

後日、玲が一人で部下たちの見回りシフトを整理していると扉を開く音が聞こえた。

「れーくん、こんちやう。」

「ん、モカか。どうしたんだ今日は。」

玲は特に気にすることなく手を動かすとモカが新聞紙で折った兜を被る。

「我の名は本田刃無勝なり。」

「モカてめえそれ日菜から聞きやがったか!?今すぐ止めろ!!ブツ飛ばすぞ!?!」

本日も平和である。

16話 ホラー鑑賞／豪雨のある日

『ホラー鑑賞』

「俺、このままじゃダメな気がするんだ。」

休日のある日、賄いを持ってきた昇太がそう言った。

「…何が？」

賄いを食べ終えた玲は質問する。

「だつてここ最近この雑居ビルで変なことが起こつてんだよ？お前の部屋に行くまでも誰もいない部屋から物音がしたし、時々女の子の笑い声があるんだよお…。」

「…ああ。」

玲はとりあえず相づちを打つ。今まで気づかれないよう黙っていたがまさか気付いてしまったとは。そんな事を考えているうちにも昇太は止まらない。

「だから今回！克服するためにホラー映画鑑賞会を開きたい！それでホラー鑑賞に参加する有志を募る！」

「へえ、お前にしてはすつげえ啖呵切つたな。」

玲は昇太が自分からホラーを見ようと言うのは新鮮だった。何しろ昇太のホラー嫌いは筋金入りと言ってもいいほどでレンタルショップのホラーコーナーは目をつぶって歩き、パッケージですら直視できないほどだ。そんな昇太の啖呵を玲は話半分冗談半分で聞いていた。

「で、誰誘うんだよ？」

「ああ、俺がチャットでホラー大丈夫な奴呼び掛ける。」

ホラー鑑賞当日。やって来たのは部下数人と、

「やつほー！玲くーん！何か面白そうなのやるみたいだから来ちゃった！」

（あ、あの人、本田刃無勝を演じてた人だ…。）

氷川日菜とその日菜に連れられて来た丸山彩と

「なんだか面白そうな気配がして飛び出してきましたよ。」

「ねえ、玲。これ何の集まり?」

モカと何の情報もなしに巻き込まれた蘭だった。

「…さあ、俺も知らねえ。」

玲は嘘をついた。なんだか面白そうな気配がしたからだ。

「これで全員か?昇太。」

「ああ、ホントは瀬田の奴も呼びたかったんだがなあ…。劇の稽古が忙しいみたいで歯切れが悪かったぜ。」

それは言い訳して逃げただけじゃないのか。そんな言葉が出なかったが黙っておくことにしよう。玲はそう決めた。

参加者と共に上映する地下一階の閉じ込め用に改良した両側鍵穴しかないドアの部屋に入り、昇太が鍵をかけ、玲にそれを渡す。

「もしかしたら俺は耐えきれなくなって逃げ出すかも知れねえ。その時はお前は鍵を死守してくれ。」

「…おう。」

なんだか嫌な予感がした玲だったが三十分後、それは的中する。

見るのは有名なジャパニーズホラー映画だった。そして今のところの映像は布団の中に隠れた被害者が悪霊に襲われるシーンだ。

「あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”

あ”あ”あ”あ!!布団の中に出てくるの反則だろおおおおおおおおおおお!!”
「おおおお!!」

「いやあああああ!怖いよ日菜ちゃん!」

「あつはつはつはつは!昇太さん、リアクション芸人になれるよ!彩ちゃんも次こういうホラーもののお仕事やってみない?」

「嬉しくないよお!!」

「蘭く。だいじよーぶ?」

「これが大丈夫に見える!?!」

「…うるっせえ。」

昇太と彩の悲鳴と爆笑する日菜。ずっと玲の腕を締め上げてくる

蘭。マイペースなモカ。嫌な予感はこの一部屋の空間で叫ばれる事だった。昇太のあまりのビビりっぷりに部下たちも怖がる気になれず、ただ心配そうに昇太を見ていた。

最終的には耐えきれなくなった昇太が玲から無理やり鍵をぶんどり、同じく耐えきれなくなった彩や蘭と一緒に逃げ出したというオチだった。残されたのは部下数人と、笑って満足な日菜、そして昇太に鍵を取られる際殴られた玲と殴られた部分をささするモカだった。

「あー面白かった!」

「…ねえ、れーくん。ホラー映画のお約束にさ、先に逃げ出した人が死んじゃってることあるよね?」

「…んな事言うの止めろ。」

『豪雨のある日』

この日は大雨だった。外を見ればまるで滝でも流れているのかと思うほどの雨量でゴーゴーという雨音はずっと途絶えることなく続いており、たまに雷鳴が聞こえる。

(今日は見回りは無しにして正解だったな…。)

玲は外の様子を見て呟く。すると巴から電話が入った。何事か電話を掛けてみると申し訳なさそうな巴の声が聞こえた。

「あ、玲? 今大丈夫か?」

「どうしたんだ?」

「実はな、雷でつぐみが動かなくなっちゃって何とか外には出れたんだが途中の雨宿り先で縮こまっちゃってな。来れるか?」

「あいつまだ雷苦手なのかよ…。」

玲が呆れていると外で雷が落ちる。それと同時に電話越しにつぐみの悲鳴が聞こえた。

「とりあえずこんな状態なんだ。助けてくれないか?」

「…はあ、しょうがねえ。今から行くよ。どこで雨宿りしてるんだ?」

玲は雨宿りをしている所を聞き出したあと、通話を切ると面倒くさそうに雨合羽を羽織り、傘に長靴と完全防備で外に出た。

雨音と水滴が傘を叩く音、そして水溜まりを踏む音、時々雷鳴が轟くなか、玲が巴たちが雨宿りしている場所に向かうとしやがんでなるべく雷に当たらないようにしているつぐみがいた。

「よー。来たぜー?」

玲が声をかけると巴は雨合羽姿に一瞬目を細めたが玲だと分かるかと安堵した。

「玲か!? いやー、雨合羽着てるからよく分かんなかったよ。」

「こんな天気だ。完全防備で行くしか:ゴフツ!」

巴が助かったと言わんばかりに言うと同時につぐみが玲の腹にタツクルしてきた。

「玲くん助けてえ!」

「み、鳩尾入った:。」

「お、落ち着けつぐみ! 玲が落ちる!」

玲がなんとか立て直したあと、つぐみがかがしり腕を回して離れない中、歩く。時々雷が落ちると同時につぐみが腕を絞める力が強くなる。腕の血が回らなくなるかもしれない。そんな事を考えた矢先に雑居ビルに到着した。

「ほら、着いたからもう離れろ。」

屋内に入りつぐみに離れるよう言ったがそれでもつぐみはがっちりホールドして首を縦には振らない。

「あのな:完全防備の俺とは違ってお前濡れてんだろ? ストーブ出すからそれで暖まれ! お前の親父に連絡入れとくからさつきと離れろ! つーか腕の感覚鈍ってきてるんだよ分かれや!」

「ほ、ほら、つぐみ。玲が動きにくいから離れなよ。」

巴の説得につぐみはようやく力を緩め、恐る恐る離れるガラガラガラドカーン!

かに思えたが近くに落ちた雷に驚き玲にベアハッグをする。

「ぐえ。」

つぐみの予想外の攻撃に玲は潰れたような声をだし、肺の中の空気

が全部出ていく気がした。

「す、すまん。巴…。三階の備品室にストーブがあるからそれを隣の部屋に持って行ってくれ…これじゃ作業にならねえ。」

「ああ、分かった。つぐを頼む。」

巴はそう言って階段を駆け上がって行った。

三階の一室。玲、巴、つぐみの三人はストーブに当たって暖まっている。制服はびしょ濡れだったので玲の着ている服を貸したのだが、無地のシャツにジーンズばかりと地味なものしかなかった。

「なんか、ひまりが言いそうだよな。もっとファッションに関心持てて。アタシは別に気にしないけど。」

「興味ねえもんはねえんだよ。それにひまりの買い物に付き合わされたら、あいつ絶対俺に着せ替え人形やらせるつもりだろう?」

「まあ、確かにな!」

玲は反論して巴が笑う。つぐみは最初はトークに参加していたが緊張状態が続いたためか玲にしがみついたまま寝てしまっていた。つぐみの親には連絡済みだからいざれ来るだろうと思う。

「そう言えば、玲ってネットゲームとかやってるか?」

「いや? やってないが、何だ急に。」

「実はな、あこの奴がハマってるネットゲームがあるんだが、最近プレイしてると変な奴に付きまとわれているらしくてな。アタシとしては力になりたいけど、ネットには疎くてな…どうすりゃいいのかわかんないんだ。」

巴が語ったのはあこがプレイしているオンラインゲームで最近あこ目当てのユーザーが粘着質に絡んでいるという内容だった。

「そうか…。ん、待て。そういうのに強い奴が昇太の知り合いにいた気がする。」

「本当か!」

玲がそう言うと巴が食い付く。顔が近いがそれでも気にせず玲は話を続ける。

「ああ、昇太がネットで仲良くなったって奴だがそいつとリアルで会いに行つた日に小躍りしながら出掛けたのに戻つたときは死んだよな目になつていたんだよな。」

「…そいつ大丈夫か？」

「昇太曰く、お互い傷は付いたが仲良くなれたって言つてたからたぶん大丈夫だが…。まあ、ネット関係は昇太の方に当たつてくれ。」

玲が話を終わらせたあと、つぐみの父親が迎えに来た。一緒に巴も送ってくれるようだったので巴はご厚意に甘えて送ってもらつた。

後日、あこを粘着質に狙つてたユーザーは昇太の知り合いによる色仕掛けに見事引つ掛かり、オフ会と称した待ち伏せで巴に叩きのめされたらしい。

玲が一人で次の見回りシフトを考えているとき、

「玲！」

ひまりが突然ドアを開けて入ってきた。

「どうしたんだ？」

「服を買いに」

「行かねえよ！」

「ちよつと！まだ言つてな…ってそれ忍者?!」

ひまりが言い切る前に玲は日菜に看破されて以降使つてなかつた逃走経路を使って逃亡した。

だが翌日、学校が休日だったせいでバイトでいないモカ以外の Aff ter glow 全員から追われ捕まり、着せ替え人形にさせられたのはまた別の話。

17話 捨て子（前編）

「…なあ、玲。」

雑居ビルの入口。昇太が困ったように話しかける。話しかけられた玲も困ったような顔をしていた。

「この子、どうすんだよ…。」

足元には玲のジーンズにしがみついて離れないリュックを背負った子供がいた。

こうなったのはちよつと前に遡る。

いつも通り、見回りをして怪しい人物がいないか目を光らせながら歩いているとき。

（異常無し…。やっぱり噂の効果はあるって訳か…。）

玲がいじめやかつあげの現場に首を突っ込み加害者を完膚なきまでに叩きのめしたという噂は広まりここら一帯では部下の報告含め数を減らしている。

（今日もこのまま帰るか…。）

そう考えやまぶきベーカリーに寄ってパンを買い、公園の前を通り過ぎようとしたとき、

きい、きい。

玲の耳に公園の方からブランコが揺れる音がした。

風もない上に暗くなり始めているこんな時に？

そう思い公園の方に視線を移すと俯いてブランコに乗っている、見た目からは小学1年位の不自然に前髪を伸ばした女の子がいた。

まるで誰かを待ってるかのように、ずっと一人でブランコに揺られている、その側には荷物らしきものがある光景。嫌な予感がした玲はその子に話しかけてみることにした。

「おい、そこで何やってるんだ？」

玲は少女と同じ視線になるようしゃがみ、話しかける。

俯き気味な少女は少しだけ顔を上げ、玲を確認するとまた俯いた。根気強く待たなきやダメな奴かと思ひ、長期戦に持ち込もうとした

ら、

「…お母さんが、来るの待ってるの。」

ボソボソながら訳を話した。玲は少し拍子抜け気味だったがすぐに向き直る。

「そうか。じゃあ、お母さんがここで待っててって言ったときはお日様はどこだった？」

「…まだお空にはお日様があったよ。でもずっと待ってるのにお母さん全然来ないの。」

これはそう言うことか。そう考えた玲はそばにあつた荷物らしき物に手を伸ばすと書き置きらしきものがあつた。それにはこう書かれていた。

「誰かこの子を養ってください。名前は由美です。」

おそらく親が書いたのだろう。今、このご時世に無責任すぎる親だ。玲は呆れてしまった。このまま帰りたいがこの子供はどうなるだろうか？このまま一人暗い中、戻ることがない親を待ち続けるつもりなのだろう。玲は連れて行って良いものか考えているときゆううく…。

少女、由美の方から音が鳴った。どうやらずっと飲まず食わずで待っているらしい。

玲は溜め息を吐きながらパンの入った袋を差し出す。

「…いいの？」

「腹、減ってんだろ？食いなよ。」

戸惑い気味の由美に玲が許可するとさつきまでの大人しさが一変してパンを頬張り始めた。

「あーあー、そんながつつくな。喉に詰まるぞ？」

そこで玲はまたも直感した。この子は今までまともな食べ物を食べることがないという事に。

「ん、んぐつ。」

案の定、喉を詰まらせてしまった。

「ちよつと待ってる。」

玲はすかさず近くの自販機に走り、水を買った後ペットボトルのふ

たを開け、由美に飲ませる。由美はペットボトルの水を喉に詰まったパンと一緒に飲んでプハツと一息つく。

「おいしかった。」

「おう、そうか。じゃ、俺は行くよ。お日様が沈んでもお母さんが来なかつたらお巡りさんの所に行きなよ?」

そう言つて離れる。すると足に何かがかつつくような感触がした。足に視線を移すと由美が玲のジーンズを掴んでいた。

「……。」

沈黙が流れる。

「あのね…。お母さんに言われなかつた? 怪しい人に付いていっちゃダメって。」

「…お母さんは何も言わないの。」

「…そうか。」

「……。」

また沈黙が流れる。

「じゃあ、一緒にお巡りさんの所に行く?」

玲がそう聞くと由美は首を振る。

「お母さんが言うの。ケーサツには行くなつて。」

(…そう言うわけか。)

おそらくこの子の親は自分が子供を虐待している自覚があるようだ。

(さて、虐待されている被害者なのはほぼ確定されてるが…まだ証拠が足りないな。)

玲は顎に手を当て、考える仕草をするが、ふと、目が隠られるほど伸ばした前髪が気になった。

「ちよつとごめんよ。髪の毛にパンの欠片が…」

「ダメ!!」

玲が前髪をさりげなく上げようとするのと由美は強い拒絶をし、震え出す。

これだけで玲は確信した。

(前髪を伸ばしているのは多分額に親からすれば見られたくないもの

があるからだな…。」

「そうか、ごめんな。」

玲はそう言って手を引つ込める。警察もダメだとするともう玲の頭にはこの選択肢しか残ってなかった。

「で、連れてきたわけか!？」

昇太が面食らう。ちなみに今、由美は部下たちとババ抜きをして遊んでいる。

「明日またあの公園に行くつもりだよ。俺の番号を書いた書き置きも残しておいたから良いだろう?」

「だからってなあ…。蘭ちゃんたちがこの子の事知ったらどうすんだよ?。」

「だから明日、朝一番、親が置いていった場所に行くんだろ?」

「…親がいることを切に願うぜ俺は。」

翌日、朝焼けを浴びながら玲は起き上がる。そして隣に寝ている由美の顔を見る。昨日、寝るときに布団の中に入ってきたのだ。

穏やかに寝息をたてている由美。まだ夢の中なのだろう。そう思った玲はゆっくりと気付かれないように前髪を上げる。露になった額は玲の予想通りだった。

幼い寝顔には似つかわしくない火傷の後が五つほどあった。事故で額に五つ火傷ができる訳がない。考えられる可能性は、

「…親からの根性焼きか。」

根性焼き。簡単に言うならば煙草の火を肌に押し付けることだが、由美のそれには悪意が感じられた。

(はあ、気が重いな…。)

このまま親からこんな目に遭わされている子を帰して良いのだから

うか。そんな考えが玲の頭の中に渦巻く。

考えてもしょうがない。そう思った玲は朝飯の準備をしにコンビ
二へと向かうのだった。

18話 捨て子（後編）

「…来ねえ。」

昨日、由美を拾った公園に由美と共に朝9時頃から来て、正午。全く来る気配がない。玲がベンチに腰かけて待っているが由美の親らしき人物が来る気配が全く無いのだ。

（ホントに捨て子かよ…。笑えねえ…。）

昨日と変わらずブランコに揺られている由美を見ながら玲は心の中で吐き捨てる。

（この子どうするんだ？親が雲隠れしちまった以上昇太の人脈に頼るしかないのか？俺、子供なんか養えねえぞ？）

玲が頭を抱えていると腕が引つ張られる感触がした。顔を上げると由美が腕をくいくいと引つ張っていた。

「お腹へった。」

「…分かったよ。じゃ、ご飯食べに行くか。」

玲の言葉に由美はこくりと頷く。

「何が良いんだ？」

「昨日食べたパン食べたい。」

「やまぶきベーカリーか…。」

玲は今日が何日だったか携帯で確認する。

（この日は学校が休みだから…。沙綾が店番なら弄られるなこれは…。）

心の中で沙綾が店番じゃないことを祈りつつ由美と一緒にやまぶきベーカリーへと足を運んだ。

「で、その子は何なんですか？」

「…。」

沙綾が店番だった。最初は会話で何とか触れられる事なく出ることができると考えていた自分を殴って、くそつたれと吐き捨てたくなつたが何とかこらえる。

「…知り合いの子の面倒見てるんだよ。悪いか？」

「ううん。ちよつと気になっただけ。ふふ、玲さんが子守りかあ…。うちの沙南と純の面倒も見てくれないかなー。なんて。」

「残念だな。もう定員オーバーだし、今後も子守する予定ゼロだよ。」

「えー、でも沙南と純は玲さんに会いたがってるんですよー？」

玲は心の中でその手を使うかと舌打ちする。

以前、昇太が受けるはずだったやまぶきベーカリーの店番の依頼を引き受けた事があり、その時、沙綾の妹と弟と関わりを持ったのだが慕われてしまったのだ。

「とにかくだ。もう俺はこれで会計する。早くしてくれ。こんなところモカに見られでもしたら、」

「私が見たらどうなるって〜？」

「どう弄られるか分かつ…た…。」

玲が振り向くとそこには面白いものを見ちゃったと口角を上げ、両手のトレイに大量のパンを乗せたモカがいた。

「ああくそ…、俺としたことが…。」

玲は公園に戻ってベンチに戻って落ち込む。その後、モカの分のパン代も払うことで事なきを得たがもしこれが蘭や紗夜だったら生きた心地がしなかった。

「まーまー、黙っててあげるからいいじゃーん。美少女モカちゃんは口は固いんだよ〜？」

隣には由美と一緒にパンを頬張りながら慰めるモカ。

「まあ、他の奴等に黙っててくれるなら良いけどよ…。」

玲は渋々ながら自分の分のコッペパンを口に入れた。焼きたての香ばしい匂いが口の中に広がった。

パンをたらふく食べた由美は午前中遊んでいたこともあってか、とうとう船をこぎ、玲の膝の上で眠ってしまった。

「でさく、この子は何なの〜?」

モカが聞いてくる。

「…言ってるだろ?知り合いの子を預かってるって。」

「嘘でしょ〜?れーくんって嘔吐くとき目をそらすもん。ホントは何の子なの?」

やっぱりAfterglowには敵わない。そう思った玲は観念して本当の事を話す。

「…漫画の中だけだと思っただけどホントにあるんだね〜:。」

「全くだ:。」

モカの呟きに玲は同意してため息を吐く。

「それで昇太の人脈を頼りに何処かの孤児院とかに預けようか考えてるんだが:。」

「その子ってさく。れーくんにずっと付いてくるんでしょ〜?」

「ああ、そうだが:~?」

「もうれーくんが養つちやえぼ〜?」

モカが出した提案に玲はモカと向き合う。

「なあ、俺は何だ?」

「れーくん。」

「俺はどんな事してる?」

「町やあたしたちを守ってる。」

「…普段なんて呼ばれてる?」

「花咲町の猫ちゃん。」

「違うだろ!?!俺は!不良で!皆からは恐れられている花咲町の黒豹なんだよ!何だよ猫ちゃんって!?!可愛くするな!そんな俺がこんな小さい子を養えるのか!?!」

モカから望んでいた答えが出てこなくて玲はイラつく。

「でもさー、れーくんになついているっばいかられーくんが貰うしかないよね〜?」

モカの言葉に拗ねるように視線を反らすと、とんでもないことに気

付いた。

「…どこ行つた!？」

そう、膝の上で寝ていた筈の由美がいつの間にかいなくなっていたのだ。

「あれま。どこ行つたんだろ?」

モカもいつも通りの言葉ながら目を見開く。

「探しに行ってくる!」

玲はすぐ席を立つと公園の外へと飛び出していった。

「はあっはあっはあ…!」

玲は全身汗だくになりながら、心当たりがありそうな所を走り回つて行くが由美の姿は全く見つからない。

(くそ…!俺としたことが、まさか気配を感じられなかったなんてな…!連れて行かれそうな所は隅々まで探したはずなのに見つからないなら…。)

町の外へ連れて行かれた。そう考えた玲は顔を青くする。玲はこの時、冷静さを欠いており昇太や部下に頼むという選択肢が抜け落ちていたのだ。

日が落ちる。夏に比べて早く日が沈む秋。すでに外は暗くなり始めていた。

(明日も探そう…今日はもう遅い…。)

玲はふらつきながら雑居ビルへと戻ると賑やかな声が聞こえた。

「…何だ?」

不思議に思いながら賑わっている部屋へと向かい、ドアを音をたてずに開けると

「やだ〜!クッキー食べる様子リスみたいで可愛い〜!」

「ひ、ひまりちゃん、食べさせるのいいけど太らせないようにね…。」

「にしても、玲のやつこんな事アタシらに黙ってるなんてな〜。」

「…ちよつとは頼つてもいいじゃん。」

「全くだよね。れーくん何でも自分で背負いこもうとするもんね。」

Afterglowの5人にちやほやされる由美の姿があった。
美少女モカちゃんの口の固さとは何だったのか。

玲は力が抜けたようにへたりこむ。

「は、はは…。何やってたんだよ俺…。」

力なく呟くと由美が玲の存在に気付き走っていく。

「あ、れーくん。」

「モカ…。こいつどこにいた？」

「んーとねー。」

玲が質問するとモカは指を口に当てて思い出す。

玲が公園を飛び出したあと、残されたモカも探しに行こうと置いていたギターケースに手を伸ばすと、

「あ。」

由美がギターケースをジッと見つめていた。

(どーしよ…。れーくん飛び出していつちやったしなく…。…このまま泳がせておくのもありか。)

モカはいたずらっ子のような笑みを浮かべた。

(…つーことはずっと公園にいたって訳かよ…。)

「それと、今日モカちゃんはバンドの練習もあったので待ち合わせ場所に向かったら、この子も一緒に付いてきちやいました。」

「ビックリしたよね。モカの側に小さい女の子がいたから。」

モカの事後報告とひまりの感想に玲は頭を抱える。そんな玲に由美は食べていたクッキーを差し出し、慰める。

「あー、ちくしよ…。」

「玲、お前頑張るのは良いけどたまにはアタシらに頼ることも覚えな

よ…。」

「アタシたちも、その、力になりたいから…。」

巴と蘭から指摘され玲は拗ねたように答える。

「うるせえよ。…でも考えとく。」

「れーくんのデレ頂きました。」

モカが冷やかすと玲はモカの前に行き、両手でモカの頬を引っ張る。

「いふあい、いふあいお、ふえーふーん。」

「お前がここにいて言わなかったから、俺があちこち走り回る羽目になったんだろうが！」

「玲もこの子の事アタシらに教えなかったからお互い様でしょ？」

蘭の指摘に言葉が詰まる。

「お前もモカの味方かあ…！」

忌々しげに蘭を睨み付ける。ここに玲の味方は誰もおらず、蘭たちからありがたいお小言を耳に入れられたのだった。

「で、お前この子も仲間入りさせるってか？」

「…あくまで仮だ。まともな貰い手が来たらすぐ移すからな。」

その後、由美は玲たちのグループの仲間入りをした。名字も不明だったため、昇太が玲と同じにするかと尋ねたら無表情ながら喜んで頷いた。

「よーし！ 仮とはいえ、新メンバー加入祝いに騒ぐぞー！」

昇太が仕切ると部下たちが便乗して騒ぎ出す。

「今日見回りがあるの忘れるなよ！」

そんな部下たちに玲は釘を刺すのだった。

19話 風邪

「あゝゝゝちくしょう…。」

玲は今、ベッドに寝かされ、額には湿布、口には体温計、顔は赤く火照っており汗が止まらず、声もガラガラでうなされている。そして、由美が側で不安そうに様子をうかがっている。そう、玲は風邪を引いたのだ。

ここ最近、見回りに加え新しく入った由美に関する待遇について考えるといった事が重なり、無理が祟って寝込むことになってしまったのだ。

(まさか俺が…こんな事になるなんてな…。)

普段、部下に無理はするなと言った自分がこれでは示しが見つからないな。そんな愚痴がこぼれる。

そんな自分に由美は小さな手で玲の頭を撫でて治るよう願掛けをする。前髪で目はあまりよく見えないが心配しているのがよく分かる。

(こいつは無口かと思ってたけど、感情豊かなんだよな…。)

数日、由美と暮らして分かったことは口数は少ないが嫌なものとは嫌いと自分の意思表示はする事。好きなこと、興味があることだと食い付きが良い所だ。

「安心しなよ。俺がこんな事で死ぬわけ無いだろ？」

そう気丈に笑って由美の頭を撫でる。撫でられた由美は黙って下を向いているが口がにやけ気味で気持ち良さそうなのが見てとれる。前髪が無かったら目を細めている事だろう。

昇太や部下も手厚く手当してくれただからこのまま何事もなく、寝

ていれば明日には治るだろう。そう考え、少し眠ろうとしたとき、

「やつほー！風邪引いたって聞いたからお見舞いに来ちゃったー！」

「ひ、日菜さん！静かに！静かにして欲しいっす！」

「出ていけ疫病神!!ゲホッゴホッ！」

ドアを開けて部下の制止を振り切りながら天才が来てしまった。死にはしないが治るのはもっと後になるだろう。玲はそう直感した。

「いやー、玲くんでも風邪引くことあるんだねー。何か新鮮！」

「お前今日仕事は？」

「午後からバンドの練習だから今はまだ大丈夫だよー。」

当然出ていけと言われても出ていかなかったので諦めた。まじまじと寝込んでいる玲を見つめる日菜にもう慣れてしまった玲だが、日菜を見たことがない由美は玲の後ろからずっと日菜を睨み付けている。ずっと懐疑の視線を送られ続けた日菜が尋ねる。

「でき、気になったんだけどあの子って何なの？新入り？」

「…まあ、そんな物だ。仮だけだな。」

「ふーん。」

玲が適当に答えると日菜は由美の方に興味を向け、近付く。一方の由美は日菜が近付くと同時に距離を取り、離れていく。

(なんかこんな感じの犬猫動画があったな…。)

動物好きの部下がスマホで見ていた動画に子猫に興味津々に近寄る大型犬とその大型犬を怖がり威嚇する子猫という構図が重なって見えた。すると、玲の視界がぼやけ始め、日菜の頭に犬の耳、由美の

頭に猫の耳が生えた幻覚が見え始める。

(あ、やべえ…。少し寝なきやな…。)

玲は遠退く意識の中、部屋を飛び出し逃げる由美とそれを追いかける日菜を見送ったあと、目を閉じ少しばかり眠った。

「玲の奴、風邪引いてるならそう言ってくればいいのになー。」

巴がそう呟く。バンドの練習後、巴のスマホに昇太から玲が風邪を引いているという情報を受けて急遽五人でお見舞いの品を持って行くことになった。

「そうだよねー。心配しちゃうよ。」

ひまりも巴の呟きに同意する。

「でも、今のれーくんは蘭みたく素直じゃないから余計なお世話だつて言いそうだよね。」

「あはは、確かに…。」

「モカ…。つぐみ…。それどういう意味？」

「あつ、違うの！そういうのじゃなくて…！」

いつも通りの掛け合いをしながら雑居ビルへと向かう五人。雑居ビルに着き、中へ入ろうとしたとき、

「…ねえ。何か騒がしくない？」

蘭が異常に気付いた。耳を澄ますと複数人の足音がドタドタと走り回ってる音が聞こえてくる。そしてその音は段々と一階に近付い

ていた。

「…皆、アタシの後ろに隠れる。」

巴が蘭たちを庇うように前に出る。すっかり忘れていたが玲のいる場所は不良の溜まり場でもある。どこか別のグループが攻めてきたのかと予想した巴は蘭たちの安全を優先する。そして走る音が一階に降りてきた瞬間、黒くて小さいものが巴の胸に飛び込んできた。

「うおわ!？」

「追いついたー!」

驚く巴に更に飛び付く聞き覚えがある声。体勢を崩した巴は後ろに倒れる。

「い、いつつ…。一体何が…って、由美と、日菜先輩?」

巴は飛び込んできた黒いものがこの前、玲の仲間入りした女の子と学校の先輩だと気付き力が抜ける。

「と、巴く。早く起き上がってよー!」

「むぎゆう…。」

「見事なドミノ倒しだねく。蘭く。お見舞いのお花だいじょーぶ?」

「な、何とか。てか、お、重い…!」

予想以上に騒がしいお見舞いになったな。巴は心の中で呟くのだった。

夢を見ている。何もない暗闇だ。ただ黒しかな空間で玲はさ迷い続けている。

すると、後ろから光が差した。振り向くとそこには夕焼けの中歩い

ていく蘭、モカ、つぐみ、ひまり、巴の姿があった。玲はそこへ入ろうと走り出す。

だが、突然進めなくなった。壁だ。見えない壁が蘭たちと玲の間にあって進めないのだ。壁を叩く。でも蘭たちは気付かない。大声で叫ぶ。段々と離れていく。手を伸ばす。それでも振り向きもせず離れていく。

すると、玲の手を誰かが掴む。黒く汚い手だ。そしてその手はお前の居場所はここだと言わんばかりに暗闇へと引つ張っていく。

嫌だ。そこは嫌だ。そう叫び、もがくも引つ張る手は容赦なく蘭たちと玲の距離を離れていく。そして玲が引つ張られる先にあるものは

「…っはあっ！」

そこで目が覚め、起き上がる。少し寝たからか幾分か楽になったがまだ気分が悪い。

「…くそ。」

そう吐き捨ててまた横になる。見なくなつて久しい夢だが若宮イヴと会つて以降見る事が多くなつていた。

(昔はこんな夢見てもどうとも無かつた筈なんだがな…。)

天井を見ながらそう思い返す。昔はただ暗闇に引つ張られるだけだった夢の内容がここ最近、蘭たちと引き離される要素が加わつたことにより一層ダメージが大きかつた。

(…そーういや、つぐみの家に泊まることになつたとき同じような夢を見たはずなのにそれほど苦にならなかつたよな…。)

そんな事を考えているとドアが開く音が聞こえた。由美と日菜がおいかけてここから帰つたのか。そう考えた玲が首だけ動かすとそこ

には先程夢に出てきていた五人がいた。

「やつほー、れーくん。お見舞いに来ちゃいましたる。」

「玲ー！ちゃんとお見舞いに果物とか持ってきたよー！…ちよつと傷ついちゃったけど。」

「ほら、由美。玲の所に来たから離れなつて。」

「あ、玲くん、日菜先輩は練習があるから帰るつて。」

「うわ、玲、すごい汗じゃん。大丈夫なの？」

それぞれ喋りながら玲の部屋に入ってくる面々を見て玲は少なからず安心感を覚える。

「ああ、大丈夫。ちよつと寝付きが悪かったただけだ。つーか言うだろ？風邪には汗をかけば良いつて。」

心配する蘭に玲は笑いながら大丈夫だとアピールする。すると巴が由美を下ろしながら話しかける。

「にしても、ちつちやい頃から風の子元気な子を地で行っていたお前が風邪引くなんてな。」

「多分だけど〜。ゆーみんの色々な事を考えてツグリすぎちゃったんでしょ〜？」

モカの指摘に玲は凶星でそっぽを向くように寝返る。ちなみにゆーみんとは由美の事である。

「おやおやく〜？この反応…当たりみたいですね〜。」

「玲…。無茶しすぎ。今日と明日は寝ておきなよ。」

「うるせえな…。お前は俺の母親か？」

「な…は、母親!?!うっさい!」

玲が毛布にくるまりながら愚痴ると予想以上に顔を赤くした蘭。更に玲はからかつてみる。

「お願いだよ蘭、俺は病人なんだよ。そんな近くで怒鳴られると寝られやしない。」

「あ、あんたが変なこと言うからでしょ!?ていうか、そんな口叩けるんならさっさと治してよー!」

「まあまあ!二人ともそこまで!」

「玲も煽らない〜!」

熱くなりかけた所で巴がすかさずに待ったをかけ、宥める。蘭は忌々しげに睨みつけるが玲はどこ吹く風な態度だ。

「そうだ。玲くん、私たちも何か看病しようと思ってるんだけど、良いかな?」

「はは、気持ちだけ受け取っておくよ。ありがとな。じゃ、少し寝る。」

つぐみの気遣いに感謝しつつも既に部下たちから充分すぎるほど介抱されていた玲はそれ以上貰うわけにはいかないと断り、眠る。目を閉じて数秒。それだけで寝付くと蘭たちが驚く。

「おお…モカちゃんもビックリの寝付きの良さだね〜。」

「でも、私の家に泊まったとき、寝起きが悪かったんだよね。朝に弱いのかな?」

「かもな。前、起こしに行った部下の顔を殴り飛ばしちやつて歯が抜けて鼻が潰れたから起こすのは止めたって昇太が言ってたからな。」

「あ!あの人そうだったの!?!」

「れーくん、折角起こしに来てくれた人を殴るのは良くないよ〜。」

モカが注意するも既に寝てしまってる玲は聞いている気配がない。モカはプクツと頬を膨らます。そして蘭たちに話しかけた。

「ねえ、皆。れーくんが元気になれるように蘭の看病したときのアレ、

やってみない〜?」

「よしー!じゃあ、アタシはありったけの毛布持ってくる!」

巴が動くと同時に各々動き出す面々。もちろん、静観していた由美も玲の風邪を治す為にはりきり始める。

この後、玲は看病という名の地獄を味わうことになるのだった。

20話 合同合宿（前編）

「合同ライブのスタッフ？」

昇太から聞かされた依頼に玲は反応する。

「ああ、今度そう言うライブイベントのスタッフに頼みたいって依頼がCiRCLEの方から来てな。ちよつと人手が足りねえっぽいんだ。」

昇太は持っていたライブのチラシを玲に渡した。

「ふーん…。お、蘭たちもいるのか。」

玲はそれとなくチラシの出場枠を確認してAfterglowがいるのに気付く。

（そう言えば、ひまりから合同ライブを盛り上げるために三連休を利用した合宿をするから玲も一緒にどうだって、誘われてたな…）

あの時は聞き流しながら考えとくと一言だけで済ませていたが、もし行かなかつたら問い詰められそうな気がしてきた。

「蘭ねえとモカねえも出るの？」

Afterglowに反応した由美がひよこつとやって来る。ここ最近、由美はどうやらギターに興味を持っているらしく、Afterglowメンバー内では特にモカや蘭になつていて、玲にバンドの練習を見たいとせがまれる事がよくあるのだ。

「由美と一緒に行ってやりな。お前も正直に言うて見たいんだろ？」

昇太に見透かされ、玲は不機嫌に昇太を睨み付ける。

「おお、くわばらくわばら。黒豹にボコられる前に退散しますかなつと。」

昇太はそう言いながら部屋から出ていった。

「玲。私行きたい。蘭ねえたちが演奏するの见たい。」

(…行きたいのは山々なただけだな…。)

隣で由美が行きたいとせがむ声をBGMに玲は頭を抱える。

(日菜のバンドもいるんだよな…。)

そう、玲が苦手とする氷川日菜がメンバーのPastel*Palettesも参加していることだ。聞く話によると若宮イヴもメンバーの一人らしい。

トラウマから抜け出せていない時にイヴに会うのは危険すぎるかもしれないし、他のバンドグループに弱みを見せてしまうかもしれない。でも親から虐待され、自由を束縛されていた由美の願いは叶えてあげたい。そんな板挟みに襲われながらたどり着いた結論は、

(まあ、蘭たちだけに関わってりゃいいか…。俺の噂は広まってるから向こうからガツガツ来るような奴はいないだろ。)

こつちから絡みに行かなければいい。そう考え、ひまりに合宿に同行する事を伝えることにした。

「あ！あなたは、黒豹さん!？」

(イヴ以上に一番会いたくねえ奴に会っちゃった…。)

蘭たちの待ち合わせ場所に向かう最中に、いつか雨の日に絡んできた香澄と遭遇してしまった。玲は無視するように由美の手を引っ張り、その場を離れようとしたが何故か由美が動かない。どうしたんだと由美の方に視線を向けると由美は香澄の方に視線を向けている。何があるんだと視線の先を追うところには香澄のグループの中に見た顔があった。

「パン屋のさーやねえがいる。」

由美はやまぶきベーカリーのパンを大層気に入っており、時々パンを買いに行っているのだが、つい最近、沙綾やその家族に顔を覚えられたのだ。

「ああくそ…。」

玲は観念したように項垂れる。そんな玲に沙綾は近付いていく。

「どうも、玲さん。今日はどうかしたんですか？」

「お前さ、俺はこの辺りで恐れられてる不良のリーダーだってこと忘れてねえか？」

当然のように話しかける沙綾に玲はジト目で睨み付ける。だが、紗綾は全く怖じ気付かず話しかける。

「あはは、この前、万引き犯を取っ捕まえてくれた人を恐い人なんて言えないですよ。」

(いらねえよそんな親切…。)

「あれ？沙綾はもしかして黒豹さんとお知り合い？」

「お、おい、大丈夫か？相手はあの黒豹なんだぞ？」

香澄がキョトンと、有咲が恐る恐ると聞いてくる。それに対し、沙綾はよくぞ聞いてくれたと言わんばかりの顔である。

「うん。この人は花咲町を守ってくれてる人で、やまぶきベーカリーの常連さんでもあるんだ。あと、沙南と純の世話もしたことがあるよ。」

「おい、そんな紹介しろなんて一言も」

「すっごーい！ほら有咲！やつぱりこの人はいい人なんだってば！」

「し、信じない！信じないぞアタシは！だって黒豹は自分の縄張りで好き勝手した奴の指を全部へし折ってそのまま放置したって逸話だってあるんだからな！」

まるでヒーローに会った少年のように目を輝かせる香澄と首を振って未だに疑う有咲。

有咲が言っている事も真実ではある。だが、これは玲が部下に少しでも盛って話せと指示した内容であり、放置したのは事実だが実際は小指一本だけだ。

「でも、小さい子連れてるし、その子黒豹さんになついているじゃん。」

「あ、ホントだ…。」

黒髪ロングの子が由美の存在を指摘しておどおどしている子が気付く。すると、玲の後ろに隠れてた由美が有咲を睨み付けながら反論する。

「玲は、悪い人じゃ、ない。」

玲のジーパンを握りながら有咲を睨み付ける。睨まれた有咲はたじたじになる。

「う…。」

「おい、由美。年上を困らせんな。待ち合わせに遅れるからそろそろ行くぞ。」

玲は由美の手を引き、その場を逃げるように後にする。蘭たちとの待ち合わせもあるから由美の歩調に合わせてつつ、早歩きで待ち合わせ場所へ向かった。

(よりもよって弦巻の息がかかっているとところか…。)

待ち合わせに間に合い、向かった先の合宿する豪邸のような山荘に着いた瞬間、玲は顔をしかめる。隣にいる由美は前髪でよく見えないが玲とは対称的に目を光らせている。

玲は過去の事があり、金持ちを嫌悪している。そんな金持ちの世話になるのは玲にとっては最悪だった。

だが、蘭たちと一緒に居ればいい。

そう聞き直り、玲は由美の手を引き蘭たちの後に付いていく。

「いやー…相変わらずここらの家ってスゴいなー…。」

巴が圧倒されたかのように呟く。

「でも、ここなら近所迷惑にならないし、思いつきり演奏できるよね。」

「それに空気も美味しいし、休憩もゆっくりできそうだよね。」

そう談笑しながら入っていく蘭たちの後に続いて庭に入った瞬間、

「!?」

突然、頭に銃を突きつけられているような感覚に襲われた。

殺気だ。

咄嗟に辺りを見渡して神経を研ぎ澄ませて殺気のをを探ろうとするが全く掴めない。まるで雲を掴もうとしているようなもどかしさになる。

「玲?」

「…玲?どうしたの?」

由美と蘭の声で我に帰る。

「あ、ああ、何でもない。」

「れーくん、圧倒されちゃうのは分かるけど人様の別荘でボーってしちゃダメだよ。」

「お前に言われたくねえよ。モカ。」

モカに弄られながらも一度殺気のをを探ろうとしたが既に殺気は忽然と消えていた。

(…何なんだよったく。)

玲は心の中で吐き捨てた。

「いらっしやい!よく来たわね!」

玄関のドアをノックすると元気な声が出迎えた。

出てきたのは腰まで伸ばした金髪に笑顔が眩しい女の子。この豪邸のような山荘を合宿場所に提供した弦巻家の令嬢。弦巻ごころだ。

「あら!あなたが昇太や薫が言っていた黒豹かしら?」

こころは早速玲に絡みに行った。その瞬間、玲は確信した。

(こいつもあの香澄とか言う奴と同じタイプか！めんどくせえ！)
先程遭遇した少女を思い出す。それに、ここには有咲のようなストッパーの姿が見えないため、ここは当たり障りのない会話をするようにした。

「ああ、よろしく。」

「ええ、こちらこそよろしく！」

このまま切ってくれば穏便に済ませるだろう。

「ところで、あなたって男の子かしら？女の子かしら？」

「れっきとした男だ。」

「あらそうなの！とつても綺麗だからビックリしたわ！雨宮の言うとおりね！」

雨宮。その名前を聞いた瞬間、玲の目が限界まで見開かれる。

「…今、なんて？」

「え？綺麗だからビックリしたのよ？」

「違う、俺の事を言っていた奴の名前だ。…雨宮って言ったのか？」

「ええ、そうよ？」

「お、おい、どうしたんだ玲？」

いつもと違う様子になった玲に巴が心配して声をかける。それでも玲の耳には届かず、信じられないと言った表情だった。

(まさか…あいつここに居るのか!?嘘だろ？いや待て。同姓同名の他人の可能性だつて…。いや、でも俺の事を…。)

「もしかして会いたいのかしら？いいわ！呼んであげる！」

「お嬢様。呼ばれずともここにおりますよ。」

すると、蘭たちの後ろから穏やかな声が聞こえた。

「うわ!?!」

「い、いつの間?!」

蘭たちは驚いて、玲は忌々しげに振り向くと、そこには先程聞こえた声と同じような印象を持つ柔らかな顔、ピシッと決めた黒スーツを着た、年齢にして三十代位の男性がいた。

「後ろから失礼します。私、弦巻家の執事兼ごころ様のボディガードでございます。両宮と申します。」

「あ、ど、どうも、ごちそうさ…。」

礼儀正しくお辞儀をする姿に蘭たちは思わずお辞儀を返す。

「…。」

だが、玲だけは一挙手一投足に注意するように睨み付けていた。そんな視線に気付いているのか、玲を見て、にこりと微笑む。

「ごころ様。Afterglowの皆様方は少しばかりお疲れのご様子です。談話室で休息なされたらどうでしょうか? 幸い、まだRoselia様しか来ておられないようですし、その間、親睦を深めるために談笑なされると宜しいかと。」

「それもそうね。じゃあ案内するわ! 玲、あなたもどうかしら?」

「お嬢様。玲様は久し振りに私に再会なされて少し戸惑っているようです。おそらく、私がごころ様のボディガードであることも知らなかったようですので、少しばかり、説明されてからの方が宜しいと思います。」

「分かったわ! 昇太のお友達のお話、あたし期待してるわ! き、こっちよ!」

ごころ様が蘭たちを連れていく。由美は様子がおかしい玲の事が心配で離れたくなかったが巴に抱えられ連れて行かれた。そして、玲とすれ違った際の蘭たちの目が後でちゃんと説明しろと言いたげな目をしていた事に溜め息を吐きなくなったがそれも許されない緊張感が張り詰める。

「…玲。」

雨宮が玲と向き合い静かにそう言う。それに対する玲は睨み続ける。

「いやー、また会えるとは思わなかったよ。僕があそこから出ていつて以降何してたんない？」

執事としての態度が霧散してまるで久し振りに甥に会った親戚の叔父のような態度になる雨宮。もし、漫画的表現をするなら花が周りに咲いていそうな雰囲気だ。

「それはこっちの台詞だ。死に損ない。」

「うーん、つれないなあ…。そこも変わってないのか…。」

「質問に答えろ。」

「そうだねえ、大人になると色々あるの…。」

ヒュツ。

雨宮が言い終わる前に玲がジャケットの内ポケットに隠し持っていたナイフを喉元に突き付ける。

「二度も言わせるな。俺に殺気に向けやがったのもお前だろ。今ここの喉笛かつ切っても良いんだぜ？」

ドスが効いた低い声で雨宮を脅す。ナイフを突き付けられた雨宮は両手を上げているものの、その表情は呆れ気味だった。

「はあ、三十路のお茶目なジョークだよ？そんな本気になることないじゃないか？」

「やかましい。俺の言ったことだけに答えろ。」

「うーん、そうしたいのも山々だけど、ここじゃマズくないかい？ 僕、これからここに来るバンドグループのお出迎えをしなきゃ行けないんだからさあ。」

「…ちっ。」

玲は舌打ちすると渋々ナイフを引っ込め、蘭たちが案内された方向に歩く。そして一旦立ち止まった後、背中越しに雨宮に声をかける。

「…」つだけ忠告する。蘭たちに絡むのはいいが、あの事は話すな。」

「…うん。分かったよ。」

後ろから聞こえる雨宮の返答を聞いた後、玲は歩き出す。

「あ。ここは広いから案内しておくべき…って、行っちゃったか。…まあ、すぐ把握するだろうな。」

雨宮が気づいた頃には既に玲の姿は無かった。その後、雨宮の予想通り、玲は山荘の構図を把握したが迷子になりかける事態となったのであった。

21話 合同合宿（中編）

「れーくん、いじってゴメンってば。」

「れ、玲くん！ほら、クツキーあるから機嫌直して！」

ようやく蘭たちがいる場所に辿り着いた玲は安堵していた所をモカに弄られて、今現在、部屋の隅に座り込んでおり、それをモカとつぐみが機嫌を直している最中だ。

「…あれが花咲町の黒豹、なのかしら。」

Roseliaの中で唯一、玲と面識がないボーカル担当の湊友希那は拗ねている玲を見てそんな感想を漏らす。

学校の生徒での噂では調子に乗って下級生苛めをしていた学生を男女関係無く、完膚なきまで叩きのめし、晒し上げたと言う。

キーボード担当の燐子曰く、噂とギャップが激しくて、猫のような子と言う。

ギター担当の紗夜曰く、リサを口説き、妹の下着を見た不屈き者と言う。

ドラム担当のあこ曰く、カッコ良くてシユバツと敵を倒すとにかくカッコいいお兄ちゃんと言う。

そして、ベース担当かつ友希那の幼馴染み、口説きの被害者であるリサ曰く、厄介そうだけどAfterglowが絡むと大人しくなり、弄りたくなる子と言う。メンバー内の評価がちぐはぐで、人物像が想像できなかつたのだ。

（…どんな人物か想像できなかつたけど、こんな感じなのね。）

玲の知らないところで自分に対する評価に『子供っぽい印象がある子』が加わった。

「結局れーくん出ていつちやったね〜。」

「まあ、あいつの事だ。しばらくしたらケロッと戻ってくるだろ。」

「…そうかな？アタシは何だかあの執事と会ってから何だか様子がおかしかったと思うけど…。どういう関係なのか聞きそびれちゃったし…。」

その後、放っておきたかったのか、居心地が悪くなったようで部屋から出て行ってしまった。また迷子になるんじゃないだろうか。そう考えた友希那は蘭に話しかける。

「美竹さん。彼をそのまま放っておいて良いのかしら？また迷子になったらどうするの？」

「あつ…！ゴメン、ちよつと玲を連れ戻してくる！」

「あつおい！蘭！」

ハツとした蘭はすぐさま部屋を飛び出して行く。巴が呼び止めようにもすぐに見えなくなる。

「行っちゃったね〜。でもれーくん何だかイライラしてたね〜。」

「…そうだね。蘭ちゃんとモカちゃんの言うとおりかも。何だか玲くん、雨宮さんに会ってからずっと恐い顔をしていたんだもん。」

モカとつぐみはいつも通りではない玲の様子に違和感を抱く。

いつもの玲なら雑ながら挨拶はするはずだが、ずっと雨宮を睨み付けていた。玲は因縁付けるような柄が悪い人物ではないはずだ。

すると、ドアが開く音がした。もう蘭が戻ってきたのか。そう思い振り向く。

「ねえ、蘭ちゃんが走っていったんだけど、何があったの？」

入ってきたのはPastel*Palettesの丸山彩だった。事情が分からないPastel*Palettesのメンバーには戸惑いの色が見えている。

「んーとねー。ちよつと迷子になっちゃった幼馴染みを連れに行ったよー。」

「え？」

モカの説明によく状況が飲み込めない彩はただ首をかしげるだけだった。

(玲のやつ、どこ行っただらろ?)

廊下を早歩きしながら玲を探す蘭。時折窓の外を覗き、綺麗に整備された庭を見る。

思い出すのはこころに雨宮の事を聞いた時の事。

「ねえ、こころ。あの執事と玲ってどういう関係なの？」

「うーん、あたしも聞いたことあるんだけど、大人には色々あるのですよっちはぐらかされて、よく分からなかったわ。」

(ムカつく…。)

無性に腹が立った。そんなはぐらかし方で良いのかとイラつく。そして心なしか、蘭の歩くスピードも速くなっていた。

「あ。いたー！」

ようやく見つけた玲は庭が見えるベランダのベンチに座り込んでいた。蘭はすぐさま後ろから近づく。

「…何の用だ、蘭。」

外を見つめながら出した声は冷たく感じる声。いつもなら柔らかな声で振り向きながら話しかける筈がその時はなかった。蘭は率直に今思ってることを言う。

「何だか、今日のアンタおかしいよ。いつも通りじゃない。」

「…そりやそうだろ。俺はこんな場所嫌いなんだよ。」

「そうじゃない。あの執事さんと、いや、ここの庭に入ってから様子が変だよ。何があつたの?」

「…お前には関係ないだろ。」

ここで話は終わりだと言わんばかりの雰囲気を出す玲。でも、蘭は引かなかった。

「…何それ? 関係ない? それ誰が決めたの?」

「うるせえな…。今は一人にさせろ。」

玲はゆらりと首を少し動かし、片目で蘭を睨み付ける。だが、蘭は引かない。

「嫌。だってあたしら幼馴染みでしょ? 何でそんな隠すような事するの?」

「うるさいって言ってるだろうが! お前らと別れてから俺とお前らの住む世界は変わったんだよ! お前だって、再会したあと、送ったとき

に出会った男に俺がどう対応したか見てただろ!? その時に俺が怖かっただろ!? つぐみのストーカーを捕らえた時もだ。俺の仕事に巻き込まれて怖かった筈だろ!」

玲はベンチから跳ね上がるように立って、蘭に怒鳴る。それはいつも蘭をからかっている時のような余裕はなく、下手したら殴られるかもしれない。だが、蘭は引かずに言う。

「…ホントにそう思ってるの? アンタ。」

「…何?」

「じゃあ、はつきり言うけど、あの時のナンパ男を気絶させた時のアンタを見たとき、あたしは驚いたけど怖くはなかった。つぐみを狙ったストーカーを捕まえた時だって、つぐみはアンタが怖いと言言ってなかった。でも、アンタの背中が寂しそうだって言ってたんだよ!」

「…っ。建前だろ、そんなの…。」

玲の顔が歪む。

「違う! これはあたしの本心なの! …確かにアンタが今まで何をしていたのか気になるのは事実だけど…。」

「だったら!」

「でも! アンタが話したくなかったらあたしたちも追求しない! モカだって、ひまりだって、巴だって、つぐみだって、昇太だって、由美だって、アンタの部下たちだって! アンタが話したくなかったら追及しなかったでしょ!? …確かにあたしらはアンタに比べたら不良に襲われたら何もできなくて弱いかもしれない。…でも、たまにはあたしらを頼ってよ。何でもかんでも、背負い込まないでよ…。」

そう言っ、蘭は玲に抱き付く。抱き付かれた玲は、蘭の心臓の鼓動が速くなっているのを、体が震えているのを感じ、今まで言いたかった事を嫌われる覚悟で吐き出したんだろうと直感した。

「…お前が言うな。」

そう言っつて背中に手を回して抱き締めようとして、止めた。既に玲の手には血と暴力が染み付いている。殺人は犯してないものの、人を恐怖のどん底に叩き落とす男の手だ。そんな手で幼馴染みである蘭を抱き締めたくはない。

「はあ…、お前変わったよ。」

でも、一緒にいることは許してほしい。彼女たちは、俺の大切な者たちだから。心の中で自分にわがままを言う。

その後、蘭と一緒に戻ると既に他のバンドグループが集まっており、蘭の帰りを待っている間、由美を可愛がっていたようだ。

だが、玲はすぐにまた出ようとした。何故なら、

「可愛いー！」

「か、香澄ちゃん、由美ちゃんがビツクリしてるからその辺で…。」

（嘘だろ…何で香澄がここにいる!?! あいつもバンドやってたのかよ！）

そう、玲が苦手とする人物の一人、香澄が由美を愛でていたのだ。すぐさま逃げようとするが、蘭に腕をガッチリホルドされてしまいい、逃げることができない。

「は、離せ！蘭！」

「何で逃げるの！」

「苦手なやつがいるんだよ！」

「これから慣れていけばいいでしょ！」

「おい、香澄。美竹さんが来たからもうそれくらいで…げえっ!? 何で黒豹がここにいるんだ!?!」

「あ！ホントだ！ねえねえ黒豹さん！この子、あなたの妹さんですか？」

「丁度良かったです。神前さん。羽沢さんと一緒に寝たとはどういう事ですか?」

「さ、紗夜さん！そんなやましい事は何もないから…!」

元々騒がしかったのが玲が入ったことにより、更にカオスになっていく談話室。

「貴方はリサを口説き、日菜の下着を見ただけに飽きたらず、羽沢さんと寝るなんて幼馴染みとはいえ看過できませんよ。いいですか…」

今まさに紗夜の説教が始まろうとした瞬間、

ばさっ。

突然紗夜のスカートが後ろから舞い上がった。

「きゃっ?!」

咄嗟に紗夜はスカートを両手で押さえ、振り返る。

そこには香澄から離れて前髪越しに紗夜を睨み付ける由美がいた。

「玲、何も悪いことしてない。」

「な、な…。」

「玲をいじめるなら、こうしてやる。」

そう言つて由美は紗夜のスカートの裾を持つと引っ張り始めた。

「や、ちよ、や、止めなさい!」

「ゆ、由美ちゃん!そんなことしちやダメ!」

後ろから引っ張られることで段々ずり上がっていくスカートを必死で押さえる紗夜。慌てて止めようとするつぐみ。

「玲くんはあっち向いてて!」

日菜は玲の首を回して視界を反らさせるが、

ぐきつ。

嫌な音がした。

「こらー!由美ちゃん、

お姉ちゃんのスカートを引っ張るの止めなさい!」

「ぐ、ぐおおおお…首があ…!」

首にダメージを受け、うずくまる玲を放つて日菜は姉のスカートを引っ張る由美を止めに行つていった。放置された玲にモカが近寄り、ポンと肩に手を置く。

「今日は災難ですな〜れ〜くん。」

「うるせえ…。」

談話室の外の廊下。その扉の側に雨宮は待機していた。外にまで喧騒は漏れており、それを目を閉じて聞いている。

(…成る程。君はとても良い友人を持ったようだね。Afterglowか…。彼女らは玲の心の支えと言うわけか。僕にとっての、ころお嬢様のように。でも、頑張りなよ。彼を狂わせた心の傷は深く、暗い…。もし、彼の過去を知ったとき、君らはどうするんだろうね…。)

雨宮はそう遠くないであろう出来事で彼女たちがどうするのか。拒絶するかもしれない。それでも手を伸ばすかもしれない。

(まあ、決めるのは彼女たち自身だ。僕はこの件に関しては向こうから絡んでくるまで静観しますかな。さてと、そろそろお菓子でも…)

雨宮は後ろから聞こえてくる喧騒を聞きながらキッチンへと向かう。

「鬼ごっこね！よし捕まえるわよ！」

「わわ、ゆるみん速いよ。」

「由美ちゃん！紗夜さんに謝りなさい！」

(…冷たい飲み物でも、用意しますかね。)

結局、この日は顔合わせとミーティングだったのだが、頑なに謝らない由美が部屋から飛び出し出演バンド総勢で由美を探す羽目になり、ようやく捕まえた時には日は沈んでいたのだった。

22話 合同合宿（後編その一）

合宿二日目。前日行えなかったミーティングをしてある程度意見が纏まった後はそれぞれのバンドグループで練習を始めたが、由美がAfterglowの練習を見学するために付いていった為、残った玲はただただ屋敷の中をぶらつくしかない。

（ひまりの奴、何で俺を呼んだんだ…。）

そう思わずにはいられない。やる事が無いので庭のベンチに座っていると、後ろから気配を感じた。

「…何の用だ？」

「おお、やっぱり察知できるんだね。」

気配の正体は雨宮だった。玲は雨宮を睨み付けるも昨日と態度は変わらず、のほほんとした笑顔だ。

「当たり前だろ。どこかの誰かが気配の察知の仕方を教えたんだからな。おかげで昨日は殺気に当てられて生きた心地がしなかったぜ。」

「うんうん。鈍ってないようで安心したよ。よく眠れたかい？」

「…この目を見て、よくそんなこと言えるな。昨日の夜は寝られなかったんだよ。」

「…もしかして、Afterglowのみんなと一緒に寝ようって言ったからかい？」

「それ以上追求したら殺すぞ。」

「おお、こわいこわい。」

のれんに腕押しとはこの事か。部下なら声を小さくしてすいませんと謝る筈が雨宮は柳のように受け流す。玲は舌打ちすると庭の方に視界を移す。綺麗に整備された庭は常人は魅了される程だろう。だが、玲の顔に浮かんだのは不快、嫌悪だった。

「…やっぱり、こういうところは嫌いかい？」

「…ああ、大っ嫌いだな。どうしても過去の記憶がチラついちまって、今すぐにでもここを荒らしてから飛び出して、寝床に飛び込みたい気分だ。」

(あ、不味いぞ。この目、本気でそれを決行しかねないな…。)

玲は本音を吐き出す。雨宮は玲の目を見て本気でやりかねないと察した後、どうすべきか考えた時、一つの案が浮かんだ。

「そうだな…。玲。少しばかり、彼女らの練習を覗いて見ないかい？」

「…どういう風の吹き回しだ？」

雨宮の提案に玲は様子を伺うように見つめる。

「なあに、君がああ場所を思い出してしまうなら、あそこには無かったものを見れば良いさ。」

「はっ。それで落ち着けるならとつくにやってるさ。」

鼻で笑う玲だが、雨宮は見抜いていた。

「君、それをやろうとしてないだろう？」

「…俺はここで良い。」

「それをダメだって言ってるんだよ。ほら、行こうじゃないか。」

雨宮は玲の手を取り、屋敷に併設されている練習用のスタジオブースへ連れ込もうとするが、玲が拒絶する。

「離せてめえ！俺は行かねえって…！」

嫌がる玲に雨宮はため息を吐くと、当て身をして、一時的に意識を刈り取った。

「はあ、こんな手は使いたくなかったけどなあ…。」

こんなところをAfterglowのメンバー、それか玲と一緒に連れて来ていた由美という少女に見られでもしたら僕のこと嫌うだろうなあ。なんて事を考えながら適当に練習しているバンドの元へと連れて行った。

玲が目覚めると、視界いっぱい黒髪ロングの女の子の顔があった。

「あ、起きた。」

「うお!？」

玲は驚き、後ろに飛び退くが、どうやらさつきまで椅子に座らされていたようで、思いきり椅子ごと倒れる。

「わ!大丈夫ですか、玲さん!」

玲の元へ走ってきたのは香澄だった。玲は顔をしかめる。

(あの野郎…よりもよってこいつらかよ…!)

玲はここに運んできたであろう男の顔を思い浮かべる。

「…ここに運んできた奴は何て言ってた?」

「え?んーと、『少しばかり、玲様の元気がないご様子ですから、貴女たちのキラキラドキドキの演奏で元気付けてあげてください』って

言ってたよ。」

香澄が思い出すように言った言葉に玲の脳裏には、のほほんとした笑顔で気絶された自分を放って出ていった男の映像が浮かび上がる。

(あの野郎…二度と笑えない面にしてやろうか…！)

玲が殺意を募らせていると有咲がヤバいと言いたげな顔をして、ベースの子が震え始めた。

「玲さーん。あんまりそんな顔しないでくださいよ。りみと有咲が怖がっちゃいますよ。」

「…別に不機嫌じゃねえよ。」

沙綾が玲を落ち着かせる。

「ビックリしたよねー。雨宮さんが飲み物でも持ってきたのかなって思ったら、玲さんを抱えてきたもんね。」

「み、妙に楽しそうだったよな…あの執事…。」

未だに玲に恐怖を抱いている有咲の証言に玲は更に雨宮に対する殺意を募らせる。

「…猫じゃらしに反応するかな？」

「お、おたえちゃん…！」

「ちよっ…おたえ…こいつを刺激するようなことを言うな！つーか沙綾も笑ってんじやねえ！」

黒髪ロングの少女、おたえが率直な感想と思わず吹き出した沙綾にりみと有咲が慌てて注意するが既に玲の耳に届いてしまった。

(や、やべー…怒らせちゃったか?)

有咲は冷や汗をかいて息を飲む。だが、玲は不機嫌そうな表情のまま、椅子に座り直す。

「…ろよ。」

「え?」

「演奏してみろよ。お前らバンドやってんだろ?」

(こ、これって、つまり、生き残りたかつたら演奏しろってことか?)

「私たちの曲を聞いてくれるんですか!」

「うるせえ。それ以外に聞こえたか?」

「よーし!みんな、やろう!玲さんを元気付けさせるぞー!」

(や、やるしかねえ!上手く行ったら機嫌を取ることができるかも…!)

「それじゃあ聞いてください!」

香澄たちのバンド、P o p p i n , P a r t yの演奏が終わる。

「いえーい!」

「…ふーん。」

×に決めポーズをする香澄に玲は冷淡な反応をする。それでも香澄は玲の元へと走っていく。

「どうでしたか?玲さん!ご感想を!」

「良いんじゃないの?」

「えー、もつと無いんですか?こう、キラキラドキドキしたー!とか、楽しくなれたー!とか。」

「あのな。俺は一流のコメンテーターじゃねーんだぞ。そんなペラペラ感想が出ると思ってたんのかよ。つか語彙が無さすぎるだろ。何だよ、キラキラドキドキって。」

「うえーん、玲さんが辛辣だよ沙綾く。」

「じゃ、俺はもう行くぞ。じゃあな。」

沙綾にすがり付く香澄を放って、玲はそう言って立ち上がると部屋から出ていった。

「怒らせちゃったかなあ…。」

「あはは、玲さんは素直じゃないだけだよ。」

「で、でも、本当に機嫌を損ねちゃったかも…。ずっと笑わなかったし…。」

「そうでもないよ？だって、聞いているときに足でリズム取ってたもん。」

玲がPoppin' Partyのブースを出た後、香澄たちはそれぞれ玲がどう思ったか分析し合っていた。そして、香澄はふと気付く。

「あ、そうだ。有咲。有咲はどう、だった…。」

さつきから喋らない有咲が気になった香澄が視線を移すとそこにはキーボードの前に立ったまま穏やかな顔で燃え尽きている有咲がいた。

「あ、有咲あ!？」

「スゴい…立ったまま気絶している。」

後に有咲はこう語る。あの時は本番のライブの時よりも緊張した

と。

(はあ、疲れた…。さっさと蘭たちの所へ帰るか…。)

玲はPoppin' Partyのスタジオブースを出た後、Afterglowのスタジオブースまで戻ろうとするが、どのブースで練習をしているのか全く分からない。部屋の中の様子も伺えない中、どうしたものかと首を捻っている

ふと、ポケットに何かが入っているのに気づき、取り出す。

入っていたのはメモ用紙だった。おそらく雨宮が入れたものだろう。メモ用紙にはこう書かれていた。

『Afterglowのメンバーがいるスタジオブースなら奥の方だよ。』

玲はとりあえず、メモ用紙に書かれている場所へと向かい、ドアを開ける。

「どうだ？やる曲は何か決まったか？」

そう言いながらブースの中を見ると、

「あ、玲くんだ！んーとねー、しゅわりん☆どり〜みんと、はなまる◎アンダンテだよ！」

すぐにドアを閉め、メモ用紙を破り捨て、叫ぶ。

「本気でぶち殺すぞあのクソ執事!!」

「昨日から厄日だ…。」

すぐさま逃げようとしたが、追いかけてきた日菜に捕まって引きずり込まれてしまい、しかもまた逃げられないように日菜がドアの方に立っている。

「あ、あの、日菜さん。何だか、不機嫌じゃないっすか?」

麻弥が恐る恐ると日菜に話しかける。

「大丈夫だよ?だって、玲くんは女の子に手を上げないんだよ?」

「いい加減な事言うな。時と場合と気分によるんだよ。」

玲は日菜を睨み付けながら訂正する。たまたま日菜の隣にいた麻弥はびくりと震えたあと、そそくさと離れる。

「え、えーと、今の気分は…?」

彩がおずおずと話しかける。玲が彩に視線を向けると彩もびくりと震える。

「さっさと出たい。」

「えー、何でー?玲くん、アタシたちの演奏聞いてってよー!蘭ちゃんだけズルいよー!」

日菜が駄々をこね、玲に抱き付く。

「あーもう！離れろ！離れろつての！」

玲は引き剥がそうと腕を振るが、日菜はびったりとくつつき、離れない。

(さ、流石、日菜ね……。あの黒豹とあそこまでスキンシップ出来るなんて……。これも天才だからかしら……。)

千聖は自分の中で要注意人物である神前玲ですら振り回す日菜を見て息を飲むのだった。

「もー！玲くんの意地っ張りー！」

結局、玲は演奏を聞いていかずに出ていってしまった。日菜は頬を膨らませる。

「あれ？イヴさん、行かなかつたんすか？あの劇、イヴさん良かったんですよね？」

すると、麻弥がいつも積極的なイヴの様子がいつもと違うことに気付く。

「あ、いえ、私、レイさんと面識はあるのですが……。どうやら、怖がられてるようなんです……。」

「え、そうなの？」

イヴの告白に彩は意外そうに反応する。無理もないだろう。学校では情け容赦ない不良として恐れられている人物が、まさか自分のバ

ンドメンバーを恐れているとは思ってもみなかったからだ。
(そういえば、イヴちゃん全く絡もうとしてこなかったし、玲くんもイヴちゃんと目を合わせようとしていなかったな…。)

日菜は先程の玲の様子を思い返す。そして、

「ちよっと玲くん連れ戻してくる!」

「ちよっと!日菜ちゃん!」

千聖の呼び声に止まらず、玲を連れ戻す為に外へ飛び出していた。

23話 合同合宿（後編その二）

「あつ、あなたは…。」

A f t e r g l o wのスタジオブースを目指してさ迷っているなか、再び出会った松原花音に玲はため息が出た。そして、一か八かの質問をする。

「…なあ、A f t e r g l o wのやつらがいる場所知らねえか？」

「え、あ、ご、ごめんなさい…分からないです…。」

（…だよなあ。）

予想通りの回答で思わず項垂れる。こつちに気付くまでキョロキョロしていたことから察するに、こいつは方向音痴なのだろうか。玲は未だに蘭たちに辿り着けない事にストレスを感じはじめていた。

（…待てよ？こいつは確か、ハロー、ハッピーワールド！のドラムだったよな？だとしたら雨宮がどこにいやがるのか分かるかもしれないな。）

そう考えた玲は再び花音に尋ねる。

「なあ、雨宮って奴がどこにいるか知らねえか？」

「え？雨宮さん？それなら…。」

「あー！かのちゃん先輩いたー！」

雨宮の居場所を突き止めることが出来ると思った矢先、突然聞こえた無邪気な声に遮られた。

「あ！かんちゃんも一緒だー！」

「おい、はぐみ…そのあだ名は…もういいや…。」

現れたのは北沢はぐみ。商店街にある精肉店の看板娘なのだが、玲があまり絡みたくない人物でもある。と言うのも、

「そうだ！かんちゃん、ハロハピの演奏聞いていつてよー！」

この子犬のように誰とも分け隔てなく接するコミュニケーション能力だ。前に自分がやってきた事をはぐみに直接言ったこともあったが、いい人だね！でもやりすぎだよ。で流されてしまったのだ。

「あのな、今俺は雨宮がどこにいるか探してんだよ。そんな悠長な事してる暇はないんだよ。」

「あまみー？あまみーなら、こころんたちの所にいるよ？」

「よし、案内してくれ。」

「うん！こっちだよ。」

あまりにも流れるような手のひら返し。もし、この場面をモカが見ていたらこう言っていたかもしれない。

「れーくんってチョロいね。」

「ここだよー！」

「よし、ちょっと雨宮を呼んできてくれ。二人で話したい事があるからってな。」

はぐみが案内した先にたどり着いた玲は軽くその場でジャンプしながらはぐみにそう頼む。

「あまみーと二人で？分かった！じゃあ、待っててね！」

(なんだろう…あの足の動き…。)

不安がる花音を連れて、はぐみが中へと入って行く。

「みんな、ただいまー！」

「あー、はぐみありがとう。」

元気よく戻ったはぐみにミッシェルが礼を言う。

「あ、そうだ。ねえ、あまみー。」

「はい。何でございましょう北沢様。」

「かんちゃん、あまみーと二人で話をしたいってさ。」

「かしこまりました。では、こころお嬢様、失礼いたします。」

雨宮がこころに一礼をして外へ向かう。途中、花音が話しかける。

「あ、あの、雨宮さん…！気を付けてください…。」

花音のその言葉で全てを察した雨宮はにこりと微笑みそのまま外へ出ていく。その背中を、花音は不安そうに見つめていた。

雨宮が廊下に出てドアを閉めた直後、殺気が迫ってくる。

殺気がした方向を見ると獰猛な肉食獣のような目をした少年が間近に迫ってきていた。常人がそのような場面に突然出くわしたならば、驚く前に意識を刈り取られるだろう。

だが、それは常人が相手の場合だ。雨宮は表情を崩す事なく、顔面目掛けて飛んできた拳を打ち払う。

「随分なぐっ挨拶だなあ。」

「うるせえ！嘘の情報入れやがって！」

雨宮が困ったような顔をしているのに玲は顔を真っ赤にして攻撃

を続ける。

端から見れば、雨宮が防戦一方に見えるかもしれないが、雨宮は余裕の表情のまま、玲から繰り出される拳と蹴りを最小限の動きで回避し続けているのに対して玲は感情むき出しのまま攻撃を続ける。

「うん、動きは悪くない。けど、感情優先の動きになってるよ。」

雨宮はそう指摘しながら足払いをして玲の体勢を崩した後、素早く押さえ込む。玲は床に押し付けられ、しばらくもがいたが、すぐに大人しくなる。

「…ちくしょう。負けた…。」

床に押し付けられたまま玲は悔しげに呟く。

「でも、こんなに感情を剥き出しにしてくれて僕は嬉しいよ。戦闘技術を教えていたときは、にこりともせず死んだ目をしていたんだからね。これも、美竹蘭様のお陰かな?」

「…蘭は関係ねえだろ。」

玲は目をそらしながら答える。だが見透かされているのか雨宮はにこやかに微笑むだけだ。

「雨宮さん、何があったんですか!？」

すると、先程の攻防の騒動が耳に入ったのかピンク色の熊が飛び出してきた。

(一番面倒そうな奴が出てきやがった…。)

玲はうんざりしたような顔をする。

「ああ、ミツシエル様。お騒がせして申し訳ありません。少し玲様がお戯れをなさっていたので対処していたのです。」

「うわ…流石…。」

ミツシエルと呼ばれた熊は苦笑いをしているかのような声を出す。おそらく中の人は口がヒクついているのだろう。

「さて、Poppin Partyの皆様の演奏を聞いてきたんだらう？…どうだい？…こころお嬢様の演奏も聞いていったら？」

「どうせ、拒否権ないんだろ…。」

「勿論。」

この時、食い気味に答えた雨宮の笑顔は目が笑っていないなかった。

「わーい！…いっつも無関心なかんちゃん聞いてくれるなんてはぐみ嬉しいー！」

「そうだね、はぐみ。孤高の黒豹に満足してもらえるように、私も頑張らねば！」

「ええ！玲を笑顔にするわよ！」

「ええと、何て言うか、ごめんなさい。」

ハロー、ハッピーワールド！のメンバーの内三人がはしゃいでいるのを死んだ目で眺めているとそれに気付いたのであろう熊の着ぐるみ、ミツシエルが謝りに来た。

「…お前、あっち側じゃないんだな。」

玲ははしゃいでいる三人を死んだ目で見つめながら呟いた。

「…色々あるんですよ。」

ミッシェルはどこか遠くを見るような目（ずっと表情が変わらないので雰囲気だが）で天井を仰ぎ見る。そしてこの時、中にいた奥村美咲はもしかしたら神前玲は自分と同じ苦労人なのかもしれないと思っただ。

「あー、疲れた…。」

演奏をした後、感想を求めて詰め寄ってくる三人を捌ききって、雨宮からA f t e r g l o wがどこにいるか聞き出せた後、満身創痍で蘭たちの所へと向かった。

「おい、蘭。何の曲やるのか…。」

「美竹さん。だから、ここはこうするべきであって…。」

「湊さん。あたしはそう思わないんだけど？」

蘭たちのスタジオブースに入ると蘭と銀色の長髪の少女が口を挟む余地がないほど議論しあっていた。玲は近くにいたりサに話しかける

「なあ、何があつたんだ？」

「あー、実はね、蘭と友希那がどうしたらライブが盛り上がるか、お互いの曲を確認したら友希那が異議を唱えちゃって…。」

「こんな時にも頑固かよあいつ…。」

玲は呆れながら事の成り行きを見守る。

「丁度いい時に玲も来たから、玲に聞きましょう。湊さん。」

「そうね。私と美竹さんだけで言い合っても収拾つきそうにないから第三者に聞きましょう。」

雲行きが怪しくなってきた気がする。玲は直感して外へ逃げ出そうとするが、

「どこ行くの？まさか逃げるんじゃないよね？」

ドアノブに手をかけたところで蘭から呼び止められた。

「…ちよつくらトイレだ。」

「嘘でしょそれ。」

「嘘じゃねえ。」

「じゃあ、目を合わせなよ。あんた嘘つくと目、合わせないよね？」

「神前さん。私と蘭はどっちのプログラムが良いのか聞きたいのであって別に問い詰めているわけではないわ。」

「じゃあ何でそんな圧を掛けてくるんだよ…。」

玲は二人から詰め寄られ、たじたじになる。

「玲。あんたはどっちにするの？」

「お前らな、俺、今日一日だけで色んな奴らに絡まれてヘトヘトなんだよ。休ませろや。」

「知らないよ。あんたが勝手に出ていったからでしょ？」

「あなたなら鼻負目なしに見てくれそうだから聞きたいだけよ。」

(どっち選んでも納得しないだろお前ら！)

迫られている玲は心の中でそう呟く。

「はいはい。友希那そこまで！玲くん困ってるよ。」

「蘭もだぞ。玲はさつき来たばっかだから少し落ち着かせろ。」

友希那と蘭はリサと巴にそれぞれ引き離される。

「あー、マジで疲れた…。」

玲はへたりと備え付けの椅子に座り込む。

「すまん。ちよつくら寝る。一時間したら起こしてくれ。」

玲はそれだけ言っとうつぶくと、すぐに寝息をたて始めた。

「え、玲にいちゃんもう寝たの!?!」

「あはは、やっぱビックリするよね…。」

驚くあこにひまりは苦笑いする。

「さて、じゃあアタシは玲を寝室まで運んでいくよ。」

「じゃあ、あこもお手伝いするー!」

「私も、行く。」

巴が眠った玲を抱え、あこと由美が

その後に続く。

「よつと。意外と軽いな。」

(玲って、軽いんだ…。)

そう呟きながら出ていく巴。その呟きを聞いた蘭たちは心の中で同じ感想が出るのだった。

24話 合同合宿（後編その三）

夢を見ている。豪華な部屋だ。どうやら幼馴染みと別れてから数ヶ月たった頃の自分だ。今日もあのフィンランド人から暴力を振るわれ、犯される一日が始まるのだろう。ならば、自分の心を殺して、人形に徹すればいい。そうすれば、いつもより犯される時間が短くなる。これまでもそれで乗りきってきた。どうせ誰も助けてくれないから、自分の救いの叫びは誰にも届かないから。

それなのに。何故あいつらは俺に優しくするんだ。何故俺に手を伸ばすんだ。

止めろ。

殺しかけていた心が息を吹き返してしまう。

止めろ。

あの時、感じなかった恐怖が再び襲ってきってしまう。

止めろ。

もう俺は昔の俺じゃないんだ。向かう敵は容赦なく潰す不良なんだ。

止めろ。

そんな可哀想なものを見る目で、昔の俺を投影した目で俺を見るな。

止めろ。

こんな汚れた自分を見てほしくないんだ。

止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ止めろ。

「っはあ……」

目を覚まして、起き上がる。とんでもない悪夢を見ていたような気がする。あまりにも汚れた昔の記憶。唾棄すべき過去。

（はは…。まだ囚われているって事か…？馬鹿馬鹿しい。あいつの

やったことはもうすでに世間に晒され制裁された筈だ。」

玲は一息つき、時間を確認するとまだ寝始めてから三十分ぐらいいか経っていなかった。周りを見ると寝室に運ばれていたようでもう少し眠るかと思いを閉じ、ベッドに身を預けようと仰向けに倒れると、枕とは違う固いようで柔らかい感触と暖かみが後頭部に感じた。

不審に思い、目を開けると、

「もう少しお休みになられますか？レイさん！」

ここから若宮イヴに膝枕されていることに寝起きの頭で気付くのに数秒かかった。

そして、ゆっくりと起き上がり、叫ぶ。

「何やってんだお前はあ!？」

「ご、ご迷惑だったでしょうか？」

玲は警戒心を最大まで引き上げながらベッドから降り、イヴと距離を取る。その様子を見たイヴは少し寂しそうに言う。

「…誰からこうしろって言われた？」

「ヒナさんです。こうしたら仲良くなれると聞いたので実践してみたのですが…。」

(あいつ余計な知恵を吹き込んでんじゃねえよ…!)

イヴの証言にここにはいない日菜に対してイラついていると扉が開く音が聞こえた。

「イヴちゃん！大丈夫!？」

入ってきたのは白鷺千聖だった。すかさず玲とイヴの間に入り、玲を睨みつけるその姿はイヴを守るという意思を感じた。

(…ああ、これだよ。本来俺が向けられるべき視線は…。)

玲はその様子に安堵を覚えた。ここに来てから自分に興味がある純粋な好奇の視線に晒され続けた玲にとって自分の事を恐怖、悪党の視線で見ている面が強いPastel*Palettesは玲にとってにはありがたかった。

「神前玲…。私たちのバンドメンバーに酷い目に会わせてないでしょうね?」

「安心しろよ。怒鳴りはしたが手は出してない。俺はすぐ手が出る変態とは違うからな。」

玲は不敵に笑いながら千聖の質問に返答する。このままイヴを連れて出て行って欲しい。そう考えていたが、事態は玲の予想外の方向へ動き出した。

「…そう。イヴちゃん。まだ感想を言えてないんでしょ?言えるときに言っておきなさい。」

「はい。チサトさん。」

(感想…?どういうことだ?)

玲が首をかしげているとイヴは玲と向き合って覚悟を決めた表情をしたあと、

「あの!舞台劇で本田刃無勝の演技、とても素晴らしかったです!ありがとうございます!」

「は?一体なん、の。」

そう言ってお辞儀をした。玲は一瞬何の事か分からず顔をしかめ

だが、すぐに思い出したのだろう。顔が赤くなり始める。

「お、おお、おおおおお、お前それを言う為だけに!？」

冷静さを失いわなわなする玲にイヴはハキハキと返事をした。

「はい!あのグラサンのショーとのナイフと槍の殺陣…。とても格好良かったです!それと…」

ツラツラと忘れていて欲しかった舞台劇の感想を述べるイヴに対して玲は段々と恥ずかしくなって萎んでいく。その姿はさつきまで千聖に向かって不敵に笑っていた姿はなかった。

「もう…やめてくれ…。」

すっかり小さくなった玲の声は興奮してマシンガントークをするイヴの耳に届くことはなく玲は更に萎んでいく。

「イ、イヴちゃん?もうそれくらいにした方が良くないかしら?」

見るに見かねた千聖がストップをかける。イヴが我に帰るとそこには耳まで真っ赤になった顔を隠してうずくまる玲がいた。

「はっ!も、申し訳ありません!出過ぎた真似だったでしょうか?」

「もう…、煮るなり焼くなり好きにしろ…。」

玲はうずくまっただまま観念したかのように声を出す。

「…それじゃあ、最後に私の願い。聞いてくれますか?」

「何だよ?」

玲がゆっくりと顔を上げるとそこにはイヴが両手を広げたポーズをしていた。

「私とハグしてください！」

ハグ。外国では挨拶にもなっているコミュニケーション手段のひとつ。だが、日本国では抱き合うと言う意味は別の意味に解釈されることが多々あるのだ。

「おいおい…。アイドルが不良とハグなんかしているのか？」

「レイさんはショウタさんと同じ、良い不良さんです！」

玲は疲れながらも呆れ半分、冗談半分で聞くがイヴは真面目に答える。

「良い不良って何だよ全く…。」

玲はそう渋々言いながら手を広げる。その様子をOKだと受け取ったイヴは目を輝かせながら玲の胸に飛び込んだ。

「ありがとうございます！レイさん！」

ぎゅっと背中まで手を回して抱き締めるイヴ。玲は疲れたような顔をしていたがすぐに我に帰る。

「ん…はあっ!?何やってんだ俺!?!」

慌ててイヴを引き離すと早歩きで部屋を飛び出してしまった。

「イヴちゃん！大丈夫？」

すぐさま千聖が駆け寄る。だが、イヴの顔はどこか晴れやかだった。

「大丈夫です！少しだけですけど、レイさんと仲良くなれた気がします！」

「全くもう、心配したわよ？」

（花咲町の黒豹…。イヴちゃんが苦手だつて聞いていたけど、本当のようね。…でも、どうしてイヴちゃんが苦手なのかしら？）

千聖はそんな疑問が浮かんだが、イヴに元気が戻って来たので一先ずは置いておくことにした。

「さあ、早く戻って練習再開するわよ。彩ちゃんたちを待たせたら悪いしね。」

「はい！」

そんなこんなで三日目。合宿最終日。玲はどうしているかと言うと。

「れーくくん。出てきてよ。」

「おーい！いつまで閉じ籠ってるんだよ！早く出てこーい！」

「玲ー！鍵開けてよー！リーダー命令ー！」

突然、同行を拒否して、部屋に閉じ籠ったのだ。その理由が、

「香澄たちの何が怖いの！」

「あいつら執拗に聞いてくるだろどうせ！」

昨日、必要以上に他のバンドメンバーに絡まれた事と、若宮イヴに

会うのが気まづくなつたのだ。

「あーもうー！さっさと出てきてよ！つぐみからも何か言つて！」

「ええ!?え、えっと、出てこなかったら昇太さんに頼んで、賄いのお料理全部カボチャにするよ！」

つぐみのその一声と同時にがちやりとドアを開ける音がした。

「いいか。俺は基本的に話し合いには入らない。俺の事はオブジェか何かと思え。」

不機嫌な顔のままの玲。最後の打ち合わせに行く前にそんな事を言つて打ち合わせ部屋に入ると隅っこに陣取つて座り、事の成り行きを見守る事にした。

「あの打ち合わせ、途中どうなることかと思つたが、何とか軌道修正できて良かったな…。」

「あはは…、私もそう思う…。」

合同合宿終了後の帰り道、玲はそうぼやき、つぐみも苦笑いながら同意する。

最後の打ち合わせくらいはまともにするだろうと思つていたが、互いのバンドグループがあんなこといいな、できたらいいの言い合い

で混沌と化していた。

傍観者の立場だった玲はこれは収拾着くのかと不安になっていると、同じく傍観者の立場だった雨宮が動いた。

「皆様方のご提案は中々発想豊かで素晴らしいものでございますね。では、どうでしょう、それらを実現できるか話し合ってみては？」

雨宮の鶴の一声に混乱は一先ず収まり、話が進んだ。玲がホツとしていると雨宮がこつちを見て勝ったような笑みを浮かべた。

(…良い度胸だこのやろー！)

思わずムキになった玲も話し合いに加わり、打ち合わせは賑やかに進行していった。

「まさか玲が参加するなんて、ビックリしちやったよ。」

「お前らの打ち合わせ見てらんなかったからだよ。つーか、蘭。お前『自分達はいつも通り』しか言ってるねえじゃん。」

ひまりの言葉に玲はそう返す。そして次に蘭に矛先を向けた。

「だ、だってそれがあたしらのバンドの在り方だし…。」

「うるせえ。いつも通りいつも通り言ってるやどうにかなるって考えてるお前が心配になってきたぜ俺は。あーあ。こりゃあ、将来嫁に貰う奴は苦勞するぜー。」

玲がいつもの調子で蘭をからかうと蘭は顔を赤くしながら黙ってギターケースを振りかぶる。それに気付いた玲は咄嗟に落ち着くよう説得する。

「ちよ、待て。蘭。ジョークだつての。」

「うっさい！さらつとそんな事言わないでよバカ！」

「ちよ、おい！誰か蘭を止めろ！」

玲はひまりたちに助けを乞うが、

「玲…、それは自業自得だと思う。」

「れーくん乙女心理解してないよね。」

「まあ、それがアイツらしいけどな！」

「玲くんは、デリカシーを覚えようね…。」

「ギター振り回す蘭ねえ。かつこいい。」

と、静観するだけだった。

玲にとっては地獄の合同合宿。その終わりは夕焼けの中、ギターを振り回して追いかけて来る幼馴染みから逃げ回り、帰った時はくたくただった。

番外編 ひまり誕生日

「…困った。」

玲は一人、頭を捻らせ悩ませていた。目の前には様々なファッション雑誌や女性誌等が並べられている。玲はそれらを眺め一言。

「全くわからねえ!」

事の始まりは昇太と一緒に羽沢珈琲店でくつろいでいるときだった。

「そういえば、そろそろひまりちゃんの誕生日だけど、玲くんは何か用意してる?」

話しかけてきたつぐみの言葉にフリーズする。

「あー、もうそんな時期かあ。」

昇太が当たり前のように呟く。

「うん、だから、みんなプレゼントは何かいいかなって思ってるんだけど、昇太さんは思いつく?」

玲は知識を総動員させるが全くいいアイデアが出てこない。

「そうだなあ…。んじゃあ、俺はネット経由で知ったひまりちゃんがハマリそうなアプリでもプレゼンしてみるか。何も無いよりはマシだろ?」

「うん、昇太さん色んな知り合いがいるから、いつつも頼りにしてるよ！玲くんは？」

「…悪い。何も考えてねえ…。助けてくれ昇太。」

何も良い贈り物が浮かばなかった玲に昇太は知り合いから押し付けられた女性誌などを読ませてひまりが喜びそうなものの研究をした。だが結果は

「全然分からん…。」

玲の頭では理解できないことがほとんどだった。元々そういういったものには興味が微塵もないのだ。玲には女性を悦ばせる技術は持っているがそれをしたらひまりと気ますぐなるし、蘭たちからの報復は目に見えている。すぐに却下した。

「ああくそ。ひまりがやってる自撮りとかSNSとかの事もっと知ってりやよかつた…！」

玲は頭を抱え唸る。一体何ならセーフでどこまでがアウトなのか、そう悩んでいるときにも時間は刻一刻と進んでいく。

「あー…どうすんだよ!?!」

頭では処理しきれなくなって思わず叫ぶ。だが声が静寂に吸い込まれただけで良い案は浮かばない。

「…もーいい。少し気分転換に出るか…。」

玲はふらふらと外に出た。

気分転換に外に出たはいいが、まだプレゼントの事が頭のすみに残り、中々スツキリできない。

(いっそ、ショッピングモールのゲーセンで消し飛ばすかあ…。)

そう考え、ショッピングモールへ足を運ぶ玲。ショッピングモールへ行くと玲は入口にあるインフォメーションをチラ見して中に入った、

かに見えたがすぐに戻ってインフォメーションを注視する。

「これだ…！」

そこにあつた情報に玲はこれしかないと考えついた。

誕生日当日。ひまりは待ち合わせ場所の公園でそわそわしていた。いつもと違うとするなら服や髪型、メイクといったことだろうか。

(誕生日に玲くんからお誘いがあるなんて…！服装もビシッと決めてきたし、大丈夫だよな？髪型どっかおかしくないかな？)

そう考えながらにやけ、うろろろする様はまさしく乙女そのもの。そして後ろから声をかけられた。

「あつ、玲!?!」

「君可愛いねー。誰か待ち合わせ?」

「あ、ご、ごめんなさい…人違いでした…。」

後ずさる。この手の男は厄介な感じがする。ひまりのセンサーがそう察知していた。

「俺と一緒に遊ばねえ?悪いようにはしないからさあ…。」

詰め寄ってくるナンパ男にひまりは少しばかり恐怖を覚えた。

「あ、あの、ホントに、待ち合わせしてるんで…。」
「おい。」

すると、後ろから声が聞こえたかと思ったら男が突然離れた。いや、離れたと言うより離された。

「何、嫌なもん見せつけてんだお前。」

男の後ろには幼馴染みの玲がナンパ男の襟首を引っ張っていた。

「あ、あれ？キミ、この子の彼氏？」

ナンパ男が玲にそう質問すると玲の目が鋭くなる。まるで失せろと言わんばかりに眼光がギラつく。

「あ、ああー、ご、ご機嫌ななめみたいだね…。じゃ、すみませんでした…。」

身の危険を感じたナンパ男は苦笑いをしながらその場を去っていった。男が見えなくなった事を確認すると玲のギラついた表情が解ける。

「はあ、悪い。待たせてしまったようだな。」
「う、ううん！大丈夫！大丈夫だよ！」

玲がナンパ男を追い払う時に見せた顔からやっぱり不良なんだと思いき直したひまりだったがすぐに戻ってホッとす。

（やっぱり、あの頃の玲だなあ…。どんな時でもアタシたちの味方で

いてくれたあのときのまんまだよ…。(

「さ、行くか。」

「うん!」

玲の言葉にひまりは元気よく頷いた。

行き先はショッピングモール。その中にある映画館だった。

玲は内ポケットに入っていたチケットをひまりに渡す。

「ほい、ひまりの分。」

「あ、うん、ありがと。」

玲から渡されたチケットにはタイタニックと書かれていた。

「その、俺はひまりみてえな女の子の欲しいものがよく分かんなかったんだ。だから、俺にできるのはリバイバル上映の昔の映画を見せるくらいしかなくて…。」

そつぽを向きながら恥ずかしそうに頬を搔く玲。そしてチラッとひまりの顔を見て困ったように言う。

「…ダメか?」

「ううん!全然!だったら一緒に見よ!えい、えい、おー!」

「すまん、その号令は無理…。」

「もー!なんでよー!」

玲が誘った映画鑑賞は効果覷面だった。ひまりは楽しんでくれたが…。

「ひまり、お前泣きすぎだろ…。」
「えぐっ、えぐっ…だつてえ〜!」

泣ける映画だと言うのは分かっていたがここまで泣かれると逆に引く。玲の記憶が確かならもう前半の色々な場面ですすり泣きして豪華客船の沈没と同時にひまりの涙腺が決壊したのだ。

「はあ、コメディものが良かったか？俺もちゃんと見るのが初めてだったがあんな悲恋だったなんてな…。失敗だ。」

玲は困ったように頭を掻く。だがひまりはぐずりながらも首を横に振る。

「ううん…。私もちゃんと見たことなかったからお互い様だよ…。悲しいけど、とても面白かった…。」

「…そう言ってくれたら助かる。」

すると、玲の携帯に着信が入り玲は確認するとすぐひまりの手をとる。

「うえっ、玲?」

「行くぞ。」

訳も分からず急に走り出す玲にひまりは困惑する。そして向かった先はあの雑居ビルだ。

(ま、待って?もしかして、もしかして玲と…二人だけの部屋で…!? わ、わ、私まだ、心の準備が…!)

ひまりの妄想が暴走してるなか、玲がビル一階の一室をノックする。

「用意できてるか？」

玲がそう聞くと向こうからノック音が二回返ってくる。

「よし、ひまり。先に入れ。」

「う、うん。」

ひまりはギクシヤクしながら玲に促され、中に入ると同時に、パンという破裂音が聞こえ、紙吹雪が舞い散る。

「ひまりちゃん！誕生日おめでとう！」

眼前にはクラッカーを持った幼馴染みたち。そして、ハロウィン風に模様替えされた部屋に沢山のお菓子だった。

「…え、みんな？」

「おめでどうひまりちゃん！実は、昇太さんがこの一室使ってもいいって言ってくれたから、玲くんの部下の人たちと一緒に、みんな準備していったんだ！」

つぐみが駆け寄って説明する。すると、後ろからツツコミが飛んできた。

「な、何でハロウィン風なんだよ!? 普段ひまりをからかかってる俺に対する嫌味か!？」

振り向くと玲が文句を言っている。カボチャ嫌いなのはAfterglow全員の知ってる情報だがその理由を知らないひまり、巴、

蘭は何故そこまで嫌うのか分からずキョトンとする。

「あ！そっか、玲くんは…。」

「ひーちゃんの誕生日、ハロウィンが近いから、一緒にやっちゃおうって思ってたね。これ、私の提案。」

うっかりしていたと顔に出すつぐみに代わり、得意気に語るモカ。それを玲は忌々しげに睨み付ける。

「モカあ…！お前なあ…！」

玲がモカを追いかけ始め、モカは逃げる。

「きゃー、助けて。かわいいモカちゃんがこわーい黒豹にイタズラされちゃうよ。」

緩い口調で、なおかつ楽しそうに走り回るモカを玲は追いかける。

「まあまあ、玲！今日はひまりの誕生日だ。カボチャくらいどうって事無いだろ？少しくらい多目に見ろよ。」

巴が玲を押さえるも、玲はじたばたする。

「離せ巴！あいつに制裁を加えないと俺の気が済まねえ！」

「…何でそんなムキになってるの？カボチャ料理しかないなら、まだ分かるけど、明らかにカボチャそのものを嫌ってる感じじゃん。」

「確かにそうだよね…。ねえ、何でなの？」

蘭の指摘に便乗したひまりが玲に聞くと玲はそっぽを向く。

「…玲くん。もう言っちゃってもいいと思うよ。」

つぐみがポンと玲の肩に手を置く。もう白状する以外の道はなかった。

「あつははははは!!そんな訳かよ!」

「ぷっ…く、ゴメン玲。あたしも笑わずにいられない…あつはっは!」
「お、お腹が痛いよお…!苦しい…!」

観念した玲のカボチャ嫌い原点のエピソードを話した直後、しばしの静寂の後、巴、蘭、ひまりの笑いの合唱が沸き起こった。

「ああもう、最悪だ…。」

白状した後の玲はこの世の終わりのような顔をする。こんな結果になるのが目に見えていたので今まで言わずにいたが今日ここでその秘密がバレてしまった。

(…まあ、今日ぐらいは良いよな…。)

玲はそう自分を納得させる。そして、ようやく笑いが落ち着いたひまりに歩み寄る。

「誕生日おめでと。ひまり。」

「…うん。」

やっぱり、自分達のために笑ってくれる昔と変わらないな。

ひまりは今日一日の玲をそう思い返すのだった。

25話 由美、合同ライブに行く。

「そうか。そりや大変だったなあ。」

「正直、お前と変わってほしかったぞ。それを大変の二文字で済ませるなくそつたれ昇太。」

「悪かったって。今度、旨い飯でも作ってやつからよ。機嫌直せよ。」

私、由美は昇太が玲とそう喋る後ろを付いていく。今日は待ちに待った合同ライブ。かつこいい蘭ねえたちだけじゃなく、さーやねえがいるバンドとか、日菜ねえがいるバンドとか、この間の合宿ってやつに行つたときにいたバンドの人たちが出演するみたい。私は楽しみ。

「にしても、由美の奴が着いてきちまつたけど、どうする？俺ら午後からとはいえ、スタッフとして働くから面倒見れないぞ？」

昇太が私の事を心配そうにしている。私の事なら大丈夫なのに。

「そうだな…。蘭たちも暇じゃないだろうし、CiRCLEのスタッフも客の整理やらで大変だろ？もう一人くらい連れてくればよかつたな…。」

玲も心配しすぎ。私がちっちゃいからって不安になっちゃってる。

よし、私は大丈夫だと言ってやろう。

「玲。昇太。私なら大丈夫。」

私がそう言っても玲と昇太は良い顔をしなかった。何で？

「おいーっす。まりなさん！応援に来ましたぜー！」

「あ、昇太くん！今日はよろしくね。」

合同ライブをやるライブハウス、CiRCLEに入ると昇太は受付のまりなさんに話しかける。何やら玲とも話し始めて暇になってきた。蘭ねえたちの所に行こう。私はそう思ってCiRCLEの中を探検し始めた。

…蘭ねえたちのバンドって何て名前だっけ？

いや、分かる。分かるんだけど、英語がよく分からない。アフターグロウって言うのは確かなんだけど、それがどの部屋なのか全然分からない。

「ここ、かな？」

とりあえず、適当に英語が書かれている部屋に入ってみる。中には誰もいない。もしかして蘭ねえたちよりも早く来ちゃったのかな？そう首をかしげながら部屋の中をうろついているとドアが開く音が聞こえた。

「あれ？由美ちゃんだ！」

入ってきたのは玲が苦手な香澄だ。…と言うことは、ここはポップインパーティー。さーやねえのバンドの部屋だ。

「どうしたの？もしかして、迷子なのかな？」

香澄はぐいぐい来るから苦手だ。私は逃げようとドアへと駆け出すと、誰かとぶつかった。

「おっと。あれ？由美じゃん。」

ぶつかったのは綺麗で長い黒髪の人。おたえさんだ。

「え、由美ちゃんがいるの？」

おたえさんの後ろからさーやねえが覗く。

「こんな所で何してるの？迷子？」

おたえさんが私と同じ目線でしゃがんで話す。…なんだかこの人、合宿の時といい、今話しかけている時といい、私を小動物扱いしている気がする。

「…迷子じゃない。部屋、間違えただけ。」

「そっかー。じゃあ、蘭ちゃんたちの所まで一緒に行こっか。」

「いい。一人でも行ける。」

香澄と一緒に行動しているが私は首を振って断る。そして蘭ねえたちの部屋へ…

「…由美ちゃん？」

部屋…へ…。

「もしかして、蘭ちゃんたちの部屋、分からないのかな？」

…りみさんの言う通りだけど、いや、分かるよ。バンドの名前は。でも、どんな英語だったのか、どこの部屋なのか分かんないだけ。

「ああもう、ほら。一緒に探してやるから、こっち来なよ。」

「…ん、分かった。」

しようがない。ここは頼るしかない。私はそう考え、手を差し出している有咲の横を通りすぎてさーやねえに頼む。

「さーやねえ。蘭ねえたちの部屋、教えて。」

「……………」

「あ、有咲！元気だして！ほ、ほら、由美ちゃんは恥ずかしがり屋なだけだから！そんな落ち込まないで大丈夫だよ！」

「う、うっせー！落ち込んでねーし！」

その後、さーやねえに頼んだ私は蘭ねえたちの部屋の前へたどり着いた。なるほど。Aが最初に来ることを覚えていればいいのか。後で英語を勉強したいと玲に頼もうかな。

「ほら、ここにAfterglowの部屋。今はスタジオで最後のリハーサル中ではないんだけど、ここで待っておく？」

リハーサル。ということは今、蘭ねえたちはステージの上で演奏しているのか。

「行きたい。蘭ねえたちのステージ。」

「じゃあ、行くっか。こっちだよ。」

さーやねえの手に引かれながらステージへと向かうとCDで聞いた音楽が、…いや、これはCDで聞いた以上にカッコいい…。

「あ、ちよつと由美ちゃんー！」

思わずさーやねえの手を放して先へ走ってしまった。でも、こんなにカッコいい音楽聞かされたら居ても立ってもいられないもん。

音が漏れて聞こえるドアを開け、ステージを見ると、

その光景に私は釘付けになった。

カッコよかった。まだ全然お客さんがいないのにカッコよく演奏する蘭ねえたち。

歌っているのは…コミックパニックかな？合宿の練習で聞いていた奴だ。

何だか踊りたくなるような楽しい音楽だ。思わずジャンプしてリズムを取ってしまう。今ここで私だけしかない観客席。何だか、私のためだけのライブって感じで最高だ。

「ふう…って、由美!？」

あつという間に終わった。私は満足だ。そしてふと私の方を見た蘭ねえが驚くと同時に他のみんなも私の方に注視する。私は感想を言いにステージに駆け寄り、よじ登る。

「蘭ねえ。とても面白かった。カッコよかった！」

私は蘭ねえの前でびよんぴよんジャンプしながら感想を言う。

「由美ちゃん来てたんだ。もしかして、一人で来たの？」

ひまねえの言葉で思い出した。玲の事、完全に忘れてた。

「リハ中すまねえ蘭ちゃん…ここに由美が来なかったか!？」

「由美!どこだ!」

扉を蹴破るように玲と昇太が入ってくる。二人とも必死そうだ。

「おーい、玲!昇太!こっちだ!」

ステージにいるともねえが呼んで、私の方を見ると玲と昇太は安心

したように座り込む。心配かけちゃったな…。

「…由美ちゃん。もしかして、何も言わずに来ちゃったの？」

つぐねえに言われて私は目をそらす。この後、私は玲と蘭ねえたちに怒られてしまったが、玲が無事でよかったと言いなから抱き締めてくれたのはちよつぴり嬉しかった。

さて、今は蘭ねえたちの部屋で待機している。玲も昇太も怪しい人とかがいなか見回りに向かったようでここに私一人だ。ライブ中で蘭ねえたちはステージで演奏しているのだろうか。私はもうあのリハーサルで充分だった。そもそも私はちっちゃいから蘭ねえたちが見えなくなるだろうし、ここで待ってて先程のリハーサルの音楽を思い出すだけでも楽しめている。

…ちよつとだけステージの横から見るとも良いかな？やっぱり本番は違うんだろうか。そんな考えが私の中で生まれる。そしてさつき昇太からどこかに行くときは伝言をしておけつていう約束を守つて『ステージ横から見て来る』という書き置きを置いて部屋から出る。

ステージに行こうとしてどこから聞こえるかキョロキョロした瞬間、

怪しい人がちよつど別の部屋に入つていく姿が見えた。

…何だろう？そう思った私はこつそりと怪しい人が入つていった部屋の扉を音をたてないように開けるとそこには怪しい男の人がバッグを漁つていた。

泥棒だ。私はそう考え、玲に伝えに行こうとしたが踏みとどまる。

もし、私が伝えに行つている間にこの人が消えてたらどうしよう？おそらく、玲が問い詰めても嘘を吐いて逃げようとするだろう。何か、証拠が必要かも。

そう考えた私は、昇太がくれた携帯のカメラで写真を撮る。

こういう場面に会ったら写真を撮つておくといいつて玲が教えてくれたから、それをやったのだが、

カシヤ。

…音が鳴ってしまった。

怪しい人が私の方をバツと振り向く。そして手に持っている携帯を見ると一瞬イラついた表情をした後、笑顔になる。

「お、お嬢さん。その携帯、こつちに渡してくれないかな？」

私にそう言うけど、渡したくなかった。後ろに隠す。

「おじさん。ここで何してたの？」

私が話しかけると目をあちこち動かし始める。

「あ、ああ。私は、ここのスタッフで、その、き、危険物がないか、調べてたのさー！」

「…スタッフさん？」

「そうー！そうなんだよ！そういうお嬢さんは何でここにいるのかな？ダメだよ。ここに入ってきてきちゃ。」

「私、このライブに出演してるバンドのかんけーしゃ。そういうおじさんって何のかんけーしゃなの？」

「ば、Pastel*Palettesの関係者だよ！うん！」

「…じゃあ、何でこれを持ってないの？」

私はそう言って玲からくれた首に掛けるやつを見せる。

玲がこれを首に掛けてない奴は真っ先に疑えと教えてもらったのだ。

すると、怪しい人は私に飛び掛かろうとしてきた。私は咄嗟にドアを開けて逃げ出す。

「待て！クソガキ！」

後ろから男が怒鳴りながら走ってくる。

私はとにかく玲の所に逃げようとした。日菜ねえからも逃げ切れる私の足なら玲の所に行けるから大丈夫。

でも、現実とは違った。

「…っ！行き止まり…。」

「はあ、はあ…：ようやく追い詰めたぞ…！さあ、さっさとその携帯を寄越せ！」

後ろから怪しい人が迫ってくる。

どうしよう。

玲だったらどうするんだろう？

そう考えているうちにも怪しい人は迫ってくる。

もうダメだ。そんな言葉がでかけた瞬間、

「ちよ、誰だあんた!？」

怪しい人の後ろから声が聞こえた。この声は…：有咲？

でも、おかげで怪しい人が有咲に気を取られた。その隙に…！

「ちっ！気付かれいったあ!？」

私は怪しい人の脛を思いきり蹴って素早く有咲の元へと走る。

「ゆ、由美！早くこっちに来て！」

有咲が私に手を出している。正直、有咲は玲を悪く言ってる嫌いな人だけど、この際関係ない。手を繋いで一緒に逃げる。

「待てこらあ！」

後ろからけんけんをしながら走ってくる怪しい人。意外としぶとい。

「くそ、あいつしぶといな。」

有咲も同じことを考えていたらしい。不服だ。すると、私たちが走

る方向から誰かが来た。

「おや、これは市ヶ谷様に由美様。どうかなさいましたか？」

雨宮だ。この人に頼ろう。

「そうだ…あの！雨宮さん！不審者です！不審者が由美を追いかけ回してたんです！」

私が言おうとしていた言葉を有咲が先に言う。…不審だ。

「…なるほど。了解いたしました。」

雨宮は私たちを横切った後、追いかけて来ている怪しい人をあつさり倒した。玲のケンカの先生だって聞いたけど本当みたいだ。強い。

「あっちゃー…。玲をあそこに行かせたのが裏目に出ちやったかあ…。」

絞め落としながら何やら呟いていたけど、これで怪しい人は捕まったし気にする事はないだろう。

件の人はどうやら日菜ねえのバンドにしつこく絡んでくる迷惑な人だったようで、あのバッグを漁っていたのは日菜ねえのバンドの人たちの口に塗るやつを自分の物にしようとしていたらしい。何で人が使ったものを自分の物にしたがるのかな？私にはよく分かんなかった。

「由美！大丈夫か!？」

しばらくしてから玲が来た。多分、不審者が出たと聞いて飛んできたのだろう。有咲は最後の演奏が各バンドのメドレーらしいから先に行った。

「ん、大丈夫。」

私は心配する玲に親指を立てて答える。

「さて、こちら辺は私が見回っておきますので、玲と由美様はステージに行ってみてはいかがでしょうか？そろそろライブも終盤を迎えます。」

雨宮がそう提案してくる。玲は少し雨宮を睨み付けながらステージへと向かった。そして、私もその後ろに着いていこうとして、振り向く。そして雨宮にこう言った。

「ねえ、雨宮。私に様とその態度はいらないよ。玲と同じようにしてもらっても構わない。」

そう。雨宮が私に対する態度を変えてもらう。そうすれば、玲と一緒に並び立てる気がしたから。雨宮は少しキョトンとした後笑って、

「分かったよ、由美ちゃん。これでいいかい？」
と、言った。

「…きゅーだいてん。」

「これは手厳しい。」

私が厳しく感想を言うのと困ったように笑いながらそう返した。とりあえず、これで玲に少しだけ近づけたかな。そんな気がした。

26話 迷惑な配信

「ふいー、寒くなってきたなあ。」

秋風を身に受けながら昇太は手をジャンパーのポケットに突っ込み、歩く。

「そうだな。こないだまでクソ暑いと思ったら、もう寒くなってきたな。」

隣にいる玲も手に息を吐いて暖めながら歩く。

今、この二人はある目的があつて歩いている。それは、二日前の事だった。

「失せろ。お前みたいな奴を見てるとムカムカすんだよ。」

「は、はひっ……!」

いつも通り、見回りをして迷惑行為をしている輩などを潰したりしながら帰路に着くとそこに見慣れない男が雑居ビルの入り口で昇太と話し合っている姿があつた。

「よ。帰ったぜ。」

「おう。お帰り、玲。」

「なあ、そいつは誰だ? 依頼者か?」

玲が昇太に尋ねると昇太は頷く。

「ああ。何だか厄介な奴がこの町に来るらしいんだ。」

「…ふうん? まあ、とりあえず中で話を聞かせ。来な。」

玲が促すと男は一礼しながら後へと続いた。

「お前の兄がこの町に来る?」

「はい…そうなんです…。」

男は自営業を営む青年でここ最近、付き合ってきた彼女と結ばれる所まで交際を続けたが、近日来る兄のせいで破局するかも知れないと言うのだ。

「その兄ってどんな奴だ？まさか家庭内暴力を振るってるのか？それとも前科持ちか？」

「…後者で書類送検されたんです。」

昇太が聞くと男はため息を吐きながら答える。余程手に余る存在らしい。

「前科持ちか…。何やらかしてお世話になったんだ？」

「…乞食です。」

「……は？」

「だから、乞食です。」

男の発言に思わず二人して固まる。

「い、いやいや、待て。この日本で乞食だと？」

玲の顔がヒクつく。それはそうだろう。このご時世、家がないホームレスはいるにしても彼らには彼らなりの生活がある。だが、乞食などあまり聞いたことがない。

「そうですね…。普通そう言いますよね…。」

男は諦めたように俯く。おそらく、この事を色んな人に聞いてきたが話を盛っていると判断されたのだろう。

「…まあ、百聞は一見に如かずや。その映像、あるか？」

昇太が話を聞くと男はスマホを取り出し、映像を再生する。

「…まあ、なんとというか、ホントにいるんだな、ああいう奴…。」
「……………」

映像を見終わった二人はそれぞれ（こんな兄を持つあんたはツライな）と同情の表情を浮かべた。

映像の内容はどこかの駅前ネットで生配信しながら

「俺、今年お年玉貰ってないんだよね。だからここにお金入れて。」

と、大の大人がぐちぐち言いながら空き缶を見せ、リスナーにせびっている内容だった。最後には警官が事情聴取に来て、配信を止めるよう指示されて不満そうな声を出しながら画面が暗転し、そこで映像は終了した。

「…それで、そいつがあんたの家に来ると。」

「はい…。この町の人たちには良くしてもらってるんですが、奴が来てこの人たちに迷惑をかけるかと思うと…。」

「それに、あんたの彼女の件もある。もし、奴の事が彼女の親に知られてしまったら最悪、会わせてもらえないな。」

「そうなんです…。」

「にしても、気になるな。何であんたの所にこいつが来るんだ？」

玲がそう聞くと男は気まずそうに口を開ける。

「それは…。」

「まさか、自分から家出して匿ってくれて理由とはね…。」

「しかも、出ていった動機がパソコンを取り上げられ、親が仕事しろと喧しいからとか…。」

人間、堕ちるとここまで行くのかと二人は呆れを通り越して乾いた笑いが出る。

他にも生配信の映像を録画したものを見せてもらったが、大体の内

容が

「俺悪くないもん。お前らが支援しないからこうなるんだろ。」

とか、

「お前らのレベルに合わせてやってんだよ感謝しろゴミが。」

とか、

「パソコンくれよお！お前ら俺にパソコンをくれよ！」

とかだった。

配信のアカウントは何度も運営側から消されているらしいが性懲りもなく復活しているらしい。そしてリスナーに責任転嫁して支離滅裂な暴言を吐きまくっていた。

「途中で聞くの止めて正解だったな。あれ。バカが移る。」

「全くだ。反面教師にはなるけど、全部聞く必要ないよな。」

そう駄弁りながら玲は公園のベンチに座る。そして、昇太は別の方向へと歩き始めた。

「じゃ、手筈通りにやれよ、昇太。」

「おうよ。お前こそ油断すんなよ。」

昇太の返答を聞いたあと、玲は部下から借りたスマホを取り出す。そしてネットの生配信欄を検索し、目当ての配信を見つけて視聴ページへ飛ぶ。

「タイトルが『弟もアンチだった』って…。自分が悪いことをしたって自覚はないようだな…。」

玲は呆れながらも生配信を視聴する。すると、画面一杯に太った男の顔が弟に対する不満を被害者面しながら喋っていた。時折コメントが流れてくるが配信者を擁護する声は皆無でそのコメントに怒鳴り散らしていた。

「にしても、白昼堂々と…。顔の皮が厚い所じゃないな、こいつ。」

時折後ろの風景まで映してしまっており、コメントで指摘されるも全く聞く耳持たずで配信を続けていた。それが玲にとっては有り難かった。

（こいつが今いるところ…商店街か。予想通りだな。）

玲はそこから配信者が昇太とぶつかり、説教される様を見せつけよ

うと考えたのだ。すると、配信者は見慣れた道にある店のひとつに入った。

(…! つぐみの店に入った!)

玲がそう思い至ったと同時に携帯で昇太に連絡を取る。

「昇太! あいつ、つぐみの店に入ってたぞ! 予定変更だ。」

「ああ、俺からも見えた。今から俺も入る。」

昇太がそう言って通話を切る。生配信から流れる声にはつぐみの接客する声、そして席に着いた後、つぐみが誰かと会話する声が聞こえてきたが、声から察するに蘭と巴だろうか。

(不味いな…あの二人だと、こいつに注意しに行きそうだな。もしそうなってネットに蘭たちの顔が晒されたら…。)

蘭たちがネットに顔が晒された際の事を考えていると、生配信の映像からベルの音が鳴る。

「あ、昇太さん! いらつしやい!」

「お、昇太。」

「おう、蘭ちゃんと巴も一緒か!」

どうやら昇太が入ってきたようだ。そして昇太が蘭たちと話をしている最中にも配信者を弄るコメントは後を断たない。

「うっせ。黙れよ。コメント打つぐらいしか出来ない臆病者が!」

「…。さて、昇太の説教を食らった後、どうお灸を据えてやるか?。」

店の中にも関わらず暴言を吐き続け、営業妨害を行う配信者をどう叩きのめすか、玲はここ一番悪い顔をしていた。

「…なあ、あの人さつきから気になってたんだが…あの人、一人で何話してんだ?。」

巴が気になって蘭とつぐみに聞く。

巴の視線の先には少し離れたテーブルでスマホに向かって声を荒げて独り言を言う太った男がいる。

「知らない。あんな気色悪いの無視すればいいじゃん。」

「でも、他のお客さんにも迷惑になるから私が注意しに…。」

「いや、つぐみはそこで待ってる。アタシがガツンと言って…。」

巴が席を立とうとすると、入口のベルが鳴る。

「あ、昇太さん！いらっしやい！」

「お、昇太。」

「おう、蘭ちゃんと巴も一緒か！席、一緒でいいか？」

「…とか言いながらも座ってんじゃん。」

入ってきたのは昇太だった。いつも通りの気さくな挨拶をしながら蘭たちのテーブル席に座る。

「うっせ。黙れよ。コメント打つぐらいしか出来ない臆病者が！」

突然聞こえた罵声につぐみがビクツとし、蘭と巴はうんざりした顔をする。昇太も声が聞こえた方を見て蘭たちに尋ねる。

「なあ、あのデブ、何だ？」

「あたしたちが知ってると思う？」

「さつきからずつとスマホに向かって叫んでるんだよ。だからアタシがガツンと言ってやろうかと思ったんだが…。」

「なるほどな。じゃ、その対応は俺に任せてもいいかい？」

「え、昇太さんが？」

「ああ、いつもここにはお世話になってるんだ。それに、あいつが逆上してつぐみちゃんに難癖付けてこないとも限らないだろう？」

「そ、それは、そうだけど…。」

「まあ、昇太がやってくれるなら心強いよ。じゃ、頼むぜ。」

「よし、頼まれた。じゃ、行ってくるぜ。」

昇太は巴と拳をぶつけ合いそう言う席をたち、まだ暴言を吐き続ける男の元へと向かう。

「大丈夫なの？昇太って、もうボス引退したんでしょ？」

「そ、そうだよ巴ちゃん。大丈夫なの？」

「まあ見てなってる。」

「おう、そのあんちゃん。何怒鳴ってたんだ？」

いつも蘭たちに話しかける陽気な声で男に話しかける昇太。後ろでは蘭とつぐみ、巴が事の成り行きを見守っている。

「ほおーう？生放送ね…？それでお前はちやほやされたい訳か…。」

昇太の陽気な喋り、そしてサングラスを掛けているため読めない表情に男もたじたじになりながらも説明する。そして最後まで聞いた昇太は口を開く。

「なるほど。あんたが言いたいことはよく分かった。つまり、親が仕事しろと喧しくて、自分を助けてくれないから弟に泣きついたが、弟も親の仲間だったと…そして、今誰が俺を匿ってくれるか頼み込んでいると…。」

「聞けば聞くほど屑じゃん…。」

昇太が蘭たちにも聞こえるように話を整理して、その声を聞いた蘭はドン引きする。

「で、お前頼み込んでるにしちや随分と上から目線な態度だったけどそれで匿ってもらえると思ってるのか？」

「だって、だってこいつらが俺の事を悪く言ってるんだから…！」

「そうやって嫌われる理由があるはずだろ？心当たりは？」

「無いよ。俺は楽しい配信をして来たんだよ？何で嫌われるのか全然分かんないんだよ！」

「じ、自分のせいかもしれないって考えは無いのか…。ここまで来ると怒るの通り越して呆れるな…。」

巴は顔をひきつらせる。

「そうか。じゃあ、最後に一ついいか？」

昇太がそう言つて、ポンと男の肩に手を置く。男は自分の話を聞いてくれるいい人だと油断しきつて返事をする、急に胸ぐらを掴み、脅す。

「ここでピーピー鳴き声あげてんじゃねえよ、豚が。他のお客様に迷惑だろうが。」

その声は低く、つぐみと蘭も初めて聞く昇太の声だ。

「は、はい…。」

「分かつたらとつとと失せろ。」

昇太が胸ぐらを離すと男はそそくさと珈琲店を飛び出していった。

「ふう、こんなもんか。」

「お疲れ。助かったよ。」

蘭とつぐみがキョトンとする中、巴が礼を言う。

「おうよ。でも久々だったからちよつと鈍ってたか？つと悪い、蘭ちゃん、つぐみちゃん。怖がらせちゃったか？」

「う、ううん。大丈夫！ありがとうございます！」

「ビックリした…伊達にリーダーやってたんじゃないんだね。」

「おいおい…。これでもここら辺の不良を纏め上げたの俺だぜ？」

（後は頼んだぞ、玲。）

後の事は玲たちに任せよう。

昇太は蘭たちと談笑しながら玲に託した。

「…さて、俺も動くか。」

昇太に凄まれる一部始終を見ていた玲はスマホを仕舞って立ち上がり、男が歩く方向に先回りした。

(さて、俺の色仕掛けにどこまで通用するか…。)

同性愛者ではないことは確認済みだが、玲のような容姿端麗の少年にはどう食指が動くか、まだ未確認だがやるしかないだろう。

男の姿が見えた瞬間、玲は女になりきった。

「あの一！あなたってあの配信者さんですか!？」

「…え、誰すか?」

「私、あなたのファン、えーと、こう言うときって、囲いさん、でいいのかな?」

玲は上目遣いをしながら男に話しかける。今の玲は無垢でボーイッシュな女の子の演技をしている。これで駄目だったらスマホを見ながら歩いているのを利用して部下が絡む手を使うが…

「ああ、何?俺の配信見てくれてるの?ありがとう!可愛いね…。」

チヨロいな。玲は心の中で吐き捨てた。ニタニタとにやける口から覗く歯はガタガタで髪の毛も洗ってないのかフケもありボサボサ、この世の醜さを寄せ集めたような顔に常人なら引くが、それは常人の話。玲は臆することもなく近付いていく。

「はいーいつも、は無理ですけど、出来る限り配信をチェックしていますー!」

「あーそう?んふんふんふん。」

気色悪いはにかみ笑いをしながら男は玲の腰に手を回し、玲の尻を撫でる。

(手を出すのが早い…。)

「きゃ!?!もう、止めてくださいよー!」

「えー？でもカップルってこんなもんじゃない？」

(…既に自分のもの宣言。おまけに怒られたのに反省の色無し…)

この瞬間、玲はこの男に制裁を加えると決めた。

「むー、それじゃあ、私のお気に入りの場所があるんです。そこで、さっきのボディタッチの続き、していいですよ？」

「え、いいの!？」

男は願ってもないチャンスだと信じ込む。ここまでトントン拍子で引つ掛かって行く姿に玲は心の中で呆れ果てる。男が持つてるスマホの画面には

『はい、通報』

『これハニートラップじゃね?』

『美人局キター(。▽。)!』

『てかこの子マジで逃げろ。』

といったコメントが流れるも男は浮かれまくって画面を見ようとし
ない。

(嘘だろ!?!こんなにあっさり分かりやすい罠に引つ掛かるとかこいつには警戒心つてもものがないのか!?)

そう考えるも玲は雑居ビルに案内する。男は雑居ビルを見て少し引く。

「え、ここなの?」

「はい。ここは誰もいないので、私はここで誰かと楽しめたらって、考えてるんです。」

少し顔を赤らめながらそう聞くと男は元気よく頷く。

「よしーやつちやおうかー!」

(下半身に正直者だな…。いいぜ。パーティーにご招待してやる。)

雑居ビルの地下一階、そのの一室に玲と男が入ると玲はもじもじしながら男に話しかける。

「その…これから準備するから、ちよつと待ってもらっていいですか？」

そうやって玲は部屋を出ると乙女の顔からすぐに戻る。そして隣の部屋で待機している部下たちに話しかける。

「よし、今から制裁を加えに行くぞ。」

「へい。分かりました、ボス。」

玲の指示に部下たちは頷く。すると、生配信を見ていた部下が気持ち悪いものを見たような声をあげる。

「うわ…こいつボスが持ってたバッグ漁って…いや待て、ボスが羽織ってた上着嗅ぎ始めたぞ!」

「…放置してたら危険だな…。よし、今からこの配信見てる奴がスカツとする事やろうぜ。」

この時の玲の顔、そして男に行つた一部始終を見た部下の内一人はこう語る。

「あのボスの笑顔は忘れられねえ…。もし悪魔が見えたらあんな顔をしてるんだらうなあ…。」

後日、依頼者から兄が実家に帰り、仕事を探し始めたという情報を嬉しそうに語っていた。そして、この依頼の事は昇太がすっかり口を滑らせてしまい、蘭たちにバレたのであった。

「全く…いつも治安維持をしてくれるのはありがたいけど、たまにはアタシらも頼れよな。」

「モカちゃんも同意。れーくんが演技でもあんな気持ち悪い人に触られていたと思つたら心配になっちゃうよ。」

「で、でも今回の依頼は私たちだけじゃどうにもならなかつたかもね

…。」

巴とモカが心配して玲に詰め寄り、つぐみがフォローする。

「つぐみの言う通りだ。女の子を演じた俺でさえもセクハラしてきたからな。」

「ほ、ホントにヤバい人だねそれ…。乙女为天敵だ…。」

ひまりが引く。

「次からはあたしたちにも話しなよ、玲。力にはなれないかもだけど、心配になるから。」

「…分かったよ、蘭。」

「おう。れーくと蘭がデレたく。」

「モカ!」「おいモカ!」

蘭と玲は声を揃えて冷やかすモカに叫ぶ。そして雑居ビルの一室は和やかな雰囲気にも包まれた。

しかし、この依頼が切っ掛けでとんでもないことになるのだが、それはまだ先の話である。

27話 コミュニケーション大作戦（前編）

有咲は一人で鼻歌をするほどご機嫌に町中を歩いていた。その理由は久しぶりに一人で過ごす休日だからだ。

（さーて、今日は何しよっかなー♪）

そう思案しながら商店街を歩くと不意に立ち止まった。

（あ、あれは…！）

有咲の視線の先にいたのは蘭とひまりだ。

（蘭ちゃんとひまりちゃんだ！ど、どうしよう。話しかけたいけど…どう話しかければいいんだろ…。って良く見たら由美ちゃんも一緒だ！）

前々から話しかけたいと思っていたAfterglowのメンバー。今がチャンスなのだが人見知りな有咲はどう話しかければいいのか、自分に苦手意識を持つてる子供にどう話しかけて良いのかも分からず思考の海に沈む。

「え、えーと…こんにちわー、ごきげんようー？」

そう言っつて顔をあげて微笑みかける練習をすると、

「有咲ちゃん！」

いきなり後ろから声をかけられた。

「うわあ!？」

「び、びっくりしたあ…！どうしたの有咲ちゃん？」

驚いた有咲が振り向くとそこにいたのはびっくりして胸に手を当てているりみだった。

「どうしたもこうしたもねーって！後ろから急に声かけられたら誰でもこうなるだろ!？」

「ご、ごめんね。何か考えていたみたいだからどうしたのかなって。」

「え、べ、別に何でもねーって。」

心配するりみの質問に適当に答える有咲。

（蘭ちゃんに話しかけたいけどまごついてたって流石にりみにも言え

ねえ…。)

ただどう話しかければ良いのか分からなかった。それを口に出すのが恥ずかしかったのだ。

「そ、そうなの？何だか深刻そうに見えたけど…。」

「大丈夫、大丈夫だって。心配すんなよー。」

何とか切り抜けられる。そう思っただけで油断をってしまった。

「あれ？有咲とりみじゃん！やっほー☆」

「うわあー!!?」

またもや後ろからいきなり声をかけられた事で叫んでしまった。しかもりみの時とは違って音量が大きかったせいで周りにいた人もびっくりして声の発生源を見る。

「…ん？なんか、叫び声聞こえなかった？」

「私も聞こえたよ。なんだろう？」

「蘭ねえ、ひまねえ。今日は玲がこちら辺見回ってるって言ってたから多分、今、声が出たところ、向かってる。」

それは当然、蘭たちの耳にも届いてしまう。辺りを見渡しはじめた蘭とひまりを見て有咲は咄嗟にそばにあった電柱に隠れる。

「ちよ、ちよつと。急に叫んだと思ったら何隠れてるの？」

有咲の奇行にリサは困惑しながらも尋ねる。

「そ、その…、蘭ちゃんと、ひまりちゃんがいるから、その…声、かけてみたいなって思ったんですけど、タイミングが分かんないし、由美ちゃんも一緒だし…。」

有咲は電柱に隠れながらぼそぼそと白状する。ワケを聞いたリサはそんな事かと微笑む。

「そんな気にしなくてもいいのに！じゃあアタシ声かけてくるよ。」

「あっ!!!」

リサが蘭のもとへと向かおうとするともたもや有咲が叫ぶ。急に有咲が叫んだ事で隣にいたりみも驚き一瞬跳ねる。

「いや、だめです。今はまだ待ってください！」

「ちよ、ちよつとどうしたの！有咲、なんかおかしいよ？」

必死の表情で引き留める有咲にリサが困惑する。

「そ、その、蘭ちゃんどひまりちゃんと、接したこと、あんまりなくて、今日はまだちよつと、心の準備が…。」

「あははっ。そういうことか。有咲可愛いなあ♪」

「か、可愛くねーよ…:…です。」

微笑ましく弄ってくるリサに有咲は思わず香澄にやっているツツコミを返すが上級生だという事に気付き、小さくですをつける。

「有咲ちゃんの気持ち分かるよ…。あんまり話したことがない人に話しかけるのって難しいよね…。」

りみの共感で有咲もそうなんだよな。と頷き、考える。

「どうしたら、リサさんみたいに話しかけられるんですかね？」

「んー、そうだね。じゃあこのアタシ、リサ先生が…あつ。」

何か言いかけたリサが何かに気付いたように言葉を止める。

何があっただらうか？そう思い、リサの視線の先を見ると。

「おい。こちら辺で叫び声が聞こえたが何があった？」

「く、黒豹だぁー…!!?!」

更に悲鳴をあげる有咲だった。

「つたく。そんなしような事でないか？」

場所を変えてファミレス。そこで玲は呆れた顔で有咲とりみの二人を見ていた。

「で、でもどうしても怖くて…。」

「だ、だからどうやったら仲良くなれるのか聞いて…るんですけど…。」

「ほら、玲くん。そんなこと言わないの。」

まず最初に玲がバツサリ斬ってしまったってシユンとなる二人。そんな玲にリサが注意する。

「で、気を取り直して。二人とも人見知りだったっけ？」

リサの質問に有咲とりみは頷く。

要約すると今話しかけても大丈夫か分からず、迷惑なのかと思ってしまうし、仮に大丈夫だったとしても何を話せばいいのかわからないと言う。

「こりやマジで人見知りだな…。」

「うーん、二人とも気を使いすぎじゃない？」

リサは人見知り二人にそう指摘する。

「そ、そうなんですかね？」

「そうだぜ？大体蘭の奴は…別にいいとして、ひまりの奴はけっこうコミュニケーション能力高いぞ。俺が見回り中に馴れ馴れしく声をかけてくるからな。」

「ちよつと、その言い方はどうなのかな…。」

有咲の疑問に玲がそう返すが玲の言い方にりみは苦笑いする。

「そう言えば、ポピパのみんなってどうやって出会ったのかな？」

リサの質問に受講者二人が言うには香澄が率先してバンドをやるうと話しかけてきたのが切っ掛けらしい。

(話しかけてきたのが切っ掛け…か…。)

玲は二人の話を聞いて蘭たちと仲良くなった昔を思い出す。

初めて会ったのは小学校の上級生が遊び半分で行っていた動物虐待を阻止した時だが、その時はただ助けたかった衝動で行っただけだった。しかし、次の日からひまみや巴から話しかけられたのを切っ掛けに蘭たち幼馴染みの一員になったのだ。

「よーし。じゃあ二人とも、香澄になってみようか！」

玲が懐古している内に話が意外な方向に進んでいた。

「え、ええ!? 香澄ちゃんに…?」

「んな事出来る訳ねえだろ!? …あつ。す、すいません…。」

戸惑うりに思わず素を出してしまい、慌てて取り繕う有咲。おそろく玲に睨まれると思つていたのだろう。

「…んだよ。やっぱお前その性格の方がいいぜ?」

有咲の素を見た玲はニツと笑いかける。

「…へ?」

予想とは違う反応で思わずキョトンとする有咲。

「俺はそんな短気な人間じゃねえよ。お前の素、中々いいじゃん。蘭とも仲良くなれそうだぜ?」

「そ、そうなんですか?」

「ああ、おそらく香澄になれてるのは心を開けてって意味だと思っぜ。その調子で行けば蘭とも仲良くなれるな。俺が保証する。」

不良だが、いい人なのかもしれない。改めて有咲はそう感じた。

「よし、じゃあ次は会話のシミュレーション、やってみようか。」

リサは次のステップに進める。どうやら次は蘭やひまりと話する時の状況をやってみるらしい。そしてリサの指名でリサが蘭役をして、ひまり役がリサがやることになった。しかし…

「ら、蘭ちゃん、こんにちわ…。」

「ああ…。」

「きよ、今日は、いい天気、ですね。」

「ああ…悪くない…。」

(やべえ…これ面白すぎるだろ…。)

「ちよ、ちよっとストップ! 蘭ってそんな感じだっけ?」

ちよっと渋くない? とリサがツツコミを入れる。

「うう…私、蘭ちゃんの事よく知らなくて…クールでかっこいいって事しか…」

「く、クールでかつこいいい…?」

りみの発言に玲はにやける。

「それに、よく悪くないって言ってる気がしたので…」

更に続いた言葉に玲が撃沈した。

「くっはっはっはっ…助けてくれ…笑い殺される…。」

目に涙を溜めながら声を殺して笑う玲にりみは顔を赤くする。

「うう…。」

「こら玲くん! そう言うなら玲くんが蘭をやってみなよ。」

「ああ、分かった。ちよつとなりきるから有咲に指導しといてくれ。」

リサに怒られたが蘭役を引き受け、リサが先ほどのシミュレーションの欠点を指導している間、すうつと集中する。

「よし、玲くん準備はできた?」

指導を終えたりサが話しかけると蘭になりきった玲は目を開ける。

「ん、いいよ。やって。」

「わ、蘭ちゃんだ…。」

(す、すご…。一瞬、蘭かと思っちゃった…。)

蘭になりきった玲を見て三人とも驚く。

黒髪の短髪、少女と見間違う程の美形が相まってますます蘭に見えるてくるのだ。

「…どうしたの? 有咲。早く話しかけて。」

「え、あ、ああ。えーと、ら、蘭ちゃん! 私、盆栽好きなんだ!」

「ぼ、ぼん…!?!」

有咲の予想外すぎる趣味に玲は一瞬素が出てしまう。

「ら、蘭ちゃんって華道やってるんだよね? 盆栽とか…ど、どうかな?」

「え、あ、えーと、うん。盆栽か…、悪く、ないね。」

「そ、そっか…よかつ…って、ちよつと待て。」

「…玲さんも人の事、言えないよね…。」

「…盆栽が趣味とか普通考えないだろ。予想外すぎて素が出ちゃった

よ。」

これは前途多難だ。そう言葉をこぼす玲だった。

28話 コミュニケーション大作戦（後編）

その後、シミュレーションの続きをやったのだが、リサが演じるひまりがやけにハイテンションすぎて蘭を演じてた玲は蘭を演じたままツッコミを入れる一幕があった。そしてファミレスじゃイメージが広がりにくいという訳でショッピングモールへやって来たのだ。

「そう言えば、ショッピングモールに新しい店ができたって言ってもしたよね？」

りみのいう通り、最近このショッピングモールに新しくキャンディショップが開店したらしい。

（最初は気まぐれで話聞くぐらいだったのに意外と長引きそうだったから別の奴に商店街の見回りさせちまったな…。ここらで詫びの品でも買っとくか…。）

玲はそう考えながらもリサの後についていき、目的の店の中へ入る。

可愛らしい外装の店に入り、まず目に入ったのが様々な種類のキャンディが並んでいる光景だった。

（…まあ、この店で後で買っておくか。）

様々な種類のキャンディに目が奪われる有咲とりみ。店内写真OKのようで、リサも加わりはしやぎだす。

完全に蚊帳の外である玲は、ただその様子を暇そうに眺めるだけだったが、改めて店の中を見渡す。ユニークな形や極彩色の海外のお菓子も置いてあるようで店に彩りを与えている。

（まあ、ひまりは好きそうだよなこういうの。お、この菓子、由美の好みじゃないか？）

玲は適当に店の中をぶらつきながら商店街の見回りを押し付けてしまった部下のお詫びの品を考えているとりサの声が聞こえた。

「あ、ゴメン！友希那から電話だ。ちよつと外すね。後でチョコの話聞くから。」

そう言うとりサは店を出ていった。仕方ないと割り切る有咲とりみだったが玲は見抜いていた。

(蘭とひまりを呼びに行ったな…。さて、俺は…。)

さっさと何種類かのキャンディを買ってさっさと出よう。そう思
い品物を物色していると後ろから声をかけられた。

「ええと、玲さんは、何で私たちの話を聞いてくれたんですか？見回り
とかしなくても良いんですか？」

リサがいなくなって心細いのか、リミが話しかけてきた。

(自分から俺に話しかけられるなら、もうできたも同然じゃねえか…。)
少し呆れながらも玲はりみから聞かれた質問に手短かに答える。

「…蘭の安全のためだ。」

「え？」

「お前らが蘭と仲良くなって、もし蘭に何かあったときお前らが目撃
していたら俺に連絡が行くようにするためだよ。だからお前らのコ
ミュニケーションの手伝いをしただけだ。」

「結局蘭ちゃんのためかよ…。」

「そうなんです。やっぱり沙綾ちゃんの言う通りだよ有咲ちゃん！
玲さんはとても優しい人だって。」

お前らのためじゃないと言ったのにそう解釈されて玲はムツとし
て、すぐにキャンディの詰め合わせを手にとってレジに向かおうとす
ると、

「玲？こんな所で何やってんの？」

「あ、ホントだ！商店街にいたんじゃない？」

「…キャンディ。」

蘭たちとばったり出会ってしまった。後ろにはリサがいることか
らリサが三人をここに誘導してきたのだろう。

「…あー、俺でなきゃ対処できない事態が起こったから他の部下に任
せちまって、その詫びの品選び。」

半分嘘を織り混ぜながら適当に返す。だが多分、視線を合わせてな
いから嘘だとバレるだろう。

「げ!?ひまりちゃんと蘭ちゃんと由美ちゃん!？」

すると有咲がビツクリしたように叫ぶ。有咲がいることが分かっ
た由美は口をへの字に曲げ、露骨に嫌そうな顔をして、蘭の後ろに隠

れる。

「…今、げって言わなかった？」

「い、言っていない言っていない！三人とも、どうしてここに？」

「いやー、偶然そこで会ってさあ。」

有咲の疑問にリサが答える。だが、その言葉を聞いた蘭がキョトンとする。

「…え？あたしたちはリサさんに呼ばれて…。」

その先を言おうとした瞬間、リサは口止めに蘭を連れて行き小声で釘を刺しに行く。その間、玲はりみと有咲に耳打ちした。

「今だぜ？二人に話しかけるチャンスだ！」

「あ、有咲ちゃん、玲さん、どうしよう…。私、緊張してきちやっただ…！」

「は、はは…、私も…。」

（しつかりしろよ…。わざわざ付き合ってやったんだから成果見せろや。）

ガチガチに緊張する二人の様子に玲は表情は変わらないものの、額に青筋が浮かぶ。

「有咲ちゃんとりみちゃんかあ。一緒に買い物したかったんだよねー！」

ひまりが話しかけて来て二人は身構える。

「ほら、有咲。勢いだよ！」

リサが後押しをする。それで意を決した有咲は蘭に話しかける。

「ら…！」

「…ら？」

「蘭ちゃんとひまりちゃんは何、してたの？」

「えと…買い物。」

「か、買い物か。…そうだよね。」

「そんな事で馴れ馴れしく蘭ねえに話しかけないでくれる？」

「うぐっ。」

一言で終わった上に由美が追い討ちをかけてしまう。玲はそれとなく援護する。

「こら、由美。いくらこいつが嫌いだからってそこまで言うことないだろ。」

「…むう。」

由美は怒られたのが不服なのか頬を膨らませる。

「ほら、好きなだけキャンディ買っていいからこつち来い。」

「…うん。」

（あ、ありがとう、ごぎいます…。）

（いいから早く何か話せ！）

玲は何とか由美を蘭から引き離す。すれ違い様に有咲に感謝され、玲はアイコンタクトで有咲に指示する。

「あ、あの、二人とも、どこか行きたいところは無いかな？」

りみが有咲と変わって話しかける。

「私も丁度このキャンディショップが気になってたんだよねー。」

「けど、有咲たちはこの店見たんでしょ？あたしらの都合でそれは悪いって。」

「蘭ちゃん優しい…、硬派…！」

りみの感想が口に漏れ玲は笑いをこらえる。

「り、りみ。口から漏れてるぞ。あ、えーと、私たちもこの店見たいと思ってたから、全然いいよ。一緒に見よ。」

（何とか誘うことはできたか…。）

玲はホツとして、視線を由美に戻す。

（…ってまた由美がいなくなった!?!）

玲は慌てて辺りを見渡すと、由美はまた蘭の側にいた。しかも、有咲は蘭の方に意識が集中しており、気付いていないようだ。

（ああくそー！いくら蘭が好きで有咲が嫌いだからってそんな監視することないだろ!?!）

「あ、りみもチョコ好きなんだ!?!」

「う、うん！うち、チョコが一番、あーじゃなくて…、えーと、私…」

「あーそっか。そう言えばりみって関西出身なんだっけ?」

りみとひまりは共通の好みが見つかり会話が盛り上がる。

（あいつ関西から来たのか…意外だな。）

玲はりみの出身を意外に思いながらもとてもよい関係を築けているのを見て安堵するも油断はしなかった。何故なら、

(や、やべ…、私も何か話さなきゃ…。)

(こいつ、どうするんだ…。)

未だに蘭と話せていない有咲がいたからだ。

「え、えーと、蘭ちゃんが好きなお菓子とか、ある？」

「あたしはその…甘いもの興味ないから。」

(そうだった…。蘭の奴甘いもの苦手だったんだ…。)

玲は失念だったと言わんばかりに頭を抱える。

「…硬派。」

「え?」「は?」

有咲が放った発言に蘭と玲の声が揃う。

「う、ううん! 甘いもの苦手なの?」

何とか話題を見つけた有咲が会話を続けるのを見て玲は今度こそ胸を撫で下ろす。

(どうなることかと思っただが、なんだ。やれるじゃねえか。由美も見るだけで口を挟んでこないし、こりや…)

(どうやら大丈夫そうね。アタシが連れてきて正解だったみたいね♪)

玲とリサは互いにアイコンタクトをして、安堵する。しかし、それが仇となった。

「…ねえ。さつきからリサさんと玲は一步引いたところから見つめると思ったら、たまに見つめ合ったりして何やってんの?…怖いんだけど。」

「あ?」

「へ? ひ、ひどいなー。アタシはただ、先輩として見守ってるだけだつて。」

リサがそう言い訳するも蘭の懐疑的な視線は解かれない。

「やっぱ怪しい…。て言うか玲。ずっと言うタイミング無かったけど、あんた嘘ついてるよね? 目、合わせてないもん。有咲もそう思うよね?」

「…て言うか蘭ねえ。有咲も怪しい。」

「え、い、いやあ…どうだろう…。」

蘭と由美の追求に有咲は言葉を濁す。

(おい、リサ。これもうバラした方がよくないか?)

(あ、あはは…。そうかもね…。)

「ほらまた!三人で何企んでるの?さっさと白状しなよ、玲。」

「俺かよ…。」

「ちよ、ちよつと蘭、どうしたの?玲に詰め寄ったりして!」

蘭の様子に気付いたひまりが咄嗟にやって来る。

「三人とも何か隠している気がするんだよ。大体、リサさんも口止めしてきたし。」

(こいつ変な所で鋭いもんな…。)

玲は腹を括ろうか考えているとりみが動揺してしまい、蘭に目を付けられた。

「…もしかして、りみもグルとか?」

「ちや、ちやう!あ、ちやうやなくて…、違う!」

パニックになったりみは関西弁を出しながらも否定するがそれは逆効果だった。蘭は玲に詰め寄っていく。

「やっぱり怪しい!玲!一体何企んでるの!?!さっさと話して!」

「おい、蘭!俺は巻き込まれた側だ!リサ!お前が話せ!」

「そうやって濡れ衣着させたってそうはいかないよ!」

玲はリサに状況説明を頼もうとしたが、それが蘭には責任転嫁に見えたように更に詰め寄っていく。

「ああ、蘭!落ち着いてよ!話すから落ち着いてよ!」

結局リサが蘭を落ち着かせて白状するのだった。

「そうだったんだ…。」

「そういうことだよ、蘭。それでこいつらの会話の練習に俺が巻き込まれてりみが蘭の役をすることになったんだがな…。」

「…りみが、あたし役?」

「でも、全然出来なかったよ…。」

「りみがやる蘭ちゃんが硬派な不良ってイメージだったんだけどさ…。ふふっ。思い出したらまた…。」

「お、おい、有咲。よせ…また…笑えて来ちまうから…ぶふっ。」

「な、何笑ってんの！玲！殴るよ!？」

りみが真似したと言うだけで笑いだす二人に蘭は赤くなって玲と叩き始める。

「い、いて!?!殴ること無いだろ!?!」

「蘭が怒るの何か違う気がする…。」

「私も蘭ねえはそんな感じだと思っ。カッコいい。」

ひまりは呆れ、由美は純粹に誉める。

「でも、玲さんのやる蘭ちゃんがホントに蘭ちゃんだったよね?」

「あ、あんたがあたしの!?!」

りみの証言に蘭の顔がりんご飴のように真っ赤になり更に激しく玲を叩きだす。

「し、信じられない！バカ！何恥ずかしいことやってんの!?!」

「も、もういいだろ!?!ここ店の中!店の中だから暴れるな!」

「ま、まあまあ蘭!そこまでそこまで!」

ひまりが仲裁に入り何とか落ち着きを取り戻す蘭。

「元はと言えば、リサさんがシミュレーションやろうって言い出したからですよね!?!あたしたちをここに連れてきたのリサさんだし。」

「え、そうだったんですか!?!」

「そ、そんな責めないでっばー!だって、二人とも楽しそうにしていてし、この調子なら大丈夫かなって思ったから…。」

「っーか、俺に話しかける位リラックスしてたよな?」

玲の指摘に二人は『確かに…』と自覚した。

「あ、リサ先輩が私の役やったんだよね?どうだった?」

ひまりはリサが演じた自分の評価が気になり、話しかける。

「大体あった、かな。」

「…まあ、あったな。」

「へえー、玲からもそう言われるなんて、リサ先輩すごいですね!」

「あ、あはは、まあね。」

ひまりは純粹に誉めるがリサは苦笑いだった。蘭を演じていた玲からつつこまれるくらいハイテンションになっていたから微妙な気持ちになっっているのだ。

「リサさんのやるひまりちゃん、こんなだったっけ？つてなったけど実際会ってみたら大体合ってたよな…。」

「…それ、誉めてないよね？」

有咲の感想でひまりがジト目になる。その様子を見ていた玲はいたずらっぽく笑う。

「何なら今から俺が実演してみようか？」

「しなくていい！」

「はいはい。じゃあ、今日”は”やらないよ。」

ひまりとりサから怒られながらもどこ吹く風な態度をする玲。その様子を見た蘭は調子を取り戻してきたと直感する。

「ま、冗談はさておき、お前らどうだ？気兼ねなく話せそうか？」

玲は話を戻して有咲とりみに尋ねる。

「うん！ひまりちゃんがチョコ好きだって知れたから、嬉しいよ！」

「じゃあさ、今度美味しいお菓子売ってる店行こうよ！今SNSで話題の店があつてね…。」

（流石、Afterglowのリーダー様だな。）

自然な流れでりみにおすすめの店を紹介するひまり。こっちは心配要らないだろうと思いい、もう片方に視線を向ける。

「有咲、今度盆栽についてちよつと教えてよ。もしかしたら華道でのヒントが見つかるかもしれないし。」

「う、うん。私、行きつけの園芸センターがあるから、よかつたら…。」

あ、由美ちゃんは大丈夫？」

「…有咲が蘭ねえと仲良くするなら…私も友達になつてやる。」
「か、可愛くねえ返答だ…。」

（…へえ。自分から話にいかない蘭が…。これなら安心だな。）

玲は由美の態度に疑問が残るも時間が解決するだろうと今度こそ安堵する。

「有咲って行きつけの園芸センターがあるの!?なんか、渋い感じがしてカッコいい……!」

「ま、まあ、一応……。」

ひまりの素直な感想に有咲はぎこちないながらも満更じゃない笑顔をする。そして、玲はいいことを思い付く。

「さて、と。お前ら、時間あるか?友好をもう少し深めるために他の店も回ってみるのも一興だと思うが?」

「お、いいじゃん玲くん!その案、乗らせてもらうよ!」

「行きたいです!」

「大賛成!」

玲の案にりみたちは賛同してはしゃぐ。そして蘭もニツと笑う。

「へえ、玲、いいこと思い付くじゃん。まあ、たまにはこのメンバーといるのも……」

「…悪くない?」

「そうだね、悪くないよ。ぶつくく……。」

「ちよつと有咲!玲!本気で怒るよ!」

「もう怒ってるじゃーん♪」

「おいおい、そんな怖い顔したら折角の友情も崩れちまうぞ?」

「ああもう……!玲、後で覚えていて!」

拗ねる蘭に楽しそうに笑う五人。この時、玲の顔は年相応と言ってもいい笑顔だった。

その日の夜、花咲町から離れた夜の町で一人の太った男がリュックを背負い、スマホを片手にブツブツ呟き、たまに怒鳴りながら歩い

ている。その顔は体同様に丸々しており、目は座っており無精髭も生えて、近寄りがたい雰囲気醸し出していた。男が進む先にいる人はかわり合わないように道を変えたり、出来る限り避けて通ったりする。

「ったく、それもこれも全部あの玲って奴のせいだ！あいつ女の子にちやほやさせてもらってるからさ！リア充だからって調子乗ってんじゃねえよ。じゃあ、凸に行けよ？今から行こうとしてんじゃ！バカかお前は！町中で怒鳴るなよ豚が？お前らが俺を怒鳴らせてるんだろ!!!」

男は以前玲に叩きのめされたネット生配信の配信者である。実家に帰ったあと、就職活動をしていたのだが、性根を叩き直すには至らず、またもや家を飛び出したのだ。

「ああもうスマホの充電が無くなる！もう最悪だよ！また暗い世界に取り残されるんだ！誰か助けてよ！ああもう終わる！」

最後まで同情を誘おうとやけくそ気味に喋ったが結局最後までリスナーには檻の中で騒ぐチンパンジー扱いをされてスマホの充電が切れたと同時に配信が終了した。

「終わった…もう、どうすりゃいいんだよ…。それもこれも全部玲って奴のせいじゃん！ふざけんなああああ!!」

夜道の真ん中で叫ぶも静寂だけが訪れる。

「ちよつといいか？」

かに思えたが声をかける者がいた。

「な、何だよアンタ…。」

話しかけてきたのは片目に眼帯が付いた柄の悪い青年だった。男は警戒して一歩引く。

「あんた、さつき玲とか言っていたが、奴を知っているのか？」

「な、何だよお前もあいつの仲間か!？」

「違うな。むしろアンタと同じだ。奴に陥れられた被害者って奴だ。どうだ？俺と手を組んで玲に復讐しねえか？玲をぶちのめしたらアイツの幼馴染みの女、好きにしてもいいんだぜ？」

そうニヤリと笑い、男に手を差し出す青年。玲が知らない水面下

で、危機が動き出し始めたのだった。

29話 いつも通り

「よし！今日の練習はこんなもんか。」

ライブハウスCIRCLEにあるスタジオで巴が練習の終わりを告げる。

「お疲れ。はい。」

見学に来ていた由美はてきぱきとペットボトルを蘭たちに渡して回る。そんな気配りにつぐみがお礼を言う。

「ありがと、由美ちゃん。」

「お礼はいいよ、つぐねえ。私に出来るの、これくらいだから。」

由美はペットボトルを配りながら自慢げに言う。

「おお。ゆうみん、ツグってますなあ。」

「ツグってる?」

「うんうん。ツグってる、ツグってる。」

「私、ツグってる!」

モカからツグり認定を受けた由美は嬉しくなったようで、はしゃいで何度もツグってると言い出し始める。

「ゆ、由美ちゃん、恥ずかしいから…。」

「モカ、由美に変な言葉を教えない。」

「めんご、めんごー。」

モカはマイペースで謝りながら由美と共に掃除をする。小さい身体を懸命に動かしながら掃除を手伝う由美を見てひまりが口を開く。

「それにしても、由美ちゃんは口数が増えてきたよねえ。」

「そうだな。それに、最近はギターを触りたいって駄々をこねてくるからどうしようって昇太がぼやいていたもんな。なあ蘭、うかうかしていられないんじゃないか？」

「え、何であたしに振るの？」

「これも昇太から聞いたんだけど、由美がギターを始めたい理由が、Afterglowのようにカッコいい演奏して蘭ねえを越えたいってさ。」

「おお、未来のライバルだ。」

「…ふん。」

蘭はチラリと由美の方を見ると由美はモップで床を掃除しながら時々ギターの演奏の真似をしていた。

(…そう言えば、今日の練習中だって由美、あたしのギターの真似をしていた…。)

「おやー？蘭は満更じゃない感じですか。」

「うっさい。早く掃除するよ！」

(今日も特に異常なし…。)

玲は商店街を見回りながらそう呟く。ここ最近、これといった大事はなく、由美が蘭たちと一緒に井ノ島へ日帰り旅行しに行ったり、昇太から聞いた話だが、あこと巴の関係がギクシヤクしたが解決したという情報以外は特に何もなく平和な日々を送っていた。

「あーおーい、玲くーん！」

つぐみが呼ぶ声に振り向くとそこにはAfterglowの五人組と由美がいた。そう言えば今日は練習の見学に行くと言っていたなどと思いつく。

「よお、お前ら。今日は一緒なんだな。練習上がりか？」

「うん。玲も暇でしょ?」

ひまりが今は暇かどうか聞くが、玲は見回りがあるため断る。

「いや、見回りがあるから手が離せねえよ。」

「そういうの暇って言うんだろ?」

「暇じゃねえ。」

「いいから来いよ!つれないぞお前!」

巴は頑なについて行こうとしない玲の肩を組んで強引に蘭たちの中に引きずり込む。

「うお?!離せ巴!」

「わわ、もちろん、れーくんを無理やり引き込まないでよ。パンが落ちちゃうよ。」

「おっと、悪い悪い。」

大量にやまぶきベーカリーのパンを買い込んだモカがバランスを取りながら巴に注意する。そんなモカを見て玲は呆れた顔でモカを見る。

「お前、それ全部食うのか?」

「うん、そうだよ。今夜食べて、明日の朝食食べて、お昼食べるの。」

「そんなに食って寝てると太るぞ。」

「だいじょーぶ、だいじょーぶ。その分ひーちゃんにカロリー送ってるから。」

「そうか、なら安心だな。」

「ちよつと玲!モカの冗談に乗らないでよ!」

「おっと、ごめんよ。ひまりは弄っていると面白いからつい。」

「もー!つぐぐ!玲がひどいよ!」

ひまりはつぐみに泣きつく。だが、こういうことはAfterglowのお約束で蘭たちにはこやかになる。

「あ、ゴメン、ちょっと寄ってつてもいい？」

蘭が花屋に気付くと玲たちに寄ってもいいか尋ねる。勿論、玲たちは快諾だった。

「んー、いい香り…お花も可愛い…。」

商店街にあつた花屋に入ると花の香りが蘭たちを迎え入れる。花の香りにひまりがうっとりとする。

「蘭、どんな花が気に入ってるんだ？」

「あたしは…これ、かな。」

巴が聞くと蘭はしばらく棚を見渡し、その中の一つの植え木鉢を手取る。その植え木鉢に植えられていた花は他の花とは違い、変わった花びらをした赤い花だった。その花は玲も知っている花だった。

「ワレモコウか。確か、これってバラの仲間なんだよな。」

「へえ、知ってたんだ。」

玲の呟きを拾った蘭は意外そうに言う。

「変わった花…。」

「確かに…何だか不思議な感じだね。」

由美はワレモコウをじっくり見てポツリと言葉をこぼし、モカも興味津々に眺める。

「この花、メインになりづらいけど、濃い色がアクセントになるし、これが入ると雰囲気しまるんだよね。結構好きな花。」

「へえー。私、さつきまで知らなかったよ。流石蘭ちゃん！」

「ま、まあ、あたしは普通の人より花に触れる機会が多かったし…。」
「昔は避けてたのにな。」

「もおー！玲！そんなこと言わないの！」

つぐみの純粋な誉め言葉に気恥ずかしそうに言う蘭。その表情を見逃さなかった玲は弄りにかかり、ひまりが叱る。

「蘭ちゃんがこうやってお花について話してくれるの嬉しいなあ。他のお花についても教えて！」

「蘭ねえ、私にも。」

「別にいいけど…。」

「ほんと変わったよねー…蘭。」

「だな。前じゃ考えられなかったよな。こうやって花屋に寄ったり、お父さんの事を話してくれたりさ。」

「へえー？そうなのかー？」

「も、もういいでしょ！やめてよさつきから…。」

しみじみ言うひまりに同調する巴。そして、その巴の証言を面白そうに聞く玲に蘭は顔を赤くする。そしてそれをモカは見逃さなかった。

「お、蘭、照れちゃったよ。」

「私知ってる蘭は、こういう蘭♪」

「こういうところは変わんないよな。」

「ワレモコウみたく真っ赤になっちゃったな。」

「ひまりも巴も玲も、うるさい！」

弄り始めた三人に蘭は一喝する。だが、これも A f t e r g l o w のいつも通りで和やかな空気が流れていた。

「あつ、ボス!?」

すると、店の奥の方から聞き覚えがある声が出た。その方に視線を向ける玲。

「つて、Afterglowのみんなも一緒っすか!」

そこにいたのは花屋のエプロンを身に包んだ、鼻が潰れ、歯も所々抜けた顔の青年。玲の部下だった。

「あ、寝起きのれーくんに殴られた人だ。」

「モ、モカさん…。その言い方やめてくんないっすか?トラウマが…。」

モカの呼び方に口がヒクつく部下。玲は意外そうに部下へ近づき、話しかけていく。

「へえー、もしかして、この花屋。あんたの家だったのか?」

「一応、親の店の手伝いですよボス。…っーか、似合わないっすよね?こんな歯抜けで鼻が潰れた面で花屋とかさ…。」

「そうか?俺はいいと思うぜ?実際、硬派な不良が華道を習ってることだってあるんだしさ。」

「は、はあ…?…あの、何か、蘭さんがこっちを見てるんすけど…。」

歯抜けの言葉に後ろを向くと蘭が何か言いたげな目をしていた。玲は何でもないと手で制す。花が入った植え木鉢を持った由美に教えてほしいと急かされ、蘭は玲を睨みながら由美が持ってきた花を教える。

「で、最近どうだ?」

「…ちよつと気になることがあつたっす。」

「…教えろ。」

「へい。なんでも、この商店街周辺に別グループの不良みたいな怪しい奴が度々目撃されてるんすよ。」

「写真は？」

「あるつすけど、パーカー被つてて顔がよく見えてないんすよ。店の手伝い終わったら写真、渡しに来てもいいっすか？」

「構わん。むしろ情報はできるだけ共有しておきたい。」

「二人して何の話？」

歯抜けの報告を聞いていると後ろからモカが話しかけてきた。

「あ、ああ、モカさん。これは何でも…」

「近辺に怪しい奴がいるらしいぜ。蘭たちにも帰り道と通学中気を付けろって伝えとけ。」

はぐらかそうとした歯抜けの言葉を遮り、玲はさらりと白状する。歯抜けはあんぐりと口を開けて信じられないようなものを見る目になる。

「ちよつ?!?ボス!何で言っちゃうんすか!?!」

「…この間、ネット配信の奴をボコっていたの黙ってたら、怒られたんだよ。すまん、隠そうとしていたのをあっさりバラしちゃって。」

玲はばつが悪そうに頭を掻いて謝る。その姿を見て歯抜けは目を白黒させる。厄介事はグループメンバー以外は口外厳禁が規則だったのを口酸っぱく言ってきたボス自らがその規則を破ったのだから無理もない。

「こ、こりゃ、明日から大荒れの天気になる前触れかもしれねえ…。」

「…おい、そりゃどういう意味だ、てめー。」

いつも通り、だが少しずつの変化がある日々であった。

「新曲の歌詞？」

「うん。書いたんだけど、ひまりたちがイメージしにくいって言っちゃってさ。」

数日後、ライブをするときに新曲の歌詞を書くことになった蘭だったが、モカたちが共感できずに見直すこととなったが、どうしても行き詰まりを感じ、玲に相談しに来た。

「んじゃ、その歌詞を見せてくれよ。」

「分かった。はい。」

蘭は玲に歌詞が書かれた紙を渡すと玲は黙々と読み始めた。

(ど、どうなんだろう…。)

玲が真剣な顔で黙って読んでいたので口を挟めず、蘭にとって気まぐずい沈黙が流れる。歌詞を最後まで読み終えた玲が口を開く。

「なあ、これまでの歌詞で巴たちが難色を示した事はあったか？」

「今までなかったよ。」

「そうか……。俺は歌に関しちや完全に専門外だが、悪くない歌詞だと思っぜ？」

「…そっか。」

あまりいい答えは得られず、蘭は少し落ち込む。玲は歌詞を蘭に返しながら謝る。

「すまん。力になれなくて。」

「いいよ。もう少し考えて見る。見てくれてありがとう。」

そうやって蘭は玲の部屋から出ていった。

一人、今後のAfterglowが抱える問題、そして部下から受け取った写真に写るパーカーを被った別グループの不良らしき人物の案件を考え、ポツリと一言こぼした。

「マジで大荒れになりそうだな…。」

後に玲のその呟きは的中する。だが、その大荒れのレベルが玲の予想を上回るものであることは、玲はまだ知らない。

30話 暗雲

蘭が歌詞の相談をしに来たその翌日の玲は見回りの強化を行った。

(あの写真の不良が何者なのか確かめる必要がある…。羽丘に来ていたのも気になるしな。)

玲は人通りが少ない道を中心に通り、精神を集中して周りの気配にも鋭くする。

(後ろに気配が一つ…。次の曲がり角で迎え撃つか。)

後ろから感じた気配に玲は早歩きで角を曲がり、待機する。そして、気配の元が近付いて来た。

「何か用…って、なんだ昇太か。」

「なんだってお前な…。」

肩透かしを食らった。そう思った玲は再び見回りを再開する。そして昇太も後ろからついてきたが、玲は気にせず歩き続ける。

「巴から聞いたぜ。蘭ちゃん、新曲の歌詞の進捗よろしくないってな。」

「ああ。そうだな。」

「知ってたのか。」

「昨日、歌詞について相談された。俺としては悪くないと思ったんだが、巴たちの印象はバラバラらしい。」

「あー、確かに巴の奴、『花咲き散り、また巡る』らへんがネガティブな感じつつってたけど、つぐみちゃんがポジティブな印象だったな。」

「俺は…蘭らしくはないなと感じたな。まあ、それはそれでも良いかとも思っていたが…。」

「…なあ、玲。これは俺の憶測に過ぎないけどな、今回の蘭ちゃんの歌詞が巴たちに理解できなかったのって…」

「久しぶり。元気みたいで安心したよ。」

突然、後ろから声を掛けられた。

玲と昇太は咄嗟に後ろを振り向くと、そこには目深にパーカーのフードを被った不良らしき人物が道の真ん中に立っていた。

「あのパーカー…こないだ言っていた奴か！」

昇太が警戒して臨戦態勢をとる。玲もポケットに入れたナイフをいつでも出せるよう構えて睨み付ける。

「そんなに警戒しなくていいよ。ボクは一人で玲に会いに来ただけだもん。」

フードで顔は伺えないが声から察するにまだ幼い、12歳位だ。玲は警戒を解かずに話しかける

「…俺に何の用だ？」

「警告だよ。今、君とその親友に危機が迫ってきている。ボクはここ
の偵察とリーダーに嘘を言っ君を探しに来ていたんだ。」

「そんな事してお前に何のメリットがある？」

「…やっぱりフードを取らないと分からないかな？」

そうやってフードを取る。そこに現れた顔に昇太は息を飲み、玲は信じられないと言いたげな目をした。

その顔は陶器人形のような整った顔立ちで穏やかな目をしていた。

しかし、顔の右半分、目の周りにまるで血が付いたような模様、正確には痣があった。

「お前…その目の奴…何だ？」

昇太が痣について聞くと、パーカーの子供は申し訳なさそうに笑う。

「うん。昔、とつても痛い目にあつたんだ。大人の人に思いつきり殴られて残っちゃったんだ。」

(…久しぶりって事は、玲が児童ポルノに出ていた時の関係者か?)

「ねえ、玲。一方的に言うけどよく聞いて。キミに復讐心を抱いている人が来ている。だから気をつけて。じゃ。」

それだけ言うとパーカーの子供はサツと走って行った。

昇太は玲の様子をチラリと見るといつもの表情ではなく、どこか切羽詰まった顔をしていた。

「…玲。大丈夫か？」

昇太が肩に手を置くと我に帰ったようで、こちらを向く。

「あ、ああ。悪い、ボーツとしてた。」

(やっぱり、あの子と嫌な記憶があるみたいだな。)

冷や汗をかいている玲の顔を見て、この事に追求するのはやめることにした。

「ま、お前はもう戻りな。さっきの奴が言っているのを鵜呑みにする訳じゃないが、今のお前、どこか不安そうな顔をしてるぜ？」

「…そうだな。今日はもう俺は帰って寝る。後の事は頼んだ…。」

玲は昇太に後継ぎをしたあと、雑居ビルへと帰っていった。その後ろ姿を見送った昇太は決意した。

(…あのパーカーの子供、玲の敵ではないかもしれないが少し気掛かりだな。ちよつくら調べて見るか。)

夢を見ている。薄暗い部屋の隅に子供たちが身を寄せあつて固まつている。まるで何かに怯えているかのよう。

その中に玲がいた。玲は同じように震えている少女を守るように抱き寄せている。

すると、部屋のドアが乱暴に開かれ、バットを持った男が入ってくる。男が入ってきたことにより、子供たちはより一層恐怖に染まる。だが、泣く者はいなかった。泣けば叩かれる。玲が抱き寄せている子供のように顔に痣ができるまで痛め付けられるから、誰も泣かなかった。

男は玲を見つけると抱き寄せていた子供を乱雑に引き剥がして玲を持ち上げるとそのまま部屋から出ていく。その扱いは人間ではなく、まるで家畜だった。そして、玲が連れて行かれた先にあるものは

「っはあ!!」

玲はベッドから飛び起きる。顔中に汗が吹き出し、息切れも激しい。

外を見ると既に朝日が上っており、小鳥のさえざりも聞こえてくる。

「…はあ、やな夢を見ちまった…。」

玲は頭を抱えながらぼやく。すると、隣に誰かいるのを感じ、横を見るとそこには由美がいた。

「おう、由美。おはよ。」

「…玲、ツラそう。何かあったの？」

「ちよつとキツイ夢見ただけだ。大丈夫だよ。」

「…そう。」

「それよりも、最近どうだ？蘭たちは。」

心配する由美に玲は話題を変え、蘭たちの新曲の様子はどうか聞くと由美は難しい顔をした。

「蘭ねえの歌詞、まだできてないから、あんまり…。蘭ねえもどこか苛立つてるみたいで、なんだかいつも通りじゃない。」

「…そうか。」

由美の証言に玲は難しい顔をする。

「なあ、俺は最近怪しい奴がないか見張つて忙しいんだ。もし、蘭が一人で飛び出すような事があったら、お前が蘭を慰めてくれるか？」

「蘭ねえ、ツライの？」

「ああ、あいつは何かあるとすぐ飛び出しちゃうからな。その時はお前が側にいてやれ。」

「ん、分かった。」

玲の頼みを快諾する由美。任せろと言わんばかりに胸を叩く姿に玲の心は穏やかになった。

由美は一人で羽丘女学園前に来た。ここ最近の蘭は良い歌詞が浮

かばず四苦八苦している様子から心配になって、そして忙しくて構ってやれない玲に変わってやって来たのだ。

「あ、蘭ねえ。」

下校する生徒から可愛がられながらも校門を見張り続け、ようやく出てきた蘭に手を振るが、蘭は由美に見向きもせず、走り去っていった。その横顔には涙が浮かんでいた。

「…蘭ねえ?」

ただ事じゃないかもしれない。そう考えた由美は蘭の後を慌てて追いかけた。

蘭は一人、公園でうずくまっていた。思わずひまりたちに文句を言ってしまった。ひまりはそんなつもりはなかったはずなのに。

変わりたくなかったから変わった。幼馴染みに後押しされて、父親とも和解できて、今まで避けてきた華道にも向き合ってきた。もう会えないかもしれない玲とも再会できた。なのに、いつも通り新曲の歌詞を書いて来たのに。何故分かってもらえないのか、一体どうすればいいのか。分からなくなってきた。

「どうすればいいの…玲…。」

もう一人背中を押ししてくれた、幼馴染みの名を呟く。

「蘭ねえ。」

頭を抱えていると声をかけられた。由美だ。トコトコと歩いてきて蘭の隣に腰かけてきた。

「…何、由美。」

「蘭ねえ、ツラそう…。モカねえたちと何かあったの？」

「…由美には関係ないから。」

蘭は由美に心配かけまいと振る舞うも声が震えてしまう。すると、由美が蘭の頭を優しく抱きつき、撫で始めた。突然の事で蘭は驚く。

「ちよ、由美!？」

「私が怖い夢を見たりしてツライとき、玲はよくこうやって一緒にいてくれた。蘭ねえもこうやったらツライのなくなるかなって。…駄目?」

「…うん、由美。しばらくこうさせて。」

「うん。」

蘭は自分よりも10歳位年下の子供に抱きしめられ頭を撫でられているのを気恥ずかしく思ったが、ひまりたちにあんな事を言ってしまった後悔が癒されるような気分になる。明日、ひまりたちに謝ろう。そう考えた瞬間だった。

「おい。」

不意に、声をかけられた。玲が来た。こんな所見られたら完全に弄られる。蘭はそう思い慌てて頭をあげる。

「キミら、こんな所で何やってんの?ダメだよお。キミらみたいな可愛い子、俺らみてーなヤベー奴に襲われるからさあ。」

玲じゃ、なかった。

玲は一人、走っていた。理由は単純。由美に任せていいのか不安だったからだ。

(…何やってんだろな、俺。)

そう自虐するも、今現在も胸騒ぎが収まらずにいるので仕方がない。そう考えた時だ。

「近寄らないで！」

「へえー、随分気が強い嬢ちゃんだな。そう言う生意気なガキを屈服させんの大好きだぜ！」

蘭の声が聞こえた。どうやら悪漢に絡まれているようだ。玲は自分の直感が当たってしまい、舌打ちをする。そして、声が出た方に走り出すのだった。

公園で知らない男に絡まれた蘭と由美。由美は気丈に振る舞って蘭を守ろうと小さな両手を広げて仁王立ちをしている。

「おいおい、ちっちゃい嬢ちゃん。あんたみたいなガキが俺ら大人に叶うと思ってるのかよ？」

由美の無謀とも言える行動に男たちが嘲笑する。しかし、由美はそんな嘲笑を聞いてないと言わんばかりに、これでもかと手を広げる。

「蘭ねえは、いじめさせない。」

「おーおー、そんな震えちやってカワイーねえ。」

男のうち一人が由美の前に歩いていき、退かそうと手を伸ばす。しかし、その行動が仇となった。

「ガヴツ！」

由美は近付いて来た男の手を思い切り噛みついた。これは、玲から教わった子供でも抵抗できる方法だ。

(武器があればいいけど、今はない。私にできるのはこうやって誰かが来るまで踏ん張ること！)

しかし、まだ小学校低学年位でしかない由美の顎の力では腕を振り回す男の力に負けてしまい、蘭の前に放り出される。

「チクシヨウウ！このクソガキ！指が食いちぎられるかと思ったぜ！」

「由美！大丈夫？」

咄嗟に蘭が由美を抱き止め、由美の安否を行う。しかし、そうしているうちに男たちが近付いてくる。

「近寄らないで！」

「へえー、随分気が強い嬢ちゃんだな。そう言う生意気なガキを屈服させんの大好きだぜ！」

由美を抱き寄せ、睨み付ける蘭にリーダーのような男はへらへら笑いながら仰々しく歩み寄ってくる。

「近寄らないでって言ったでしょ！」

「ぐへへ、そのイヤイヤが止めちゃイヤ〜んってなつても知らねえからな。」

そう言つて手を伸ばしてくる男に蘭は由美を守るように抱きしめ、目を瞑る。

しかし、いつまで立っても男が触つてこない。不思議に思った蘭は目を開ける。

「大丈夫か？」

そこには走つてきたのだろうか、息切れをしながら男の腕を掴む少女と見間違ふ美少年、黒一点の幼馴染みがいた。

「あん？白馬の王子様…ぐええ!？」

男が言い終わる前に玲の蹴りが男の顔に叩き込まれる。

男は綺麗な放物線を描きながら地面に倒れ伏す。よく見れば、男の取り巻きらしい連中も倒れていることから、全員気付かれない内に倒したのでろう。

「大丈夫か？蘭。」

「う、うん。ありがとう、玲。」

差し伸べた玲の手を蘭は掴みながら立ち上がる。

「玲？今、玲って言ったのか？」

すると、さつき蹴り飛ばした男が顔を押しさえながら起き上がる。

「…どうやら、まだぶん殴りたいみたいだな。」

その男にうんざりしながらも玲は臨戦態勢を取る。しかし、男は余裕の態度だった。

「やっぱり、玲じゃねえか。俺を忘れたのかよ。激しい一夜を共にしただろ？神前玲くうん？」

「は？何を、言ってる…」

男の馴れ馴れしい態度に玲は最初は首をかしげたが、男を観察して何かに察したのか言葉が出なくなる。

「玲？どうしたの？」

蘭が聞くも玲は男の方を見るだけ。しかも、その表情は恐怖に染まっていた。

「随分とかわいく綺麗になってんじゃん。おっと、今黒豹って呼ばれてんだっけか。へへ、今日のところは引き上げてやるが、いつかお前を首輪を着けた従順な黒猫ちゃんに調教してやるぜ？」

男はそれだけ言うと倒れ付していた取り巻きを叩き起こし、その場を後にした。残ったのは、立ち尽くす玲と蘭に抱かれている由美、そして玲の様子がおかしくなったのを不安そうに見つめる蘭だった。

「…ねえ、玲。あの男、一体…」

「蘭。今日はもう帰れ。」

「で、でも、あんたの事が心配だよ。あの男何なの？何で玲の事を知ってる…」

「やかましいー！さっさと消えろ！お前は知らなくていいんだよー！」

心配する蘭を玲は突き放すように怒鳴る。しかし、今の蘭にそれは

悪手だった。

「…何それ。あたしは知らなくてもいい？あんたもあたしが変わらな
きや良かったとか思ってるの!？」

「あ…、ち、違う。そう言う意味じゃ…」

「じゃあどういう意味なの!？答えてよ!あんたはいつもいつも昔の事
を話さないよね!あたしが頼りないから?あたしは変わったんだよ
!モカたちといつも通りでいたかったから!もう会えないと思って
たあんたに会えたんだから!なのに、なのに何でそんな事言うの?も
ういい!あんたなんか知らない!」

蘭はそう捲し立てると由美を連れのまま公園から足早に出ていく。
玲はただ、立ち尽くすしかなかった。

「あ…。」

公園から出た蘭はモカとぼったり会った。モカのいつものポケッ
とした顔には申し訳無きで一杯だった。

「モカ…。」

「…ごめんね。」

モカは謝ってきた。その様子を見た蘭は自虐する。

「あたし…変わったつもりだったけど、泣きながら飛び出して行っ
たりして、全然変わってないよね。みんなと一緒にいたいから変わった
つもりだった。けど、根っこの所は何も変わってなかった…!」

「ううん、蘭は変わったよ。あたしたちが知らない所に行っちゃった

だけ……。蘭が見えてる世界ってさ、あたしたちよりも広いんだよ。だから、蘭が見えてる世界が、あたしたちにはまだ見えないんだ。」

「でも……。でも、あたし、みんなの事が分かんないよ。玲の事も分かんない……。自分の事すらも分かんなくなっちゃった……。！」

「……蘭ねえは、悪くないよ。」

由美が慰めるも、蘭は泣き止まない。泣き続ける蘭にモカはただ謝るしかなかった。

「……ごめんね。」

31話 過去

家に帰った蘭はふらふらしながらも帰宅する。もう何もかもが分からない。もう楽しかったいつも通りに戻れないのか。そう考えながら玄関を開ける。

「今日は遅かったな。蘭。」

「…うん。ごめん、父さん。」

父が玄関で出迎えてくれた。おそらく、いつもと違い華道の集まりに遅れてしまった蘭を心配したのだろう。厳しめの顔に少しだけ心配の色を滲ませていた。

「む…、蘭。その子はなんだ？」

「…え？」

父の質問の意図が分からず、蘭は思わず父が見ている視線の先を見た。その先には蘭の後ろに隠れ、父をジッと見ている由美がいた。どうやら一緒にいたことに気付かなかったようだ。蘭は慌てて由美と視線を合わせる。

「ちよ、ちよっと、由美！なんでついて来たの!？」

「だって蘭ねえ、ずっと私の手を繋いでた。」

「う…。」

そうだった。玲と自分の事ですっかり忘れてしまっていた。蘭は額に指を当て、失念する。

「…もしかして、その子が話に聞いた由美と言う子か？」

「ご、ごめん、父さん。ちよっとこの子送って行くから…。」

「待ちなさい、蘭。」

父が呼び止めてきた。説教が一つや二つ、飛んでくるのか。そう思い足を止める。だが、出てきた言葉は蘭の予想とは違った。

「もう日が暮れて外は危険だ。泊めてやったらどうだ？昇太くんには私が言っておく。」

「…え？」

思わず首をかしげる蘭であった。

翌日、雑居ビルでは不良たちが不安そうに会話していた。何故なら昨日から玲が寝室に入ったつきり出てこないからだ。いつもの寝付きが悪いだけだと思い込んでいたが、昼になっても寝室から出でこず、最初は樂觀していた部下たちも不安になり始めたのだ。

「なあ、ボスどうしたんだ？全然出てこないんだが、何かあったのか？」

「さあ、昇太のアニキが言った蘭さんの歌詞の進み具合が良くねえのと何か関係があるとは思うけどよ。」

「お前、起こしに行つてこいよ。起こすの担当だったろ？」

「イヤだよ！これ以上殴られたら鼻が完全に潰れて入れ歯する羽目になつちまう！この年でジジイみたいなもの付けたくないぜ！」

「そーいや、由美ちゃんはどうしたんだ？昨日から帰つて来てねえけど。」

「よう、お前ら何の話してんだ？」

不良たちが口々に話していると昇太がやって来た。いつものよう

に賄いをもって、気さくに話しに入っていく昇太。

「あ、昇太のアニキ。実は…」

部下は昨日から玲が寝室から出てこない事、由美が戻ってきていない事を心配そうに昇太に報告する。

「ああ、由美なら蘭の親父さんから連絡があったぜ。昨日は蘭がうっかり連れたまま帰っちゃまったらしくてお泊まりだったんだよ。」

「よ、よかったあ〜…」

「蘭さんの親父さんってあの着物の堅物なおっさんだろ？よく由美ちゃんを泊めてくれたよな。」

「ボスがああなってるのに由美ちゃんがいなくなっちゃったら俺ら正気じゃなかったかもな！」

「お前、そういうの好きなのか…。」

「ばっ!?ち、違えよ！俺は仲間のためだと思っただな…！」

「はいはい、俺は分かかってやるから。あと、巴さんに気を付けるよ？あの人、妹バカだから。」

「何だその目え!?!やめろ！すっげえ肩身狭くなるから！」

（昨日のあの痣の子の事でまだ平静を保ててないのか…。もしかして、それほどあの子は玲にとって苦い記憶があるのか?）

気が緩み、けなし合ったり笑い合う部下を尻目に昇太は眉をしかめる。昨日話しかけてきた痣の子供。あの子は他の子供とはどこかしら違う雰囲気から、玲の児童ポルノ時代の関係者なのは分かるが、一体どういう関係なのか。昇太が顎に手を当て、考える。

「よし、玲に関してはとりあえず俺に任せろ。」

「え?い、いいんすか?」

「可愛い後継者が困ってるんだ。元とは言え、俺もボスやってた身だぜ。ここは俺に任せとけ。お前らは見回りをやつといてくれ。」

「で、では、頼みます…。」

部下を撒くことに成功した昇太は見回りに行く部下を見て微笑む。

(つたく、今の玲には勿体無さすぎる部下だぜ。ここまで慕われてる
なんざ、泣けてくらあ。)

心の中でしみじみしながら玲の寝室の扉をノックする。

「おーい、玲！メシ持ってきたぜ！開けなよ！」

昇太がそう叫んで十数秒後、がちやりとドアが開く。

少し開けたドアの隙間から覗く玲はシーツを体に包み、髪もボサボ
サ、あまりよく眠れなかったのか目の下にクマもできており、大丈夫
のようには見えなかった。

「…昇太か。」

「おいおい…、お前大丈夫か？」

「…蘭は大丈夫か？」

「蘭ちゃん？何で蘭ちゃんが出てくんだよ？」

「…いや、何でもない。メシはそこに置いといてくれ。」

玲はそれだけ言うともた扉を閉めてしまった。

(…なんつつーかあ、思春期で部屋に籠ってしまった子供を心配する
親ってこんな感じなのかね…。)

「わーったよ。じゃ、俺は行くからな。食べ終わったらまた外に置いといてくれ。」

商店街の思春期の子を持つ人達の心境を知りながら賄いを置き、部屋を後にする昇太。そして、痣の子について探る為、雑居ビルを後に

した。

玲は昇太が持つてきた賄いを震える手を抑えながら口にする。

だが、吐いてしまった。忘れ去っていた過去の惨たらしい記憶が玲を苦しめてくるのだ。今まで会うとは思わなかった人物に二人、それも苦い記憶しかない人物だ。

一人は助けてやれなかった。一人は昔の自分を完全に殺した。

（ダメだ。割り切れ。割り切るんだ。もう後悔しても仕方ないんだ。あれは、あいつは、俺の力がなかったからだ。守つてやると約束したのに何もできなかった俺を許してくれ。そんな目で見ないでくれ。痛い。止めて。止めてよ。もう言うこと聞くから。首輪もしてやるから、何でも言うこと聞くから。いい子にするから。だから叩かないで。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。）

「誰か…助けて…。」

ようやく出た声はか細く、たった一人、シーツを体にくるめて縮んで震える姿は黒豹の名で恐れられている不良の親玉とはとても思えなかった。

雑居ビルを後にした昇太は商店街に向かい、通りを行き交う人々を観察する。途中、北沢精肉店で買ったコロッケを頬張りながら虎視眈々と見張る。そして、昇太は目当ての人間を見つけた事ができた。

昨日話しかけてきたパーカーを着た痣の子だ。すぐさまコロッケを食べ終え、包み紙をポケットにしまいながら痣の子の元へと向かった。

「おい、あんた。」

昇太が呼び止めると痣の子は振り向く。

「…てつきり、玲が来るって思ってたけど君なんだね。」

「悪かったな、玲じゃなくてよ。」

「ボクに何か用？」

「…お前から玲の事を知りたい。」

「…知ってどうするの？」

「あいつを救う手掛かりを探す。」

「…興味本意で聞いていい内容じゃないよ。」

「それでも構わねえ。」

「…うん、分かった。でも、これは外で話したらマズい内容だよ。どこか話せる場所はあるのかい？」

「ああ、ついてきな。」

昇太が案内したのは商店街の一角にある定食屋だった。そこは昇太の家でもある。昇太は入口を開けるとガラガラと音が響く。すると、奥のカウンターから顔に傷が付いている体格のいい男が顔を出す。

「いらっしやーい！…つてなんだ昇太かよ。入るならいつも裏口から入れと言っとするだろうが。お客かと思うじゃねえか。」

「わりいわりい。親父、奥の個室使ってもいいか？」

「おう、今んとこ昼のピーク過ぎたしな。夜までには好きだけ使え。」

「おう、ありがたく使うぜ。さ、来な。」

昇太が催促すると子供も後へと続く。そして奥にある座敷の個室に入ると二人はテーブルを挟んで向かい合うように座った。そして、昇太の父からお冷やが置かれ、昇太の父は午後の仕込みのため、厨房に戻っていった。

「良い店だね。雰囲気があって、落ち着くよ。」

「今はな。夜になるとここは居酒屋にチェンジして夜な夜な仕事帰りのおっさんの汗とゲロと酒の匂いが混ざった空間になるぜ？朝、臭い消しと掃除で忙しいのとツラいったらありやしねえ。」

そう言う昇太の愚痴に痣の子はにこりを微笑む。

「で、俺んところの事情はここまでにして、お前は誰だ？玲とどういう関係だ？」

昇太は低い声で痣の子に問い掛ける。本当は子供相手にこの話の方はしたくはなかったが、相手が何者か分からない以上油断はできない。

「…ボクの名は勝目友梨。女の子だよ。で、玲とは…そうだね、仕事仲間？」

「…じゃあ、早速本題だ。お前が知ってる限りの玲に関すること、吐けよ。」

「うん、いいよ。」

昇太の気迫をもものともせず、友梨は語り始めた。

ボクが玲と会ったのは、四年前ぐらい。その時ボクは心無い親に虐待されたり、捨てられたりした子供を引き取る孤児院にいたんだ。でも、孤児院だと言うのは表だけ。本当は子供に興奮する人達の相手をする娼館みたいな物で、そこへ来るお客様は地位が高い人、政府のお偉いさんばかり。ボクと一緒にやって来たのが、神前玲。所謂、同期って奴だ。

そこでボクと玲は色々な事をやらされていたよ。犯されるだけじゃなく、血が出るまで鞭でひっぱたかれたり、蹴られたり、蟻を体に垂らされたり、男の子は女装させられてカメラで撮られたりもしたね。とにかく、沢山嫌がることをされて、もう地獄だったよ。そして、事が終わると子供は薄暗い部屋に放り出されるんだ。そして、たまに職員のストレス発散に付き合わされて狭いロッカーに叩き込まれてロッカー越しにガンガン叩いて来るんだ。中にいると音がすごく響くから鼓膜が破れるかと思ったね。

そんな日々が続くから死にたくなかった事もあったね。実際、精神崩壊した子もいたし。その時、手を差し伸べてきたのが神前玲。彼だったんだ。彼も色々やらされたよ。犯されている時もパシヤパシヤ撮られたり、ね。特にボクと玲は人気があったんだ。ボクは嗜虐心をそるからとか、玲はよく抵抗するから屈服のしがいがあるってね。

でも、そんなある日、政府のお偉いさんが玲を買い取って来たんだ。ボクも詳しい事情は知らないけど少し聞こえた言葉だと、後継者だからって気がする。

玲がいなくなっても変わることはない日々を送っていたら、ある日、警察が来て、ボクらを保護してくれた。なんでも、匿名からの情報でこの孤児院の正体を暴いた人がいて、それに怒った世間の人助けに来てくれたんだ。そして、それにもない、常連だった地位の高い人や政府のお偉いさんが連鎖的に失脚、失踪、国外逃亡したんだよ。ほら、昔ニュースで一ヶ月も同じ話をするほど大きな話題になったで

しよ？あれだよ。

ボクにはその匿名の人物が誰だか知ってたよ。玲がやったんだって。ボクはそれからまともな孤児院で匿われていたけど一人で旅をしたんだ。玲を探す為の旅だったけど、結局何の手掛かりも無く、見つからなかった。諦めかけた時に不良グループのリーダーが玲の話をしているのを聞いた。そして、ボクはその話に惹かれて不良グループに入ったんだ。

「…それが、お前がここに来た理由…か…。」

友梨の昔話に昇太は息を飲む。この子と玲は、そこまで残酷な経験をしてきたのかと。昇太は側に置かれているお冷やのように汗をか

く。
「ボクらを明るい場所へと出してくれた彼にお礼を言いたかった。…でも、会えると思って入った不良グループが間違いだったんだ。」

ずっと微笑むような顔に焦りが加わる。様子がおかしくなった友梨に昇太は目を細めた。

「…何だと？」

「お願いがあるんだ。もう、玲と関わるのは止めて、仲間と一緒に逃げるんだ。ボクが入ったグループのリーダーは突然凶々しく現れた玲に叩きのめされた挙げ句、今まで築き上げた信頼、実績、居場所まで奪ったと憎々しげに言っていたんだ。あの目は、怖かった。」

「…ちよつと待て。そいつって…！」

昇太がリーダーの正体に感付いた瞬間、個室のドアが開いた。そこから二、三人の不良が昇太を押しさえつける。そして、一年以上聞いて

いなかった声が昇太の耳に届いた。

「よお、相変わらずボロい定食屋だな、昇太？」

「……てめえは……！」

眼帯を着けた青年、去年の夏祭り、玲に完膚なきまで返り討ちにあい、追放された男、大崎がいた。

32話 少しの変化

昇太は机に押さえつけられながらも大崎を睨む。

「てめえ…どのツラ下げて戻ってきやがった！」

「おいおい、昔の仲間じゃ久しぶり会ってやったと言うのに随分な言い様だな。それに、自分が今どういう立場にいるのか分かってないようだな。なあ、友梨？」

大崎は昇太を見下しながら友梨の頭に手を添える。友梨は顔を伏せ沈黙している。

そして、大崎は友梨の頭をポンポン叩いた後、

があん!!

思い切りテーブルに叩きつけた。そして乱暴に頭を上げられた友梨の鼻から血が吹き出す。

「何勝手に外へ出てんだよ、ああ？」

「あ、あぐっ…。」

「俺言ったよな？外へ出るとき必ず誰かに伝言しろって。それが出来てねえてめえはなんだ？ああ!？」

友梨が両手で鼻を塞ぎ、鼻血を押さええるも指の隙間から漏れ、滴り落ちる。その状態の友梨の耳元で大崎はお構いなしに怒鳴る。しかし、それを静観する昇太ではない。押さえつけられながらも大崎の暴行を止める。

「おい、よせ！」

「人の教育に首突っ込んでんじゃねえよ。てめえには玲の弱点をとこ

とん吐いてもらうつもりだからな。」

大崎は押さえつけられている昇太を見下し、勝ち誇った笑みを浮かべた。どうやら本当に玲の復讐以外考えていないようだ。

「…そう易々、吐くと思ってるのか？」

「そうだな。あんたは友情を大切に行っているお人好しだからダチを売るなんて行為には出れねえだろ。」

「だったらさっさと諦めて…！」

「だが、お前のダチがどうなるかな？」

「…あ？」

一瞬、大崎の言葉の意味が理解できなかった。そして、理解が追いついた昇太はサングラス越しに目を見開く。その様子を見た大崎は更に口を歪め、喋りだす。

「宇田川…とか、言ったか？お前のダチの名前。そいつとその関係者が悲惨な目に遭うぜ。」

「な…!?!」

大崎は昇太がどういう人間か理解している。世話焼き、兄貴分、相談役。その性格を利用して大崎は昇太の友人を人質に玲の弱点を探ろうとしたのだ。昇太は思わず激昂する。

「てめえ…！巴たちは関係ないだろ！」

「今はな。だが、お前が玲の弱点を吐かなきゃ、宇田川巴と、奴の妹のあこつつつたか？そいつらが俺の部下のオカズになっちまうぜ？それでもいいのか？」

「そこまで腐ったか！この卑怯者が！」

「何とでも言いな。俺をそうさせたのは神前玲なんだぜ？」

「ぐっ…。」

昇太は歯噛みする。今の玲の精神状態ではおそらく巴たちを守りきれない。かといって、玲を売るような真似もできない。突破口がない現状。友を救うために友を売るか、友を守るために友を見殺しにするか。その板挟みに苦悩する。

「おい、昇太。何騒いでんだ？」

騒ぎを聞いた昇太の父が夜の仕込み中で手が放せないため、厨房から声を出す。その声を聞いた大崎は潮時だと言わんばかりに身を引く。

「さて、良い返事期待してるぜ。おっと、誰かに漏らすような真似をするなよ？もしやったら…言われなくても分かるよな？」

大崎はそう言い残すと友梨の頭を乱雑に鷲掴みにし、そのまま店から出ていった。一人残った昇太は頭を抱える。

(…どうすりゃ、いいんだよ。くそつたれ…)

「お前、何か余計な事は喋ってないよな？」

商店街の狭い、人通りがない路地。そこで大崎は友梨を問い詰める。友梨は鼻から血を流しながらも大崎の目を見て答えた。

「安心して。ボクはきみの侵攻については何も喋ってないよ。ただ、彼から話しかけてきたんだ。玲の過去について教えてほしいって言われて、ボクはそれに答えただけ。」

友梨は大崎から目をそらさず正直に答える。しかし、大崎は友梨の頭を掴むと壁に押し付けた。

「嘘はついてないだろうな？俺が来たとき、逃げろだかなんだか聞こえた気がしたが？」

大崎は疑いの目を向けながら友梨の頬にナイフをチラつかせる。そしてナイフの腹で友梨の頬をつつき、脅しにかかる。

「ほ、本当だよ。ボクが言ったのは玲の過去の事だけ…きみも知っている事だけだ。」

友梨はそれでも嘘ではないと言い続ける。

「…ふん。そこまで言うなら嘘じゃないんだろうな。いいぜ。一応信じてやるが、帰ったらお前はあのデブの相手をしな。分かったな。」

大崎は疑ってはいるものの友梨から離れた。そしてそれだけ言うと友梨を置いて、部下と共に帰っていった。

(これじゃあ、前と変わらないな…。)

一人、友梨は壁にもたれかけ、ため息を吐く。今夜は新しく入ったあの太った男に身体中舐め回されるのだろう。そう考えると憂鬱になる。しかし、今の自分が帰る場所はあるのかと不安に感じ、重い腰をあげるのだった。

(蘭ちゃん…返信こないなあ…)

つぐみはスマホのグループチャットの画面を眺めながらため息を吐く。

昨日、蘭が飛び出してしまった後、つぐみは蘭が書いた歌詞を自分なりに解釈して蘭に伝えたが、未だに連絡が返ってこないことに不安を覚え始めていた。

(ひまりちゃんたちも落ち込んだじゃって…玲くんに相談してみたけど、玲くんも返信してこないし…。私…どうすればいいのかな?)

そう思案しながらトボトボ歩いていたせいか、何かにぶつかった。

「あつ、す、すいません!」

「ううん。ボクの前方不注意だ。きみは悪くない。」

咄嗟に謝るとぶつかった相手は子供のようだった。なんだか声に比べて大人しい印象だな。そう思い、つぐみが頭をあげるとそこには、

「だから気にしなくていいですよ。」

鼻から血を流しながら微笑む子供がいた。

「気にするよ!?!」

「これで、よしっと。」

つぐみはぶつかったお詫びにと友梨の鼻にティツシユを詰めて止血した。今、蘭と気まずい状態なのに他の人にも気をかけるところがつぐみらしいとも言えるだろう。もし、この場にモカがいたら「おおく、ツグってるね。」と言っていたところだ。

「ホントに気にしなくても良かったのに…。」

「いや、鼻血を出したまま歩いているのは気になるよ…。」

気にしなくてもいいと言い続ける子供につぐみは苦笑いをする。

「とりあえずありがとう。親切なお姉さん。ボクのために…。」

「今度からはちゃんとティツシユを持つこと。いいね?」

つぐみからポケットティツシユを受け取る友梨。右目の痣が気になるはずだが、触れようとしないつぐみ。久しぶりに人の暖かさに触れた友梨は困ったように笑う。

「あはは、きみ、もしかしてお人好しって言われたことあるでしょ?」

「あはは、よく言われるね。」

「それって辛くないのかい?他の人の心配とか、気が休まらないでしょう?」

「ううん。私がしたいからやってるんだ。それに、困っている人がいるのに、見て見ぬふりなんて絶対できないもん。」

「…ふーん。」

何の迷いもなく返すつぐみに友梨は表情こそ出さないものの、驚いていた。

(玲が住んでいる所って、こんなに暖かいんだね。さっきの昇太もそ

うけど、この町はボクの記憶の限りじゃ、活気に溢れている気がするなあ。…ここが、あの大崎の手に落ちると…。」

一瞬、大崎のグループを裏切ろうと考えたが、考えるだけ無駄だと割りきる。

「あの…大丈夫?」

「…え?ああ、ごめん。考え事していたんだ。」

「どこか辛い?」

心配そうに見つめるつぐみに大丈夫だと告げようとした瞬間、目の前が突然ぼやけた。

「あ、あれ?何で?こんな事、今まで無かったのに…。」

友梨は自分の目を服の裾で拭うも、すぐに視界がぼやけてしまう。拭った袖には濡れた跡がある。今まで泣きたくなった事がいくつもあった。でも、泣かなかった。今まで泣いても誰も心配してくれないどころか、更に殴ってきたから。その内、泣くことを忘れてしまった。その方が楽だから。その方が殴られずに済むから。

「ご、ごめんなさい。ボクは大丈夫ですから。」

拭っても、拭っても、拭っても、拭っても。溢れる。溢れる。溢れる。溢れる。溢れる。

(どうしよう、このままじゃ、このままじゃまた…!)

脳裏に浮かぶは幼い頃の自分。孤児院とは名ばかりの施設に行く前の自分。一緒に住んでいた、もう顔すら浮かばない大人が泣いている自分を黙らせるように暴力を振るってくる。お腹が空いたと言っ

気が済むまで泣き続けた友梨は泣き腫らした目を拭いながらつぐみに謝る。

「でも良かった。何だかさつきより晴れやかな感じになってるよ。」

「…ありがとう。お世辞でも嬉しいよ。」

「お世辞なんかじゃないよ。ほんとにスッキリした感じになってる。」

「じゃ、ありがとうございました。つぐみさん。」

「うん、じゃあね。友梨ちゃん。元気で！」

友梨とつぐみは笑い合って別れた。友梨はこれまでの受け身だった自分と決別する決意をして、つぐみはこんな自分でも誰かを笑顔にできた実感を噛み締めながら別れた。

その夜。友梨は大崎のグループがたむろしている町外れの廃工場のアジトで最近加わった太った男の相手をするために男がいる部屋に入った。

「あ、来たね友梨ちゃん…。へ、へへ、今日もペロペロするからね。」

男はネット配信をしていた所を玲に恥をかかされた恨みで大崎のグループに入ったらしいが、正直言つて、何もできない小物だ。どうやら大崎は玲に恨みがあるなら誰でもいいらしい。

鼻息を荒げながら唇を突きだし近づく男。だが、友梨は反撃に出ることにした。

「気安くちゃん付けしてんじゃねえ！」

そう叫び、男の股を蹴りあげる。内臓全部が上に飛び上がるような

衝撃が男の全身を駆け巡り、そのまま倒れた。

（女王ってやったことはないけどこんな感じだったっけ？やり過ぎたかな？）

股間を押しえながら倒れてピクピク動くだけの男を見ながら友梨は首をかしげる。

後日、男が大崎に訴えに行ったが、友梨は「SMをやってみたいて言っていたんですけど、初めてだったから加減が分かりませんでした。」と、嘘をついてそれを信じた大崎はお咎めなしにし、男は発狂したのだった。

33話 狼煙

(どうする…俺は、どうしたらいいんだ…。)

昇太は一步一步ふらつきながら雑居ビルへと向かう。玲の弱点を白状するか、このまま沈黙して巴やあこを見殺しにするか。その自問自答を繰り返しながら玲の寝室に向かおうとする。それだからだろうか。後ろから近づく気配に気付かなかった。

(今の玲は頼りにならないし、大崎のグループがどれだけの規模なのかも分からない…。下手すりゃ商店街の人たちにも被害が…)

「昇太くん！やっほー♪」

「のわっぴゃあ!？」

突然耳元で聞こえた気楽な声に驚きながら後ろを振り向くとそこには蘭と同じ学校に通う天才の氷川日菜、その友人の今井リサがいた。

「お、おう、リサに日菜か。今日はどうしたんだ？」

「あー、ビックリした。昇太くん何だか、どよんって感じだから声掛けてみたら突然変な声出すんだもん。」

「あ、ああ、悪い。考え事してたわ。で、今日は何の用だ？」

何とか取り繕いながら昇太は日菜に向き合うとリサと日菜は難しい顔をした。

「今日はパスパレとRoseliaの練習がない日だから日菜と一緒に帰ってたんだけど、日菜が玲さんと一緒に遊びたいって言い出してさ。」

「うん。それで今日は玲さんと遊ぼうって思ってたんだけど、玲くんが何だか、るんって感じじゃなかったんだー。どうしたんだろ？な

んか、ぶるぶるって感じだったよ?」

相変わらずの天才感覚の造語で会話する日菜に昇太は情報を噛み砕きながら考える。

(ぶるぶる?寒い?いや、寒くて風邪だけならああはならないだろう? 一体…あ。)

「…まさか、怖がっているのか?」

「そうそう、そんな感じだったよ。ちょうどホラー映画見てる昇太くんみたいなの…あれ、ちよつと待って?昇太くん、何か知ってるの?」

天才故の鋭さで日菜は昇太を見る。流石は日菜だな。と苦笑しつつも、これまで玲にも黙っていた事を話すときが来たと腹を括る。

(玲…お前の過去、バラすけどいいよな?)

「リサ…、日菜…。聞いてほしいことがある。」

昇太は真剣な目でリサ、日菜と向き合う。今の自分にできるのはこれしかない。そう決意し、重い口を開け、友梨から聞いた玲の過去、そして玲が出演していたAVを見てしまい、それを黙っていたことをポツリポツリと語り始めた。

「ただいま…。」

蘭は学校から帰ってきた。登下校でも一緒だったモカたちと会うことはなく、一人で帰ってきたのだ。この時ばかりはクラスが別々で良かったと安堵する。もし、一緒だったならば気まずすぎて授業を受ける気にもなれないからだ。

(つぐみはあの歌詞をそう受け取ったけど…もう分かんない…。)

今現在の状況はつぐみのおかげで辛うじて繋がっている状況だが、それもいつまで持つかは分からない。沈んだ気分で玄関を開けるとトテトテと歩く音が聞こえた。

「蘭ねえ、おかえり。」

「え、由美？なんで？だって、今朝帰ったんじや…？」

奥から現れたのは由美だ。今朝、帰ると言って、登校するとき一緒に出ていった筈だ。何故ここにいるのか。

「玲が元気ない。私、そばにいようとしたけど、部下から言われたの。今はそつとしておいた方がいいかもって。それで暇だったから、ここに来た。」

「…そっか。」

玲が元気ない。それを聞いた蘭は昨日の事を思い出した。あの男に名前を言われたときの怯えよう、心に余裕がなかったとはいえ自分を突き放すように怒鳴る姿、そして自分が言い返したときの目。

(最悪だ…あたし…。この前の合同合宿のとき…あたし、話したくなかったら話さなくていいよって言ったのに…。)

蘭は冷静にあの時の事を振り返る。あの男は間違いなく玲の過去に関係がある人物だ。だが、合同合宿で雨宮に会ってから様子がおかしくなった玲に言ったことを反故するような行動をとってしまった。自責の念に駆られていると下から声が聞こえた。

「蘭ねえ。」

由美だ。何故か蘭の目の前に来て、前髪越しにこちらを睨み付けている。

どうしたのだろうか。そう思った瞬間、由美は蘭のスカートを持つと、勢いよくめくり上げた。

「な…ちよっ何すんの!？」

突然の蛮行に蘭は啞然としたが理解が追い付き、慌てて押さえつける。合同合宿で紗夜にやったことをつぐみと日菜に怒られた以降やらなくなった事と、まさか慕っている自分にやるとは思っていなかったからだ。

「蘭ねえ。私、昨日から言ってる。蘭ねえは悪くないって。」

「で、でも、私にはもう分からないんだよ…。あの歌詞の意味だって…どんな気持ちで書いたなんて…」

「昇太が言ってた。友達って仲良くするのは当たり前だけど、たまには喧嘩もするものだって。だから、多分今の蘭ねえは喧嘩しているだけ。今までもそうだったんでしょ？」

「由美…。」

「歌詞の事は私にも分からない。だから力にはなれないけど、絶対モカねえたちとまた仲良くなれるから。それまで我慢だよ。」

由美はそう言うのと蘭に抱きつく。そして最後にこう言った。

「…スカートめくってごめんなさい。」

「…もうしないでよ?。」

少しだけ、蘭の気持ちが和らいだ。

「…それで、玲は去年ここに來たつてワケだ。もしかしたら、玲が怯えているのはそのエセ孤兒院の關係者がこの町に來ているせいかも知れない。」

昇太は語り終えた。つぐみを狙ったストーカーの家から玲が出演していたA Vが見つかったことを、友梨から聞いた玲の凌辱され続けた過去を。顔を上げるとリサは口を手で押さえて絶句しており、日菜はただ黙って昇太を見据えていた。

「何、それ…。玲くん、そんな酷い目に会わされていたの…?」

気まずい沈黙の後、リサが声を震わせながら口を開く。

無理もない。蘭たちA f t e r g l o wのもう一人の幼馴染みが、蘭たちから聞いた話では正義感溢れる優しい少年が、口にするのもおぞましい事をやらされ続け、道具のように扱われ続けていたのだ。普通に両親に愛されながら、幼馴染みでもある友希那と仲良く遊んで暮らしてきたリサにはショックが大きすぎる話だ。

「…蘭ちゃんたちには話してないの?」

ずっと黙って昇太を見据えていた日菜が聞く。その視線に耐えきれず昇太は思わずそらしてしまう。

「言えるわけねえだろ…。お前らでもそんな反応なのに蘭たちに話し

たら…」

「昇太くんのバカ!!」

昇太の言い訳に日菜は昇太に思い切りビンタをした。

「あいつってえ!!?え?え?何すんの?!」

「ちよ、日菜!?!」

日菜から渾身のビンタをスパァン!といい音をたてながら食らい、サングラスが吹っ飛び、昇太は殴られた箇所を押さえながら困惑する。

「あのね!今、私たちが会って話しているのってその玲くんなの?違うでしょ!?!」

「い、いや、でもさ。」

「いやもでもないよ!」

日菜の剣幕に押され、昇太は黙ってしまふ。後ろにいたりサも突然の急展開に呆然とする。

「だって!あのとき玲くんが助けしてくれなかったら今のアタシはいなかったかもしれないんだよ!怖かったもん…!男の人に囲まれて…押さえつけられて…!そんな時に助けに来てくれた玲くんはカッコよかった…。私も玲くんみたいになりたいと思った…。」

玲が助けに来てくれた事を思い出しているのか、日菜は身体が震えそうになるのを両手で自分を抱いて押さえつけながら喋る。

「だから…だからアタシは玲くんに恩返しをしたい!もしこの町に玲くんを虐めてた人が来ているなら、アタシが玲くんの代わりに追いつす!」

「日菜…。」

日菜の啖呵を聞いた昇太はアホみたいに口を開けていた。が、すぐに反省する。

(なんだよ。日菜がこんなに玲に肩入れしていたなんてな。…うじうじしてんのがバカらしくなってきた。)

地面に落ちたサングラスを拾い上げながら昇太は自傷気味に笑う。そして、決意した。

「なあ、日菜、リサ。もひとつ、聞いてもらいたい事があるんだ。」

サングラスをかけ直した昇太はもう一度日菜たちを見据える。まだ何かあるのかと言いたげな二人を見て昇太は口を開く。

「実は今、玲に恨みを持っている連中が徒党を組んでこの町に来ているんだ。最悪、俺たちのグループと戦争になる可能性がある。」
「せつ…!?!」

戦争。日常生活からは程遠い単語が出てきてリサは戸惑う。それでも昇太は気にせず喋り続ける。

「俺はその親玉に脅迫されたんだ。お前が玲の弱点を吐かなければ、巴やあこを部下のおもちゃにするってな。」

「あこを!?なんって汚い奴なの!」

まさかの自分のバンドの身内の名が出てくるとは思わなかった上に関係ないあこを巻き込もうとする相手の魂胆にリサは憤る。

「だから頼む。俺たち不良は見回りをしているが万全じゃない。必ず

どこかに監視の穴ができる。そうなってからじゃ、遅いんだ。お前たちで埋めてくれないか?」

「分かった! パスパレのみんなやお姉ちゃんに伝言しておくよ!」

「アタシも、出来る限り友希那や学校の友達に伝えておく!」

「ああ、ありがとう。」

昇太は徹底抗戦を選んだ。もしどちらを選んでも苦しいのなら、自分で新しい選択肢を作ってしまう方がいいんだと。

「でもまず、やることあるよね?」

「…ああ。そうだな。」

日菜の言葉に昇太は頷く。

まずは、怯える子猫を獲物を震え上がらせる黒豹に戻すことからだ。覚悟を決めた昇太と玲を元気付かせようと張り切る日菜、そんな二人の背中を眺めるリサは雑居ビルへと向かった。

蘭たち Afterglow が知らないところで、戦いの準備が進められ始めた。

34話 反撃

数日後、雑居ビルの一室では数人の部下が慌ただしく動いていた。

「羽丘の近くに怪しい奴がいる？目え離すなよ。そいつが巴さんかあ
こちゃんに近付くようならブチのめせ！」

「商店街はおやつさんたちが見張ってるからと言って油断すんなよ
！」

「念のため花女の方の見回りも怠るな！」

部下たちがスマホで得た情報を直ぐ様、壁に貼ってある周辺の地図
に印を書き込んでいく。

「首尾はどうだ？」

部屋のドアが開き、玲が入ってくる。その顔は若干の疲れは残って
いるものの、数日前の怯えは鳴りを潜め、ギラリと鋭い目付きは元通
りになっている。玲が入ってきたのに気付いた部下の一人が近付き
報告をする。

「へいボスーやっぱりあっちこつちに別のグループと思う連中が町の
至る所にいるっぽいっすー！」

「時間別のデータはあるか？」

「これです。」

「ありがとよ。お前、将来こういうデータ管理の仕事向いてるかも
な。」

すかさずタブレットを渡してくる丸眼鏡の不良。玲は誉めながら
タブレットを受け取ると画面に整理整頓された情報を見る。

「朝方と夕方に目撃情報が多い事から多分ですけど、巴さんとあこ

ちやんの登下校を狙ってると思うんですが…。」

「十中八九、そうだろ。性格の悪いあいつだ。今、自分は昇太の弱味を握っていると勘違いしていやがるのさ。おそらく、昇太が俺の弱点をバラすのを断ったらすぐさま襲えと指示しているだろうな。」

「ちくしょう…なんて卑怯な奴だ！男なら正々堂々だろ！」

「普通に戦うならな。あいつは狡猾だ。力押しじゃ俺には敵わないと分かる。偶然迷い混んだ松原花音を人質にとる機転の速さから察するに、追い込まれたら自分にとって最良の逃げ道を作る才能がある。…あれも不良の一つの形なんだろうな。だから潰しに掛かるならまず大崎に気付かれないように外堀を埋めていく必要があるんだ。」

玲は自分なりに分析した大崎の戦い方を言いながら丸眼鏡の部下が作ったデータを見る。その横顔を見て丸眼鏡の部下は安堵の声を漏らす。

「…でも、ボスが戻って良かったです。数日前はマジで様子がおかしかったんですから、俺ら心配したんですよ？」

「…ああ。悪かった。」

「これも、日菜さん様々ですね。」

「あいつに借りを作るのは癪だけどな…。」

玲はそう言いながら顔をしかめる。玲が精神的に回復したのは数日前の事…

「あ、昇太のアニキ！戻って来たんす…って日菜さんとリサさんもどしたんすか？忘れ物でも…。」

「わりい。俺がいいって言うまで玲の部屋に誰一人近付かせるな。」

部下が言い終わる前に昇太がそう言うのと階段を一段飛ばしで上がって行って、日菜もついていった。最後尾のリサはジェスチャーで謝りつつ、日菜の後をついていく。

どうしたんだろうか。そう考えた直後、

「玲くーん!!入るよー!!」

日菜の大声と共にドアが蹴破られる音がした。ビルにいた部下たちは急いで音がした所へ向かおうとしたがその先にリサがいた。

「ちよ、ちよーつとストロップ!」

「リ、リサさん!何があつたんすか!?!」

「あー…、ごめんね?ちよつと日菜が今の玲くんが好きになれないってワケで…大丈夫だよ。昇太も一緒だから悪い方向には向かわないって。」

「で、でも…!」

「…戻ろうぜ。今のボスが元に戻るには俺たちじゃ役不足だ。ホントはAfterglowの誰かがやるべきなんだろうけど、今は日菜さんたちに託そう。」

説得を受けた部下が残りの部下にそう言うと、後ろ髪を引かれる思いではあるが受け入れ、すぐすぐと持ち場に戻っていった。

(ふー…聞き分けよくて助かった…。)

リサは一人ホツとする。そして、日菜が蹴破ったドアを見る。

(頼んだよ…日菜、昇太!)

「玲くん!!入るよー!!」

日菜がそう叫んだ直後、ドアが蹴破られる。思った以上に大きな音が出たため、昇太はリサに耳打ちする。

「わりい、リサ。ちよつと今の音で部下たちが来ちまうかもしれねえから引き留めて説得してくれるか?」

「あー…、うん。何となくそんな役回り来るかなーって思ってたよ…。いいよ☆受けたげる♪あとでファミレス奢ってよ?」

昇太は分かったよ。と了承したあと、部屋に入る。

そこには日菜の目の前に毛布を大量にくるんだ玲の姿があり、日菜を怯えた眼で見っていた。

「な、何の用だ…。もう、もう虐められるのはゴメンだ…。!」

見分けがついていないのか日菜から怯えながら距離を置く玲。

「玲くん!いつまでそうやってウジウジしてるの!?!」

日菜が言うと玲はビクリと身体を震わせ部屋の隅へ逃げ込む。

「頼むから…頼むから…!何でもするから怒らないで…!」

(あー、これじゃ逆効果か…。)

「なあ、日菜。今そのやり方じゃ逆効果かもしれねえ。俺に任せてくれないか?」

「むー…。」

昇太は日菜に耳打ちをして、交代する。日菜は不服そうな顔をするも部屋から出ていった。

「玲。俺が誰だか分かるか？お前の親友の蓮昇太だ。」

昇太がそう聞くと玲はこくこくと頷く。

「そうか、良かった。昨日何があったか教えてくれないか？」

昇太がそう聞くと玲の額から冷や汗が吹き出し、震え出す。

「…まだ無理そうか。じゃあ、今日起こったこと、報告するぜ。」

昇太はスツと目を閉じ、精神を集中させたあと、目を開く。

「玲…。俺は、お前が変態どもから犯されていたことを勝目友梨から知った。」

昇太のその言葉に、玲は血の気が失ったような顔になった。普段の玲ならば、おちよくってはぐらかす余裕があるのだが、

「何で、何でだよてめえ…。」

震えながら昇太に詰め寄り、胸ぐらを掴む玲。だが、すぐに力なく離し、項垂れる。そんな玲に昇太が話しかける。

「殴らねえのか？」

「…いいや。どうせバレる事だと心のどこかで思ってたんだ…。そうだよな…。無害なはずの若宮イヴを怖がっていたり、今のこんな情けない姿を見たら、そりゃ気になるよな…。はは…。」

自傷気味に力なく笑う玲。更に玲は喋る。

「なあ、俺の過去を知ったあんたはどう思った？ただ生きたいが為に、殴られないために変態どもに向かって自分のケツを振って誘う淫売か？惨めで哀れな孤児か？そんな悲惨な過去から逃げ続ける臆病者か？」

「…少なくとも、そのどれでもないな。」

「じゃあ何だよ!？」

「そんなの決まってるじゃん。玲くんだよ。」

玲の逆ギレに近い質問に部屋から出ていたはずの日菜が戻っており、答える。そして、日菜の言葉に玲は気付く。

「おい…、こいつにも喋ったのか!？」

「まあな。日菜と、リサには喋った。」

昇太のさらっとした答えに玲は拳を握り昇太を殴ろうとした。が、横から入った日菜に止められる。

「どけよ、日菜…。」

「やだ。」

「どけって言うてんだよ！じゃなきゃお前も殴り殺してや…」

「バカ!」

玲が恐喝している最中に日菜が玲を殴る。殴られた玲はバランスを崩してしりもちをつく。そして日菜は玲の胸ぐらを掴みあげる。

「いい加減にしてよ玲くん！今ヤバい人たちから巴ちゃんとかこちゃんが狙われているのにそんなウジウジしていいの!？昔の玲くんと同じ目に遭っちゃうんだよ!？」

「と、巴…？あこ…？なんで、そいつらが出てくるんだ…？」
「それは俺から話す。」

突然出てきた幼馴染みとその妹の名に戸惑う玲に昇太が話しかける。

「今日、勝目友梨からお前の過去を聞いているときに大崎の奴が出てきて、俺は脅迫されたんだ。お前の弱点を吐かなきゃ巴とあこを部下に襲わせる…ってな。」

「……………」

「なあ、玲。もう過去は忘れろ…………いや、もうどうしても忘れられねえか。なら、もう縛られるな。お前は充分苦しんだからな。」

そうやって昇太はポケットから一枚のDVDを出した。

「それって…」

日菜が答える前に昇太はそのDVDを真つ二つに割る。

「もうこんな物に囚われる必要はねえ。」

DVDを割っていく昇太を見て玲は呆然とした顔から段々と顔つきが戻っていく。

「…その顔だよ。俺は今その顔のお前が見たかった。」

「…そうだな。ありがとよ、昇太。おかげで目が覚めたぜ。」

「ねえねえ、あたしはー？」

「お前には絶対礼は言わねえ。調子に乗るな。」

「えー、玲くんそれ差別だよ差別ー!!」

「いいじゃねえかよ、玲。俺も日菜のおかげで目が覚めたしな。」

「はあ、憂鬱だ…。」

日菜に借りができた事に頭を抱える。そして部屋から出るように踵を返し、歩いていく。

「これから、ですよね？」

「ああ、大崎の奴は昇太の性格を利用したまでは良かった。だけど、奴は人選をミスしたからな。」

そう言って玲は部屋をあとにした。

人通りの少ない路地裏。その入り口には見張りらしき人物が二人立っており、一般人には近寄せがたい空気を醸し出していた。

その中に、昇太は来ていた。目の前にはかつての仲間、大崎が立っており、周りには大崎の部下が見張っている、下手な動きはできない状況だ。

「随分待たされたが、返事は持ってきたんだろうな？」

大崎は勝ち誇った笑みを浮かべながら昇太に尋ねる。

「…ああ。」

「じゃあ、答えてもらうぜ？神前玲の弱点…それは何だ？」
「玲の…弱点は…」

昇太は唇を噛み締めながら話していく。それを大崎は良心の呵責に苛まされていると判断し、口角を上げる。しかし、その予想は外れた。

「P a s t e l * P a l e t t e s … の … プツ、クク…ひ、氷川日菜と、若宮、イヴちゃんだ…。」

出てきたのは大崎には聞いたことがない人物の名前だった。先ほどの良心の呵責と思つてたそれは、ただ笑いをこらえているだけだったのだ。

「…は？」

「あつはつはつは!!誰がお前に玲の弱点を教えるかバカ野郎!そのマヌケっ面、玲に見せてやりたいぜ!」

腹を抱えて笑い出す昇太に大崎は額に青筋が浮かび上がる。

「…おい。お前、今自分がどういう状況に置かれてんのか分かつてんのか?」

「おいおいそんな怒んなよ、鉄分ちゃんと取つてんのか?」

「…っ!この…っ!」

「お、落ち着いてくれ!ボス!」

昇太の煽りにキレた大崎は直ぐ様殴りかかろうとしたが、そばにいた部下に窘められる。その様子を昇太は余裕綽々で見ている。

「おいおい、そんなカツカすんなってー。」

「ボ、ボス、落ち着いて!人質、いるんでしょ!?!」

部下に諭され大崎は少し冷静になる。

「昇太あー！てめえがそんな態度なら、これから中継で宇田川巴とその妹がやられるのを見てやがれ！」

大崎が映像を出すところには一緒に下校している巴とあこの後ろ姿。その様子をテレビ電話で中継しているようだ。その映像を見た昇太は焦り出す。

「あ、おいおいおい。止めろ、そこは止めろ。」

焦り出した昇太を見てまでも形成逆転したと確信し、口角を上げる大崎。

「いや、もう止めねえさ。恨むんなら、こいつらを見捨てた自分を恨むんだな。」

この日、Roseliaの練習が休みだったあこは姉と一緒に商店街を通って帰っていたのだが、ここ最近の落ち込み具合に心配になっていた。

（おねーちゃんどうしたんだろ…。なんだか最近元気がないけど…。これって玲兄ちゃんとか昇太兄ちゃんに相談した方がいいのかな？）
「宇田川巴とその妹だな？」

そう考えていると、後ろから声をかけられた。

「へ？」

「な、何だお前ら!？」

後ろを振り向くとそこには明らかに敵意しか感じない不良の集団。あこはその不穏な雰囲気には晒され、巴の後ろに隠れる。

「お、おねーちゃん…この人たち、昇太兄ちゃんの知り合いじゃないよね？」

「大丈夫だ、あこ。アタシに任せろ。」

震えるあこを庇いながら巴は不良の集団を睨み付ける。

「アタシに何の用だ？」

「へへ、用？ そうだなあ。お前らの知り合いから聞いたらどうだあ？聞ければだけだよ。ギャハハハハハ！」

話を通じない。そう判断した巴はあこの手を握り走り出す。

「おい、どこ行くんだよ？」

が、逃げようとした先にも仲間がいた。四面楚歌の状況に置かれてしまった巴とあこは身を寄せ合う。

「俺、あのちっちえ奴やるわ。」

「うーわ、ロリコンかよ。引くぜ。」

「おい、姉妹并って奴やってみねえか？姉と妹、仲良くやるんだよ。」

「いーじやんいーじやん。ヤっっちゃおうぜ！」

「お、おねーちゃん…！怖いよ…！」

「止めろ…！あこにだけは手を出すな…！」

巴は近付く不良を殺さんとばかりに睨み付けるが、それでもへらへ

らと笑いながら近付く不良たち。

しかし、この時、大崎の部下の不良たちは宇田川姉妹のみに視線が集中してしまっており、その様子を見ている少女に気付かなかったのだ。

「さあ、ロックンロール。」

少女がそう眩き、手に持っていたキーホルダーのような物の紐を引っ張ると、けたたましい音が鳴り響いた。

「な!? 防犯ブザーだど!?」

突然鳴り響いた音に不良たちが戸惑い、音がした方向を見る。巴とあこも音がした方向を見るとそこには不自然に伸びた前髪、どこか見覚えがある赤いカーディガンを着た少女が防犯ブザーを鳴らして立っていた。

「由美!」

「おいガキ! てめえそれを寄越せ!」

不良の一人が由美に襲いかかろうと走り出した瞬間、由美の後ろからフライパンが飛んできた。

「ぐわ!」

フライパンが頭に直撃した不良はそのまま崩れ落ちる。

そして由美の後ろには顔に傷がついた体格のいい男が般若のような顔になって立っていた。そして、その人物は巴がよく知っている人

物だった。

「巴ちゃんとかこちゃんを虐めるのは、よしてもらおうか…。」

「しよ、昇太の親父さん!？」

低い声で不良たちを睨む昇太の父。だが、数で勝る不良たちは脅しにかかる。

「なんだおっさん!ぶつ殺されてえのか!？」

「俺らを誰だと思ってるんだ!大崎様の部下だぞ!」

「知らん。それにお前らは自分の状況が分かってないようだな。」

昇太の父がそう言うとき多くの雑踏が聞こえてくる。何の音だと見渡した不良が目にしたのは、

商店街の人々だった。一人は花屋の店主。一人は精肉店の店主。

一人は買い物袋を持った主婦。それぞれが不良たちを睨んでいた。

すると、一人の不良が前に出る。どうやら脅して追っ払おうという魂胆だ。

「おう、何だお前ら!いいぜ、死にたい奴は一步前に出な!」

この不良は脅しが得意でそれにビビる弱者から金を巻き上げるのが趣味だった。そして大崎と出会い、彼の腰巾着になりながらも弱者を脅し、金品を巻き上げる。今回はちよつとばかり数が多いが行けるだろうと考えたが、

全員が一步前に出た。

「…あー、わ、わかった!いいぜ、お前ら全員死にてえんだな?」

全く効かなかったことで若干声が震えているが持ち直す。そして宇田川姉妹を指さす。

「こいつらがどうなってもいいんだ…」

不良がこの日最後に見たのは不良に襲いかかってくる中年たちだった。

35話 危機

(ど、どういう状況だ?これ?)

巴は今現在の状況の変化に追いつけずにいた。

さつきまで玲とは無関係の不良たちから自分と愛する妹の貞操が狙われていたかと思いきや、由美の防犯ブザーを皮切りに、突然昇太の父親を筆頭とした商店街の人たちが不良を懲らしめ始めたのだ。

目の前ではボコボコにされて固まって縮こまる不良を睨む大人たちがおり、軍配は商店街の人たち上がったようだ。

「つたく、巴ちゃんとあこちゃんに手え出すなんざ、百年早いぞガキ共!!」

「そうだそうだ!」

「俺らの目が黒い内にとつとと失せな!」

宇田川姉妹に近付いた不良に向けた怒号を受け、ボロボロになった不良たちは気絶した者を抱えながら尻尾を巻いて逃げ出していった。

「ともねえ、あこねえ。大丈夫?」

啞然とする二人に声をかける赤いカーデイガンを羽織った少女。幼馴染みが拾ってきた捨て子、神前由美だ。

「由美ちゃん…うえ〜くん、怖かったよお〜!」

あこは恐怖から解放された安堵から泣きじやくりながら由美に抱きつき、由美はあこの頭を撫でて宥める。前にあこは由美を見て、妹ができたとはしゃいでいたが、今の状況だとどちらが妹か分かったものじゃない。

「ごめんな、由美。アタシだけじゃどうにもならなかったよ。…にしても、その服って…。」

巴が感謝しながらどこか既視感がある服を指摘すると、由美はよくぞ聞いてくれたと言わんばかりに胸を張る。

「これ、蘭ねえのお父さんがくれた。昔、蘭ねえが着ていた服だって。これで私も蘭ねえに近づけるかな？」

そう言っただけでよく見えないが目を輝かせる由美を見て巴は微笑みを浮かべた。

「な…、何だ、これは…。」

テレビ電話から中継されていた映像を見て大崎とその部下は絶句する。映像は右へ左へとブレまくり、怒号と悲鳴の大合唱が奏でられながら映像が終わったのだ。そんな大崎たちに昇太は呆れたように喋る。

「あーあ、だから止めろと言ったのに…。なあ、大崎。お前、長く離れてたから忘れてたのか？ 巴は商店街のおやっさんたちの人気者だぜ？」

昇太の言葉を聞いた大崎はゆらりと振り向く。そして一步一步、ゆっくりと歩き、昇太の前で立ち止まる。

「…なんでてめえはそんなに余裕綽々だ？ 死にてえのか？」

大崎の手には鉄パイプが握られている。おそろくどう答えても殴ってくるだろう。しかし、昇太の表情は変わらなかった。

「落ち着」

昇太が口を開いた瞬間、大崎は鉄パイプを振りかぶった。が、突然飛んできた小石が大崎の手に命中し、鉄パイプが落ちる。

「俺がここにいるからだよ。」

手を押さえてうずくまる大崎の耳に一年前聞いた忌々しい少年の声が入る。

「神前、玲……！」

「まったく、見張りならもう少し警戒心が強い奴を置けよな。カカシみたいに突っ立ってるからうっかり倒しちまったぜ？」

まるで美少女のような悪魔の笑顔で昇太の側へと一步一步、足を動かす玲。周りの大崎の部下は襲おうと思えば襲えたが、動けずいた。身を少しでも動かそうとすると冷徹な視線に睨まれるからだ。

「俺に復讐するつもりだったようだが、残念だったな。」

「この、悪魔があ……！」

大崎は玲を睨むも、玲はどこ吹く風な態度で大崎を見下す。

「何とでも言いな。さて、これで王手だ。俺の目が黒い内にさっさとそのケツ捲って逃げ帰るんだな。」

玲は悪魔のように口を歪ませる。明らかに大崎の方が不利な状況。

玲の勝ち是谁の目から見ても确实だった。

「は、ははは……！」

だが、大崎は笑った。

「……どうした？ ついに気が触れたか？」

「なあ昇太、俺が言った言葉はちゃんと覚えておきな。俺は、『宇田川巴とその関係者が悲惨な目に遭うぜ』と言ったぜ。商店街の連中は想定外だったが、残りの連中はどうなる？ たしか、Afterglowの美竹蘭だったか？」

大崎が口に出した名前に玲の顔に余裕が無くなり、踵を返して飛び出していた。

「おい、玲！ 待て！」

昇太も慌てて後を追いかける。そして、場に残った大崎はニヤリと笑った。その笑みは、子供の頃から疑問だった事柄がようやく理解できたような、スッキリした笑みだった。

「あの動揺っぷり、ドS野郎の言う通りだったな。あいつはガールズバンドを組んでいる奴と縁があるってな……。」

「ボ、ボス。いつの間に……？」

大崎が一人でニヤついていると置いていかれている部下が尋ねてくる。いつの間に関係者の知らない間にそのような根回しをしたのだろうか。大崎は腰を上げながら答える。

「巴の関係者の内、一人を目撃したやつがいたんだよ。そいつにさられてくるように伝えたのさ。それよりも撤退だ。ここが商店街の

連中にバレるのも時間の問題だからな。」

そう言つて大崎とその部下は逃げるようにその場を後にした。

「…ダメだ。全然思い浮かばない。」

蘭は一人、公園で歌詞の見直しをしていた。由美に励まされた事で考えていたが、一人で考えるだけでは限界があり、ずっとにらめっこする有り様だった。

(何も、分からない。分からないから、思い付かない。思い付かないから、書けない…。)

「はあ…。」

思わず、ため息が出る。由美から喝を入れられたのにも関わらず進捗がない有り様に自己嫌悪してしまう。

「あー蘭ちゃんだ！おーい、蘭ちゃんー！」

すると、突然話しかけられ頭を上げると一学年上の先輩、氷川日菜がこちらに向かって走ってくるのが見えた。

「え、日菜先輩!？」

「あ、何これ？新曲の歌詞？見せて見せてー！」

「あ、ちよっちよ!？」

戸惑っている間にも日菜は蘭が書いた歌詞を読み始めた。そして、

読み終えた日菜は難しい顔をした。

「んー…、ねえ蘭ちゃん。この歌詞って、どういう意味なのかな？」
「え？」

「何となーく、カッコいいと思うよ？でもさ、何が言いたいのかよく分からないんだ。」

「…あたしにも分かりませんよ。誰もその歌詞の意味、分からなくなっちゃったんですから。」

「ふーん、そっか。」

蘭の答えを聞いた日菜は「でもさ、」と言葉を続ける。

「分からないことって、楽しいと思わない？」

「…全然楽しくないです。分からないのってすごくツライです。」

若干イラつきながら答える蘭。その事で今、幼馴染とも気まずい雰囲気になっていっているのに何をのたまうのかこの先輩は。そう心の中で愚痴をこぼす。だが、日菜はそれでも喋り続ける。

「アタシもさ、よく色んな人から分からないって言われるんだ。でも、パスパレの皆や玲くんは違って…」

玲。その言葉を聞いた蘭は少し身じろぎをする。あの時、逆ギレしてそのままの幼馴染み。今はどうしているのだろうか。

そう思っている間にも日菜の舌は止まらない。

「一緒に分かんない事を考えてくれるんだ。だから、アタシはパスパレの皆や玲くんが大好きなんだ！」

「…!!」

分からないなら一緒に考える。その言葉で蘭は閃きを得る。

もし、幼馴染み皆で歌詞を考えれば突破口が見えるのだろうか。玲に怒ってしまったことを謝ってから頼めば一緒に考えてくれるだろうか。一つの光明が見えてきた。

「おやおやあ？また会ったね、赤メツシユの嬢ちゃん。」

その矢先に、悪雲が迫る。ついこないだ聞いた男の声。玲が怯えた男の声だ。蘭が咄嗟に声がした方向に視線を向けるとそこにはニタニタ笑いながらゆっくり歩いてくる男がいた。どうやら今回は一人のようだ。

「…あ、あんたは…！」

「覚えてくれたのかい？嬉しいねえ。じゃあ、そのお礼に…」

男は自身のポケットの中をまさぐり、何かを取り出す。それは、革製品の紐を輪の形に括ったもの。ペット等の首に着ける首輪だった。

「そこのお嬢さんと仲良く調教して、黒猫ちゃんに見せてやる。へへ…、その丈のスカートだったら、四つん這いにしたとき見えちゃうかもなあ？」

「っ…！」

男の下卑て座った視線が蘭と日菜の身体を舐め回すように見つめてくる。蘭はその視線から逃げるように後ずさる。あの時は玲が助けに来てくれた。でも、今助けを求めても玲は来れるのだろうか？来てくれるとしても間に合うだろうか？その不安が蘭の頭を支配する。すると、蘭を守るように出てくる者がいた。

「…蘭ちゃんは下がって。この人、とてもやな感じがする！」

日菜だ。蘭を守るように仁王立ちをして男と向き合う。すると、男

は目を細めた。

「…へえ。その目、いいじゃん。俺さあ、そういう目を見てるとさあ…」

男がブツブツ呟きながら身体をふらふら振り子のように動かしていたかと思ったら突然走り出した。

「痛めつけて歪ませたくなるんだよおおおお
!!!!!!」

そう言って取り出したのは鞭だ。それで日菜を痛めつける魂胆のようだ。

「っ、危ない!!」

咄嗟に蘭が叫ぶ。だが、日菜は動揺した様子もなく、素早く手刀で鞭を持つ手を捌き、鳩尾に膝蹴りを叩き込んだ。

「げぼっ…!?!」

「手加減したから、痛い目を見ない内にさっさと消えて。」

あっさり打ちのめされ、咳き込みながら崩れ落ちる男。玲から護身術を教わっていた日菜にとって目の前の男は敵ではなかった。

「ぐ…く、くくく…強いなあんだ、すっげえ腹立つな全くよお!」

だが、男は苦悶の声を上げながらも笑っていた。その様子を見て日菜は怪訝な顔をする。

「何がおかしいの?」

「いやあああー!?!」

日菜が問い詰めようとした瞬間、後ろから悲鳴が上がった。咄嗟に振り向くと、そこには複数の男に囲まれている蘭の姿があった。おそらく男の手下だろう。

「へへへ、俺らと遊ぼうぜ？かわいいこちゃん。」

「やだ！放して！」

「し、しまった！蘭ちゃん！」

日菜は蘭を助けようと走り出そうとした。だが、突然足が動かなくなり、バランスを崩した日菜は地面に倒れる。痛みに耐えながら足の方を見ると先ほど打ちのめした男が日菜の足を掴んでいた。

「な…放してよ！ヘンタイ！」

日菜はもう片方の足で男の頭を蹴ろうとしたが、その足も捕まれてしまう。そして、馬乗りにされ、顔を地面に押し付けられる。

「これで形勢逆転だな。お友達を守れなかった気分はどうだ？ええ？」

男は鳩尾のダメージが残っているのか腹を抱えているが日菜を見下し笑う。

日菜は何とか抜け出そうともがくが男は更に力を入れて日菜の顔を地面に押し付ける。

「さーて、まずお前から首輪を着けてやる。ありがたく思えよ？」

「ぐっ…、ら、蘭ちゃん！」

口の中に砂利が入っているのにも気にせず蘭の方に視線を向けると、取り囲んでいる男の内一人がスカートの中に頭を入れようとして

いるのを必死に両手で押し退け抵抗する蘭の姿が見えた。

「さーて、どんなパンツ穿いてんのかな〜？」

「い、いやっ！やだっ！やめて、見ないで…！」

「あー、こいつ真っ赤になってやんの。かーわいー。」

「ほらほら〜。後ろがから空きだぜ？」

「へえ〜。柔らかかそうでいいケツしてんじやん。パンツの食い込みエツロ。」

「あつ、やだ！見ないで！見ないでったら！」

必死になって恥じらう蘭の反応を見てニタニタ笑う男たち。両手が前からスカートの中に頭を入れようとする男の頭を押さええていて塞がっているのを良いことに別の男が後ろから蘭のスカートをめくり、下着をまじまじと眺め始めた。

「も、もう…いやあ…見ないでえ…。」

「あれ、泣いちやった？スカートめくってパンツ見られただけで泣くってコイツどんだけウブなんだよ、ギャハハハハハハ!!」

「うおつ。こいつ、太ももスベスベで最高だぜ。」

男たちは下卑た笑い声を上げながら蘭の太ももやスカートの中を撫で回し始めた。日菜は動きを封じられ、ただ見ているしかできない自分が情けなくなり、心の中で玲に謝るだけだった。

「んっ、やつ、やあつ！そこっ、ダメっ、触らなっ、やつ…！」

（ご、ごめん、玲くん…蘭ちゃんを、守れなかつ…）

「……………そこまでです。」

その時、日菜の背後。正確には男の後ろから聞き覚えがある声が待ったをかけた。

(この…、声って！)

まさかと思い、日菜が声が出た方に首を動かすと、

「これ以上の狼藉は看過できませんよ。」

弦巻家の執事が若干殺意が籠った目をして首輪を持っている男の手首を掴んでいた。

36話 思わぬ助っ人

「何だあんた?」

男は苛立ちながら雨宮を睨む。だが、雨宮はそれに臆した様子もなく話しかける。

「通りすがりの執事です。貴方たちに忠告します。さつさと引き上げて下さい。」

両者聞く耳持たず。男は折角のいい気分が台無しにされた怒りからもう片方の手でポケットに入れていたナイフを持つ。

「てめえ…邪魔すんじやねえよ、ああ!」

「…忠告はしましたよ?」

だが、それに気付かない雨宮ではない。低い声でそう呟いた直後、素早く手を捻る。

ゴキッ。

骨が折れる音が響いた。

「うっぎやああ!」

男は痛みに悶えながら押さえ込んでる日菜の上から転がり落ちる。手を押さええて転げ回る男に目もくれず、雨宮は日菜の身体を優しく起こす。

「日菜様、お怪我はございませんか?」

「う、うん。」

「結構。では、貴女は蘭様の救助を。」

「分かった！」

「くそがあ！てめっ、てめえ、よくもお！」

安全確認からの流れるような指示。それに素直に従った日菜は蘭を取り囲んでいる不良たちの元へと走る。男は額から脂汗を吹き出しながら雨宮を恨めしそうに睨む。

それに対し雨宮は男に再度忠告する。

「もう一度言います。失せろ。」

その時の雨宮の表情はいつもの優しい笑顔は鳴りを潜め、底冷えするような声だった。

男は連れてきた不良を囮に襲おうと蘭を捕らえている不良の方へ視線を向けたが、既に全員、日菜に倒されており、不良たちを叩き伏せた日菜が蘭の安否を確認していた。

「…くそっ！覚えてやがれ！」

男はそう吐き捨てると公園から走って出ていった。

「今日の夜まで覚えておきましょう。」

雨宮は間髪入れずに笑顔でそう返す。

そして、蘭の元へと走っていき、日菜に蘭の様子を尋ねる。

「日菜様。蘭様は何もされていませんね？」

「大丈夫だよ、雨宮さん。ちよつと怖い目に会っちゃったけど今は落ち着いてる。正直、あたしだけじゃ、どうにもならなかったよ。ありがと！雨宮さん！」

「いえいえ、貴女は薫様のご友人ですから。」

日菜に感謝されるもいつもの見慣れた笑顔で返す雨宮。その後、日菜が不思議そうに首をかしげる。

「うーん、でもどうしてこころちゃん一筋の雨宮さんが私たちを助けに来たのかな？」

「あ、それ、あたしも気になった。」

「ねえ、どうしてなの？」

「そうですね…。実は私、ある人物から依頼を受けております…。」

それは昨日の事、雨宮はここ最近、不良たちの動きがいつもと違うことに感付き、こころの出迎えをしたのだ。

校門前で待機をしていると下校する生徒の懐疑の目に晒される。何故ならいつも着ている執事服のまま迎えに来たからだ。それでも気にした様子もなく、周りを見渡す。道路を挟んだ向こう側に不良がたむろしているのが見えた。

（やはり、ここにも不良が…。おそらく、あれは玲のグループの者だな。）

しかし、何故ここに？そう考えている間に不良は雨宮と目が合うと会釈をして去っていった。

（ふむ、さては玲の指示だな？僕がここにいるなら、ここら辺は安泰だと判断したんだろうな。…だが、一体どうしたことだ？玲の奴、どこか別グループの不良を追い出すのに失敗したのか？）

「すみません、雨宮さん。ここで何をしていますか？」

雨宮が考察に入っていると後ろから声をかけられ、振り向く。
そこにはジト目で雨宮を見つめる風紀委員がいた。雨宮は体ごと向き直す。

「これは紗夜様。何をしているかと申しますと、こころ様のお出迎えですが？」

「でしたら、中で待つててください。そこに立っていると、下校する生徒の目に入り、気になってしまいます。」

「おや、これはお気遣い感謝いたします。」

「ここ最近、この辺りも物々しくなってきましたから。校門前に待機している人を見たら気になりますよ。まったく、神前さんは何をやって…。」

「あら！雨宮じゃない！」

紗夜がそう愚痴をこぼしているとまた声をかけられた。声が出た方に視線を向けると笑顔を浮かべる令嬢と、その後ろで口許がヒクついている友人の姿があった。

「あ、あの、雨宮さん？なんでこんな所にいるんですか？すごい目立つんですけど…。」

「これは奥沢様。たまにはこころ様と一緒に下校するのもよろしいかと思ひまして。」

「嬉しいわ！雨宮が迎えに来てくれるなんて小学校以来だわ！」

「…まあ、いいか。最近、ここら辺、何か不穏な感じがしてたし。雨宮さんなら大抵の怪しいやつぶっ倒してくれるし…。」

こころは無邪気にはしゃぎながら見せる笑顔に美咲もつつこむ気が削がれ、苦笑いをするのだった。

「それじゃあ、一緒に帰りましょ！」

こころは雨宮の側に駆け寄り、手を握る。その様子はまるで飼い主に甘える子犬のようだ。しかし、雨宮が待ったをかける。

「こころ様。大変申し訳ありませんがその前に私に用事がある者が来ているようです。」

そう言つて雨宮が向けた視線の先。紗夜、こころ、美咲もつられて見ると、そこには前髪で目が隠れ、赤いカーディガンを着た少女が立っていた。

「あら？あなたは…由美ね！」

「え？由美ちゃん、どうしてここに？」

しばらく会っていない少女に、こころは嬉しそうに思い出し、それと対照的に美咲は困惑した。紗夜は過去のトラウマからか、無意識ながらスカートを押さえる。

「…私、雨宮に用があつて来た。」

由美はそう言つと雨宮の前へと歩いて来る。それに対し、紗夜はスカートを押さえたまま距離をとる。雨宮は由美と同じ目線になるよう屈み、尋ねる。

「ふむ、由美ちゃん。君が私に何の用があつて来たのかな？」

「蘭ねえを、守ってほしいの。」

「え、ええーと…どういう事？」

由美の短い発言に美咲が割つて入る。由美は美咲を一瞥した後、口を開く。

「蘭ねえ、今モカねえたちと喧嘩してて一緒にいけないの。でも今、玲

を狙ってる悪い奴らがこの町に来て、蘭ねえも狙われた。部下たちも頑張ってくれてるけど、でもまだ不安。」

「…なるほど。最近、商店街の雰囲気ピリピリしてるのそれが理由だったのか…。」

（日菜が話していた通りの事が今起こっているのね…。）

「だから雨宮。蘭ねえを守って、下さい。」

由美はそう言って雨宮に頭を下げる。雨宮は暫し由美を見つめ、口を開く。

「由美ちゃん。等価交換って知ってるかな？」

雨宮の質問に由美は首を振る。

「人は何かをするとき、それに見合ったご褒美を貰わないと動けないものなんだ。だから、ご褒美を何も持ってきてない由美ちゃんの頼みは聞けないかな。」

「ちよ、ちよつと雨宮さん！それはいくらなんでも…！」

厳しい現実を教える執事に美咲が口を出そうとする。だが、それを雨宮は手で制し、話し続ける。

「ですから、君の望みを聞いてあげる代わりに、僕が出す条件を飲んでくれないかい？」

「…うん、分かった。」

由美は唇を噛み締めながら頷いた。由美にとって蘭は今までゴミのように扱われていた自分を構ってくれた慕うべき人間の一人だ。その恩返しに何かしたいと考えていた由美は了承する。だが、それに待ったをかけた人物がいた。

「由美！あなたがそんな事聞く必要はありません！雨宮さん！あなたもあなたです！こんな小さな子に「こころお嬢様とお友達になつてくれませんか？」何を……え？」

紗夜が異議を唱えようとしたら雨宮から出された条件を聞き、勢いが失速する。由美もそんな条件だとは思ってなかったのか前髪でよく見えないが、目を丸くする。

「…そんなのでいいの？」

「勿論です。それに、こころお嬢様だけではありません。はぐみ様、花音様、薫様、美咲様、ミツシエル様。ハロー、ハッピーワールド！のメンバー全員とお友達になつて頂きたいのです。どうでしょうか？」

「だったら、いいよ。」

「と、言うわけです。こころ様。」

雨宮がにこやかにそう言うと、こころは目を輝かせ、全身で嬉しさを表現するように飛び跳ねだした。

「嬉しいわ！すっごく嬉しいわ!!由美とお友達になれるなんて！ありがとう雨宮！今日はとってもいい日ね！そうだわ、この最高の気分の歌を思いついたわ！」

「え？」

歌を思いついた。そのワードを聞いた美咲は慌ててバッグの中に入ってるボイスレコーダーを探し始めた。いつもなら四六時中ご機嫌なところは何時何処で歌を思いつくか分からない。だからどんな時もボイスレコーダーでこころの鼻歌を録音する準備はできていたが、この時ばかりは不意打ちだった。

「ラ〜ララ〜♪」

「ああ、待ってよこころ！今録音するからあ！」

「と、言うわけでございます。」

「由美…。」

「そっかー。だから昨日、お姉ちゃんいつも以上に不安そうにしてたんだ。」

雨宮が語り終える。蘭はここまで自分を助けてくれる由美に感動して、日菜は納得したように呟く。

「さて、君もそろそろ顔を出せばいいんじゃないかい？」

突然、雨宮が誰もいない公園の入口に向かって誰かを呼ぶ。

まだ懲りてないのか。そう感じた日菜と蘭は身構える。

だが、現れたのは見慣れた人物だった。

「ちっ…。ここでも察知するとかお前の目にはサーモグラフィでも付いてんのか？つーか、お嬢様の側にいらなくていいのかよ？」

「玲…。」

「玲くん…。」

玲は蘭を一瞥した後、気まずそうに目を反らす。そんな玲を見て、蘭は少し胸の奥がズキリと痛んだ。

「まあ、いい…。雨宮、正直助かった。」

「お礼なら僕じゃなくて由美ちゃんに言いなよ。僕はただ、由美ちゃんからの依頼をこなしているだけさ。」

「…おう。」

雨宮との会話を終えた玲はそのまま帰ろうとする。

このままじゃ駄目。その直感に蘭は従い、呼び止める。

「ね、ねえ！玲！」

蘭の声を聞いた玲はその場で立ち止まる。改めて見た玲の背中
前よりも沢山傷付いており、小さくなっているような雰囲気でした。

「その…、こないだは、ごめん！」

蘭の謝罪の言葉を聞いた玲はしばらく立ち止まっていたが、

「…俺も悪かった。」

そう言つて公園から足早に出ていった。

「ちよ、ちよつと玲くん！」

「いいんです、日菜先輩。」

日菜が呼び止めようとするが、蘭は必要ないと言う。

「あたし、どうするべきか分かってきたから。今は、玲のあの言葉で十分です。」

いつも通り。玲と喧嘩したあと、お互い謝る。それは蘭たちの中で
様式美だった光景だ。これならば、モ力たちともまた仲良くなれる確
信があった。

「うーん、蘭ちゃんがそう言うならそうなのかな？」

「さて、そろそろお帰りになられた方がよろしいですよ。」

雨宮がそう告げる。気付けばとつくに日は沈み、街灯が灯され暗くなっ
ていきつつあった。

「…とは言っても、この時間帯だと危険です。私がお家までお送りしま
しょう。」

雨宮はそう言いながらスマホを取り出し、コールボタンを押す。し
ばらくすると公園の入り口に妙に長い車がやって来た。その車を見
て日菜は目を輝かせ、蘭は呆然とする。

「わー！これってあれでしょ!?!」

「り、リムジン…?」

「その通りです。さ、お二方、どうぞ中へ。」

雨宮がドアを開け、催促すると日菜は、いの一番に入っていく。蘭は
その後を恐る恐るついていった。テレビのドラマや映画などでよく
海外のセレブが乗ってくるあの車に乗れるドキドキが止まらなかつ
た。

「あ。ねえねえ、あの時、ヘンタイの手首折ったじゃん？あれってどう
やったの?」

「あれは、手首の構造を理解してるのと、力の入れ方でああなります
ね。そうですね、まず…」

が、天才と執事が何やら物騒な会話をしている。蘭は別の意味でドキ
ドキだった。

番外編 つぐみ誕生日

一月。それは新年を祝う月で、年末年始で大騒ぎする月でもある。羽沢珈琲店はCLOSEの看板を掲げているが、中には看板娘の幼馴染みである玲がいた。今年、大人の仲間入りする看板娘が晴れ着を見て欲しいと頼まれたからだ。

「ど、どうかな？玲くん、似合う？」

つぐみの声に玲が視線を向けるとそこには茶色を基調としたデザインの着物に短い髪が結われて綺麗な髪飾りを着けたつぐみがあった。

「うん、良いじゃねえか。中々素敵だぜ？」

「えへへ、ありがとう。」

玲が率直な感想を言うつつぐみははにかみながらお礼を言う。

「…にしても、何で俺に見せたんだ？蘭とかのほうが良くないか？」

玲が突っ込むつつぐみの動きが止まる。

「え、ええと、それは、その…。」

顔を赤くして目を泳がせながらモジモジする姿。それを見た玲は察した。

「ああ、そうか…。つぐみ、お前まだ言えてないのか？」

「うう…。」

玲はイタズラっぽく笑みを浮かべてつぐみに近寄る。それに対し、つぐみは更に顔を赤く染めながら俯く。こうなった理由は少し前に

遡る。

それは、玲が珈琲店でくつろいでいるときの事だった。普段、玲は客が少なくなった時間帯にやってくる。この日もいつも通りの時間にやって来て、片手で頬杖をつきながらメニューを見て、つぐみを呼び、気配が近付いたのを感じながら注文する。

「つぐみー。今日もいつものやつで頼むぜ。…ん?」

いつも通りコーヒーを注文しようとした時、いつもなら元気よく返事をするつぐみが黙っており、不思議に思った玲が振り向くと、つぐみがポケットとどこか上の空だったのだ。

「…つぐみ? おーい、つぐみー?」

「…はっ。ご、ごめん、玲くん!いつものキリマンジャロでいいんだよね!?!」

慌てて注文をとるつぐみ。それを玲はじとっと見つめる。

「…俺がいつも頼んでるのはブレンドだよ。」

「あう…ゴメンね…。」

どこか様子がおかしいつぐみに玲はまさかと思い、カマをかけてみることにした。

「…ああ、そうか。したのか。」

「ふえっ!? ま、まだ告白してないよ!?!…あ。」

カマを掛けたらあつさり引つ掛かった。玲はニヤニヤしながらつぐみを見据える。

「あ、ああああ〜…。」

やってしまったと言わんばかりに頭を抱え、うずくまるつぐみ。それを見た玲は少しやり過ぎたと反省する。

「あー…ごめん、やり過ぎた。ちよつと戻つて頭を冷やしてごい。」
「…うん。」

幸い、店の中に今は玲しかおらず、注文をしてくるような客はいなかったため、頭を冷やす時間は十分にあった。

そして、話せるほど冷静になったつぐみはぽつりぽつり、喋り始めた。

要約すると、たまに店に来てくれる常連客がいるのだが、その常連客は羽丘とは別の高校の生徒会役員らしく、その共通点でつぐみと意気投合したようだ。

「…で、最近その常連客を見てると胸が苦しくなるような気分になると。」

玲はつぐみの話をそう纏める。白状したつぐみは顔を赤く染め、モジモジしながら尋ねる。

「こ、これって、やっぱり？」

「…だな。完全にホの字だ。」

「そう、なんだ…これが、そうなんだね…。」

つぐみは今の感情を噛み締めるように呟く。異性を意識するよう

な感情。つぐみの頭からまた湯気がポポポと沸き出そうな様子を見た玲は肩を叩く。

「お前さ、今日はもう休みな。その状態で接客されたら客が不安になる。」

「…うん。」

頷いたつぐみはふらふらと裏へと歩いて行く。その後ろ姿を見送った玲はつぐみが惚れた相手の素性を調べようと誓ったのだ。

「ええー………」
!!??!!??
つぐみさんが初恋いいいい!!
!?!」

その夜、玲が召集した部下たちの驚愕の声が雑居ビル中に響き渡る。その後の反応は千差万別だった。

「マジかよ、赤飯炊かなきゃ！」

「うおおお!!許さんぞおおお!!」

「誰なんすか!?!どこの馬の骨とも知らん奴っすか!?!」

「つぐみさんの彼氏かあ、ヒモになりそうだな…。」

純粹に祝う者から怨嗟の声をあげる者、付き合ったらどうなるか妄想する者までいる始末だった。

「おい！静かにしろ！」

そんな部下たちの混沌を玲は一声で治める。

シンとなった部下たちを見渡した玲はつぐみが惚れた相手かどのような人物か、つぐみから聞いた素性を伝える。すると、一人の不良が手を上げた。

「あの、ボス。そいつ、俺が通ってた高校の風紀委員つす。」

「そうか。じゃあ、どんな奴だった？」

「うーん…、小学校から一緒でしたっすけど、ずっと無遅刻無欠席で真面目を具現化したような奴でしたよ。」

「…そうか。もつと他に無いのか？」

「うくん…：あ、確かあいつ、女が苦手で、小学校の時、運動会の恒例の女子とフォークダンスすることになったんだけど、破廉恥だとわめて運動会無くそうと募ったら先生にこっぴど怒られ運動会出禁になったって伝説があるんすよ。」

「…：そうか。」

判断に困る話だ。玲はそう思い、どうするべきか腕を組み、考える。

「なんでえ、女嫌いかよ。」

「つーか、運動会の恒例行事に文句つけたりするくらい女嫌いって、もう筋金入りじゃねーのか？」

「じゃあ、何でつぐみさんは平気なんだ？」

「これもつぐみさんの優しさが成せる業じゃねえの？」

「やべ…：なんか、俺応援したくなってきたかも…。」

何やら部下の間で同情が出始めた。これはいけない。そう考えた玲は手を叩いて注目を集めさせる。

「まあ、そいつの外はそんな感じだと分かった。後日、直接見て俺が判断する。今日はこれで解散だ！」

玲の指示でその日の集会はお開きとなった。

後日、つぐみが働いているときにお邪魔させてもらった玲はいつも

のコーヒーを飲んで件の相手が来るまで待っていた。
時間にして二十分。来客を知らせるベルが鳴る。

「いらっしやいませー！あ、今日も来てくれたんですね！」
「ど、どうも、つぐみ、つぐみさん。」

来たか。何やら噛んだようだがどのような男だろうか。そう思い、
視線を向けると、

ブリキのロボットのような動きをする好青年がいた。あれがつぐ
みが好きな男性なのだろうか？そう怪訝に思い、つぐみの表情を見る
と、ほんのり頬が赤くなっているのが見えた。

(…ああ、このロボット野郎かよ。)

「え、ええと、いつものブラックだよね！」

「は、は、は、はい！そうです！」

男の方もやましい事など考えていないようで純粹につぐみに惚れ
たようである。これだけで判断材料は十分だ。玲は店を出る事にし
た。

「行けると思うんだがなあ。コクったらOKだと思うぞ？」

玲はため息を吐きながらつぐみに指摘するとつぐみは顔中真っ赤
になる。

「で、で、でも」

「でもも何もねえよ。…はあ、つぐみ、ちよつと来い。」

玲はそう言ってつぐみの手を取ると、店を飛び出していった。

「あ、あの、玲くん？どうしたの？」

公園まで連れて来られたつぐみは困惑する。連れてきた玲はポケットからガムを取り出し、咀嚼する。

「…そろそろ来るな。」

「えっ？」

玲の発言の意図が掴めず首を傾げると誰かが公園に入ってきた。その足音を聞いたつぐみが目を動かすと、

「っ!? つつつつつつぐみさん!？」

「あ、あああああああなたは!？」

つぐみの想い人がいた。つぐみが困惑していると玲がつぐみに近づいて来る。

「れ、れれれ玲くん! まだ心の準備が…！」

目をぐるぐるさせながら玲に文句を言おうと顔を向けた瞬間、

玲とつぐみの顔がくっついた。

「…えっ？」

それは誰が出した声だろうか。その場の時間が停止したかのよう

な空気が流れる。

「う、うわああああ!! つぐみさんに何をするんだあ!!」

一番最初に動いたのはつぐみが惚れた好青年だ。玲に向かって拳を突き出す。

が、玲は空に舞う絹のようにするりとかわすとそのまま逃げて行った。

「つ、つぐみさん! 大丈夫ですか!？」

玲が逃げ去ったのを確認した好青年はつぐみの肩を掴み、呼びかける。

「う、うん? 大丈夫、だよ?」

急な展開についていけず、つぐみは目をパチクリさせながら頷く。しかし、青年もつぐみの肩を掴んでいることに気付き慌てて手を離す。

「はっ、すつすいません!! でも、ああ…つぐみさんの唇が…。」

「あ、あの…。」

落ち込む青年につぐみが呼びかけ、青年が顔を上げる。

「実は、ファーストキスは、まだだよ?」

そうやってつぐみが手を広げると、つぐみの手には、ガムの包み紙があった。

(ガムの包み紙?... あいつ、さては僕には見えない角度でこの包み紙

でキスをする振りをしてたのか!?!…いや、でもどうして?)

青年はキスをした少年が何をしたかったのか分からず、困惑している。つぐみはモジモジしながら意を決したように口を開く。

「あ、あの、その、私で良ければ、そのお付き合い、しません、か?」

(なんだ、言えるじゃねえか。)

隠れながら様子を見ていた玲はニヤリと笑う。

実は、これは玲が手引きした作戦だ。つぐみを連れ出し、青年も知り合いである部下を使って呼び出させる。

そして、ガムの包み紙を使い、つぐみにキスをする振りをして激昂したらそのまま退散する作戦だ。

見事に引掛かってくれたようで、今はぎこちないながら会話しあっている様子だ。

(ちよつと早い誕生日と成人祝いのプレゼントだ。幸せにな。)

玲は心の中で祝杯をあげながらその場を後にした。

誕生日当日。つぐみの誕生日パーティーを行っている羽沢珈琲店で四人分の驚愕の音が響き渡った。

「つ、つぐがあ!?!」

「おー…、これにはモカちゃんビックリだー。」

「大丈夫なの? そいつ本当はつぐみを狙った悪漢じゃないの?」

「蘭! そんな事言わないの! はあー、つぐの彼氏かあ…。どんな人な

の!？」

彼氏ができたことを報告すると案の定、幼馴染み四人組から質問攻めされることになった。

そして、彼氏の話をするとその度にひまりが黄色い歓声をあげ、蘭は半信半疑ながらも相づちを打つ。

「…にしても、ここに玲がないのがほんつとうに惜しいなあ。あいつ、どんな顔したんだろうな。」

巴はここにいない黒一点の幼馴染みの事を話題に出した。

「あ、玲くんには私が付き合えるように手助けしてもらったんだ。」

「ええ!？れ、玲があ!？」

「…何であたしらには黙ってたわけ?」

「うーん、仲間外れはヒドいよね。」

巴の呟きを拾ってそう返してしまい、また騒然となってしまった。つぐみのいいところでもあり、悪いところが出てしまい、慌てたつぐみは必死に取り繕う。

「あーた、ただ、アドバイスマいたいなものを受けただけだよ!？」

「えー!？何?玲はどんなアドバイスしたの?!教えてよ、つぐみ!」

切り上げようとしてもひまりが食らい付く。どうやら今後の参考にしようと根掘り葉掘り聞き出す気だ。

でも、つぐみは言えなかつた。何せあんな大胆すぎる方法で彼氏とくつつくことができたと知ったら、少なくとも蘭は阿修羅と化すかも知れないからだ。

「え、ええと、それは…その…」

「あ。窓の外にれーくん発見。」

どう話を反らそうか考えているとモカが外を指さした。

指さした先には玲が足早に去って行く姿が見えた。おそらく、様子を見に来ていたようだが、モカと目が合った瞬間に逃げ出したのだろう。

「ま、待って玲！どうやってつぐに彼氏作らせたのか教えて!!」

このままじゃ見失う。最初に行動を起こしたのはひまりだった。

「よし、追うぞ、蘭！」

「…つぐみのあの反応、何吹き込んだのか聞き出さなきゃ。」

「蘭もやる気満々だね。じゃあ、モカちゃん超特急で行きまーす。びゅーん。」

四人は騒々しく店を飛び出した。だがすぐに騒々しく戻ってくるだろう。

静かになった店内につぐみはポツンと取り残されるが、くすりと笑い、

「…ありがとう、玲くん。」

段々と近付き、大きくなってくる幼馴染みたちの声を聞きながらつぐみは呟くように、はにかむようにお礼を言うのだった。

37話 屋上で

「た、助けてくれえ!」「おらあ!そっち行つたぞ!」「逃げんじやねよ!」「待てこらあ!」

夕暮れの路地裏。蘭たちが暮らす町から少し離れた場所で不良たちの怒号と悲鳴が響き渡る。不良同士の抗争、しかし、抗争と呼ぶには余りにも一方的な戦いの最中、こっそりとその場から離れる男がいた。

その男は玲がいる町とは別の町の不良グループを仕切っているボスで、玲とは不可侵の関係でいた男だった。が、自身の子分や身内を盾にした大崎の悪巧みに屈し、共に暴力を振るうようになっていた。今現在は不可侵の関係でいた玲のグループに襲撃され、こっそりと逃げ出そうとしていた。

「くつ、くそ!こんな筈じゃあ…」

「よお、何やってんだ?」

悪態をついていると後ろから氷のように冷たい声が出た。

驚き、振り向くとそこには美少年が獲物を狙うようなギラついた目付きでこちらを見据えていた。心臓の動悸が早くなり、冷や汗が出てくる。

「う…れ、玲…!」

「あんた、大崎の元に下って以降、羽振り良いらしいな。」

「し、仕方なかったんだ!下手に歯向かったら、部下や身内が悲惨な目に遭うって脅されて…許してくれ!」

「そう言った他の奴等にあんたらは何をした?」

懇願するも玲の冷やかな視線は崩れない。自分が言ったことは事実だが、玲が追求した事もやらざるを得なかったとは言え、それもま

た事実。反論の余地もなく、窮地に陥った男が次に起こすアクションは明白だった。ポケットに忍ばせたナイフを抜き取り、玲に向かって走り出す。

「く、くそつたれがあー！」

襲ってくるのは分かった。玲は素早く男の頭に回し蹴りを放つ。あっさり吹っ飛び、顔面から壁に激突した男はそのまま崩れ落ちる。気絶した事を確認すると玲の部下が近付いて来た。

「ボス……っちは片付きましたぜー！」

「…ああ。」

しかし、玲の目付きは変わらず、小石を拾うとそれを投げた。

小石は報告に来た部下の横を掠め、部下の後ろにいた別グループの不良に直撃した。

「常に警戒を怠るな。これは勝ち負けのルールなんてない戦争だ。」

「わ、分かりました。ボス…。」

唾然とする部下に玲は忠告しながら玲は歩いていく。

歩いた先には玲の部下たちに囲まれて縮こまって震える別グループの不良たち。全員、身を寄せあつてその顔には恐怖が貼り付けられていた。その状況を玲は興味なさげに見る。

「残った奴等はどうします？皆、大崎の配下になってからこの辺りを暴れまわってた奴等つすけど。」

「決まってる。逃げた奴は追うな、残って抵抗した奴は徹底的に痛めつける。大崎の部下になったことを後悔させてやるほどにな。ただし、殺すなよ。」

「ひいひいー!!」「そ、そんなあ!」「許してくれえ!」「俺たちや大崎に

脅されてただけなんだって！」

玲の指示を聞いた不良たちは懇願し、叫びだす。しかし、その叫びは聞こえないと言わんばかりに玲は踵を返し、その場を去る。

「おらあ！今更許しを乞うなんざ虫が良すぎんだよ！」「恨むなら大崎の野郎に頭下げた自分達を恨みな！」「死なねえだけでもありがたいと思え！」

「痛い痛い痛いいいい!!」「ぎゃあああ!!」「神前玲！てめえは血も涙もないのか!!この外道の殺戮マシーンがあ!!」

後ろから聞こえてくる不良たちの悲鳴と怨嗟が耳に入りながらも歩いていく。そして、ふと自分自身の手を見た。

(…俺の名が、段々と肅正と暴力の象徴になってきている。俺は…一体何だ?)

心の中で出た疑問に答える者は誰もいなかった。

放課後。誰もいない、窓から赤い夕焼けの日差しが差し込む教室に一人。髪の一房に赤メツシユをした黒髪の少女がスマホの画面とにらめっこしていた。

「話が…あります…屋上に…。」

SNSのグループチャットに呟きながらスマホに文字を打ち込むが、すぐにそれを消す。

(…ダメだ。いい言葉が浮かんでこない。こうやってる時間も無駄なのに…。)

仲直りするための言葉を模索するが中々一步を踏み出せずにいた。あの時、一方的に怒鳴り散らして、子供みたいにわめいて、その後は飛び出してそれっきり。

由美から喝を入れられたのに、玲との仲直りできたのに、その勢いで話そうと思っても、切り出し方が分からずまごつく自分に苛つく。すると、突然スマホが通知音と共に震えだし、それに驚いた蘭は飛び退く。

「なっ何?」

もし、玲からだったら文句の一つくらい言ってやろう。そう考え、スマホの画面と向き直る。

画面には最近話してない幼馴染みからだった。

『緊急事態!!みんな、屋上に来てくれ!!』

「巴ちゃん!一体何があったの!?!」

ひまりに説得され、変わらないことを選んだ巴からの連絡を受けたつぐみは屋上へ飛び込んできた。最初にやって来たのがつぐみだと分かる。ひまりと巴はつぐみらしいなと安堵する。

「トモチーン、緊急事態ってどしたの?」

それに遅れてモカもやって来る。いつも通りののんびり口調に心配の色を滲ませながら現れた。

でも、一番肝心な人物がまだ来てない。ひまりはモカに聞いてみる。

「モカ、蘭は？」

「んー…分かんない。来るかな？」

モカが首を傾げるとモカの後ろから階段を一段飛ばしで駆け上がるような音が聞こえてくる。そして、扉を開けて現れたのは、

「巴！連絡見たよ！何かあったの？」

自分達のバンドグループを作るきっかけになった、赤メツシユをしてカツコつけているのに寂しがり屋な幼馴染みだった。教室から全力疾走してきたのか肩で息をしている。

まさか、こんなにあっさり集まるとは思ってた巴は少し戸惑う。

「え、えーと、夕焼けが綺麗で皆で見たいって思ってたな！」

「…は？」

「ら、蘭ちゃん！」

そんな事であたしらを呼んだの？蘭はそう言いたげな顔で呆気にとられ、つぐみに指摘される。

「その、実は、蘭に言いたいことがあって…けどさ、皆がどうやって集まってくれるのか、分かんなくて…」

ポツリポツリと、言葉を紡ぐ巴。そして、意を決したように蘭と向き直り、口を開いた。

「あのさー…あつ。」

が、それはもう一人、ひまりも同じだったようだ。一瞬気まずい空気が流れるも巴が先に言っただけで良いジェスチャーを送り、ひまりは頷くと仕切り直して蘭と向かい合う。

「あのね、蘭。この前は酷いこと言っただけ、ごめんね。」

「…あたしの方こそ、急に大声出して出て行って、ごめん。」

「ううん、蘭は悪くないの。私は蘭の気持ち、全然考えてなかった。本当に、ごめんなさい。」

そう言っただけでひまりは頭を下げる。リーダーとしての自覚が足りなかった。そのせいで蘭を沢山苦しめてしまった。その反省と謝罪に思いを込め、頭を下げる。

「アタシも、ごめん。蘭と一緒にいられるように変わったって言ったとき、ハツとしたんだ。蘭が家と向き合っているとき、アタシたちは何をしていたんだろう？って。辛いこと全部蘭に押し付けちゃって何もしていなかったなって…蘭が変わっていく中で自分達だけ『いつも通り』で…」

「そ、そんなこと…！」

巴の謝罪を聞いた蘭は否定しようと口を挟むが、それでも巴は話続ける。

「そしたら、不安になってき。これから先も、由美や玲が変わってしまっただけに色んな事がどんどん変わって、いつも通りの夕焼けも、一緒に見れなくなってしまうんじゃないかって…。」

段々尻すぼみになっていく巴。それでも蘭たちは耳を傾け、静かに聞く。そして巴は顔を上げ声を張り上げた。

「でも！アタシはずっとここで見てるぞ！夕焼け！」

「巴…。」

「な、何かさ、蘭はずっとアタシたちと一緒にいるために変わっただろ？でも、一緒にいるために変わっちゃダメな所もあるって思ってる…。ここから一緒に見る夕焼け。それが好きって気持ちはずっとずっと大切にしていきたい。…アタシには変わることは怖い。だったら、アタシは変わっちゃダメなものをずっと守り続けるよ。」

巴は紅く空を染める夕焼けを眺めながら、言い切る。だが、決意を上手く言葉で表現できないまま口に出したせいかわ、誰も何も言わないせいかわ、気まづくなり苦笑いしながら振り向く。

「やっぱ、上手く言えないや…。ごめん？伝わりにくくてさ…。」

考え無しな自分を自虐的に笑う。だが、蘭たちには伝わった。

「ううん、巴。言いたいこと、ちゃんと伝わったよ。」

「私もだよ、巴ちゃん。私もここから見える夕焼けを皆で一緒に見るのが何よりも好き。同じ気持ちだよ。」

蘭と共感するようにつぐみも告白する。その様子には巴は安堵する。

「あたしが変わったのは、皆が、玲もいたから…：色んなことから逃げ続けたのは、変わることが怖かったから…でも、そんなあたしの背中を押して見守ってくれる皆がいたから、今のあたしがある。」

脳裏に浮かぶのは、自分達を守るために傷だらけになって、周りから恐れられ、慕われながらもどこか寂しげな雰囲気、変わったように見えて根本的な所は何一つ変わってない、今ここにはいない幼馴染み。

彼もいたから、今の自分がある。

「……あたしは、変わったつもりでいた。でもさ、みんなのことが分からなくなった時に、結局怖くて飛び出した。不安で、寂しくて……何で分かってももらえないんだろって……」

彼もこんな気持ちでいるのだろうか。

強くて怖い、黒豹の名を持つ不良のボスとしての自分しか見てもらえない。

暗い過去に囚われた弱い自分を分かってくれない。

そんな彼は、

「すごく自分勝手だと思う。歌詞が皆に届かないのはあたしが、自身も皆のことも分かかってなかったからだよ。……ごめん。」

「蘭は悪くないよ！これは私たちに原因があつて……」

「あたしは、皆に助けられてばかりで、皆のために何もできてないくらい……だから、これから先、変わらないために変わることが皆のためになるなら……あたしはこれから、前に進み続けようと思う。今度こそ、絶対に。原点のこの場所を、あたしたちの永遠にするために、止まらない。」

だから、彼も引張って行こう。彼が嫌だと言っても強引に引張ってやる。だって、Afterglowと一緒にいるときの彼は楽しそうだったから。

そして、蘭の告白でようやく仲直りできた五人。ほつれかけた絆が前よりも強固に結び直されていた。

ふと、ひまりが思い出したかのようにスマホを取り出す。

「そうだ！玲にもこの夕焼け見えてるよね？ちよつと電話してみるね！」

「スピーカーにすんの忘れるなよ！」

ひまりは巴に言われた通りスピーカーカーに設定したあと、玲に電話をかける。二回電子音がした後、声が聞こえた。

「もしもし、ひまりか…。何があった？」

心なしか、通話先の玲の声は元気がないようだった。それでもひまりは元気よく話しかける。

「うん。玲、最近話せてないなーって思ってたよ、ちよつと息抜きにお話し付き合ってくれない？」

「…分かったよ。ったく、お前の愚痴を聞かされるこっちの身にもなれ。」

澁々ながら了承する素直になれない玲の声に思わず全員笑い声を漏らす。

「…ちよつと待て。他に誰がいる？」

笑い声が玲の耳に入ってしまったらしくスマホから怪訝な声が返ってくる。つぐみが代表して返答した。

「玲くん！私たち、仲直りできたんだよ！」

つぐみの返答にしばらく沈黙が流れる。流石に不安になったつぐみながらも一度言おうとしたが、

「つぐみと一緒になのか。そう、か。良かったな。…うん、良かった。…待て。もしかして蘭も巴もモカもいるのか？つーかこれ、スピーカーか？」

安堵の後、少し戸惑い気味の玲の声が聞こえた。すると、今度はモ

カが話しかける。

「ハロー、ハロー。れーくん元気ないよ？さーやのパンちゃんと食べてる？」

「それで元気になるのお前だけだよ。バカ野郎。」

「玲！あの時、商店街の皆にアタシとあこが狙われてるって教えてくれたんだろ？ありがとな！」

「…別に。っーかお前声がかいんだよ。加減しろ。」

照れ隠しから余計な指摘をする玲に巴はニヤつく。そして、最後に蘭が話しかけた。

「…玲。」

「…蘭か。」

「あんたが今何をしているのかは敢えて聞かないよ。…でもさ、忘れないで。あたしたちはあんたの幼馴染みだから。迷惑じゃなかったら、あたしたちがそばにいてあげる。」

蘭の言葉に玲は黙る。そして、ポツリと小さく呟くように言った後、通話が切れた。その言葉を拾った蘭たちは皆、笑顔になる。

「おう、れーくんがデレたねえ。」

「全く、素直じゃねーなあいつ！」

「玲くんらしいね。変な所で素直じゃないの。」

「もー、変わったって言ったのに全然変わってないじゃん！」

「あたしが言えた義理じゃないけど、面倒臭いよね。」

屋上で笑い合う幼馴染みたち。

玲が通話を切る前に言った言葉は、

「…ありがとな。」

新たないつも通りが始まりを告げようとしていた。

38話 新たないつも通りへの一歩

「よっお前らー!」

仲直りして久し振りの集団下校。ひまりがうつかり深夜のライブに申請しかけたり、モカが幼馴染みは難しいとぼやいたり、それぞれのいつも通りについての話に花を咲かせながら歩いていると昇太に声をかけられた。

「よお、昇太!いつもの見回りか?」

「ああ。にしても、お前ら、なんだか前より仲良くなってんな。」

昇太が元ボスとしての観察眼で蘭たちの様子がいつもより良い方で違う事を指摘すると、ひまりはよくぞ聞いてくれたと言わんばかりにたわわに実った胸を張る。

「その通りですよ昇太さん!私達はもう昔のAfterglowじゃないんです!えっへん!」

「お、新生Afterglowか!ひまりちゃんも頼もしくなってきたな!」

「えへへー、もつと誉めてー!」

昇太が誉めるとひまりは調子に乗って笑う。だが、そこヘジト目で見ているモカが水を差す。

「そー言っつて、さつき深夜のライブに入れようとしたの誰でしたっけ?」

「…私です。」

「あっはっはっはっは!やっぱひまりちゃんはひまりちゃんだな!」

「ちよつと昇太さん!それどういう意味ですかあー!」

「まあまあ、ライブの枠抑えなら俺も手伝ってやる。だからそんな拗

ねるなって。」

昇太に笑われ、ひまりはポカポカと昇太の胸を叩く。だが昇太にダメージは無く、むしろじゃれつく子犬にかまっているような態度だった。

「あ、そうだ、新曲どうしようか？」

つぐみが思い出すように新曲の話題を出す。仲が悪くなった原因は元々新曲の歌詞だ。次の問題に目を向けた。

「あ、あのさ！その件だけど、一緒に歌詞考えない？」

「お、いいなそれ！」

「いいじゃん、いいじゃん！」

「じゃー、今日はお泊まりだね。」

「…え？今から？」

「ではみなさん。ゆっくりしてってください。」

「はーい、お邪魔します。」

「蘭ねえたちと一緒…。」

蘭の提案からトントントン拍子に歌詞作成のお泊まり会を執行した幼馴染みたち。蘭の父も厳ついながらも微笑ましく迎え入れ、現在、同居中の由美もはしゃぎだす。

「蘭、少しばかり食べ物も用意したからみんなで分けあって食べなさい。」

「も、もういいでしょ父さん！みんな、あたしの部屋に行こ！」

手厚くもてなす父に照れ隠しから強制的に話を切り、幼馴染みたちを自室へ引つ張っていく蘭。その後ろ姿を微笑ましく見送った後、一緒にやって来た昇太と向き合う。

「で、君は何の用でここへ来たのかな？蓮昇太くん。ただ蘭たちの送り迎えという訳ではあるまい？」

「ええ、実は今ここにはいない蘭の幼馴染み、神前玲についてです。」

笑顔から一転して真剣な顔つきになる昇太。和やかな空気が一気に鳴りを潜め、重い空気が流れ始める。蘭の父もいつも以上に眉間に皺をよせ、表情が固くなる。

「その様子だと、面白くなさそうな話みたいだね。」

「…正直、胸くそ悪い話です。でも、あいつが別れてから何をしていたのか、大人たちも知らなくちゃいけないと思ったんです。」

「…お茶を出す。こっちに来なさい。」

「それでなー、玲の奴アタシと木登り競争して優勢だったんだけど、偶然そこに鳥の巣があったせいで親鳥につつかれて最終的にアタシの勝ちになったんだよ！あれは面白かったなー。」

「あれは傑作だったね。ゴール一步手前で俺に勝てる奴はいないかーって言った直後につつかれてたもんね。」

「あはは、でもつつかれすぎて頭から血が出ちゃった時はビックリしたよね…。」

蘭の部屋で部屋着に着替えた五人は昔話に花を咲かせていた。由

美も信頼をよせている玲の過去の話にのめり込み目を輝かせながら巴の服の袖を掴んでせがむ。

「もつと、もつと玲の話して！」

「よしよし、分かったぞ由美！次はそうだな…」

興が乗った巴は自分が覚えている限りの玲のエピソードを話していく。そして巴の思い出話を蘭の父が差し入れに持ってきたサンドイッチを食べながら傾聴しているモカとひまり。その様子を見ていた蘭は呆れたようにポツリと呟いた。

「…こうなるって思ってた。」

新曲の歌詞の閃きを得るために蘭の部屋に集まったが、昔話に花を咲かせたり、父が持ってきたサンドイッチを食べながらぐだぐだ喋ったりといつも通りの五人組だった。

「にしても、蘭のパパが持ってきてくれたサンドイッチ美味しいね。感謝。」

「これって今後の差し入れになるかな？」

「新・いつも通りだね。」

食いしん坊担当の二人はそう喋りながらもサンドイッチを食べ歩いていく。そこへ区切り良く話を終えた巴も入ってくる。

「新・いつも通りも気付けば結構増えてきたよな。」

「…それって、巴の『アレ』も含まれる？」

蘭が言うアレとは、Roseliaのライブを見に行ったとき、成長したあこを見た巴が姉として葛藤して、ギクシャクしていた時の事だ。その時は蘭と由美に喝を入れられた事で姉妹仲の修繕が出来た

のだ。

「あの時、脛を蹴ってごめん…。」

由美は気まずそうに謝る。何しろ、うじうじしている巴に対して最初に行動を起こしたのは由美だったが、やり方が野蛮だった。それでも巴は気にしてないように笑う。

「大丈夫だよ。むしろ怒ってくれてありがとな。」

巴の乱雑ながらも優しさを感じる撫で方で由美は嬉しそうに口元がにやける。

「蘭のお父さんがいつもライブを見に来てくれるようになったのも新・いつも通りだよね！」

「それは増えなくてもいい奴!!」

「蘭のお父さん、いつも私が見えるように肩車してくれる。」

「恥ずかしいから思い出させないでよ、由美…。」

「新・いつも通りって言えば、由美ちゃんが私たちの練習を見学するようになったよね。」

「そーだねー。あたしもライブ前にやまぶきベーカリーの方角に拝んでいたりさ〜。」

「え、モカちゃん、そんな事しているの!?!」

「つぐみ、モカの発言はあんまり真に受けない方がいいよ。」

「へへー、これも新・いつも通りの一つにしよーっと。…でもさ、みんなが思い付く新・いつも通り、あるよね〜。」

この一年、どんな新しいいつも通りができたのか語っていくとモカが思い付いたように笑う。その意図を察した蘭たち。

「あれだね！」

「あれだな！」

「あれしかないでしょ！」

「うん、あれだ。」

「じゃあ、いっせーのと言ってみようか？」

つぐみ、巴、ひまり、蘭、モカがお互いを見て、息を揃えて新しい通りを言った。

「「「玲（くん）がいる事！」「」」」

玲たちがいる町。いや、玲が襲撃したグループがいる町とは10駅ほど離れた町の寂れたクラブに大崎を含む大勢の不良がいた。それぞれカツアゲでどれだけ稼いだか、因縁付けしてビビらせた相手の反応が面白かったなど、自分たちの悪事を自慢しあってゲラゲラ笑いながらたむろしている。その様子はまさしく海外のギャング映画で見られるようなガラの悪い酒場だ。そこへ、一人の不良が血相を変えながら駆け込んできた。

「大変だ、大崎の兄貴！隣町のグループが襲撃された！」

その不良の報告は下世話な話をしていた不良たちを黙らせるのに効果てきめんだった。

「何だど!?!」「も、もうかよ?」「やべえよ…。こないだまで玲の縄張り周辺だと思ってたのに…。」

（あのグループとつるんだのはごく最近だ…。何故だ、町の外に一歩も出てない奴がどうしてあのグループは俺と協力関係であることを

知っているんだ!?)

大崎は表情に動揺を出さなかったが、玲の迅速かつ、神出鬼没とも言える猛攻に思考を張り巡らせる。だが、まずは部下を落ち着かせるのが先だ。そう考えた大崎は部下たち全員に聞こえるように声を張り上げる。

「…落ち着け。まだ包囲された訳じゃねえ。まだリョージのグループが…」

その瞬間、ポケットに入れていた大崎のスマホが震え出す。大崎はスマホを取り出し画面を見ると偵察に出ていた部下からだった。嫌な予感がしつつも通話ボタンを押し、耳に当てる。

「…もしもし、俺だ。」

「ボ、ボス…、リョージとの待ち合わせ場所のホテルに来たが…：：やられた。もうもぬけの殻だ…。」

「クソ…ちくしょうがあ!!」

部下からの報告を聞いた大崎はやり場のない怒りでスマホを床に叩きつける。そしてギリギリと歯ぎしりをしながら現状打破の糸口を探し始めた。

(どんな手だ? 奴はどんな手を使って俺らを追い詰めているんだ? くそ! あの野郎、反撃に出やがったか!)

段々顔に余裕がなくなっていく大崎。その横顔を見ていた部下が不安に飲まれる中、友梨は玲の攻撃手段に冷や汗をかく。

(玲…もしかして、いつ、どこから攻めてくるのか分からないような戦い方で不安を煽って相手のやる気を削いでいく作戦なのかな…?)

「おやおや、随分と追い詰められてんな。」

そんな中、余裕とも嘲笑つてるとも言える声が聞こえた。大崎が片目で声がした方を見ると片手をギプスで固め、タバコを啜えた男がいた。

「アイドルと執事にボコられただけのアんたに言われたくないな。」

大崎は若干イラつきながら男を睨む。男は昨日、蘭をさらってくるように命じていたのにも関わらず、突然現れた執事に妨害され帰ったのだ。ただ女子高生をさらってくるだけの仕事を失敗した者が余裕な態度でいるのを見ていてだけで大崎の額に浮かぶ青筋が切れそうだった。だが、男は大崎の睨みにおどけて返す。

「おー怖っ。でもよお、玲の弱点はもう分かってるはずだろ？」

「じゃあ何だ？お前はあいつらの油断を誘う作戦ができてんのか？」

大崎が睨みながら尋ねると男は友梨に一瞥した後、Afterglowのポスターを見る。そして、ポスターに印を付けるようにタバコを押し付けながら答えた。

「友梨の奴にこの中の誰かを刺させればいいのさ。」

39話 幼馴染みを知るために（前編）

蘭たちはその後も、ひまりのチャットアルバムの写真で思い出話や新・いつも通りについての話題に花を咲かせて盛り上がる。由美ものめり込むように聞いていたが、いつの間にかひまりの膝上で寝落ちしてしまい、今は蘭のベッドでスピスピと可愛らしい寝息をたてている。

「それで、つぐが最前列で見たって言った結果、みんなびしょ濡れになっちゃったよねー。」

「うん…、そうだ…ね。」

ひまりの懐古につぐみは船を漕ぎながら答える。どうやらつぐみも限界が近いようだ。

「…ありや？つぐ、寝そう？」

「…はっ!?ご、ごめん！こんな時間まで起きてることって無いから…」

ひまりに聞かれてつぐみは飛び跳ねるように我に帰る。普段、つぐみは夜更かしをしないので当然なのだが、

「て言うか、もう朝じゃん。話しすぎちゃったね。」

夜更かしどころではなく、徹夜だった。カーテンの隙間から覗く空は白け始め、早起きした雀の鳴き声が朝を告げている。

「ん~~~~~！一杯話したなあ。」

ひまりは凝り固まった体をほぐすように伸びをして、蘭たちも各々首や肩を回してほぐす。

「なあ。外、出ないか？そうすりやスツキりするだろ？」

「賛成！早く行こ！」

巴の提案にひまりが賛成した途端、モカがひまりに耳打ちした。

「ひーちゃん、ゆーみんなが寝てるから静かにね…。」

「…はい。」

「んう…ん…はっ！ご、ごめん蘭ねえ！私寝ちやつ…！」

ようやく起きた由美が少しばかりブーツとして頭が冴えた瞬間、寝ていたと自覚し布団を蹴飛ばすように飛び起きると、目の前には雑魚寝するつぐみ、ひまりと巴。そして机に向き合って真剣にペンを走らせる蘭にその隣に腰掛けるモカがいる光景だった。

「…あれ？」

「あ、ゆーみんなおはよー。」

ポケットとする由美にモカは人差し指を口に添え、静かにのジェスチャーをしながら挨拶をする。

「今、蘭は歌詞を書いているから静かにね。」

声を潜めながら注意するモカに由美は頷く。そして、モカの目に涙が溜まっているのに気付いた。

「モカねえ…、泣いてるの？」

「…あー、ずっと起きてたから眠いや。ふあく。じゃあゆるみん、モカねえちゃんは少し寝まーす。」

そう言つてモカは由美のすぐ横に倒れるように眠った。

今のモカの心情を推察することは由美にはできない。でも、悪い様子ではないことかもしれない。そう思った由美は寝ているモカの頭を撫でた後、歌詞の執筆をしている蘭の邪魔にならないように、音をたてないようにその場を後にした。

「む、由美ちゃんか。おはよう。」

「はい。おはようございます。」

廊下に出たところに蘭の父と遭遇し、礼儀正しくお辞儀をする。由美は今、蘭の家に住まわせてもらっている間、蘭の父から最低限の礼儀について教えられている。素直で吸収が早い由美は苦言一つ言うことなくこなしていく様子は蘭の父も息を巻くほどだった。

「そろそろ朝食だから、蘭とお友達を呼ぼうと思ったんだが…いいかな？」

「…今、蘭ねえ新曲の歌詞を書いている。だから邪魔できな…じゃなかった、できません。」

「…そうか。なら、作りおきが必要だな。それと、由美も敬語はまだまだだな。」

新たないつも通り、最初の朝食は作りおきから始まるのだった。

夢を見ている。どうやら昔の自分のようだ。周りにはモカ、ひまり、つぐみ、巴も一緒にいる。皆で喧嘩しあったり、その度に仲直りしたり、そして笑い合う。

でも、何かが足りない。モカたちもいるのに、何が足りないんだろ

う？蘭は奇妙な違和感に目を凝らして辺りを見渡す。

すると、自分たちから離れた場所にもう一人の幼馴染みが傷だらけで遠くから自分たちを見守るように、それでいて自分たちが仲良くしているのを羨ましそうに見ている幼馴染みがいた。

蘭が声をかけようと近付いた瞬間、突然虚空から黒い手が幼馴染みの首を絞めるように鷲掴みにしてきた。しかし、幼馴染みは苦しんで抵抗する素振りを見せず、あるがままを受け入れるように空中に宙ぶらりんになる。そしてどこからともなく声が聞こえた。

罵声だった。下卑た笑いだった。嘲笑だった。悪意ある笑いだった。

ありとあらゆる罵詈雑言がもう一人の幼馴染みに集中する。段々幼馴染みの光が消え、生気が失いつつある目から涙を流しながら。

思わず息を飲む。でも助けなきや。そう思い、蘭は手を伸ばし幼馴染みの名を叫んだ。

「玲!!」

「うお!!ビックリしたあ!」

飛び起きると巴がビックリするように声をあげた。どうやら歌詞を書き終えた瞬間に寝落ちしてしまったようだ。

「蘭、おはよう。れーくんは何があったの〜?」

「あ、ごめん。ただの夢だから…って、もうお昼じゃん。」

謝りながらふと時計を見るともうお昼だった。そして、机には作りおきが置かれており両親が用意してくれた物だと気付く。すると由美が興奮気味に蘭の体にダイブしてきた。

「蘭ねえ。この歌詞カッコいい!早く完成したの聞きたい!」

「由美ちゃん、ずっと蘭に歌詞の感想を言いたってウズウズしてたんだよ。でも、本当にいいよねこの歌詞!」

「夕焼けから夜空になってそして朝が来る…。アタシたちの新しいつも通りが全部詰まってるな！」

「それで、どんなアレンジで行こうかみんなで話し合ってたんだ。」

「そっか…。みんなで演奏できる歌詞ができてよかった。」

この前とは違う、いつも通りのOKが入り蘭は安堵してはにかむ。

「後は昇太と相談して、いい感じのライブ会場を見つけないとね！」

「この調子なら新曲すぐに出来そうだしな！」

「まー、それもそうだけど。他にやることあるでしょ？ねー、蘭？」

モカの一声に蘭は頷く。さつき見たあの夢は現実味があったのだ。

「…うん。まずは、玲の過去を知ろう！」

蘭たちが外へ出た直後の純和風の居間。そこで蘭の父は難しい顔をしていた。昨日、昇太から聞かされた話が子供が経験するには余りにも過酷すぎたからだ。

(…まさか、蘭たちと別れた直後にあんな目に遭わされていたとはな…。)

「あなた…顔色が優れませんよ？」

「昨日、あんな話を聞いたばかりだからな。こんな顔にもなるさ。」

心配した妻に心配ないと前置きをした後そう言う父。吐き気がするほど胸糞悪い話。他の者が話したなら冗談はよせと一蹴したが、話した相手は商店街一の人望有りて人脈持ちである蓮昇太だ。本心を

言えば信じたくはなかったが、昇太の全く目を反らさない真剣な眼差しに信じざるを得ない要素があったのだ。妻も苦い顔をする。

「まさか、あのとてもいい子な玲くんがね…。あなた、今のあの子に会ったことがあるんでしょ？」

「ああ…前、蘭の音楽活動を認めるときに偶々ばったり会うことがあったのだが、あの時見た印象は猛毒の棘を持つバラだった…。美しくもあり、何者も寄せ付けない威圧感を感じた。子供の頃はコンクリートの中でも咲くタンポポのようなめげない力強さと活発さ満ち満ちていたが、全く別の華に変わってしまったような感じだった…。それもこれも全部、大人たちの欲望と暴虐に振り回された結果だと思うとな…。」

「今、蘭には話してないって言っていたけど、あの子は鋭い所があるからね…。いつか気付くかも知れないわ。」

「…いや、もう薄々気付いてるかもな。玲くんとずっと交流してきたから、彼の弱い部分も見えてしまっているかも知れない。」

「…あなた。私たち大人にも玲くんの為に何かできることがあるかしら？」

「今度、蘭の友達の保護者たちと話し合ってみよう。今も昇太くんが玲くんの為に東奔西走しているんだ。私たちも動くとしよう。」

外に出た蘭はまず玲がいる雑居ビルへと向かった。玲がいる所と言ったら最初に思い付いたのがあのビルだからだ。しかし、

「今、玲はいないの？」

「へえ、ほんつとうに申し訳無いんですけど…。」

ビルに残ってた不良からそう告げられた。ひまりはもっと聞いてみる事にした。

「どこに行くとか、言っただけですか？」

「それが…俺らにも知らされて無いんすよ。もし、敵に捕まって情報が漏れたら不味いからって訳でさあ。」

「おお、徹底してるね。」

「ど、どうしよう、図書館にもいなかったし早々に行き詰まっちゃったよお…。」

「ひまねえ、諦めちゃダメ。」

早速ひまりは不安になってしまい、由美に慰められる。まさかこの前から外出しているとは思っても見なかったのだ。

「う〜ん…またの機会にする〜?」

モカがそう言い、諦めムードが濃厚になっていく中、蘭は玲の過去を知る方法を思い付く。

「…待つて。丁度いい人がいるじゃん。」

「やれやれ、アポ無しで呼び出すのはお行儀が悪いですよ、美竹様。」

現在、蘭のボディガードの仕事をしている雨宮は困ったように笑いながらも注意する。だが、蘭は気にしてないように話す。

「急に呼んだのは申し訳ないと思ってるよ。…こころの方は大丈夫なんでしょう?」

「ええ、私が鍛えた黒服たちもいますのでご心配なく。」

蘭が思い付いた方法、それは雨宮が知っている限りの玲の過去を話してもらったことだった。

前々から雨宮に対する玲の態度は初対面とは思えない所からもしかしたらという一縷の望みに賭けたのだ。蘭は雨宮の目を見て尋ねた。

「それで、単刀直入に聞くけど、雨宮さんって玲の過去を…」
「勿論、存じ上げています。」

蘭が質問を言い終わる前に雨宮は答えた。言い終わる前に言われた蘭はジト目で睨んだが、雨宮の表情は変わらなかった。

「ほ、本当なのか?教えてください、雨宮さん!」

「玲が私たちと別れた後、何があつてあんなつたんですか!」

「と、巴ちゃん!ひまりちゃん!落ち着いて!」

巴とひまりが詰め寄り、つぐみは慌てて制する。その様子を雨宮はにこやかに見守る。

「ふふ、…ではビルの中へ入るとしましょう…。」

そう言つてビルの中へ入ろうとした雨宮は突然言葉を切つて視線を変えた。その顔にはさつきまでの笑顔がなかった。

何があつたのだろうか?そう思い、全員雨宮の視線の先を見ると

「つ、つぐみ、さん…。」

そこには身体中傷だらけで顔も殴られた跡、服も所々破れ、痛々しい姿の、右目の辺りにある血のような痣が特徴の少女がよろよろ歩いていた。

「ゆ、友梨ちゃん!？」

つぐみが駆け寄り寄ろうとしたが、先に雨宮が今にも倒れそうな友梨の身体を支えに行く。

「キミ、しっかりと！」

雨宮が呼び掛ける。そして偶然見張りをしていた部下に指示を飛ばす。

「早く、救急箱を！」

「へ、へい！」

「友梨ちゃんどうしたの!?!こんな…ひどい…。」

つぐみは口を押さえながら近付き、肩を触ろうとする。が、雨宮が待ったをかけた。

「羽沢様。ご心配なのは分かりますが不用意に触ると更に痛みが増します。」

「あつ…、はい。じゃあ、救急箱を持って…」

そう言つてつぐみは手を引く。すると、後ろから巴がポンとつぐみの肩に手を置いた。

「…なあ、アタシら置いてけぼりなんだけど…この子、つぐとどういう関係だ？」

まずは説明する方が先だろう。つぐみはそう思ったのだった。

40話 幼馴染みを知るために（後編）

時は遡って昨日。極悪とも取れる笑みを浮かべる男が出した提案に友梨は動揺を隠せなかった。

「ま、待って、何もそこまでする必要はないんじゃない？」

「…いい案だな。多分、昇太から見たこいつは俺のストレスの捌け口にされているサンドバッグぐらいしか思っていないだろうからな。そのサンドバッグからやられるなんざ考えないかもな。」

「だろ？ つー訳で、おい友梨。今からこいつらの内誰かを刺してこい。」

だが、誰も友梨の話など聞く耳を持たず。男は得意気になって友梨に指示を出す。

「…で、できません…。」

しかし、友梨にはできなかった。何故ならAfterglowのメンバーの中に人の暖かさを教えてくれた羽沢つぐみの姿があったからだ。自分の恩人を悲しませる真似はできない。蚊の羽音のようで、消えてしまいそうな震え声で拒否をした瞬間、男の蹴りが友梨の腹に深く刺さった。

「ぐっ!!?げほっげほっ!」

「できるできないじゃないんだよ、やるんだよオラ!やるって言え!」

腹に鈍い衝撃が走り、腹の中の物が全部出てしまいそんな感覚に襲われた友梨は膝から崩れ落ちる。

男はそんな友梨の髪の毛を鷲掴みして頭を思い切り地面に叩きつけた。

「い、痛い、やめて。ごめんな、さい…。」

「あー？よく聞こえないからもう一回だ！」

友梨の謝罪をにやけ顔で聞こえない振りをしてながら今度は笑いながら壁に叩きつける。その様子を遠巻きから見ている大崎の部下は若干引き気味になる。

「うつわ…えげつねえ…。」

「やつぱ誰かが行った方が良くねえか？こいつ乗り気じゃないみたいだしよ。」

「見ろよ、頭から血い出てるぞ。ガキでも容赦ねえな。」

「おいおい、今度はグーパンかよ。あれで気絶しねえアイツもやべえな。」

「何でもアイツ、どれくらい力込めたら気絶しないのか分かってるらしいぜ？」

「ひえつ、マジかよ。」

「だからお前はグズなんだよ！一人じゃ何もできないお前を受け入れてやったボスに申し訳がないと思わねえのか？ああ!？」

部下たちが話している間にも殴る蹴る、叩きつけるといった暴行を続ける男。誰もその行為を咎める人は居らず、遂には首を絞めるという行為に出た。

首を絞められ、足がつかない高さまで持ち上げられた友梨。酸素を求めて足をバタつかせるもどうにもならず空を切る。

「ぐえ、あつ…あああ…。」

「さっさと言いな。この中の誰かを刺しに行くど。」

「ぼ、ボクは…つぐみ…さんを…」

友梨の意識はそこでブラックアウトした。

「う…。」

「あ。友梨ちゃん、目が覚めた？」

目を開けると知らない天井。後頭部に柔らかな感触、ベッドに寝かされているのだろう。そして横から聞き覚えがある声が話しかけてきた。

さて、どこまで覚えているだろうか？友梨が思い出す限りではあの男に痛め付けられた後、カッターナイフを押し付けられ追い出されるように出ていかされた。その後、Afterglowのメンバーが揃っている所を見て近付いたが、その直後に体力に限界が来て倒れそうになった所を整った服装の執事らしき人物が優しく抱き留めてくれた所までは覚えている。

痛まないように首を動かすと心配そうに見つめるつぐみたちAfterglowのメンバー全員がいた。

「…うん、は？」

「ここはね、私の幼馴染みが住んでいる部屋だよ。ごめんね。あんまり整った所じゃなくて…。」

「つぐみ、それだとれーくんの部屋が汚いみたいじゃないかな？」

「あ、べ、別にそんな事はなくて…！」

「モカ、茶化さない。」

「さーせんっした〜。」

「大丈夫か？出来る限り手当てしたけど痛む所はないか？」

「にしても、こんなひどいことする人がいるもんだよね。私信じられないー！」

仲睦まじく会話する五人。これが友情と言うものだろうか。言葉では知っていたが実際目にするのは初めての友梨はジッと見つめる。

「…友梨ちゃん？」

つぐみに呼び掛けられハツとする。

「ご、ごめんなさい。ちょっとボーツとしてたみたいです。」

「無理しちゃダメだよ。あんなにひどい怪我だったから動かないでね。」

「あ、ありがとうございます。」

「失礼します。皆様、そろそろ玲の過去について話す準備ができましたのでお呼びに来ました。」

「はい、分かりました。」

「じゃあ行こ、つぐ。」

「うん。それじゃあね、友梨ちゃん。安静にしててよ。」

ひまりに呼び掛けられたつぐみは友梨の頭を優しく撫でた後、その場を後にした。一人残された友梨は今まで受けたことがない優しさと暖かさのダブルパンチで暫し呆然としていた。

(…もしかして今まで全部夢だったのかな?)

もしかしたら今まで大崎の元で受けていた拷問全ては今まで見ていた悪い夢。暴力を振るってくる人も、それをただ見ているだけの人も、ボロ雑巾のように放られた自分に見向きもしない人も全部夢かもしれない。そう都合よく考えてしまい、ポケットに手を入れる。だが、押し付けられたカッターナイフが存在している事から夢じゃないことを物語っていた。

(…やっぱり無理だよ。あの中の誰かを刺すなんて、ボクにはできない…。どうしよう。どうしたらいいんだろう。)

何とか刺さずに回避する方法を考えようとするもどうやっても暴

力を振るわれる未来しか見えない。友梨はため息と愚痴を吐く。

「…はあ、どうすればいいんだろう。」

「悩んでるの?」

「きやあ!?!」

突然隣から声が聞こえて友梨はここ最近出してなかった可愛らしい悲鳴をあげてしまう。

咄嗟に横を見るとそこには友梨より年下の不自然に長い前髪をした少女がビツクリしたように両手を挙げていた。

「…ごめん。驚かすつもりはなかった。」

「う、ううん。ボクの方こそ、急に声出して悪かったよ。」

一秒くらいの間の後、お互いに謝る。そして、先程つぐみたちと一緒に出ていった筈の子が何故ここにいるのだろうか。疑問に思った友梨は話しかける。

「どうしてここに? つぐみさんと一緒の方が良くないかい?」

「…あなた、私と同じ感じがする。」

よく分からない質問に友梨は首を傾げる。

「…っど、どういう事かな?」

困ったように聞き返す友梨を見て、少女は少し黙った後、意を決したように頷く。

そして、

「私も、そうだもん。」

そう言って少女は前髪で見えなかった額を見せた。

「…では、皆様。覚悟は宜しいでしょうか？」

所変わって蘭たちは雑居ビルの地下の一室に案内された。雨宮はドアを閉めた後、蘭たちに確認する。

「何度も言わせないで。あたしたちは、玲の過去を知る覚悟ができているから。」

「…怖いけど、れーくんに何があったのか、私たちも知りたいしね。」

「頑張れひまり…泣くなひまり…玲もああなるしかないワケがあっただから…！」

「昇太も玲の過去になると気まずそうに口を開かなかったからな。どっただけエグいのが来ようが構わないさ。」

「もしかしたら、イヴちゃんを怖がる理由がこれで分かるかも知れない…。お願いします！雨宮さん！」

「…了解致しました。では、話させていただきます。これは、私が独自に関係者に取材して得た情報、そして私が玲と出会った時の事です。ご気分が悪くなられたら退出なされてください。それほど、おぞましく、嫌な話です。」

覚悟を決めた蘭たちの目を見てそう忠告したあと、雨宮は淡々と語りはじめた。

玲の父親は大手企業の専務で、正義感が強く、社内でのセクハラやパワハラを厳しく罰する人物であったが、それと同時に手柄を立てた部下を誉め、失敗した部下の責任も背負い、慰める理想の上司と言っ

ても良い人物で人望も厚かったと言います。ワーカーホリックで中々家に帰るのも遅くなるのがよくありましたが、家族との交流を第一に考える良きおしどり夫婦だったようです。出張先でも家族より困っている人を見過ごせない、所謂お人好しな人物だったと聞きます。

しかし、ある日。彼は社内の徹夜残業を無くそうと上司に直談判しました。過労により倒れる者が現れたからです。

それが神前家の不幸の始まりだったのです。

玲の父親の存在を快く思わない上部の人間が治安が悪い国に海外出張に向かわせ、そこでテロに巻き込まれた父親は帰らぬ人となりました。

訃報を聞いた玲の母親はショックを受け、生きる気力を無くし、介護無しでは生きられない状態になってしまいました。この時、玲は小学6年だったのです。

葬式は身内と社内の関係者のみで済ませました。

母方の実家に戻るしか選択肢がなくなった玲は小学校を卒業する目前で引越しをしてしまいました。

「……ここまでが貴女たちが知る神前玲の周りに起こった出来事です。」

雨宮が一旦語りを止める。

「…あの引越し、そういう訳だったの？」

「玲の親父さんについては、アタシらも初めて知ったな。」

「…れーくんの説明が雑だったもんね。」

蘭たちの記憶の限りでは当時の玲の説明は擬音に頼りきった説明でよく分からないがすごい仕事なんだろうなと言う認識だったが、雨宮からの説明でどこか納得した様子だった。しかし、

「でも、ひどい…。玲のお父さん何も悪いことしてないのに…。」

「…ひーちゃん、大丈夫？」

「ぐずっ、うん…。大丈夫です。大丈夫ですから、続けてください。」

ひまりは限界に近かった。が、それでも聞かなければならない。止めどなく溢れる涙をぬぐいながら続きを促し、雨宮も続きを語り始めた。

引越し先の母方の実家での生活は地獄だったそうです。

それほど裕福とは言えない実家で浪費癖が強く、子供を良く思わない母の叔父に理不尽な暴力を振るわれる日々を送りました。母は認知症を煩い、玲の事を認識できなくなり、物言わぬ人形を玲と思い込み、玲には暴言を言う現状だったそうです。

そしてある日。叔父が、玲を売りました。玲を買ったのは指定暴力団の団員でした。その後、玲は孤児院の名を騙った非合法の娼館で働かされる事になり、そこで大人たちから痛めつけられ、辱しめられ、陵辱の限りを尽くされ、尚且つ味方がいない絶望的な状況に陥り、彼の心に深手の傷を負うことになってしまいました。

そして、最後に彼はある悪徳政治家に買われました。ですが、そこも以前と変わらぬ牢獄でした。その理由は、彼を買った政治家は自分の後釜になり得る人物を作る為だったのです。彼の意思など関係無く、英才教育を施されました。

私はこの時、この悪徳政治家を弦巻家の存続を危ぶませる存在と睨み、執事見習いを装って内部調査をしていた時に玲と出会いました。その時の彼の目は何もかもが信じられない。自分に近づく者は全て敵だと言わんばかりの眼光を放っており、とても十代の子供の目とは思えませんでした。

彼を救いたい。そう考えた私は玲の付き人になりたいと申し出ました。あわよくば、大人たちに入れられた檻の外へと出してやるつも

りでした。そして、彼に私が教えられる限りの事を教えました。

ところが、ある日。悪徳政治家の悪事が突然明るみになり、政治家は辞職に追い込まれました。

私は慌てて政治家の元へ向かうと正面口は既にネタを聞きつけたマスコミや報道陣で固まっており、蟻の子が入る隙間もないほどでした。

こうなった理由は分かっていました。玲が報復として匿名でスキャンダルに目ざとい週刊誌に孤児院の事情と悪徳政治家の悪事の情報を送ったのです。ですから、火事場泥棒のように玲を連れ出そうとしましたが、一步遅れてしまいました。

記者会見会場に向かう政治家が出て行き、マスコミもその後を追っていたのを見るとすかさず中に入りましたが…、玲は屋敷のどこにもいませんでした。代わりに玲がいた部屋に真つ二つに破れた紙がありましたので繋ぎ合わせてみると、悪徳政治家に対する文句や悪口、皮肉たっぷりの礼が書かれてありました。

私は確信しました。彼は自分で檻を食い破り、飼い主の喉笛に噛みついて出て行ったのだと…。

「…以上が、私が調べた限り、そして私が見た玲の過去です。」

雨宮が語り終える。その声はいつもの穏やかさは鳴りを潜め、低く、冷たさを感じる声だ。これは嘘ではない。全て真実だと突き付ける声だ。

「何それ…、何で、何で玲がそんな目に会わなくちやいけないの？」

震える声で蘭が問う。それに雨宮は答える。

「残酷なようですが、現実です。美竹様。」

「ひどいよお……こんなの……あんまりだよお……うわああああん!!!」

限界が来たひまりは大声で泣き出す。既に最初の時点で涙が出てしまい、玲が娼館で働かされたと知った瞬間、声を殺してただただ泣くしかなかった。

「何だよ……ふざけるなよ……！アイツだって立派に生きてんだぞ！アイツが何をしたんだよ!!」

巴は唇を噛み締め、やり場の無い怒りを発散するように拳を壁に叩きつける。じわりと血が出たが、拳の痛みよりも玲の過去を知ったショックの方が大きかった。

「何で、何でこんなひどい事ができるの？玲くん、何も悪いことしてないのに……ひぐつ。」

つぐみは彼が時たま見せる寂しそうな背中。その訳が、彼を人として扱わない大人たちの仕業だと察した。イヴを怖がるのは、恐らく客の一人である外国人に虐められたせいだとも察した。

「っ……………」

モカは、口を紡いで黙っていた。もし、今喋ろうとしたら我慢できずに泣き出してしまいそうだったから。でも目から溢れ落ちる涙は止まる気配がなく、それほどショックである事を物語るのに十分だった。

そんな五人の様子を見る雨宮は五人が落ち着きを取り戻すまで沈黙を守る。

ようやく落ち着いてきた所で、雨宮は口を開く。

「彼はもう、貴女方の思い出の中にいる彼ではありません。…それでもなお、彼の側にいられると言えますか？」

「…勝手に決めつけないで。」

蘭は雨宮の発言を否定する。

「ほう？」

「アンタから見たら確かに別人かも知れない…けど、あんな目に遭ったから変わった？それは違う！いつもひまりやあたしを弄って、つぐみにはどこか甘くて、モカや巴に振り回されて、それでも自分のためじゃなくて他の人のために頑張ってくれる、昔とそんなに変わってない！あたしたちが知っている、神前玲だから！」

「蘭…。」

「…。」

「あたしたちは、玲と一緒に新しいいつも通りを作っていく。だって、玲も居てこそあたしたちAfterglowだから。」

蘭の言葉に巴たちと雨宮は目を見開く。そして雨宮は降参だと言わんばかりに笑みをこぼした。

「…そうですか。玲…、本当に君は良い友人たちを持ったね…。」

そう呟く雨宮の声は先ほどのような冷たさは無く、柔らかな声になっていた。

「…では、他の皆様方も蘭様と同じご意志で宜しいですか？」

雨宮は蘭以外の面々に尋ねる。

「…ああ。あいつにや、あこの事で色々助けてもらったからな。これから借りを返すさ！」

「はい。もう玲くんは十分苦しんだから…これからは私たちと一緒に楽しい思い出を作りたいです。」

「ぐすつ、玲にもいつも通りでいてもらいたいもん。私はAfter glowのリーダーとして、玲を助けたいんだから！」

「れーくんはモカちゃんオススメのパンをまだ食べてないからね。それに雨宮さんも協力してくれるでしょ？」

それぞれ、玲を思つての返答。そして最後にモカが協力を仰ぐ。

「ふふ、この空気でそう言われてしまつては断れませんね。いいでしょう。こころ様の世界を笑顔にしようと言ふ夢を叶える為にも、まずは元教え子の笑顔を取り戻す手伝いをしますか。」

困つたように笑いながら雨宮は承諾すると内ポケットから一枚のディスクを取り出した。

「それって…。」

ひまりは玲が出ていたAVじゃないかと指摘しようとした瞬間、雨宮はディスクを真つ二つに割つた。

「もし、今話したことが信じられないようなら、孤児院から押収したこれを見せる手を考えていました…。不要になりましたね。」

そう言いながら割つていき、ゴミ箱に叩き込む。

「さてと…では、参りましようか。彼は今、貴女方を守るために独りで戦つています。とても危険な場所ですが、それでも彼の元へ向かいますか？」

「当たり前でしょ？あたしたちの新しいいつも通りに玲も一緒じゃないと駄目なもの。」

「分かりました。では…む。」

雨宮がドアノブに手を伸ばすが途端に動きが止まる。

「…？どうしたのです…」

「しっ。」

不安に思ったつぐみが声をかけようとしたが雨宮に遮られる。

「皆さん…部屋の隅に移動してください。早く。」

雨宮がまたも打って変わって有無を言わせない語調で蘭たちに指示する。

「え、う、うん。」

突然様子が変わった雨宮に戸惑いつつも言われたように部屋の隅へ行く。巴が守るように前に出て準備ができたと目で合図を送ると雨宮は勢いよくドアを開けた。

すると、バタリと二人の少女が倒れてきた。

「…バレた。」

「ほら、言ったじゃないか！バレるって…、いたたたた…傷が…。」

「ゆ、由美ちゃんと友梨ちゃん？」

入ってきたのは由美と友梨だ。どうやら玲の昔話に聞き耳を立てていたようだ。バツが悪そうに由美は謝る。

「…ごめんなさい。こっそり聞くんもりなかったけど…。」

「まったく、ボクが止めなよって言ったのに聞かないんだから…。」

「む、でも昔の玲を知りたいって言ったの友梨でしょ？」

「ぼ、ボクは少し興味があるって言っただけ！」

「ほら、知りたいじゃん。」

「だからそんなんじゃないよ……いたた……」

「ほらほら、二人とも喧嘩するなって。」

口論になりかけた所で巴が仲裁に入る。だが、由美と友梨はお互いフグのように頬を膨らませて睨みあった後、お互いにそっぽを向いた。その様子を見ていたモカが納得するように頷いた。

「……なんかデジャヴって思ったらアレだね。トモちんと蘭が喧嘩しちゃった時みたいないな感じだね。」

「え?」

「……は?モカ何言ってるの?」

モカの発言で蘭と巴は戸惑い、つぐみとひまりは納得するように笑う。

「確かに、言われてみたらそうかも。ふふ。」

「あはは、もー、モカったら!今は玲の事が先でしょ!」

既に重苦しい空気は無く、いつも通りの風景。和やかに笑い合う姿は確かにより一層固まった絆があった。

「それじゃあ、後は雨宮さんからの通知が来るまで練習に励むってことでー!」

雑居ビルの前。ひまりがそう締め括る。あの後、雨宮が玲の現在地を調べるため解散となった。友梨はこのまま帰っても危険だと判断したつぐみが一緒に連れていき、警察に連絡してみる事にした。

「ああ！きーてと、明日から曲作るの楽しみだなー！」

「明日からみんなツグってこ〜。」

モカの造語に友梨は首を傾げる。

「え、ええと、つ、ツグってくって…?」

「友梨。モカの言うことあんまり真に受けない方がいいよ。」

「えー、蘭ったら冷たいな〜。」

「あはは、じゃあ、行こっか、友梨ちゃん。」

つぐみに手を引かれて友梨はその場を後にした。

「今日は色々あったなあ。初めて夜更かしをして、一緒に朝焼けを見て、蘭ちゃんの歌詞にみんなでどう演奏しようか話し合ったり、玲くんの過去を知ってショックだったけど、ちゃんと向き合おうって決めた〜。」

つぐみは友梨の手を引きながら今日あったことを振り返る。

友梨はそんなつぐみの後ろ姿を見て、辺りを見渡す。誰もいない。

刺すなら今だ。

ダメだ。

何故？

だってボクに優しくしてくれたつぐみさんだよ？

でも、ボクがここで刺さなきゃボクはどうなる？

つぐみさんを痛い目に遭わせたくない。

ボクが痛い目に遭うのに？

それでもいい。

殺されるかもだよ？

それでもいい。

今度は殴る蹴るだけじゃ済まないかもだよ？

それでもいい。

もうつぐみさんとは会えなくなるよ？

…それでもいい。

失明させられたらつぐみさんの笑顔が見れないよ？

…それでも、いい。

耳を潰されたらつぐみさんの声が、つぐみさんの演奏も聞けないよ

？

…それでも…。

刺さないと殺されちゃうよ。だから、早く刺して。

…い、やだ。

刺せ。

やだ…。

刺せ！

や、やだ…。

刺せ！！！！

友梨は、気付かれないようにポケットからカッターナイフを抜き取り、音をたてないように刃を出す。つぐみはまだ気付いていない。そして、繋いでいる手にカッターナイフを振りかぶった。

「そうだ！友梨ちゃんにも私たちの演奏、聞いてもらいたいな！ねえ、友梨ちゃ…。」

41話 自由へ

「つごめんなさい…。」

「ゆ、友梨、ちゃん？」

つぐみは目の前の状況が理解できなかった。ぽたり、ぽたりとつぐみの手を伝って、赤い液体が滴り落ちる。

震え泣きながら、歯を食い縛る友梨。細い腕に深々とカッターナイフを突き刺しており、血液が流れ出ていた。

ただし、つぐみの腕ではなく友梨の腕からだが。

「な、何してるの友梨ちゃん!？」

理解が追い付いたつぐみは慌ててカッターナイフを引き抜く。友梨はその場で糸が切れたマリオネット人形のように崩れ落ちた。

「ごめんなさい…ごめんなさい…。」

泣きながら謝り続ける友梨。一体何がこの子をそうさせたのだろうか。つぐみはカッターナイフ放って、万が一の為に、昇太から渡された包帯を傷口に巻き始めながら、優しく注意する。

「友梨ちゃん、ダメだよ。自分を傷つけちゃ、絶対ダメ。」

「できない…できないよお…つぐみさんを傷つけたくない…でも、そうしなきゃわたしが殺される…うわああああああん!死にたくない!わたし死にたくないよお!」

泣き喚きだす友梨。包帯を巻き終えたつぐみは友梨の背中を優しく叩いて慰めながら抱きしめる。これ程までこの少女を追い詰めた人物は誰なのか。

「つたく、予定狂ったな。これだからガキは嫌いなんだよ。」

どう乗り切るか考えている間にも相手は待つてくれない。大股で歩きながら友梨に近づこうとする男。

時間がない。あまりにも無さすぎる制限時間の中、つぐみが出した答えは、

「あん？何だよあんた。」

（い、今、この場で一番年上なのは私なんだ…。私が友梨ちゃんを守らなきゃ！）

自分の身を差し出す事だった。モカの言葉を借りるなら、ツグってしまったのだ。

「ゆ、友梨ちゃんに乱暴はしないでください…！」

気丈に振る舞い、男に退くよう呼びかけるが、男は苛ついたように眉間にシワを寄せ、凄む。

「てめえにや関係ねえだろ？さっさとどけよ。」

「ど、どきません！」

本当は逃げ出したい気持ちで一杯だった。だが、自分が逃げたら友梨はどうなる？「殺されるかもしれない。」まだ小さな少女が命の危機を感じるほどの精神状態に追い込んだ男に何をされるのか。どう考えても助からない。だから、つぐみは動かなかった。

「…ほおー？」

そんなつぐみの意図を察したのか、男は面白そうに口を歪める。舌舐めずりをして口を開いた。

「…そうかあ、そんなにそのガラクタが大事かあ…。いいぜ、てめえにくれてやる。ただし、お前は俺のモノになれ。でなきやこいつを連れて帰る。」

あまりにも嫌な条件だった。男の目はつぐみの身体を注視しており、明らかに身体をまさぐる気だった。

「わ、分かりました…。」

「つ、つぐみ、さん…！」

後ろから友梨が不安そうに呼び掛ける声が聞こえる。その声が耳に届いたつぐみはできるだけ精一杯の笑顔で答えた。

「大丈夫だよ友梨ちゃん。私は大丈夫だから…」

「さーて、どう弄ってやろうかな？」

男はつぐみの脚から下卑た目線を舐めるように見つめながら距離を詰める。それに対しつぐみはギュツと瞼を閉じ、我慢するように固まった。

「やっ…！」

すると、胸を触られた感触がした。思わず声が漏れてしまう。

「んー…、胸はそんなにないな…。」

男はそう言いながら腕をつぐみの背後に回し、スカートの中に手を入れ、尻を撫で回し始めた。

「…！んう…！」

「身体はいまいちだが、顔は良いな。その我慢しようと頑張ってる顔いいねえ？声出さないようにしてるようだが、気持ちいいのか？」
「こっ、こん、なの……！」

つぐみは否定しようと口を開くが、男はつぐみの尻を強く揉んだ。

「あん……!？」

「ん？何て言ったんだ？」

男はにやけながらつぐみの口に耳を近づけ、つぐみの吐息を直に聞こうとする。

「ん、はあ……はあ……」

「エロい吐息しか聞こえねえなあ！さーて、次は本番行っちゃおうか！」

「あつ、やつ、そこは……！」

男はそう言うつつぐみのスカートに手を伸ばす。男がどのような凶行に出るか察した友梨は叫んだ。

「や、止めてください！ボクは罰を受けます！だからもう止めてください！お願いします！」

「あー、聞こえないなあ！ハエが飛んでいるのか？」

男は友梨が必死になる様子が面白いのか、わざとらしく耳に手を添え、聞こえない振りをする。

「お願いです……お願い、ですから……止めて、ください……」

それでも友梨は泣きながら懇願する。いつだって友梨は耐えようと頑張ってきた。どんな攻め苦を味わおうが、どんな暴力を振るわれ

ようが、どんな辱しめを受けようが、泣くことだけは我慢してきた。だが、その限界はもう来てしまっていた。つぐみの優しさによつて麻痺しかけていた感情が回復しつつあったからだ。

そんな光明が見えた友梨の希望を、男は絶望へと叩き落とす。それはまるで、お釈迦様が地獄へ垂らした蜘蛛の糸をハサミでチョン切るような無慈悲さで。

「さーて、どんな下着を…!？」

男はつぐみのスカートを掴み、捲り上げようとした瞬間、小石が瞼に直撃した。

「だ、誰だ!？」

咄嗟に男はS極同士の磁石のようにつぐみから離れ、石が投げ込まれた方向を見る。友梨とつぐみも男の視線の先を追うように見るとそこには、

「つぐねえと友梨を虐めるな。さいてーやろう。」

前髪の隙間から男を睨み付ける、小さい頃、幼馴染みが着ていた赤いカーディガンを羽織った由美がいた。

「…ガキ？はっ、はははは…。」

男はてつきり、自分の手首を折った執事が来たのだと思ってたばかりに数秒呆けた後、緊張が解けたように笑いだした。

「脅かしやがって、クソガキが。正義の味方ごっこのももりか？」

男はズカズカと由美の目の前に歩み寄ってくる。それに対し、由美

は鬼さんこちらと言った感じに手を叩きながら逃げる。

「…ガキが、大人を舐めてんじゃねえぞお！」

沸点が低い男は由美の挑発に乗ってしまい、つぐみと友梨から離れて行ってしまった。

「た、大変。由美ちゃんが…！あ、あれ…？」

つぐみは後を追おうとしたが、身体をまさぐられた恐怖がやって来てその場にへたり込んでしまう。友梨は慌ててつぐみの側に駆け寄る。

「つぐみさん！」

「あ、あはは、大丈夫だよ、友梨ちゃん。私は、大丈夫…。」

心配する友梨に笑いかけるとつぐみ。だが、小さく身体を震わせていることからどれほど怖かったのか窺える。

こんな目に会うのが慣れていないつぐみが、自分を助けるために身体を張った。だが、自分は何をしていた？ただ暴力を振るわれるのが怖くて、怯えて、縮こまっているだけだったじゃないか。

ちよつと前、由美が一緒になったことを思い出す。

「私も、そうだもん。」

そう言っ由美が前髪をたくし上げると見えなかった額が露になる。

まるで月面のクレーターのようなでこぼこが五つ。子供特有のす

べすべした肌に似つかわしくない物がある。それを見た友梨は目を見開く。

「きみの、それって…」

「私、パパとママから虐められてたの。おでこのこれはその時できたもの。」

「…辛くなかったの?」

「辛かったよ。痛かったし、怖かったし、寒かったし、寂しかった。」

余程思い出したくない記憶なのか、露になった由美の目には恐怖の色が浮かぶ。それでも由美は言葉を続ける。

「でも、玲と会ってから変わった。みんな優しい。蘭ねえはカッコいいし、つぐねえは優しいし、モカねえは面白いし、ひまねえは泣き虫だけど明るいし、ともねえは頼りになるし、もつと一杯。蘭ねえのお友達もみんな私の事を可愛がってくれた。」

嬉しそうに語る由美。外見だけなら、前髪で目がよく見えない無愛想で可愛げのない子だろう。だが、そんな自分を優しく迎え入れてくれる人たちがいたからここにいる。

自分も受け入れて貰えるだろうか? 友梨は顔の傷をそつと指で触れながら考える。由美は友梨の顔を見て疑問に思っていたことを口にした。

「…あなたのそれ、親から?」

「…ううん、違うよ。ボクのこれは昔、知らないおじさんから熱い鉄板に顔を押し付けられて痕が残っちゃったんだ。それだけじゃないよ、この身体のあちこちにも鞭で叩かれたり、殴られてできた打撲だったり…色々痛い目に遭わされたんだ。」

「…その人は?」

「もういない。…いや、ボクを痛めつける人がまだ一人残ってる。」

「その人がいないと生きていけない？」

「…どうだろう？逃げようと思えば逃げられるかもしれないけど、捕まっちゃうかな？」

「…私の場合、パパとママがいなきや生きていけなかった。でも、あなたは違うと思うよ。そいつから逃げることはできると思うんだ。もし、もうダメって思ったら逃げていいんだよ。もし、逃げる先にそいつがいたら倒しても逃げよう。それで、玲とか雨宮に言って助けてもらおう。…あ、今、玲は忙しいからダメだった。」

(倒しても…。)

由美の言葉を反芻するように呟く。自分はその檻男から逃げ出せるのだろうか？自分の力で打ち破れるのだろうか？しばらく目を瞑り、考えた友梨はゆっくりと目を開け、カッターナイフを拾った。

覚悟は、決まった。

「とうとう捕まえたぞこのガキが…！」

男は肩を上下させ息を荒げながら由美の頭を掴む。あれから由美は狭い道を通って逃げ回っていたが、路地の行き止まりに当たってしまい、急いで引き返そうとしたところで捕まってしまった。

髪の毛を掴み、ぶら下がる由美を男は地面に振り下ろし、叩き付ける。由美の頭から血が流れ出てくる。

「ぐっ…！」

「もう許さねえぞ？俺に喧嘩売った事を後悔するんだな？」

男はそう言って由美の身体に足を乗せ、体重をかけた。胃の中の物が込み上げてくる感触と背骨が軋む音がする。

「あっ…あああ…。」

「そーらそら、今なら謝ったら許してもらえるかもしれないぞ？」

男は鬱憤を晴らすように足でグリグリと由美の身体をアスファルトに押し付ける。

それでも、由美の答えは決まっていた。

「だ、れが…お前みたいなの、ボケ、や、ろう…。」

由美の返事に男の額に青筋が浮かび上がる。そして、一旦足を退かし、由美の胴体目掛け、サッカーボールのように蹴りあげた。吹っ飛ばされた由美はそのまま転がり、慣性の法則に従って止まる。着ていたカーディガンは男の靴底や乱暴されたことにより裾が解れてしまっていた。

「ぎゃぼっ!?!げぼっ、ぐぼっ!」

「ったく、最近のガキは生意気でいけねえな。そこまで死にてえなら望み通りにしてやろうか！」

「待てー！」

男が追い討ちをかけようとした瞬間、呼び止める声が聞こえた。男が振り向くとそこには、カッターナイフを持った友梨がいた。

「…丁度良い。おい、このクソガキを刺せ。」

友梨は何も言わずに歩いていく。そんな友梨の耳元で男は催眠術をするように囁く。

「刺せ。」

「うん…。」

「殺せ。」

「うん…。」

「お前は俺の道具だ。」

「うん…。」

「刺せば自由にしてやるぞ。」

「…刺せばいいんだよね?」

「そうだ! 刺せ! 殺せ! こいつは俺を侮辱したからな!」

「…うん、じゃあ刺すよ。」

友梨は覚悟を決めたようにそう言って、

男の足にカッターナイフを突き刺した。

「…あ?」

男の口から間拔けな声が漏れる。それは困惑か、驚愕か。男のズボンを赤く染めるように鮮血が流れ出る。

「…………あああああああああああああああああこのポンコツがあああ!!!」

理解が追いついた男は絶叫し、友梨を殴り飛ばす。吹っ飛ばされた友梨はそのまま由美の隣に落ちる。そして、前髪の隙間から驚いたような目をする由美を見て、友梨は微笑む。

「…ボク、あいつの言いなりにならなかったよ。」

「…やるじゃん。」

「でも、もうボクたち終わりかもね…。」

「…それもまた一興って奴だ。」

「…何それ、意味分かんないよ。」

痛がる男の慟哭をバックに静かに笑い合う二人。

「くそっ！くそがあ！もう勘弁ならん！ぶち殺してやる！」

男は目が血走り、歯軋りをしてカッターナイフで刺された片足を引きずりながら仲良く倒れている二人に近づく。

すると、男の肩を掴む手が現れた。まだ邪魔する奴がいるか。頭に血が登り、冷静な判断ができなくなった男が振り向くとそこには、

「こんばんは。」

張り付けたような笑みを浮かべる執事悪魔がいた。そして執事悪魔が動いた瞬間、男の視界が暗転するのだった。

42話 アキレウスの踵

「首尾はどうなっている？」

友梨の反逆から次の日、大崎の配下がいるアジトを潰した玲はそこを拠点として部下からの情報を聞いていた。美しくも鋭い目の下には隈ができており、頬には加減を間違えたのか返り血が付いていた。元々いた町から随分離れたが、その周辺に大崎のアジトがいるという情報を掴んだのだ。

「へえ、大崎の奴はここの廃工場を根城にしていやす。」

偵察に出た部下が地図の一ヶ所を指さして他の部下がその位置にペンで丸を書きポイントする。そこは住宅地から離れた所であり、周りは林に囲まれている、騒いでも問題ない所にあった。

「ここなら暴れても問題なさそうっすね、ボス。」

部下の一人が素直な感想を述べたが玲は否定する。

「…いや、これは長期戦になったらこっちが不利だ。まず、住宅地から離れてはいるが、人通りが全く無いわけじゃない。見ろ、ここからちよつと離れた所に遊歩道がある。もし、俺達が襲撃して騒いでいる所を見られて警察に通報されたらどうなる？大崎と仲良く豚小屋にブチ込まれる羽目になるぞ。攻め込むなら誰も来ない深夜だ。」

玲の指示に部下たちは納得するように頷き、攻める算段を建て始めた。

これまで玲が戦ってきた戦法はゲリラ戦だ。不定期にバラバラの時間、場所の電撃戦の神出鬼没戦法で相手の不安を煽り、昼も夜も襲い続けて消耗させた。そのお陰か、大崎の手下の大勢は降伏の道を選

んだのだ。

「た、大変ですボス！」

すると、扉を蹴破るように部下の一人が飛び込んできた。

「おい、今作戦会議中だ！入るならノックして会議中に失礼しますっつってから入れよ！」

作戦会議に参加していた部下が怒鳴るが入ってきた部下は逆ギレする。

「それどころじゃねえんだよバカ野郎！ボス、町に残ってた昇太の兄貴から連絡です！つぐみさんと由美が襲われたらしいっす！」

ガタリ！

報告を聞いた瞬間、玲は無に近かった表情に焦りが生じ、跳び跳ねるように立ち上がって、部下に詰め寄った。

「本当か!? 誰が、誰がやった!?!」

玲は鬼気迫る表情で報告をしてきた部下の前へ行く。その気迫に押されながらも部下は口を開く。

「そ、そいつはもう、雨宮さんに叩きのめされてサツの御用になりました…。」

「…戻る。お前らは攻め入る準備を進めろ。完了したらすぐ連絡を。」

玲はそう言って足早に部屋を出た後、比較的広い部屋で英気を養っている部下たちに声をかけた。

「おい、少しバイクを借りるぞ。鍵を。」

玲が言い終わる前に部下の一人が鍵を渡す。鍵を渡した部下が質問する前に玲は出ていき、残された部下はポカンと口を開けるだけだった。

部下のバイクを借りて、戻ってきた玲は雑居ビルで由美がどこにいるか聞き出した。

「おい。由美は今どこだ？」

「あつ、ボス…。い、今、由美は弦巻さんの所が管理してる病院つす。病室は207つす。」

「そうか、分かった。ありがとな。」

玲はすぐさま踵を返すと病院へと走り出した。ほどなくして着き、部下から教えられた部屋へ行くとそこには、雨宮と昇太。そして、蘭たちがベッドを囲っていた。

「あ、玲！戻ったのか！」

巴が気付き、呼び掛けるとその場にいた全員が振り向く。そして、ベッドに横たわる二人を見て玲は言葉を失った。

「玲、戻ってきたんだ。」

「やあ、玲。…こんな姿じゃそんな顔しちゃうよね。」

ベッドにいたのは顔の半分ほどが包帯で巻かれた由美とその隣で

首や腕から覗く包帯から分かるほど重症の友梨がいた。二人とも、意識ははっきりしているが痛々しい姿だった。

「お、お前ら…。」

玲は動揺して声を震わせゆっくりと近づく。でも、由美は口をにこりと形だけ動かし、笑う。

「大丈夫。手も足も無理に動かさなかったら治るって言ってた。」

「安心していいよ。ボクも平気だから。…って言っても説得力無いか。」

友梨は自虐するように笑う。でも、前見せた暗いような笑みではなく、どこことなく晴れやかな笑みだった。

「…玲くん。」

不安そうにする玲につぐみが声をかける。玲はゆっくりとつぐみを見ると、まるで高級な壺を扱うかのように恐る恐る尋ねる。

「つぐみ…お前、大丈夫か？」

「…うん。大丈夫だよ。由美ちゃんが助けてくれたし、玲くんもこんな怖い目にあってたんだなって…。」

「そうか…。」

つぐみは震えてはいるが立ち直れない程ではない事を確認した玲は安堵しかけた。

(…待て。最後の言葉はどういう意味だ?)

が、すぐにつぐみの言葉に含みを感じ、顔をあげる。

そこにいる全員は由美と友梨の見舞いに来ていたはずなのに、今は玲の心配をしている。寝かされている由美と友梨ですら、こちらを見ているのだ。

「…な、何だよお前ら？その、顔は…」

「…れーくん。ゴメンね。」

困惑しているとモカが突然謝ってきた。そして、意を決した巴が真剣な顔でこちらを見据える。

玲の中で嫌な予感が心臓の鼓動を早めていく。呼吸すら忘れそうになるほど息苦しくなる。

頼む。

外れてくれ。

それを知られたくない。

蘭たちだけには、

知らないでいてほしいから。

頼む。お願い。

「…玲。アタシらな…、アンタの過去、全部知っちゃった。」

巴から告げられたのは、玲が一番聞きたくない言葉だった。

「……………は、はは、何のことだよ？俺が、お前らと別れた後のこと？何だよ、いきなり。何でそんな…：やめろ。そんな目で見るな。そんな顔をするな。お前らだけには知られたくなかったのに！」

「れ、玲。ちよつと落ち着い…」

「!!」

徐々に焦り、冷静さを失っていく幼馴染みを心配し、手を差し伸ばしたひまりの手を玲は叩く。

「いつ!？」

「ひーちゃん!」

「ひまりちゃん!大丈夫?」

「おい玲!お前なあ…!」

巴が咎めようと玲に目を向ける。が、思わず口が止まった。視線の先にいる幼馴染みは涼しい季節にも関わらず、滝のような冷や汗をかき、まるでこの世で一番恐ろしいものに会ったかのように震えていた。

「来るな…、来るな!俺はお前らが知ってる俺じゃない!俺は、俺は黒豹だ…。そうだ!向かう敵は噛み殺し、歯向かう奴はたとえ仲間だろうと容赦はしない…、それが幼馴染みであつてもだ!俺は、俺は血にまみれた薄汚い獣なんだよ!」

その顔は絶望だった。その顔は悲しみだった。知られなくなかったのに。知られないよう努めて来たのに。

何故、何で、どうして、どこから、どうやって。

焦点が定まらない目で辺りを見渡す。

すると、ジツとこちらを見る雨宮と目が合った。

途端に、さっきまでどう言い逃れようかオーバーヒートしかけた頭が冷える感覚がした。

こいつだ。こいつが蘭たちに自分の過去を漏らしたんだ。

「おい…、喋ったのか…?」

うろんな表情で目の前の雨宮にそう聞く。何を喋っても襲われる。そんな一触即発の緊張感が漂う。

「ええ。私は喋っても良いと判断しました。」

だが、雨宮はそんな空気に怖じ気付く事なく、さらりと言った。
瞬間、玲の手刀が雨宮の喉元目掛けて飛び込む。それを雨宮は一步引いて避ける。

「死ね。」

「乱暴は良くないな。いくらご当主の管轄とはいえ、ここは病院だよ？」

「関係ない。死ね。」

「やれやれ、しょうがない子だ。」

怒りのあまり語彙が減って聞く耳を持たない玲に雨宮は呆れる。

「や、やめて！玲！あたしたちが聞きたいって言ったから…！」

「止めなくてもいいですよ、美竹様。今の彼は聞く耳持たずですから。」

玲の猛攻を雨宮は踊るように避けながら、説得しようとする蘭たちを止める。

「さてと、ちょっと眠ってもらおうよ。」

雨宮はそう言うのと殴りかかる玲の腹に素早くボディーブローを放った。

「がっ、は…。」

腹に鈍い痛みがじわりと広がる。そのまま玲は雨宮を殺さんばかりに睨みつけたが、程なく気を失って電池が切れたおもちゃのように動かなくなった。

「はあ、きみ、いつから寝てないんだい？素人程度なら問題ないけど、僕くらいになつたら赤子の手を捻るよりも簡単に倒せちゃうよ？」

雨宮は玲の状態を見抜いていた。

玲の身体は全く休まっておらず、これまで満身創痍で不良たちの戦いに身を投じてきたことを。

自分が忠誠を誓った令嬢と同じ年とは思えないほどの業。そこまですべての Aff t e r g l o w を守りたいのか。

そう考えた雨宮は玲を両腕に抱え、立ち上がった。

「さて、由美ちゃんと友梨ちゃんのお見舞いはこれくらいにして、場所を移しましょう。」

僕のお父さんは死にました。なんでも、外国へお仕事に行つたとき、悪い人たちに殺されちゃったみたいです。お母さんはずっと泣いてました。いつもお父さんとの思い出話を聞かせてくれてとても楽しかった。でも、あの時、笑顔を見せてくれたお母さんは今、朝も、昼も、夜も、ずうつつつと泣いています。だから、僕が頑張らなきや。僕がお父さんの分まで頑張らなきや。そう思つて、お父さんのお部屋にあった難しい本をいっぱい読んでいました。お母さんに誉められたい。そして、お母さんを元気にさせたい。だって、お母さんのあの笑顔がまた見たかったから。

僕は引越しました。場所は長崎の：何だっけ？とにかく、長崎に

引っ越しました。蘭ちゃんたちとお別れしちゃうのは寂しかったけれど、いつも一緒だよ、絶対また会おう。と約束しました。引っ越した所はお母さんが昔住んでいたお家らしいです。でも、その家に住んでいるおじさんは僕の事が大嫌いです。どうして嫌いなんだろう？ 全く分らず何で嫌いか聞いてみても殴られるだけでした。お母さんはおままごとのお人形を大事そうに抱えるようになりました。まるで、赤ちゃんをあやしているみたいで、僕は興味本意で抱かせてほしいと頼もうとしたら、怒られました。その人形の事を僕だと言うのです。どうしてしまったんでしょうか？

僕は孤児院に引き取られる事になりました。おじさんは施設の人と何か話しているようで暇だったのでぐるりと周りを見ました。何やら元気がない子が多くて可哀想だと思いました。よし！ここで僕がみんなを元気付けよう！そしてお母さんにみんなを元気にさせてえらいねって誉めてもらおうんだ！よし、頑張るぞ！

地獄だ。ここは地獄なんだ。誰も助けしてくれない。もう痛いのは嫌なのに。もう裸になるのは嫌なのに。何で大人の人たちは僕をいじめなの？ 何で？ どうして？ 嫌だ。家に帰して。もう知らないおじさんお婆さんに色々恥ずかしい事だったり痛い事されるのは嫌だ。撮らないで。夜もシャッター音が響き渡って眠れなくなっちゃうから。パシヤパシヤパシヤパシヤ。誰か助けて。お母さん、お父さん、蘭ちゃん、モカちゃん、巴ちゃん、ひまりちゃん、つぐみちゃん。助けて。もう苦しいよ。助けて。助けて。助けて。

ようやく俺は抜け出せた。：いや、抜け出せてないか。檻が変わっただけと言った方がいいか。俺を引き取ったのは悪徳政治家だった。勿論、俺をペットのような扱いをして、何度ベッドの上で抱かれたか。だが、表向きは人当たりが良い政治家で通っており、たちが悪い。俺はずっと学者やら家庭教師から勉強させられ、たまに発情した奴らに犯された。その度に教えに来る奴は変わったが、どれも長続きはしなかった。俺は決めた。あのくそつたれ政治家の喉元食い破ってやる。

変わった奴が俺のお世話係になった。執事見習いだと言つてにこやかに笑う気持ち悪い奴だった。だが、そいつは今までの教えに来た家庭教師や学者の誰とも違った。一挙手一投足に隙が無く、色んな護身術に人体のツボ。あらゆる哲学や道徳まで教えてくれた。俺は試しに色仕掛けを試してみたが、毛布を掛けられて「子供がそんな事言うんじゃない。」の一言であしらわれた。：何かムカつく。

今日はあのタヌキ親父の化けの皮を剥がす決行日だ。俺は仕事でない日を狙ってタヌキ親父の部屋に忍び込み、私用のパソコンを立ち上げた。パスワードは知っている。奴が俺でよろしくやっている時に、俺は奴のパソコンのパスワードを覚えたのだ。パスワードを打ち込み、デスクトップが開く。そこからスケジュールと書かれたファイルを見ると、出るわ出るわ。今まで手に付ける予定の賄賂やあの娼館に資金を送る証拠など悪行の数々が。俺はそれをUSBメモリにコピーしてさっさとパソコンの電源を切り、退散する。そして、何も知らない使用人にUSBメモリが入った封筒を送るよう頼んだ。使用人は100%善意で承ったが、送り先はスキャンダルに目がない新

聞社だ。さーて、明日が楽しみだ。

次の日の朝。屋敷の中が蜂の巣をつついたような騒ぎになっていた。部屋に備え付けられてあったテレビを見ると、俺が送った情報をトップニュースで報じており、ニュースキャスターやコメンテーターがタヌキ親父の事を好き勝手言いあつていた。ざまを見る、俺を弄んだツケが来たんだ。俺はほくそ笑むとタヌキ親父が急いで屋敷から出ていく姿を見た。記者会見の場に急ぐのだろう。逃げるなら今だ。俺は火事場泥棒で大量の現金を盗み出した後、誰の目に付けられることなく逃げ出した。やった！俺は自由になったんだ！

目を覚ます。見慣れた天井だ。どうやら雑居ビルに戻ってきたらしい。

「あ、玲くん、気付いた？」

つぐみが声をかける。玲が首だけを動かし、声がした方を見ると、そこにはおしぼりを持っているつぐみがいた。その後ろには蘭たちや昇太もいてつぐみの声で玲が目を覚ました事に気付き、駆け寄る。

「れーくんおはよー。…って言っても、もう夜だからこんばんわだね。」

モカがいつも通りのとぼけた様子でボケる。だが、玲はツツコミを入れる元気がなかった。

「…もう行かなきゃな。寝すぎた。」

玲はつぐみを優しく押し退けそのまま去ろうとした所、巴がドアの前でどうせんぼをした。

「…どけよ。」

「どかない。」

「聞こえなかったか？どけよ。」

「そんな状態のアンタを放っておけるかよ。」

互いに譲らない。こうなった巴は絶対に引かないし、玲も部下を待たせている手前、引けない。こうなっては埒が明かない。そう感じた昇太は玲に忠告した。

「おい、玲！お前さあ、いい加減休みなよ。」

そうやって、玲の肩に手を置き、受け入れるよう提案した瞬間、

「!!」

玲は急に肩に置いた昇太の手を払いのけた。

「お、おう、どうしたんだ？」

昇太は驚いて玲を見る。

玲の顔は恐怖に染まっていた。

「あ…悪い、昇太…。何でもない。何でも…。」

玲はふらりとふらつき、壁に寄りかかった後、その場に座り込み、膝を抱えて縮こまってしまった。おそらく、過去のトラウマが出てしまったのだろう。昇太がどうしたものか悩んでいると、玲の前に出てくる者がいた。

それは、蘭だった。蘭は縮こまって震える玲を正面から見据え、玲と同じ目線に屈み、優しく抱きしめた。

何も言わない。でも、それは玲の過去を知った蘭ができる最大限のメッセージだ。

辛かったよね。苦しかったよね。もう大丈夫だよ。色んな想いが籠った抱擁に玲の目から一筋の涙がこぼれた。

それを見たモ力たちも顔を見合わせ、玲の周りを囲むように抱きしめる。みんなで玲の苦しみを背負おう。特につぐみは玲が体験したかもしれない恐怖を理解していた。他のみんなに負けないくらい強く抱きしめる。

その様子を見ていた昇太は肩を竦め、こつそりと極力音をたてないように部屋を出る。そして、下の階へ降りると、そこには不良がたむろする雑居ビルには似つかわしくない執事がいた。その執事に昇太は話しかける。

「よ。雨宮さん。」

「…彼はどうだい?」

雨宮が聞くと昇太は親指を立てる。その意味を察した雨宮はやはりと言いたげに目を伏せた。その反面、昇太はご機嫌に声をかける。

「あれなら、安泰でしょうよ。」

「…ええ。そうですね。」

「…なんだよ、なんか不安なモンでもあるってのか?」

「昇太くん。君は、アキレウスを知っているかな?」

雨宮から聞かれた質問に昇太は首を傾げた。
アキレウス。よくは知らないが、聞いた話だと、とても強いヤツ。
くらいの認識だ。

「ギリシヤ神話に出てくる英雄ですよ。完全無欠で一騎当千の力を誇る最強の英雄です。」

「へえー、そんな奴が…でも、何でいきなりギリシヤ神話の話になるんだよ?」

「…敵はいない。そう解釈されてもおかしくない彼には弱点が一つありました。それは、踵です。彼は踵が唯一の弱点でその弱点を知っていた人物に殺されてしまったのです。」

「へえー、そうか…ん?待て。それって…」

素直に勉強になると感心しかけた昇太は雨宮が言おうとしていた事に思い至った。

「ええ。神前玲。彼にとつての踵はあのAfterglowです。もし、彼女らに危害を加えれば、彼はその加害者を徹底的に追い詰めるでしょう。今、彼の精神状態は、死にかけていた昔の自分と今の自分が混ざってしまった状態です。その彼を救えるのは美竹蘭様たちAfterglowですが、その逆も言えます。」

「…そうだな。」

昇太は天井を仰ぎ見る。玲は幼馴染みたちを守っているつもりだったが、いつの間にか守られている。その事を自覚していないのだ。

「よ。昇太。」

すると、後ろから声を掛けられて振り向くと蘭を除いたAfter

growが階段を降りていた。

「おう、巴か。…ん？蘭ちゃんはどうした？」

昇太が気付いて巴に聞くと全員困ったように、それでいて微笑ましく笑い、ひまりが代表して答えた。

「ちよつと蘭と一緒にしてくれってね。」

一抹の不安は残るものの、大丈夫そうだな。昇太はその報告を聞き、肩の力を抜くのだった。

ようやくメンタルが回復しつつある玲は蘭と懐かしむように昔話に花を咲かせた。本当は幼馴染み全員で話せば良かったのだが、玲が「蘭に話したい事があるから、外してくれないか。」と頼み、それを了承した結果、二人だけの空間になったのだ。昔話に一区切りが着いた玲は真剣な顔で蘭と向き合う。

「なあ蘭、これから俺の言うことを聞け。明日の深夜、大崎のグループに本格的な攻撃をする。規模はおそらく大崎の方が上。正直、俺だけではお前たちを守りきれない。だから…」

「分かった。戻って帰りを待ってるよ。…何、その顔。」

「…なんだお前。てつきり、それでもついて行くって言うかと思っただじゃねえか。」

あつきり引くとは思わなかったのか、玲が心に思ったことを正直に

言うど蘭は呆れたような顔になった。

「…あのね、あたしたちまだ新曲の公開もしていないのにそんな危ない橋を渡るわけないでしょ？」

「こんなところに来たのにか？」

「もう慣れた。」

「…しようがない奴。」

玲がそう締め括ると二人でクスリと笑い合う。そして、玲は後腐れがないように話しかけた。むしろ、蘭と二人きりになった目的だ。

「…なあ、蘭。実は俺、その…、お前らのライブを見てからさ、ギター弾いてみたいと思うんだけど、教えてもらってもいいか？」

玲がそう言ってきた事に目を丸くした。

「…あたしでいいの？ギターならモカの方が…」

「俺はお前に教わりたいの。」

「…全くもう、我が儘だから。」

「そう言つて、満更じゃねえくせに。それに、モカじゃあ擬音だらけな上に眠くなりそうな説明になっちまうだろ？」

「…確かに。言ってる。」

間延びした声で擬音だらけの説明をするモカは容易に想像できる。蘭は納得したように頷くと、玲は部屋の隅の山積みになっているガラクタへと歩いていく。

「ちよつと待ってる、確かこの辺に…あつたあつた。部下から貢ぎ物として貰ったが置物になつたギターだけど、これでいいか？」

玲が取り出したのは埃を被り、長く使われてないであろうギター

だった。

「うん、いいよ。じゃあ今は基本的な事しか教えられないけど大丈夫？」

「ああ、後は自分でコツを掴む。」

「ほんつとうに、あんたのその天才っぷり、腹立つ。」

「別にほしいと思った訳じゃねえよ。」

そう言い合いながら玲は蘭からギターの使い方を勉強し始めた。この時の玲の顔は不良としての眼光はなく、蘭からギターの持ち方から教われているその姿はとても不良の頭領とは思えないほどだった。

「で、ここはこう持って…」

「おい、いつもこんな持ち方とか気にして歌ったりしてんのかお前。」

「大丈夫、慣れればそう気にしなくてもいいよ。」

「慣れればって…んで、これでそのまま弦を弾けばいいのか？」

そう言いながら指先に弦を引っ掛け音を鳴らす。

ぺえくん…

その音はまるで死にかけの蚊が飛んでいるような気が抜けた音が部屋中に響いた。

黙って難しい顔をする玲を見て、蘭は唇を噛み締め、笑いをこらえながら誉める。

「うん…、いい感じだよ。」

「ほんとかあ？とても厳しい華道の娘だから皮肉が込もってんじやねえか？」

「まあ、八割方皮肉だよ。ふふっ。」

「このやろ。俺、真剣にやってんだぞ？笑ってんじやねえよ。」

玲は蘭を小突き、また笑い合う。

「ど、どうだ？」

「背中向いてるぞ、今がチャンスだ！」

しかし、この時の玲は入口に背を向けており、背後に忍び寄る気配に気付かなかった。

だが、蘭は武器を持っている見慣れない不良が玲の背後に近付いているのに気付いた。

玲はギターの方に意識が向いているのか近付く不良の気配を察知する気配もない。不良が金属バットを振り上げたのを見て、蘭は叫ぶ。

「危ない!!」

蘭が玲を押し倒すのと不良が金属バットを振り下ろすのは同時だった。

玲は一瞬、何が起こったか理解できなかつた。

何かに気付いた蘭が叫んだと思つたら突然押し倒してきた。

驚く間もなく、押してきた蘭の背中に金属バットが落ちてきた。

いや、落ちてきたと言うより、振り下ろされたと言つた方がいい。

痛みに悶えながら玲の身体にそのまま崩れ落ちる蘭。

蘭が、殴られた。

寝かせた後、幽鬼のように立ち上がる。そして倒れた不良の顔面を何度も踏みつけ始めた。

「ぶっ、げっ、やめっ、やめっつっ…！」

「ひっ…！ひいいいい!!」

喋る暇も与えないほど何度も踏みつけ、段々赤く染まっていく床。その様子を見ていたもう一人は血相を変え、金属バットを捨ててその場から逃げ去る。

だが、それを許す玲ではない。標的を切り替え、捨てられた金属バットを拾い、殺意に満ちた眼で逃げた不良の後を追いかけて始めた。

「お、おい、玲！何があつたんだ!？」

巴が呼び掛けるも無視をして逃げる不良の後を追って走っていく玲。巴は玲を追いかけてようとした瞬間、

「ぎゃああああ!？」

ひまりの悲鳴が聞こえた。

「巴！お前はひまりちゃんの所へ行け！俺は雨宮さんと一緒に玲の後を追う！」

巴は玲の事で後ろ髪を引かれる思いだったが、昇太の指示を聞き、ひまりの元へと走る。

走った先にはひまりとつぐみが口を押さえて震えており、モカは呆然と部屋の中を見て、立っていた。

「ひまり！何、が…!？」

巴が部屋の中を見た瞬間、言葉を失った。

「た、助けてくれえ！化け物に殺される！」

息を切らしながら逃げる不良。階段が見えたところで駆け降りようとした瞬間、足に激痛が走り、階段の踊り場へ転げ落ちる。

咄嗟に足を見るとナイフが膝裏に刺さっていた。おそらく、玲が投げたのであろう。そして、顔を上げるとそこにはギラついた眼で不良を見下す黒豹の姿。手にはさつき捨てた金属バットを床に引きずる形で握られている。玲は不良を見下しながら口を開いた。

「なあ…お前さ、これで蘭を殴つただろ？」

「ひっ…ひっ…」

「おい…、答えるよ。てめえの泣きつ面なんざ見たくねえんだよ。」

「ご、ごめ…」

「あ、わりい。手が滑った。」

不良が謝ろうとした瞬間、玲はわざとらしく謝りながら金属バットを不良の足に振り下ろす。足からボキリと嫌な音になる。

「ぎゃああああああ!?足！足があああああ!!？」

「お前死ねよ。今すぐここで死ね。」

静かで虚ろな、それでいて殺意がこもった声で呟きながら男を容赦なく殴り続ける。

大勢の部下が駆けつくが、そこには無抵抗な男を殺意しか感じられない目で殴り続ける、あまりにも恐ろしい玲の姿があった。その光景に固唾を飲み込み、誰も近寄れなかった。ミイラ取りがミイラになるかもしれない。だから近寄れない。

だが、ただ一人を除いて。玲の背後に近寄り、肩に手を置く者がい

た。

「玲、もう止めなさい。彼はもう逃げる意志もない。」

玲を止めたのは雨宮だ。諭すように声をかけると玲は動きを止め、ふらふらと自分の部屋へと戻っていった。

「蘭…！蘭！しっかりしてえ！」

「蘭ちゃん！聞こえる？返事できる？」

「なんで…なんで蘭を殴ったの…！」

部屋に戻るとモカたちが蘭を囲んでいた。ひまりとつぐみは大粒の涙を流しながら蘭を呼び掛け続けており、モカは玲が顔面を潰し、気絶させた男に詰め寄る。

「お、おいよせ、モカ！早く救急車を…あつ、玲…。」

玲は巴にも目をくれず、蘭の側に膝から崩れ落ちるように座る。

「蘭…蘭！大丈夫か！」

「う…。」

玲の呼び掛けに蘭はゆっくりと目を開ける。背中を金属バットで殴られた痛みから汗が吹き出しつつも、玲の顔を見て安堵の表情を浮かべる。

「良かった…。無事だった…。」

それだけ言うと気を失ったように目を閉じた。

「蘭……蘭……らあああああん
!!!!!!」

玲の悲痛な叫びは蘭を呼びかけ続ける幼馴染みたちの声に埋もれていった。

43話 決戦前夜

翌日の朝、玲はいつもより早く起きてしまった。目元は泣いていたのか赤く、髪の毛もボサボサ。しばらくボーツとしていたが、頭がはつきりしていくにつれて、昨日起こった出来事を思い出し、吐き気が込み上げてきた。

昨日、蘭が気を失った後、病院に搬送されるのに付き添おうとしたら雨宮に止められた。

「待つんだ。君が居なくなったら部下たちはどうなるんだい？君にはまだやるべき事があるんだろう？」

「ふざけんな……今は蘭の方が大事だ！肩を離せクソ執事！」

逆上した玲は抵抗しようとしたが呆気なく撃沈。薄れ行く意識の中、蘭を乗せた救急車が遠ざかるのを見ているしかできなかったのだ。その後、気がついた玲は雨宮を脅して病院へ行こうと試みたものの、全く動じない雨宮と雨宮から告げられた状況に心が折れ、泣き寝入りをする羽目になってしまったのだ。

「……くそ！あの時……あの時もつと周りに意識をしていれば……！」

昨日の蘭の苦しそうな顔を思い出し、玲は歯噛みする。自分の注意力散漫のせいで蘭が傷付いた。それだけじゃない。もしかしたら後遺症が残ってギターを握れない、脳にダメージが入り、ろれつが回らなくなつて歌も歌えなくなつたらどうすればいい？ネガティブな考

えや自責が玲の心を苦しめていた。

「…入るぜ。玲。」

そんな中、昇太が声をかけた。ゆつくりと振り向くと、昇太の顔にも後悔の色が混じっているのが見える。

「例の襲ってきた奴、調べたぜ。二人とも大崎の手先だ。どうやらこのビルに大崎しか知らない抜け道があったようなんだ。」

昇太が手招きしてついてくるよう催促する。玲もおぼつかない足取りながらついていくと、屋上に出た。転落防止の鉄格子に梯子が掛かっており、隣のビルから伝って来た事が窺える。

「盲点だったぜ。まさか隣のビルから侵入するとはな…。」

昇太は悔しそうに吐き捨てるが、玲は黙っているだけだ。蘭が搬送された病院がある方角をジッと見ていた。昇太はそんな玲に声をかける。

「…そんなに気になるなら行ったらどうだ？」

「駄目だ。」

「駄目って、幼馴染みなんだから！行きたくないのかよ!？」

「本音を言えば行きたいさ！けどな、今俺ら不良がどういいう状況か分かってるのか？」

「…どういいう事だ？」

昇太が首を傾げると、玲はニュースを見ると吐き捨て、その場を後にした。昇太はとりあえず、スマホを取り出し画面を見ると、

『まるで昭和の映画!?増加する不良狩り!』

ニユースサイトのトップに玲と大崎の戦いがそのようなタイトルと共に掲載されており、記事の内容も主に玲から逃げてきた不良の言い分ばかりでまるで玲が悪者のような扱いだった。

「…んだよ、これ！ふざけんよ…！」

昇太が絶句していると、昇太のスマホが鳴り出す。すぐに出ると、部下が声を潜めて話しかけてきた。

「あ、昇太の兄貴っすか？今、由美や蘭さんが入院している病院にいるんすけど、サツが来たんすよ。俺も問い詰められたんすけど、何とか誤魔化して乗り切ったつす。でも、これ以上ここにいたら不味いと思うんで退散します。できれば、蘭さんの現状聞いてから退散したかったんすけど…すんません。」

「…くそつたれ。」

昇太は部下の報告に歯噛みして悪態をつく。それでも、状況が改善することはない。それでも言わずにはおれなかった。

「蘭ちゃん…大丈夫だったね。」

蘭がいる病室でつぐみは医師から言われた言葉を反芻する。

病院に搬送された後は皆帰る気になれなかったが、ここにいても進展がないと判断し、一旦帰宅した。次の日に全員で病院へと赴き、先に来ていた蘭の父と一緒に医師から告げられたのは、蘭は命に別状がなく、後遺症も残らない事だった。

「ああ、特に後遺症も残らないから大丈夫だつてな。」

「でも、生きた心地しなかったよね…。玲、ホツとするだろうなあ。」

「そだね。早くれーくんにも知らせたいよね。」

「でも、玲の奴、電話に出ないんだよね…。」

巴はそう言葉をこぼしながら自身のスマホに目を落とす。蘭が無事だと分かり、真つ先に巴は玲に電話を掛けたが、ずっと待っても出ず。誰よりも蘭の心配をしていたはずなのに。そのせいで今のところ、巴たちは蘭よりも玲の心配の方が勝っていたのだ。思い出すのは、蘭が気を失った後、雨宮に引き留められるまで片時も子猫を守る母猫のように蘭から離れなかった幼馴染み。

「玲くん…ずっと取り乱していたもんね。」

「…心配だね。」

つぐみの心配からの眩きをモカが拾うが、それ以降、誰も言わなくなった。

娘が殴られたと聞き、病院に駆けつけた蘭の父はベッドの上で眠る娘を見て生きた心地がしなかった。が、診察した医師の話によると幸いにも命に別状はなく、後遺症もないそうだ。安堵した父は付き添った幼馴染みたちに見守るよう頼み、一旦気持ちを整理するため、廊下に出た。

「美竹様ですね？」

すると、切れ目の鋭い女性刑事に話しかけられた。

「…君は？」

「申し遅れました。私、警視庁捜査一課の近藤と申します。」

そう言つて警察手帳を見せる近藤と言う女性刑事。

「実は、最近起きている騒動について調べておりまして。不良狩り、と言えば分かりますでしょうか？」

優しく話しかける近藤。だが、その目は相手の表情を窺っているようだ。

「あのニュースでやっている事ですか？勿論、ご存じですが…何故私に？」

蘭の父は顔を引き締め女性刑事と向き合う。女性刑事はチラリと蘭がいる病室を一瞥すると、口を開いた。

「実は、貴方の娘さんが不良に襲われたとの情報を得てここに来たのですが…不躰ながら今、面会は可能でしょうか？」

蘭の父は女性刑事の話に嫌な予感を察知し、出払うように話す。

「…わざわざ来てもらつて申し訳ありませんが、娘は今、眠っております。話を聞けるのは、後になるかと。」

「…そうですか。神前玲に関する情報を何か持つてないか聞き出そうと思いましたが、分かりました。また時間を改めて来ます。では。」

近藤は素直に引き下がりに、一礼をした後、歩き去つていった。残つた蘭の父は内心冷や汗をかきながら玲の心配をするのだった。

(玲くん…このままだと君は不味いかもしれないぞ…。)

夕方。玲は一人、自室で窓の外を眺めていた。巴やひまりから着信が何度も来ていたが出る気にはなれなかった。何も考えず、ただ無心でいるだけ。すると、廊下の方から部下の喋り声が聞こえた。

「…にしても、昨日のボスヤバくなかったか？あんなにボコボコぶん殴ってよ。」

「んなこと言ってるじゃねえよ！ボコボコにしたのはアイツが蘭さんをぶん殴ったからだろう？」

「まあ、そうだけだよ。ボスも取り乱す事あるんだなって。」

「んだよ、お前。まさか、失望したってか？」

「違えよ、安心したんだよ！だって何でもかんでも出来るボスだからもしかしてアンドロイドか何かだと思ってたんだけど、蘭さんを心配する姿を見たらホツとしたんだよ。ボスも弱いところがあるんだなって。」

「あー…何となく分かる。」

「だからよ。俺らもボスにおんぶだっこは良くねえと思うんだ。俺らにも出来ることねえか今から探そうぜ！」

そう言つて遠ざかる足音。その言葉が耳に入った玲は改めてこんな自分には勿体なさ過ぎる部下だと痛感した。自分はたった一人傷付いただけでこの有り様なのに。そして、泣きながら蘭の無事を願い始めた。

「神様…どうかお願いします…。蘭を、蘭から音楽を、命を奪わないでください…。代わりに、俺の命を持って行ってもいいです…。だから…。」

夕方。ようやく立ち直った玲は部下たちの前に姿を表した。それまで集合場所の会議室で駄弁っていたのが嘘だったように静まる。

「お前ら。今日の深夜、俺は大崎のアジトへ攻撃を仕掛ける。」

玲の一声に更に場の空気が張り詰める。

「正直、激しい戦いになることは予想される。最悪、重症を負うことになるかもしれない。そんな危険な場だ。それでもついでに行く奴は手を上げてくれ。」

玲は会議室を見渡し、ついでに行く部下を見る。やはり、痛いことはゴメンなのか、手を上げるのは肉体派だったり、喧嘩慣れしている者だけでまばらだった。それでも大崎の部下ににゲリラ戦を仕掛けた時の人数と合わせたら十分な数だ。しかし、その屈強な腕の中に不良とは思えない、細くて綺麗な腕が混ざって生えているのに気付いた。玲は呆れたようにその腕の主に話しかける。

「…おい、お前は呼んでないし、連れて行くつもりもないぞ。」

「えー、なんでー!?!」

不満そうに声を出したのは玲と同じ天才、アイドルである少女、氷川日菜だった。

「なんでって決まってるだろ。お前はアイドルだし、本来、無関係だ。」
「あたしに護身術教えたのにな？」

「それはお前がしつこく付きまとうからだろうが！」

ああ言えばこう言う。そんな二人の掛け合いを部下たちは眺めるだけだ。

「それに聞いたもん！蘭ちゃんが殴られたって。」
「っ！」

日菜のその発言に玲は言葉が詰まる。今聞きたくない言葉だったからだ。

「あたし、蘭ちゃんが大変な目に遭ったって聞いたとき、何で側にいてやれなかったんだらうって悔しかったんだ……。ねえ、あたしにできる事はないかな？」

「…紗夜はどうすんだよ？アイツがお前を危険な目に遭わせるのを良しにするとは思えないぞ？」

「大丈夫だよ！おねーちゃんにはお友達の家泊まってくるって言ってるー！」

「嘘ついてんじゃねえよ。」

「でも、そうじゃないとおねーちゃん許してもらえそうにないし…。」

「…だとよ、おねーちゃん？」

「え？」

玲は呆れ気味に会議室の扉に声をかける。日菜は不思議そうに玲の視線の先を追うと、

「…あなたに姉呼ばわりされたくありませんよ、神前さん。」

「お、おねーちゃん!？」

自宅でギターの自己練をしている筈の姉がいた。日菜は冷や汗をかき始める。

「美竹さんと由美のお見舞いに行ったときから様子がおかしいと思ったら、こんな危ないことに首を突っ込んで…。」

「お、おねーちゃん…ダメ…?」

「駄目です…と、言いたい所ですが、許可しなかったとしてもあなたは黙って行くでしょうね…。」

厳しく却下する、つもりだったがもし却下した場合、日菜がどう動くか予想してため息を吐く。

「じゃあ…!」

「ただし!無事に帰ってくること!もし、怪我をしたら神前さんとは金輪際関わらない事にしますよ!」

日菜が目を輝かせるが紗夜が釘を刺す。だが、日菜には紗夜が自分を心配してくれている事を察し、紗夜に抱き付く。

「分かった!わーい!おねーちゃん大好き!」

「…まったく、しょうがないんだから。」

まるでなついてくる子犬のように飛び付く妹に困ったようにそれでいて満更じやない表情を浮かべる紗夜。そんな紗夜に玲は声をかけた。

「良いのか?」

「あなただって予想しているのでしょうか?この子は鎖で繋いでも、檻に入れても自分で抜け出すような天才だと。それに、こうなった日菜にあなたがどれだけ弁舌を尽くしても絶対聞き入れませんかよ?」

「……。」

否定できない。氷川日菜は自分に正直だ。もし、説得して追い払ったとしても自分に気付かれないようにこつそりついて来るのは目に見えているし、取り押さえても取り押さえた部下を引きずりながら来るかもしれない。とんでもないじゃじゃ馬だ。

「…分かったよ。ただし、面倒は見きれないし、日菜に万が一あっても自己責任ってことで。」

「…承知しました。」

「よろしくね、玲くん！」

だが、戦力にはなる。そう判断した玲は日菜を加えることを渋々ながら引き受けた。

「よし、一時解散だ！今日の深夜！志願者はボスが言った場所へ、サツに気付かれることがないように遅れるなよ！」

ビルから出ていく部下たち。その中で玲も戦闘準備で待たせている部下の元へ行こうとしたが、

「やあ、玲。」

行く先に雨宮がいた。後ろには車が停めてあり、今しがたやって来たところだろう。

「…お嬢様の護衛はいいのかよ？」

「実は急に有給を取らされてしまつてね。仕事人間な僕としては暇で仕方ないんだ。僕を雇つてみないかい？」

「傭兵ごっこなら他所でやれ。」

「三食まかない付きで時給500円でも良いけど？」

「はあ…!？」

「悪くない条件だと思うが、どうだい？」

玲は暫し呆気に取りられるが、困ったように笑う。

「…運転手程度ならいいぜ。」

「それはありがたい。」

雨宮はにこやかに微笑んだ後、車に乗り込んだ。玲も助手席に座り、目的地を指示する。

「行き先は？マイマスタご主人様。」

「×市○○町の7番地だ。」

「了解しました。」

雨宮は承ると車を走らせた。

「……………」

「……………」

沈黙が支配する。聞こえるのは車を走らせるエンジン音だけ。

玲は窓の外を何も言わずに眺めている。そんな玲の様子を見た雨宮は口を開いた。

「美竹様が気になるんだろう?」

「…言つてねえ。」

「顔に書いてあるよ。」

「…気持ち悪いぞクソ執事。」

「容態は安定。これといった後遺症や怪我もないとの事だよ。」
「…そうか。」

少し、短い言葉ながら安堵が混じる声。素直じゃないな。そう感じた雨宮はもう一押し声をかける。

「面会するかい？」

「いらねえ。つか、今俺がどういう状況にいるか分かってて言ってるのか？」

「大丈夫。手はあるさ。と、言うわけでちよつと寄り道するよ。」

蘭と由美がいる病院。そこに一人のおどおどした少年を連れた雨宮が正面口から入る。だが、その二人に声をかける者がいた。

「失礼。私、こう言う者ですが…。」

声をかけたのは刑事の近藤だった。警察手帳を見せながら二人を呼び止める。

「ふむ、私どもに何か？」

「呼び止めてしまって申し訳ありません。弦巻家の執事でございますね？実は今、不良狩りに関する情報を収集しております。お時間、よろしいでしょうか？」

「ええ。勿論。」

雨宮が了承し向き合う。近藤は鋭い目を隣にいた少年に向けて、少年はその視線に怯えたのか、雨宮の陰に隠れるように動いた。

「そちらの少年は？」

「この子はここ最近明らかになった私の親族の息子です。私の仕事に興味があると言っておりましたので仕事を教えるついでにお嬢様のご友人を紹介しようかと。」

「…その子の親はご同伴ではないのですか？」

「…実は聞いてください。この子の両親は子供が嫌いなようで、この子を雑に扱うような親でございまして、去年帰省したときにこの子が弱っているのを見かけて保護したのです。」

「……。」

「ですので、こころお嬢様と交流すれば、少しは心の負担を減らせるかと思ひ、執事の仕事をやってみないかい？と誘ったところ、快く受け入れました。そして……！」

「…もう十分です。分かりました。引き留めて申し訳ありませんでした。」

雨宮の説明に熱が入り始めた瞬間、近藤は長くなりそうだと察して引いた。雨宮は少しがっかりしたような表情をする。

「…そうですか。では、これで。」

「ええ。申し訳ありませんでした。」

近藤が退いて行くのを見送った雨宮は少年の手を引き、エレベーターへと乗り込む。扉が閉まったと同時に少年の庇護欲を掻き立てられるような怯える表情は鳴りを潜め、雨宮に白い目を向けた。

「…おい。お前のあれ、素が入ってるだろ？」

「さて、どうだろうね？とにかく、病室から先は自分で行きなよ。君と美竹様、二人の時間を邪魔しないよう僕は見張っておくからさ。」

面会終了時間が近付いているためか、人通りが少ない。玲と雨宮はその静かな廊下を歩き、目的の部屋へと辿り着く。玲は一步、一步、蘭がいる部屋に近付くにつれ、自分の心音が高鳴っているのを感じる。そして、蘭がいる病室に辿り着く。扉は他の病室と変わりない普通の扉。だが、玲には手をかけるのが憚られる。しかし、今会わなければ二度と会えないかもしれない。自分の心に叱咤をかけ、意を決してドアをゆつくりと開けた。

「…玲?」

そこにいたのは意表を突かれたような表情をする、ベッドにいる蘭。

無事だ。普通に話せてる。普通に認識できている。その事実をこの目で確認できた玲は自然と目から涙が出てきた。

「良かった…! 本当に…、良かった…!」

「ちよ、ちよつと玲、大袈裟じゃない? みつともないから泣かないですよ。…て言うか何でここに?」

「俺は…俺はお前を守れなかった。許してくれ…。」

そう言つて蘭のベッドの前で崩れ落ちる玲。この一日。彼はずっと耐えていた。蘭が無事であつてほしい。その一点しか考えられなくて、今すぐにも自分の役割を放棄したい筈だ。だけど、彼は不良のリーダーとして、蘭たちを守る為に戦う事を選んだのだ。

「…玲。あんたにはまだやるべき事があるでしょ?」

「蘭…?」

だから、蘭は敢えて厳しくする。自分が目を覚ましたとき、父から

玲が警察に目をつけられた事を聞いたから。

「行って。ここにいたらあんたは警察に捕まっちゃう。だから、早く…」

本当は言いたくない。自分の視界がぼやけていつてるのが分かる。蘭は思い切り声を張り上げた。

「行けーーーーー!!!」

そうしないと彼はずっとここにいてしまう。それでは駄目なんだ。まだすべき事があるから。

蘭の意図を察したのか、玲は病室を何も言わずに飛び出した。その時、見た顔は整った顔立ちをくしゃくしゃにして泣いている顔だった。

「うつ…うつ…玲…ゴメン…こんな事しか…言えなくて…本当に…」

遠くなつていく足音。その足音を聞きながら蘭は一人、咽び泣いた。

「お、おい、大崎さんよ!ここにいても不味いから早く逃げようぜ!」

太った男が大崎にそう提案する。大崎が玲に恨みを持つ人間としてスカウトしたがそんなに大したことはやっておらず、ただいるだけ

の存在だった。

「逃げる？どこかアテでもあるのか？」

「そ、それはあ…そのお…。」

「いいか？そんな根拠のない発言は慎め。何度言わせりや分かるんだお前は？お前は腹だけじゃなく頭にまで脂肪が詰まってるのか？」

大崎は男を蔑む。だが、それでも男は下がらなかった。

「ふ、ふぎけんなよ！俺様の意見ばかり無視しやがってよお！」

堪忍袋の緒が切れたように男はわめきだす。無理もない。何せ大崎のグループは玲に恨みを持っていれば誰でも良かったのだ。しかし、それだけを基準にしていた事と、部下が増えすぎた事から意見の衝突が多くなってしまい、玲のゲリラ戦に翻弄される羽目になったのだ。

「もうこんな所いられるか！俺は抜ける！あばよ！」

「…ああ。もう好きにいな。」

太った男は大崎にそう吐き捨てアジトの廃工場から出ていった。その様子を見ていた部下はまたかと言いたげにため息を吐いた。

「これで十人目…。遂に何もしてなかった寄生虫が出ていきましたね。」

「そうだな…。」

「襲撃に向かった部下二人からの連絡がない以上、俺達の敗北では？」

部下はこの戦いは負けだと言うが大崎はそうではないと言いたげに笑う。

「いや、俺の予想だと、奴は今日^玲ここを襲撃する。それに奴は甘ちゃんだからな。それを利用するぞ。」

「ボス。大崎のアジトからまた一人出ていきました。どっかで見た太った男っすけど、どうします?」

「放っておけ。アレは一人じゃ何もできない肉塊だからな。…さして、そろそろだ。」

大崎と玲。二人の最後の戦いは、目前に迫っていた。

44話 戦い

「ここまでだな、大崎。」

「く、くそっ…！」

「ふう、なんか呆気なかったねー。」

玲と大崎の戦いは一瞬だった。大崎の部下は玲のグループの猛攻に抵抗したが、日菜の言うとおり、呆気なく完敗。外で頭に手を組み、連れ出され並ばされる光景は、まるで降伏した国の兵士が奴隷となり、無抵抗を示すような光景だ。しかし、この結果に雨宮は違和感を抱いた。

（おかしい…。玲を潰す事に全力を尽くす男がこうも呆気なくやられるものか？それに、玲は気づいてなかったようだけど、あの目は…。）

雨宮の心配をよそに玲は大崎に詰め寄る。

「さて、最後に言いたいことはあるか？」

低く、冷たい声が大崎の耳に入り込む。

「…そうだな。俺はお前が憎い。それは誰が見ても明らかだ。」

「ああ。それがどうした？」

「俺は負けた。それは認めよう。だが、最後にひとつ頼みがある。」

「…言ってみろ。」

「あんと一対一で戦いたい。」

「…いいぜ。」

大崎の提案は決闘だった。それは不良としては珍しくないことだった。そして、玲と大崎は荷物が入ってない倉庫へとやって来た。広く、障害物もあまりなく、決闘場として丁度いい場所だった。

「…ありがとよ。こんな俺の願いを聞き届けてくれてよ。」

「御託はいい。さっさと始めるぞ。」

「ああ…そうだな。やっぱりお前は甘ちゃんだな！」

がららがしやああーん

大崎がそう叫んだ瞬間、突然何かが落ちるような、けたたましい音が響いた。

咄嗟に音がした方を見ると決闘の成り行きを見守っていた雨宮や日菜と昇太、部下たちの姿はなく、代わりに黒いシャツターがそびえ立っていた。

嵌められた。そう察した玲は大崎を睨むが、倉庫の端に積まれてあった箱の影から大崎の手下がぞろぞろと現れ、大崎を守るように動く。そして、その中心にいる大崎は玲を見下すように嗤っていた。

「大崎…！貴様あ！」

「お前を潰すのに手段など選んでいられるか！これでおしまいだ、ざまあみろ！」

「玲！おい玲！ちつくしよう！何だよこれは！」

決闘の邪魔にならないよう離れて見守っていたら突然目の前に下りてきたシャツターに驚いたが、すぐに破ろうと蹴る。しかし、シャツターはビクともせず、変わらずそびえ立っているだけだ。そして、それだけでは終わらなかった。

「た、大変だあ！昇太の兄貴、どこからともなく大崎の手下が！」

「なっ…!?マズい！このままじゃ袋叩きになるぞ！」

(なるほど…。呆気なかったのは待ち伏せに人員を割いていたからか。)

慌てて来た部下の報告と背後に聞こえる大勢の足音に昇太は焦り、雨宮は納得しながらも持つてきた荷物に手を伸ばし、前に出た。

「お、おい！雨宮さん!?何を…」

「僕が時間を稼ぐ！君たちは体勢を立て直せ！」

雨宮は昇太に指示をしたあと、荷物から指を引っ掻けるためにあるような輪が付いた管状の物体を取り出した。

「な!?あ、雨宮さん！いくら何でも手榴弾はやりすぎじゃ!？」

管状の物体が何であるか察した昇太が止めさせようと走り出すが既にピンは抜かれ、大勢の足音が聞こえる方向に放り投げた。

放物線を描いた管状の物体は地面に落ちたと同時に煙が噴き出す。爆音と共に破片と肉片が飛び散ると予想した昇太はまたも呆気に取られた。

「えっ…、これは…。」

昇太が聞こうとした瞬間、煙の中から声が聞こえてきた。

「げほっ、げえほ！ちくしょう！何だこりゃ!？」

「おい、下がれ下がれ下がれ!!バカ！こつちに来んな！」

「ああああああ!!!目が！目ぎやああああ!!!」

煙の中から聞こえる阿鼻叫喚。そこで昇太は雨宮が何を投げたのか思い至った。

「催涙弾か！」

「僕がこころ様の安全のため開発していたんだけど、誰もテストサンプルになつてくれないからね！ちようど良かった！」

「…いや、そりゃこんな事になるから誰も受けねえよ。」

昇太は煙の中で繰り広げられている地獄を見ながら苦笑いをする。もし、雨宮から部下の何人かにこの催涙弾のサンプルになるよう頼まれても昇太は即答で断るだろう。

「さて、早く立て直すんだ。このガスも長くは持たない。」

雨宮はすぐさま踵を返し、昇太もそれについて行く。聞きたいことがあつたのだ。

「なあ、玲はいいのかよ!？」

聞きたかつたのは雨宮の対応の仕方だ。まるで玲の事を後回しにしているようで腹立たしかつたのだ。しかし、それに対し雨宮は笑顔で答える。

「大丈夫ですよ。玲の元にはもう一人の天才がいますから。」

玲は追い詰められていた。

一人、二人程度ならどうとでもなるが、今、目の前にいる敵は大崎を含め十人。どうあがいても玲の負けで終わってしまうだろう。

「さて、今頃外では待機していた俺の部下がお前の部下を殲滅しているだろうよ。さあ、第二ラウンド始めようぜ！」

「くそっ…。」

大崎の勝ちを確信した声が倉庫内に響き渡る。玲は苦虫を噛み潰したような顔をして壁際に追い詰められた瞬間、玲を囲んでいた右側の一人が突然何かに殴られたように倒れた。

「玲くん！大丈夫？」

「お、お前は、日菜!？」

「そんなバカな!?!どうやって入ってきやがった?」

倒れた不良から聞こえる声に玲と大崎は驚く。玲の記憶が正しければ、最後に見たのは雨宮の隣で決闘の成り行きを見守ろうとしていた筈だ。この出入口が閉められた倉庫に抜け道があったのか、聞こうとすると玲の考えていることを察したのか日菜が喋りだす。

「実は、雨宮さんからこっそり中に入ってたって言われたんだ!」

「…あのクソ執事、余計なことを!」

玲は口では忌々しく言っているが、笑顔だった。本心から忌々しく思っているのは大崎の方だろう。

「その割りにはホツとしてるでしょ?」

「ふっ、まあな!」

日菜の指摘に素直に受け入れながら近くにいた大崎の部下を蹴飛ばす玲。

仲間の一人がやられて、ハツとした大崎の部下たちが二人を取り囲むように動き出す。

いつか見たアクション映画のような状況。それに気付いた日菜は自身の闘争心に火がついた。

「うう〜…この状況!メラメラつと来たー!!よーし、第二ラウンド、ズガガンとやっちゃうよー!!」

大崎の台詞をそのままそっくり返す曰菜。
生まれながらの天才と、人の業から作られた天才は背中合わせになりながら戦闘を開始した。

倉庫の外は乱闘と化していた。数で押し潰そうとする大崎の勢力に対し、玲の勢力は武器やステゴロ、道具などを駆使して凌いでいく。まさに量対質。だが雨宮や昇太の指示を受け、陣形を変えながら叩く玲の勢力が圧倒的に優勢、大崎の勢力は敗戦濃厚だった。向かってくる大崎の部下を一撃で気絶させながら雨宮は昇太に話しかけた。

「さて、もう指示しなくても勝てるね。昇太くん、僕はこれから高所へと向かう。」

「高所って、何でだ、雨宮さんとお！」

ヘッドロックからのしめつけ、最後に壁に叩きつけをしながら昇太は雨宮に聞き返す。

「状況を確認したいからね！じゃー！」

雨宮は簡潔に言い切った後、使われてない非常階段へ走り出していった。昇太はついて行きたかったが、今、迫ってきている大崎の部下に邪魔されているため。何より、可愛い部下たちを放っていきたくなかった。昇太は部下に激を飛ばす。

「よーし、お前らあー！これで勝ったら俺んちで宴会やつぞー！」

指示する人間がない烏合の衆。それに対し、昇太は疲弊しつつあ

る部下を奮い立たせる。昇太の激を聞いた部下たちは一同に雄叫びを上げ、数で勝る大崎の勢力を押し出していった。

その雄叫びは、倉庫内にも聞こえていた。しかし、それに気を取られている余裕はない。

「女だからって手加減しねえぞ！」

日菜を後ろから殴りかかってくる大崎の部下の拳を玲が受け止める。

「ありがと玲くん！」

「よそ見すんなよ！」

日菜は礼を言いつつ、玲は注意をしつつ、殴り掛かろうとした不良を二人同時に殴り飛ばす。そして、また背中合わせの状態に戻る。

「はあ、はあ、大分減ってきたね。」

「息上がってるぞ。休憩挟むか？」

「まさか！まだまだこれから！」

「ああ、そうだよな！」

玲はもう一度動こうと周囲を見渡した瞬間、気付いた。

「…大崎がない！」

「え!？」

日菜がその言葉を拾い、聞き返す。

「くたばれ！」

それを好機と見た部下の一人が殴り掛かろうとした。日菜がハツとして声がした方を見ると、大崎の部下が鉄パイプを振り下ろそうと手を上に持つてきていた。

(しまっ……！)

日菜は油断して両手で防御しようとした瞬間、日菜の前に人影が飛び出し、鉄パイプの攻撃を受けた。

「ぐっ…、ううあああああ!!!」

飛び出した人影の正体は玲だった。奇しくも、この時受けた箇所は蘭が玲を守ろうと身を投げ出して受けた所と同じだった。玲は日菜に振り下ろされる筈だった鉄パイプを受け、痛みからの悲鳴を雄叫びに変えながらカウンターアタックで鉄パイプを持った部下の襟首を掴んで壁に叩きつけ、最後にダメ押しの一発お見舞いした。

「玲くん！大丈夫？」

「…、これぐらい何ともない。大崎の奴め、部下を差し置いて逃げるつもりか！」

心配して駆け寄った日菜に心配かけまいとしながらも、辺りを見渡す。すると、倉庫のシャッターとは反対側にドアがあり、そこからドアを開けて走り去る大崎の姿が見えた。

玲は追いかけてやろうとするが、まだ残っていた大崎の部下に邪魔され、舌打ちをする。こうやって相手をしているうちに大崎は逃げてしまいかもしれないのに。

すると、邪魔してきた部下の手首を掴んだ日菜が素早く手を捻る

と、大崎の部下はその場で手を押さえて転げ回りだした。

突然、痛みがりだした仲間に戸惑う大崎の部下。だが、玲は見抜いていた。

「お前、それは誰からだ？」

「雨宮さんから！」

玲の問いに日菜は短く答え、更に言葉を続ける。

「玲くん、行って！あたしもこいつらを倒したら追いかける！だから行って！」

日菜の言葉に玲は一瞬、豆鉄砲を食らった鳩のような顔をしたが、すぐに大崎が逃げたドアへと走っていった。残った日菜は自分を取り囲む不良たちを睨み付ける。

「おいおい、泣かせるじゃねえかよ。」

「俺らもラッキーだぜ。まさかアイドルをイジめることができるなんてよ。」

「へーっへっへ！パンツ見せたら許してやるかもな！」

玲が大崎の後を追いかけて行ったことで大崎の部下は邪魔物が消え、一気に下卑た笑みを浮かび始めた。

アイドル一人くらいなら自分達でも勝てる。そう油断をする、してしまった。

「残念だけど、あたしはあんたたちみたいな奴にはやられないよ。みんなここで、あたしに倒されちゃうんだからね！」

そう啖呵を切って、日菜は飛びかかってきた大崎の部下の腹に拳をめり込ませた。

「くそっ！あいつらがそこまでできるとは思わなかった！早く撤退して計画の練り直しだ！」

大崎は一人、廃工場の側にある駐車場の真ん中を走っていた。その先には大型のワゴン車がポツンとある。普段は欲求不満な部下が一人でいる女性を連れ去り、おもちゃにする為に使われていた物だが、それが偶然、駐車場に停まっていたのだ。このワゴン車の持ち主は今、玲の足止めをしている筈だ。ありがたく使わせてもらおうとした瞬間、大崎の顔の横に何か素早いものが通りすぎ、ワゴン車のタイヤがパンクした。

「なっ…!?!」

戸惑っているうちにもうひとつのタイヤも突然パンクした。大崎は何が起こったか分からず辺りを見渡すが、誰もいない。

それも当然。タイヤをパンクさせた張本人は登りきった非常階段からスナイパーライフルを構えていたからだ。

「そう簡単には逃がしませんよ。」

にこりと微笑みながらスコープ越しに狼狽える不良のボスの様子を見る雨宮。その情けない姿を見ている内に徐々にその口が邪悪に歪み始めた瞬間、我に帰った。

（おっと、いけない。こころ様からこの笑顔はダメだと言われてたんだった。反省反省。）

自戒しながら、非常階段を降りる雨宮。自分にできるのはここまでだと言わんばかりに降りていく。この男を倒す役目は自分ではないからだ。

大崎が走った先に追い付いた玲。背を向け、逃げようとする男に思いきり叫んだ。

「大崎圭司！」

その声に大崎は足を止める。

「…初めてアンタにフルネームで呼ばれたな。神前玲。」

そして、観念したように振り向く。

「俺の出せる手は全て出した。正直もう何もねえよ。」

「…そうか。」

「…やっぱりその面だ。俺はお前のその何もかもゴミ屑だと言ってるようなその面が気に食わねえ！」

「……………」

「俺が去年の夏、あそこから追い出されてどうなったか知らねえだろう？興味もねえだろうな。あの後、親父の仕事が左遷させられた後、それなりに裕福だった生活は一転、貧乏になった。俺にお袋はいない。そんなお袋の代わりになれるよう努めてた親父は給料を下げられ、扱っても冷遇され、貧しい生活耐えきれなくなって！俺を残して自殺した！！」

「……………」

「地位、名誉、部下、住み処、家族、生活…！お前のせいだ…！お前は俺の大事なものを全部ぶち壊しやがった！！」

「……………」

「だから、俺はお前に復讐すると誓った。どんな汚い手を使っても、後ろ指さされて罵声を浴びられようが！お前が大切だと思うものの全部ぶち壊してやるとな！」

「実際どうだ？あの由美とか言うガキがボコられたと聞いた時、お前はどんな気持ちだった？まあ、そんな目をしたお前だ！何も思わねえだろうな！」

「……………」

「それでもお前は俺の前に現れた。この俺の前にな！手は出し尽くし、逃げ道も無くなった。だが、それでも！俺はお前をブチ殺す！！サツなんぞ怖くねえ。失うモノが無いからな！」

大崎はそう言つてシャツを脱ぎ捨てる。すると、胸から腹にかけて描かれた刺青が露になる。その刺青に描かれていたのは黒豹の喉仏に噛み付く獅子の絵だった。

「この刺青は俺の決意だ。ここで貴様を殺してやるぞ！玲!!」

「……………そうか。なら、掛かってこいよ、大崎。第三ラウンドだ。」

45話 決闘

夜が更けた廃工場の外。そこで互いに睨み合う二人の男がいた。

一人は眼帯をして、身体に刺青を入れた男。もう片方の目から覗く眼光は目の前の少年の一挙手一投足を見逃すまいと睨み付ける。

もう一人は美少女と見間違うほどの美貌。闇に溶けるほど黒い髪、細い手足。だが、その顔にある二つの目はまるで獲物を狙う猛獣のように、闇夜に光る刀のように、睨んだだけで人を殺せそうな鋭さだ。

「うおおおおおおおおお!!!」

「っ…!!!」

大崎が雄叫びを上げ、玲は姿勢を低くしながら走り出し、そして大崎は蹴りを繰り出し、玲はそれを受け止める。それが開戦のゴングの役割となり、二人はお互い距離をとる。

(ちいっ…、やっぱまだ残ってるか…!)

普段の玲ならば大崎は敵ではなかったかもしれない。しかし、玲は大勢の不良を相手にした事による疲弊と日菜を庇った際受けたダメージが足枷になっており、思うように動かせない身体に歯噛みする。

それでも大崎の猛攻は止まらない。玲は痛む身体に鞭を打ち、避けながらカウンター戦法で攻めていくが、それでも限度があった。

「げほっ…!?がっ…」

腹を蹴られた。頭を殴られた。視界が赤くなっている。殴られたときに額が切れ、流れた血が目に入ってきたからだ。玲も黙って殴られ血を流しておらず、お返しに急所を突くように手足を大崎の身体にめり込ませていく。

「ぐはっ…、んのやろお!!」

大崎は痛みに悶えるも怯む様子はなく、身体を抱えたままタツクルをして、そのままパンクしたワゴン車に叩きつける。

「うっぶ…おらあー!」

大崎とワゴン車のサンドイッチにされた玲は腹の中にあるものが込み上がってくる感触を味わいながらも大崎の背中を殴る。そして大崎共々地面に転がる。

玲の戦い方は既に以前のようない撃必殺の鋭さはない。

殴る、蹴る、引つ掻く、噛み付く。雨宮から叩き込まれた戦い方を全て投げ捨て、ただただ大崎と殴り合いながら転げ回る。

その様子はまるで獣。互いに血に飢えた獣が喰らい合うような、互いの血で身体を染め合うような泥臭い戦いが繰り広げられる。

「玲いいいッー!」

大崎は玲の頭を掴み、そのまま後頭部を地面のコンクリートに叩きつける。

「う…っぐ!!」

玲はそのお返しと言わんばかりに頭を掴んできた腕に足を絡ませ、身体ごと捻る。

「ぐああああ!!?」

ぐきりと嫌な音が大崎の腕から聞こえ、大崎は悲鳴を上げながら腕を離し、のたうち回る。

玲は叩きつけられ痛む頭を抱えながら立つ。しかし、おぼつかない足どりからは玲が満身創痍である事が窺える。

それでも玲は止まらない。のたうち回っている大崎の髪の毛を引っ張って立たせ、顔面に拳を何度も叩きつけていく。だが、黙って攻撃を受けている大崎ではない。最後の力を振り絞り、玲の拳を動く方の手で受け止めた後、蹴り飛ばす。

玲はよろめきながらもバランスを保ち、もう一度拳を握って大崎の顔面を狙う。

「うおおおおおおお!!!」

それに対する大崎も拳を握り、玲の顔面を狙い、振りかぶった。

「くたばれええええええええええ!!!」

互いの拳は衝突することなく交差する。どちらが勝ってもおかしくない満身創痍の戦いに決着がつこうとしていた。

「玲くん…大丈夫かな?」

氷川日菜は何とか大崎の部下を退け、今現在は玲の後を追いかけている。

服は所々破かれたり乱れており、下着が少しだけ見えている。捕まり、服を破かれるなど、無傷とはいかなかったが、最悪の事態は回避できた。これも玲や雨宮に教えられた護身術の賜物だ。その事に安堵はしつつも一息はつかず、玲の後を追いかける。

そして駐車場にたどり着いた日菜が見たのは、

「あつー玲くん!」

大崎が倒れ伏し、玲が立っている姿だった。

決着がついた。最後は玲が最後の力を振り絞って放った拳が大崎の顔面にめり込み、大崎は吹っ飛ばされ、重力に従いそのまま仰向けに地面へと落ちた。

だが、玲は喜ばなかった。喜ぶほどの体力が玲にはない。今にも膝は崩れそうなほど笑っており、全身がもはやどこが痛いのか分からないほど悲鳴を上げるようにズキズキ痛んでいるからだ。

「くそ…。また負けちまった…。」

仰向けで倒れた大崎がそうぼやく。玲はまだ油断をせず大崎を睨み付ける。大崎はゆっくりと上半身を起こして、打撲だらけの顔で笑みを作り、口を開く。

「だがな…。俺は何度も起き上がって、てめえの大切な物をブチ壊してやる…。過去のお前のような。」

大崎のその言葉は、玲のトラウマをえぐる。おそらく、あの男から聞かされたのであろう。玲はゆっくりと大崎に歩み寄り、その顔面に蹴りを放った。

しかし、大崎は防御する素振りを見せず、そのまま口や鼻から血を吹き出す。

それでも玲の攻撃は止まらない。止まらない。殴る。殴る。殴る。

こいつのせいで巴とあこが怖い目に遭った。

こいつのせいで由美と友梨が無惨な姿になった。

こいつのせいでつぐみは身体をまさぐられ、純潔を汚されかけた。

こいつのせいで蘭が、蘭が。

「そうだよなあ…。そうするしかないよなあ？」

大崎
クズが何かを言っている。死ね。

「そうさ！その目だ！お前に足りないのは相手を殺す覚悟だ！」

手が真っ赤になる。でも返り血だ。問題ない。死ね。

「お前はこれで完全に化け物になるんだ…！」

黙れ。死ね。

「さあ、殺せよ！俺を殺して…！」

止めを刺すと言わんばかりに拳を振りかざす。

「本物の！怪物になっちまいなああ！あああ！！！！」

「うあああああああああ！！！！！！！！！！」

！！！！！！！！

玲は雄叫びを上げ、一線を越えようとした瞬間、突然横から何かがぶつかる衝撃を受け、バランスを崩し二、三度転がる。何が起こったか分からず頭を上げると、

「…ダメだよ、玲くん。それ以上は…ダメ！」

そこにあっただのは今にも泣きそうな氷川日菜の顔だった。玲の身体をがっしりホールドをし、涙声になりながらも力を緩めない。

「それ以上やったら、玲くんは犯罪者になっちゃうよ！そうになったら、病院で一人、玲くんの帰りを待っている蘭ちゃんに何て言えばいいの!? 玲くんが敵を殺して帰ってきたって言えばいいの!? 嫌だよ…、そん

なの……あたしは嫌だよお……。」

日菜は玲の胸に顔を埋め、泣き出してしまふ。日菜の泣き顔を見ている内に、日菜の説得を聞いている内に玲の中にあるドス黒い感情が消えていく。

「……すまん。助かった。」

玲は冷静になり、泣き出す日菜の頭を撫でる。もし、日菜がいなかったら玲は殺人者の烙印を押されていたことだろう。もし、殺人者の烙印を押されたら、良心の呵責によって苦しめられ、自殺していただろう。本当に、自分には勿体無いくらいの人達だと、ぼやきながら空を見上げた。

「……ふん。つまんねえな。」

大崎は首だけを動かし、日菜の下敷きになっている玲を見て、つまらなさそうに視線をそらした。

大崎は万策尽きたと言っていたが、それは自分が無事である場合の事。最後の策は玲に自分を殺させて、犯罪者に仕立て上げる事だった。世間では玲は歯向かう輩は女子供ですら一切容赦しない冷酷な不良のボス、黒豹の名で通っている。

蓋を開けてみれば、攻撃しない限り無害な人物であるが、今回の騒動は事が大きすぎた。この情報化社会で、この騒動は注目されてしまい、玲の攻撃の手口まで分析された。

その結果、下手したらテロリストになる危険人物ではないかとの結論に至ってしまったのだ。この上、殺人容疑まで加わってしまうともう取り返しがつかない。大崎は自らの命を捨ててまで玲を陥れるつもりだった。

「……完敗だ。ちくしょうが。」

しかし、それすらも失敗してしまった。もはや大崎には攻める気力も起きず、ただ無感情に空を眺めた。町から離れた林の中の廃工場。光が少ないこの場所は夜空の星がよく見える。無数に輝く星空と、泣きじゃくるアイドルの声を無感情で聞いていた。

だからだろう。大崎は、誰かの足音が近付いて、自分の足元を横切っていったのに気付いた。

「じゃあ、玲くん。帰ろっか。」

少しだけ涙の後が残ってる顔で日菜が促す。気付けば廃工場から聞こえる声は既に静まっております、戦いが終わっていることを示していた。

「…おう。」

玲も日菜に抱えられながら立ち上がり、廃工場へ行こうとした。

「漁夫の利とは、正にこの事ですね。」

が、後ろから聞こえた声に日菜と一緒に振り向くと同時に、日菜が突き飛ばされ、玲は地面に押し付けられた。

「ぎゃっ!?!」

「がっ、ああああああ!?!」

大崎との戦いで痛めた身体にまたもや激痛が走り、悲鳴を上げる。抵抗しようにも力が入らず、首だけを動かさず、押さえ付けられた者を見る

と、
「神前玲。少し署で話を聞こうか？」

病院で見た、切れ目の鋭い女性刑事の顔があった。

46話 戦いの結末

神前玲の足取りを追っていた近藤は今この時がチャンスだと思っ
た。

病院で見た気弱そうな少年。何やら引つ掛かりを感じ、己の直感を
信じてその後をこっさり追い掛けていた。

車に乗り込み走らせたところで、近藤も覆面パトカーで追い掛けた
が、途中で信号機に捕まってしまい、遠くなつていく車を見て思わず
舌打ちをしてしまった。

信号機から解放され、どこに行つたか探していると、何やら争うよ
うな声が聞こえてきた。耳を澄ませ、声がする方向へ覆面パトカーを
走らせると、廃工場へとたどり着いた。覆面パトカーを少し離れた場
所に停めると手錠、警棒、護身用のスタンガンを持って廃工場へ向
かった。

「玲くん!?!いきなり何なのあんた?玲くんに乱暴をしないで!」

日菜は玲を地面に押し付けている女性に噛み付く。しかし、女性の
鋭い視線は崩れない。日菜をギロリと睨み付ける。

「あなたは…この不良の仲間ですか?」

「玲くんとは友達だよ。」

「仲間のようですね。貴女にも事情聴取をしますので同行願えますか
?」

「じゃあまず玲くんを離して。」

「それは出来ない相談です。この危険人物から目を離せば二度と捕ま

えられないでしょうからね。」

「……玲くんを化け物みたいに言わないで……！」

「おかしな事を言いますね、あなた。神前玲は実質化け物ではありませんか？これまでの不良集団に対するゲリラ戦のような不定期且つ神出鬼没の侵略。降伏し、抵抗力のない者を徹底的に痛めつけ、そのまま放置。これを化け物と言わないならば何と呼べばよろしいのでしょうか？」

「それ以上言わないですよ……。玲くんを悪者みたいに言うなあ！」

日菜は親友を化け物扱いする近藤に殴り掛かろうと走り出す。しかし、近藤が素早くポケットに手を入れ、スタンガンを取り出して日菜の身体に押し付けた。

「あつぐ?!」

日菜の身体を電流が走り抜け、力が抜ける。そして、糸が切れたマリオネットのように崩れ落ちた。

「ご安心を。護身用のスタンガンです。痺れも一夜の内に消えます。無駄な抵抗はしないでください。」

「れ、玲、くん……。」

「日菜あ……てめえ……、そいつは関係無え……。俺が目的だろ？俺を連れていけよ……！」

玲は痛みで動けない身体で近藤を睨む。すると、近藤の態度が一変した。

「はっ、何を言い出すのやら。お前らの頼みを聞くなど、虫酸が走るぞ。社会不適合者の言葉など聞くに値しない。」

先程までのキチツとした口調が嘘のように荒げ、鋭い視線に侮蔑の

感情を滲ませる。それはまるで出荷寸前の豚を見るかのような表情と声だった。

「じゃあ…、まずはその凝り固まった顔と考えをほぐしな。」

しかし、玲は近藤を挑発した。日菜から引き離すために近藤を煽る。その言葉が耳に入った近藤はこめかみに青筋を浮かばせ無言で玲の身体を力を込めて踏みつけた。

「あつぐあ…。」

「その汚い口を閉じろ、薄汚い不良風情が。」

近藤は玲を踏みつけた足をぐりぐりと動かし、傷口に塩を塗るような行為をする。

「おいおい…っ、不良なら何してもっ…許されると思ってたの…っか…。」

しかし、玲は屈しない。昔、同じような事をされていた玲にとって慣れてしまった物だ。痛みに耐えながらも近藤を挑発する。

「当たり前だ。これでも私は寛容なのだぞ？本来ならそのまま達磨にさせて、車に括り付けて引き回してやりたいくらいだ。」

「おつか…ねーな。どうして、っそこまで不良を恨んでんだ？身内が、不良にやられたのか？」

玲はそれでも煽る。すると、その言葉が引き金となったのか、近藤の目が見開いたかと思うと、段々と眉間にシワを寄せ、憤怒の表情で、蹴るように踏みつけてきた。

「黙れえ！貴様らの！貴様ら不良のせいで私の姉さんは死んだんだぞ

！彼氏と結ばれて！結婚も間近で！順風満帆だった姉さんの人生を
！貴様ら不良が襲って！犯して！！殺して！！台無しにさせたんだ！！償
え！！あの世で姉さんに償え！！」
「げほっ、がはっ……！」

突然ヒステリックになり、言葉を発する毎に玲を蹴る。もはや痛い
かどうかも分からなくなってきた玲は怒り狂う近藤の顔を見てぼん
やりと考えていた。

（ああ…蘭が殴られた時の俺も、こんな感じだったのかな…。）
「や、やめ、やめ、て…。れい、玲くんが、死ん、じゃう…。」

日菜は玲を守ろうと動くが、スタンガンの痺れによって、身体が思
うように動かせない。声を出そうにも上手く話せない。

それでも、日菜の声が耳に入ったのか、近藤はゆっくりと日菜を見
る。

「安心しろ。死ぬ寸前まで痛めつけるだけさ。寝転がっている不良の
ボスの仕業に仕立て上げればそれでいい。お前のような不良少女が
いくら喚こうが世間は刑事である私を信じる。貴様も加担者として
事情聴取するから大人しくしている。」

すると、日菜は目を見開いた。近藤は自分の言葉に絶望したと思
い、ニヤリと嗤う。

「くた、ばれやあああああああ
!!!!!!」

だが、次の瞬間。叫びと共に近藤の肩に激痛が走った。驚いた近藤
が振り向くと、そこには玲にやられていたはずの大崎が近藤の肩にナ
イフを突き刺していたのだ。

「き、貴様!？」

近藤は危険度が低いと思っていた者が襲いかかってきたことに狼狽え、バランスを崩してしまい、頭から地面に激突した。

「がっ…!？」

打ち所が悪かったのか、頭に強い衝撃を受けた近藤はそのまま気絶してしまった。大崎は息切れしながら近藤のポケットをまさぐり、手錠を取り出す。そして、何も言わずに自分の手首に手錠を嵌め、もう片方を近藤の手首に嵌めた。

「な、なん、で？」

日菜は大崎の一連の行動に疑問を抱いた。どうしてあれだけ玲を憎んでいたはずなのに。あれだけ玲を陥れたかったはずなのに。どうして玲を助けたのか。

大崎は日菜を見ると空を見上げ、口を開く。

「……………さあな。俺でも分かんなくなっちゃった。さっきまで俺が望んだ玲が苦しむ様を見れたはずだったのにな。この女が玲を痛めつけている姿を見ると、左遷され、石を投げられている親父の姿が被っちゃまって…気が付いたらこいつをブツ刺してた。もう分かんねえよ。」

どうしてだろうな？

大崎のその言葉は自分自身に向けての物だったが、それに答えられるものはいない。いや、答えなどないのだろう。

「お前らは勝者だ。さっさとこんな負け犬に気をかけず退散しな。」
「う、うん。そうし、そうしたい、けど。から、からだがしび、びれ

「ちや、つて。」

「おーい！日菜ちゃん！玲ー！どこだー!？」

日菜はどうしようか考えようとした時、廃工場の方から昇太の声が聞こえてきた。どうやら向こうの戦いも終わったらしい。

「しよ、しよた、くーん。こつ、ちー。」

日菜は出来るだけ手を上げ、昇太を呼ぶ。その姿が見えたのか、足音が段々大きくなって来るのが聞こえてきた。

玲と大崎の戦いは終わった。

47話 夕焼けと…

その後、不良グループのリーダーである大崎は警察の御用となった。大黒柱を失ったグループは瓦解し、散り散りになり、不良抗争は玲の勝利で幕を閉じた。

「やれやれ、傷を負ったって聞いたから驚いちまったよ、近藤。」
「…」心配をかけて申し訳ありません。」

警察署で近藤は無精髭が目立つ先輩刑事に頭を下げる。肩を怪我しており、病院に運ばれたが、無理に動かさないようしなければ支障はないと医者に言われた後の事だ。

「んで、大崎圭司。こいつが今までの不良騒動の犯人だと。」

「いえ、それともう一人。神前玲です。」

「んー…、そうか。」

「はい。顔は割れています。もう一度玲がいると思われる場所へ…」

「…なあ、近藤。張りきってる所で悪いが、上からの通達がある。」

「む、何ですか？」

「今後、お前は降格処分でこの不良騒動に関わるのは禁止。それと自宅謹慎だ。」

「な!?何故ですか!今、神前玲を捕らえなくてはいけません!あんな危険人物を野放しにしてたら…」

「お前の行き過ぎた行動を撮影した動画が上層部に送られて来たからだ。俺も見させてもらったけど、ありややりすぎだぞお前。」

「…!?そん、な…何故…何故!?!」

「何故ってお前、満身創痍で無抵抗な奴を容赦なく蹴ってる奴見たらどっちが悪者か、見りや分かるだろ?お前が不良を恨んでいるのも分かるが、やり過ぎるとお前の姉を殺したガキ共と同じになっちゃう。」

先輩刑事からの説得に目が覚めたのか、近藤は己の手を見て震えだした。

「…まあ、お前はよくやったよ。大崎圭司を捕らえる事は出来たんだからそれ以上欲張るのは危険つてもんだ。後の事は後輩に引き継ぐ。それでいいか？」

一人うちひしがれる近藤に先輩刑事は肩を優しく叩きながら諭す。

「…それに、これを戒めにして謹慎期間中に視野を広げてみな。気晴らしに音楽聞いてみるのもいいかもしれないぞ。」

近藤の目からは大粒の涙が落ちる。それは目標を捕まえられなかった悔しさからなのか、怒りを制御出来なかった自分への歯痒さなのか。自分が嫌悪していた者になりかけていた恐怖からか。自分でも分からなかった。そんな後輩の姿を見た先輩刑事は見せられた映像を思い出す。

(まあ、それだけじゃなく、アイドルにスタンガン押し付けたからな…これが公になったらマジでヤバイからな。警察おれらもアイドルも。)

玲は重傷を負っていたが、雨宮や部下からの手当てのおかげで何とか歩ける程には回復できた。しかし、服の下から覗く包帯からは戦いの傷が完全には癒えていないことを示していた。そして今はリハビリを兼ねた散歩をしている。

玲が歩いているのはとても静かな公園。のどかな風景があり、遊歩道を挟むように生えている木の間を歩く。その先のベンチに腰掛けて本を読んでいる雨宮を見つけた。

玲はその隣のベンチに座る。

「やあ。傷はもういいのかい？」

雨宮は本から視線を外さないまま玲に話しかける。

「どっかの誰かさんの気持ち悪いほど手厚い介抱のおかげでな。」

「それは良かった。にしても、よく僕がここにいると分かったね？」

「お前の愛しのお嬢様に聞いたらこういう静かな場所が好きだって聞いたからな。」

「で、僕に何か用かな？」

「ああ、あの時あの暴力刑事との一部始終を録画してくれやがったお礼と、お前の分の給与だ。ほれ。」

玲は乱雑に手を差し出すと雨宮は受けとる。雨宮の手の上には四枚ほどのくしゃくしゃになった千円札とその中心に500円玉がぽつんとあった。

「500円の18:00から2:00までで給料は4000円、そして録画のお礼に500円玉一枚か。律儀にどうも。領収書書こうか？」

「いらねえ。」

「そうか…。今日、美竹蘭様の退院日だけど、見舞いに行かないのかい？」

「…行かねえ。俺と一緒にいたらまた蘭は傷付いてしまう。そうなたら俺は傷付けた相手を殺しちまうかもしれない。自分を制御できる自信がないからだ。」

「…それはつまり、君はこの町を出て行くつもりかい？」

「ああ、出て行く。俺がここに居すぎたみたいだからな。また根無し草だ。」

「そうか、寂しくなるなあ…。」

「…止めないのか？」

「君の決断だ。僕に止める権利はないよ。」

「とか言っつて、あのお嬢様が俺を捕らえろなんて命令をしたら捕まえるつもりだろ？」

「まあ、そうだね。でも、君は蘭たちに会わないのは、その傷だらけの姿を見られたくないからだろうか？だから病院に運ぼうとしても拒否をした。」

「ああ…、今の俺の姿を見たらあいつらは絶対悲しい顔をする。折角仲直りした矢先にそんな顔をさせたくないからな。」

「…ホントに、初めて会った時と比べて変わったよ。君。」

「…そうだよな。あの時、家出した蘭を匿った時はただ久し振りだっと思ってただけだった。でもな、あいつらと関わっていく内に、あいつらの音楽を聴いていく内に、俺の心が暖かく満たされていく感触がしたんだ。諦めていた暖かな世界…それを思い出させてくれた。…だが、俺の手はもう汚れすぎた。犯される事にも慣れてしまい、人を傷付けるのに躊躇しなくなつた。もはや俺の手は…子供の頃、蘭たちと泥だらけになるまで遊びまくつた少年の手じゃない。血と暴力で彩られてしまった。もう蘭たちの世界には戻れない。」

玲は自分の手を見てそう独自する。その目には羨望と憧憬、そして諦めが混ざつた悲しい目だった。

「…それでも、あいつらの事を想うくらいは、赦されたい。」

雨宮はハロー、ハッピーワールド！結成時に自己紹介されたとき、こころがこう紹介された。

「雨宮はね、何でもできるすっごい人なの！」

それはこころが雨宮に対して最大の信頼を寄せた言葉で、実際その通りだった。

拉致され、知らない外国で人殺しの技術を学ばされ、更にはその居場所すらも追われた先で野垂れ死になる運命を変えてくれた恩人のために。彼はあらゆる事を学び、恩人の娘の付き人となつた彼にできない事はないと自他共にそう自負していた。

だが、たった一人の少年の心を癒せなかった。

そんな少年の心を癒せたのは、Afterglowの在り方だ。いつも通りでいたい。その思いが共通している五人だからこそ、神前玲は心を癒せたのだ。

「…後の事はどうするんだい？」

「昇太にまかせる。…まあ、無責任だとは思いますが、あいつも俺が出て行くのを反対しそうだから何も言っただけだな。」

困った子だ。雨宮はそう思いながら本のページをめくっていると雨宮のポケットからハロー、ハッピーワールド！の楽曲が流れてきた。すかさず雨宮はポケットに入れてあったスマホを取り出すと、耳に当てる。

「はい、いかがなされましたか？こころ様。…はい。…はい、了解いたしました。」

「次は何の無茶をするって？」

「今回は寂れた遊園地を盛り上げたいそうだよ。」

「はっ、またとんでもない事を思いついたな。」

「でも、面白いと思わないかい？さて、僕は本業に戻るとしよう。」

雨宮は本に葉を挟み、腰を上げると玲に手を差し出した。玲も笑みを浮かべ、差し出された手を掴む。

「じゃあ、死ぬなよ。玲。」

「そういうあんたも、あっさり過労で死ぬなよ？」

二人は握手をするとそのまま別れていった。この先、玲が進む道は茨と呼ぶには過酷すぎる、困難な道になるだろう。雨宮はようやく心を取り戻した少年の行く末の心配とこれからどう生きていくかの楽しみが入り交じった複雑な心境の中、世界を笑顔にするという壮大な

目標を持つご令嬢の元へと向かっていった。

それから二日後、新しいいつも通りに戻ったAfterglowは新曲の作成に取り掛かっていた。新しいいつも通りになって、ここにはいないもう一人のために作った歌を最初から最後まで通して歌った後、一息つく。

「よっし、いい感じだな！」

「うん！この調子で本番も頑張ろう！」

「蘭く。ギターの時、落ちてないよね？」

「心配しなくていいよ、モカ。いつも通り弾けてる。」

「良かった。鈍ってたらどうしようって思ってたけど、これなら大丈夫そうだね！」

蘭は殴られ、少しの間入院する羽目になったが、命に別状はなく後遺症も残らなかつたのですぐに退院できた。少しの間ながらギターに触れなかつたので腕が鈍っているかもしれないと何曲か演奏してみたが、問題はなかつた。すると、がちやりとドアを開ける音がした。

「よっ。精が出てるな。」

音がした方を見ると昇太がいた。顔には殴られた跡や湿布が貼つてあるが、それでも持ち前の気さくな笑顔は失われていない。

「お。よう、昇太！」

巴が最初に挨拶を交わす。昇太も手を上げ挨拶を返しながらスタ

ジオに入る。

「中々良い演奏だったぜ！これなら本番も大丈夫じゃねえのか？」

「えへへ、ありがとう。昇太さん。」

「しよーくん、しよーくんや、その手に持つてる紙袋はもしや…！」

「ご明察だぜ、モカさんや。やまぶきベーカリーの焼きたてパンだぜ。」

「やったあ！私ちよつとお腹減ってたんだよねー！」

「おおく、さすがしよーくん。パシリの才能がありますなあ。」

「いやあ、それほどでも…って何でやねん！」

昇太はそのままつぐみたちと和気あいあいと会話をし始める。そして、蘭の方に話を振った。

「んで、蘭ちゃん。殴られたところは痛むか？」

「…うん。痛まない、けどさ。」

昇太は蘭の歯切れが悪いことに気付いた。まさか別の問題でも起こったのだろうか？そう考えていると蘭が口を開く。

「玲はどうしてるの？」

「玲？…まさか、あいつに会えてねえのか!？」

蘭の言葉の意図を察した昇太は驚いて蘭に聞くと、後ろから巴が話しかける。

「実はそうなんだよ、昇太。あいつ、あの戦いの夜以降、姿が見えなくてな…。」

「無事なのは分かってるんだけどね。」

「私たち、心配なんだよね…。」

「昇太さん、何か知りませんか？」

A f t e r g l o w 全員の言葉を聞いた昇太は首をかしげる。

「ええ？あいつなら無傷とは言えねえけど、帰って来てるぜ。…でも、何で蘭ちゃんたちに会わねえの？わっかんねえな…。」

実は、昇太は玲以外の怪我をした部下の面倒を見ていた為、玲が動けるようになった後の動向は知らずにいたのだ。

「そっか、無事なんだね。…ねえ、それなら頼んでもらってもいい？」

蘭は玲が無事である事に安堵しながらも、昇太にしかできない事を頼んだ。これしかない。この人にしか頼めないと。

玲は一人、雑居ビルの一室にいた。朝起きて、夜寝るためにいた、慣れた部屋を入り口から眺める。

「……もこれで見納めか…。」

無意識にこぼれた言葉はそのまま静寂に吸い込まれる。机の上には玲が書いた別れの言葉と、今後の対策について昇太に託すという言葉が綴られた置き手紙代わりのノートパソコンがあった。

玲は荷物を担ぎ直すと、踵を返し、その場から立ち去る。一步一步、階段を降りる音は毎日聞いているはずなのに、この日ばかりは何故だか寂しく感じた。

そして、一階に辿り着き、外へ進めようとした足を止めた。

「……何の用だ？昇太。」

玲の視線の先には入り口に立つ昇太がいた。傾きつつある陽の光が昇太の背中を浴び、逆光によって表情は窺えない。

「…お前、出て行くのか？」

発せられた昇太の声は驚きと戸惑いが半々だった。それに対し、玲はしくじったと言いたげな表情をした後、平坦な声で答える。

「だったら何だ？俺を止めるのか？」

開き直った玲は昇太を睨む。おそらく、その道を退かなければ、たとえ昇太であろうと容赦はしないと云う目だった。

「…わあつたよ。でもな、これは持っておけ。」

昇太はそう言つてジャンバーのポケットに手を入れ、中に入っていた物を差し出す。それは丁寧に封をされている手紙だった。

「蘭ちゃんからお前宛ての手紙だ。読んでおけ。」

「…はっ。言いたいことがあるならメール使えや。」

その手紙を見て玲はそう吐き捨てる。その言葉に昇太は怒りで手を上げようとする。が、おそらく殴つて説得しても自分では玲の心には届かないだろう。そう考え、名残惜しそうに玲のポケットに手紙を入れ、抱き締めた。

彼には助けられた事が沢山ある。それまで自分には出来なかった事を易々と成し遂げてきた。だけど、孤独だった。昇太はそれを察して孤独を癒そうとしてきたが、自分には出来なかった。

俺はお前の味方だ。せめて、お前が帰る場所は用意してやる。その想いを込めた抱擁をする。

玲は少し驚いた表情をしたが、すぐに意図を察し、抱き合う。

「じゃあな。…強情っぱりの馬鹿野郎。」

そうやって昇太は後ろ髪を引かれる思いで見送った。玲はその横を通り過ぎ、宛もない旅を始めるのだった。

蘭たち、Afterglowはいつも通り商店街を歩きながら玲の事で話し合う。そんな中話しかけてくる声があった。

「蘭ちゃーん！元氣ー？」

「おい、香澄！ゴメン、蘭ちゃん。うるさかったか？」

入ってきたのは香澄たちPoppin' partyだった。

「ううん。全然。」

「よっ、香澄！どうしたんだ？今日は。」

「うん！今日はね、由美ちゃん友梨ちゃんのお見舞いに行ってきたんだけど、二人とも、バンドをやるんだって！」

「おお!!そりゃホントか!?!」

「うん！それで、誰がどのパートやるの？って聞いたんだけど、二人ともギターって言っちゃって…」

「っーか、友梨ちゃんは自分もやるなんて聞いてないって顔してたよな。」

「でも、友梨って何でメイクでもしてるのかな？」

「おたえちゃん、あれメイクじゃないよ？」

商店街の一角で盛り上がる中、蘭は由美がバンドを始める事を知って微笑んだが、まだ浮かない顔をしていた。

(玲…何となくだけど、あたしには分かる。あんたはあたしたちを不良の世界に巻き込んで欲しくないから、こう言う風景を崩されたくないから会わないんでしょ?でも…、でも、それでいいの?)

玲は町を離れ、歩いていたが流石に歩き疲れたのかベンチに座り込む。一息つき、ふと、昇太から押し付けられた手紙を見る。

(…蘭からの手紙、か。)

玲は最後まで読み読んでおくかと手に取り、封を切ると中には便箋が二枚、そして便箋とは違う質の紙があった。それを取り出し、見た玲は目を見開いた。

(ライブのチケット!?蘭が参加する…。)

何故こんなものが。疑問を持ちながら玲は便箋に目を移すとそれは、昇太の言う通り蘭の文字で書かれた手紙だった。

『玲、あの日以来、あんたに会えてないから無事かどうか気になって仕方ない。』

一文目で玲が便箋を持つ手の握力が強くなる。破り捨てたかったが、その後続く文に目を奪われる。

『あんたは言っていたよね?俺とは住む世界が違う。もう昔の俺じゃないって。でも、本当にそうなの?だってあたしたちから見ただけであんたは、ずっと一緒に日が沈むまで遊び合った幼馴染みでしかないから。あたしはあの日、家出して良かったと思っっている。だって、そのおかげでまたあんたに会えたんだから。』

玲の手紙を持つ手が震える。しかし、その震えは恐怖ではなかった。

『あんたはあたしに言ってたよね。俺が怖いかって。あたしの答えは決まってる。怖くない。むしろ、守りたいと思っただんだ。』

『力だって、知恵だって、あたしたちとは比べ物にならないほど、それこそ月とすっぽん位の違いがある。でも、頼もしい筈なのに、時々あんたの背中が消えてしまいそうに感じる事があつた。そんな姿を見てあたしはあんたを守りたいと、ずっと側にいたいと思つた。』

『おかしいよね？あたしは、あんたを何から守りたかつたんだろう？今までその答えは見出だせなかつたけど、今なら言える。』

『あたしは、あんたをあの酷い過去と運命から救いたかつたんだ。』

そこまで読んだ玲は、感極まり、来た道を戻り始めた。

蘭たちに会いたい。もう一度、蘭たちの歌を聴きたい。もう一度、蘭の顔を…

玲はその事だけを考え、疾風のように走り続ける。

そして、向こう側から走って来る人にも気付かずにぶつかった

ドン

その瞬間、腹に激痛と、何か異物が入ったような感触がした。

「あ。」

現実には甘くなかつた。

「…玲?」

「ん、玲がいたのか!? 蘭!」

突然ここにはいない幼馴染みの名を唐突に呟いた蘭の言葉を巴の耳が拾った。それと同時に幼馴染み全員が振り向く。

「…いや、何でもない。気のせい。」

誰もいない方向をじっと見た後、少しがっかりしたような声で気のせいだと答える蘭。

(…もしかして、れーくんに何かあったのかな?)

しかし、モカは少し嫌な予感がして、スマホのある人物にメッセージを送った。

「よーし! みんな、行くよ! 明日は本番! 玲にも届くように歌うんだー!」

「おう! その意気だひまり! やってやろうぜ!」

ひまりが音頭を取ると巴たちがその後が続いていく。すると、つぐみはモカが来ていないことに気づき、振り向いた。

「モカちゃん? 何してるの、早く行こー!」

「つぐー、ちよつと待ってて〜…おっけーおっけー。今行くよ〜。」

モカは素早く連絡を入れた後、スマホをポケットに入れ、蘭たちの後を追って走っていった。

ぶつかって来た人と玲の間に赤い水滴が落ちる。玲が腹を見るとぶつかって来た人の手を伝って赤い水滴が落ちる。

刺された。そう認知した直後、ぶつかって来た人の手が身体から離れる。

「は…、はは、やったあつひやはははー！」

シャツが赤く染まり、崩れ落ちる玲を見て太った男が狂ったように叫び、笑い出す。その両手にはそれぞれナイフとスマホが握られている。男はスマホに向かって大声で喋る。

「やったぞー！見てるかクソアンチ共！今日！俺は！不良を殺しましたー！世の中の役に立ったよー！」

どこかで見た顔だったか、玲はもう覚えていない。どこかで恨みを買われるような事をした因果が回ってきたんだろう。そう自己完結している内にも男は玲の頭を何度も踏みつける。

「ほらあ、どうしたあ？抵抗してみろよ！あひゃひゃー！」

男はまるで魔女が嗤うかのような耳障りな笑い声を出しながら玲

を踏みつけ、蹴る。すると、男が何かに気付き蹴るのを止めた。

「ん？何だこいつ、手紙なんか持つてる！彼女にやるラブレターだったのかな？音読してみたいと思いまーす！」

そう言つて大切に握っていた蘭からの手紙を取り上げようと手を伸ばす男。玲は持てる限りの力を振り絞り、ナイフを振った。

男の手のひらに赤い線が走る。男は少し硬直して自分の手のひらを見る。そして理解が追い付くと、顔面蒼白になり叫んだ。

「ぎゃー！斬られたー！痛いー！人殺し！誰か助けてー！」

男は反撃されると思つてなかったのかパニックになり、手に持つていたスマホとナイフを放り投げ、逃げ出していった。

「はあ…はあ…。殺るつもりなら…、心臓を狙いやがれ…。」

激痛で顔中に汗が吹き出し、ふらつき、大事そうに手紙を持ち直しながら、ゆっくりと起き上がる。致命傷ではないが、このまま放つておくと多量出血で命に関わるだろう。腹を押さえ、よろめきながら公園のベンチに座り、救急車を呼ぼうとした。が、蘭からの手紙に続きがある事に気付き、読み進める。これが最善の方法ではないことくらい玲は分かつてた。だが、今読まなければ駄目だという直感に従い、読む。

『今まであたしたちはあんたに守られてきた。これからも、あんたはあたしたちを守つて傷だらけになるかもしれない。人質にならないように自分から離れようとするかもしれない。でも、忘れないで。どんなに離れて、時間が経つて絆が解れても、何度でも結び直してやるから。今度はあたしたちが玲を守る。あたしたちがそばにいる。Afterglowの魂と玲の魂は永遠に一緒だよ。』

所々に血の指紋が付いた手紙に水滴が落ちる。雨は降ってない。玲の目から涙が止めどなく溢れだしたのだ。

玲の心を蝕んでいた記憶が消える。

玲の心に刺さっていたトラウマという名のナイフが抜け、その傷跡が癒される感覚がした。

それはまるで、押さええていた感情が飛沫を上げて吹き出すようだった。

(蘭…俺は…。)

空を見上げる。夕焼けが空を赤く染め上げ、一番星が瞬いている。

その光は玲の体を優しく暖かく包むように光っており、天からのお迎えのようだった。

Afterglow全員が和気あいあいと話し合う中、蘭たちは心の中で玲の事を考えていた。

(玲、あんたにや、沢山借りがある。あこの事だけじゃない。子供の頃、一緒にいじめっ子相手に戦ってくれたりしたよな。他にも一杯あるけど、一人でもどうにもならない時が来たら返させてもらうからな！)

(玲ってさ、私が泣いちゃったりするといつも泣き止ませようと変な顔したり、お菓子を買ってきたりして頑張ってたよね。それに、知らないって言ったのに私が作ったマスクットを持ってるの、知ってるんだからね！今日その事を問い詰めて弄ってやるんだから！)

(れーくんってさ、やっぱり不良は向いてないと思うんだ。だって、ゆーみんなみたいに困ってる人を放っておけず、結局養っちゃうところとかさ、ちっちゃい頃、捨てられた子犬の里親探ししていた時のれーくんそのまんまだったよ。)

(玲くん……。昔、玲くんが感じていた恐怖が、今は分かるよ。だから、一人で心細くなったらいつでも来ていいよ。玲くんが心落ち着かせるようなブレンドコーヒーを作って待つてるから！)

(玲……あんたがあの手紙を読んでくれたら、あたしは少し気恥ずかしいけど、嬉しいかな。だってあの手紙はあたしだけじゃない。ひまりも、巴も、つぐみも、モカも、みんな同じ気持ちなんだから。勝手に消えるなんて真似をしたら許さない。あたしはあんたを追い掛けるよ。ずっと。)

だって、あんたは最高の友達だから。

日が沈んで辺りが暗くなり、誰もいない公園のベンチ。そこに女の子と見間違うほど美しい少年が横たわっていた。腹は赤く染まり、ベンチをも赤く染めているその状況は、誰の目から見ても重症である。しかし、その顔に苦悶の色はなく、良い夢を見ているかのように穏やかで安らかだった。

最終話 新年

「やっと着いたあ…。まったく、あん親どもめ…。」

駅の改札口をくぐった少女はそう言葉をこぼす。今住んでいる福岡から一人で新幹線や在来線を乗り継いでここまで来たのだ。一人で行かせた親に恨み節一つ吐きたくなる。

「えーっと…。いつもならしよー兄さんが出迎えてくれとるけど…。」

少女は周りを見渡し、目的の人物を探す。辺りを見渡すと、自分の名前が書かれたウエルカムボードらしき物を掲げている少女二人が目に入った。一人は前髪が長く目が隠れているまだ小学一年ぐらいで、もう一人は自分と同年に見える子だった。

「…まさか、あれじゃなかよね?」

半信半疑でいると、前髪で目が隠れた少女と目が合ったような気がした。そしてもう一人の少女の袖を引っ張り、こちらを指さすと一緒にこつちに来た。近付いて分かったが、もう一人の女の子は顔半分を覆うような傷が特徴的で只者じゃないような雰囲気があり、少女は息を飲む。

「あんた、古賀麗美?」

「え、ええと…。どちら様で…?」

前髪が隠れた少女に詰め寄られるように名前を言い当てられ、少女、古賀麗美は距離を開けるように後ろに下がる。

「こら、由美。麗美が怖がってるじゃないか。」

顔に傷がある少女が由美と呼ばれた少女を後ろに引つ張つて前に出た。

「ごめんなさい。怖がらせてしまつて。ボクは勝目友梨。この子は、美竹由美。昇太は料理の仕込みで忙しいからボクたちが代わりに来たつてワケ。荷物はそのキャリーバッグだけ?じゃ、早速行こうか。」
「は、はあ…。」

麗美は困惑しながらも少女の後についていく事になった。

(一体何なん、こん子ら?...大丈夫なん?...まさか、財布とかスられたりとかせんかな?)

麗美はよく、東京は犯罪が多いとテレビで言っているのを聞いていたので、もしかしたら狙われたのではないかと不安になる。その不安が察知されたのか友梨が振り向く。察されたか?そう思い、麗美は体をこわばらせる。

「...ははあ。ボクたちを疑つてるよね?じゃあ、証拠見せるよ。」

そう言つて友梨がポケットから出した写真を見て、麗美は固まつた。

そこに写っていたのは確かに昇太と麗美だった。昇太が布団が敷き詰められている部屋でポーズをしているが、昇太が普通にピースしているのに対し、麗美は昇太の背後で飛び上がつて口をタコのようにすぼめ変顔をしており、何も知らない人が見たら妖怪か心霊が写り込んでいるんじゃないかと言われそうな写真だった。

「これ、君だよな?」

「.....はい。」

何故、よりにもよってこんな写真を、そしてこれで分かってしまう自分とは。麗美は心の中で咽び泣いた。

麗美が商店街の中を歩いていくと、去年来たときには無かった明るい歌がスピーカーから流れていたり、心なしか人通りも多くて活気に溢れているような気がした。

そして、商店街の一角にある定食屋に着いた。入り口にはお休みの貼り紙があり、中には入れないようになっていたが、由美と友梨は遠慮することなく開ける。

「すみませーん！年末年始休みなんでまた日を改めて来て下さー…つて、何だ由美と友梨かよ。」

厨房から顔を出した昇太の顔に麗美は笑みがこぼれる。

「しよー兄さん！」

「おお？麗美ちゃんか！元気にしていたか！」

「うん！しよー兄さんは変わっちゃらんねー！去年のまんまばい！」

「ほおー、そういう麗美ちゃんは大きくなったな！いくつだっけか？」

「十二！まだまだ成長中やけん、もっとでかなるばい！」

麗美は昇太と盛り上がっているが、由美と友梨は麗美の言葉が分からず、ぽけつとしてしているしかなかった。

「今、親父と一緒に年越しの飯を何にするか話し合ってた手が離せないから、由美と友梨の二人と一緒に遊んでたらどうだ？」

「え、あん二人？何か怖かけど、大丈夫なん？」

「大丈夫、大丈夫！二人とも優しいから心配しなくてもいいぞ！」

「…つて、外に出たけど、何処に行けばよかと？」

「うん？君って、毎年ここに來てるんでしょ？ならこの商店街の事知ってそうだけど…。」

「実はあたい、しょー兄さんの家しか知らんくて、どこに何があるのかよう分からんと…。」

「そうなんだ。じゃあ、ボクたちが案内するよ！…とは言っても、ほとんど年越しの準備で閉まつてるけどね…。」

「友梨、大丈夫。あそこなら開いてる。」

由美に連れられて來たのは喫茶店だった。中へ入ると優しそうな茶色髪の女の子が出迎える。

「いらっしやいませ！あ、由美ちゃんと友梨ちゃん！」

「やあ、つぐみさん。ボクはいつもの。由美は？」

「つぐねえ。私はオレンジジュース。」

「はい、かしこまりました。…あれ？後ろの子は？」

彩と呼ばれた従業員の女の子と目が合い、麗美は緊張気味に挨拶する。

「こ、こんにちわ！あたい、いや、私は古賀麗美って言います！」

「ああ、昇太さんが言っていた女の子だね！私は羽沢つぐみ。よろしくね。」

「は、はい、よろしく、お願いします…。」

さつきの昇太の時と違い、もじもじしだす麗美。そのギャップに由

美と友梨は揃って首をかしげる。

「はえー…中々よか店ねー…。雰囲気あつて落ち着くばい。」

三人は案内された席に座ると麗美はきよろきよる周りを見渡し始める。そんな麗美に由美が質問した。

「…ねえ。気になったんだけど、どうして昇太に対しての態度と、つぐねえに対しての態度が全然違うの?」

「あー…、やっぱ、さっきんと見た後だと気になっちゃう?」

「うん。何て言うか、借りてきた猫みたいになっちゃってたよ?」

「…ねえ、誰にも言わん?」

麗美の気まずそうな雰囲気によ美と友梨はアイコンタクトをした後、麗美と向き合った。

「うん。ボクは誰にも話さないよ。」

「ああ、うん。ありがと。じゃ、話すけんね。」

麗美が語ったのは自分の家族の事だった。

麗美の親は最近親子で会話することが少なくなってきたらしく、その原因が、母親は方言が嫌いで、麗美に標準語で話すよう厳しくしつけていたところ、それに父親が止めさせるように文句を言って喧嘩に発展してしまつたらしい。今ではお互いに不干渉で、子供の自分にはどうすればいいのか分からなくなつてしまつたのだ。

「…そうか。それは、大変だね。」

友梨は麗美の家庭事情を知つてそう言葉をこぼす。

「やけん、ほんとに両親も来るはずなのに、あん二人は知らんお兄さん

お姉さんと仲良くしちよって、あたいをほっぽって……！それで最近、別れるって話聞いたつちやけど、どつちがあたいを押し付けるかって！あたいは疫病神なん？ふざけんでほしかとけど!!」

「ま、まあまあ。君の事情は分かったよ。随分大変だったろう？こここのコーヒー飲んで落ち着こうよ。」

友梨に飲むよう促された麗美は吐き出してスッキリしたのか、出されたコーヒーを思い切り口の中に流し込んだ。が、

「っ!ん、んぐっ……に、苦い……。」

慣れないコーヒーの味が渋くなってしまふ。その様子を見ていた由美と友梨はフツツと笑った。

「ひ、ひどかよ二人ともお……。」

「ごめんね。でも鬱憤を吐き出せて良かったんじゃないかな?」

麗美は恨めしそうに二人を睨むが、由美はオレンジジュースをくびくび飲んで知らんぷりをしており、友梨も謝りながらも、コーヒーに角砂糖とミルクを入れて飲んでいた。

「うう、恥ずかしか……。」

麗美は恥ずかしさに顔を腕に埋めて顔が赤くなっているのを見られないようにしたのだった。

麗美がやって来た翌日は大晦日、午前中は由美と友梨に連れられ、あちこち歩き回った。その時に由美と友梨の知り合いのガールズバンドたちと会話したりと和気あいあいとしていたが、麗美はハロー、

ハッピーワールド！はあまりにも濃すぎるメンバー過ぎて、今日限りにしようと決めた。そして午後、麗美は出前の料理を持った昇太に連れられて雑居ビルへとやって来ていた。

「え、ええーと…しよー兄さん？ここは？」

「俺のダチがいる所だ。大丈夫だって。みんな見た目怖いけど優しい奴ばっかりだからさ。」

昇太に手を引かれながら麗美は雑居ビルの中へと入っていく。地下があるらしく、その中の一室にドアを開けると、デカイ体の男が近付いてきたので麗美はビククリして昇太の後ろに隠れる。

「昇太の兄貴！持ってきてくれてありがとうっす！」

「おう、お前ら！待たせたな！俺と親父が作った大ボリユーム年末特製料理だ！今日はこれを食べって年を越そうぜ！」

昇太が声を張り上げると部屋にいた不良たちから歓声上がる。

「す、すごかあ…。こん人たち、みんなしよー兄さんの？」

「ああ、そうだよ。」

「ん？昇太の兄貴、この子は？」

「紹介するぜ。俺のいとこ。九州からやって来たんだ。」

「へえー、九州から!？」

「ああ、でも待て！こいつ、見ての通り人見知りだからがつついて話しかけんなよー！」

「へい！分かりやした！」

昇太は麗美が部下たちを怖がらないようにするため、自分に離れないように忠告した後、不良たちの宴の中へと入っていった。

「ところで、玲は…って、ああ。今いないんだっけか。」

「ええ、今頃向こうで楽しんできると思っていますよ。」

三十分か、一時間ぐらいたった時、ふと口に出した名前を拾った麗美は首をかしげた。

(玲? 誰やるか? 女の子っぽいけど...)

昇太が言っていたその名前に麗美の心は疑問を掴んでしまい、離れない。

「なあ、しよー兄さん。さっき言ってた玲って誰なん?」

「ん? ああ、そうか。お前は知らなかったもんな。よし、ちよつと来い。」

昇太は腰を上げると麗美を連れてはしやぐ不良たちの宴会場と化した地下室から出て行き、階段を登り始めた。

一階上がると既に不良たちの騒ぎ声が聞こえない事から、ここを防音対策は完璧のようだ。

こつ、こつ、こつ。一段一段登っていく昇太の後をついていく麗美。そしてたどり着いたのはビルの一室だ。中を覗くと、ベッドに机、そして隅っこにはありとあらゆる物が山積みになっており、誰かが住んでいたかのような痕跡がある部屋だった。

「ここに住んでいた元ボスだ。」

元ボス。その名前を聞いた麗美は目を見開く。

「も、元ボスって...今はどうしちよると?」

「もう、不良を止めたんだよ。」

そう語る昇太の横顔にはどことなく寂しさが滲み出ており、麗美は亡くなったのかと察した。これ以上踏み込むのは良くないと思い、話

題を変える。

「え、ええーと、今の、ボスって…誰なん？」

「今のボスはお前もう会ってるぜ？ 駅で迎えに来てた勝目友梨だ。」

「ほおー、あん子が…ええ!? あん子があ!？」

納得しかけて驚く麗美。まさか、あの優しそうで自分と年が変わらない女の子が屈強な不良たちの親玉とは夢にも思わなかったからだ。

「ど、どうしよう…あたい、あん子にため口してしまっただっちやけど…大丈夫なん!？」

右往左往しながら狼狽える麗美を見た昇太は思わず吹き出してしまふ。

「おいおい、落ち着けて。あいつはそんなの気にしないし、このグループは不良ばっかじゃねえんだよ。」

「…ほえ? それって、どういう…?」

「昔はそれこそ、俺や玲がいた頃は不良ばっかだったんだけど、最近是不登校児やいじめられっ子、色んな心の傷を負った子達を受け入れるんだよ。ボスになった友梨が言ったんだ。『ボクたちはいじめてる人を撃退しているけど、それだけじゃ弱い人はボクたちを頼るようになってしまう。それじゃダメなんだ。』ってな。当然部下の中には反発する奴もいたが、あいつの言うことも一理あったんだ。実際、いじめられっ子の中には俺らに依存しかけている奴もいた。不良に守られている。これを聞いたらどんな印象かって友梨の奴は俺たちに問い掛けていったんだ。そして、あいつはこのボスの座に着いた。」

麗美は楽しそうに語る昇太の横顔を見て、それほど友梨はスゴい子だったのかと感心する。

「さ、戻るか。まだ宴会は始まったばかりだからよ。」

その後、料理はおつまみ程度の感覚になっていき、他の部屋で紅白を見る組、年末定番のバラエティーを見る組、ゲームで遊ぶ組に別れて行った。

麗美はゲーム組についていき、格闘ゲームをやっていたのだが。

「だああ！負けたあ！」

「うっそだろ!?こいつ超強いのに何でそんな弱キャラで勝てるんだよ!?」

コントローラーを持った不良が崩れ落ちる。画面には麗美が操るキャラクターが立っており、勝敗を決するK・Oの文字がでかかど表示される。

ここまで、麗美は不良相手に三勝も勝ち抜きしているのだ。

麗美は驚く不良たちの視線に恥ずかしがりながらコントローラーを握る。

「え、ええと、このキャラは、体が小さいから当たり判定も狭くて相手がでかいから当たりにくいんです。その上、罠を設置して戦うトリックキーなキャラだから、それを生かしたただけなんですけど…。」

「次、俺！俺がやる！」

「あ、ど、どうも、お手柔らかに…。」

二分後、不良が崩れ落ちた。

そうして、更けていった夜。麗美は不良たちから格ゲー女王の称号

を勝手に授けられ、困惑していたが悪い気はしなかった。

そして、年越しの合図が紅白見ていた組からカウントダウンが告げられ、全員その場で明けましておめでとうの歓声を上げた。

その後は、家に帰る組と、残って騒ぎ続ける組、そして初詣に行く組の三つに別れ、麗美は初詣に向かうことになった。

「さ、寒かねー、しよー兄さん。」

「おう、カイロやるからこれで暖まれ。」

麗美は完全暖房の装備で出てきたが、それでも冷たい風が体を包む。昇太はそんな麗美にカイロを渡す。

そして、見えてきた神社に向かうと、昇太は最初に目が入った人物に話しかけに行った。

話しかけに行った人物は麗美にも覚えがある人だ。

(あんな人は確か、宇田川巴さん、だったかな?)

昇太と仲良く話しているようで自分が入っていいのか尻込みしている、

突然後ろから引っ張られた。

「うえ、ちよ、何?」

麗美の理解が追いつかない内に段々昇太から離されて行って、道に外れた明かりが少ない場所に放り込まれてしまった。

「な、何なん!? あたいをどうするつもり!？」

麗美は困惑しながらも引っ張っていった人を見ると、頭にニット帽

を被り、目が見えないほど濃いサングラス。そして口にはマスクをはめており、人相が分からないようにしてあった。

「はあ、はあ、君い、この辺りじゃ、見かけない子だねえ…。」

そう興奮したような男の声で不審者は息を荒げながらナイフを取り出す。麗美は背筋が寒くなり、逃げ出そうとしたが、足がすくんで動けなかった。

「とつても綺麗な足だねえ…しゃぶりつきたいくらいだよ…。」

(い、嫌…、あたい、どうなるん？何であたいなん？怖か…誰か助けてえ…。)

震えながら身を縮みこませ、守るが、そんなものは意味がない。

「じゃあ、そのセーター脱ぎ脱ぎしようね…！」

そう言つて一歩、一歩ずつ近付く不審者。麗美はもう駄目だと言わんばかりに目をつぶった。が、

「おい、ようやく見つけたぞクス野郎。」

知らない声が聞こえた瞬間、不審者が短い悲鳴を上げ、どさりと倒れる音がした。

何が起こった？そう思い、目を開けると、

不審者を見下す濡れ烏のような黒く短い髪、少し力を入れたら折れてしまいそうで、よく見たら鍛えている細い手足。そして、その上にはとても美しく、綺麗な顔が乗ってあった。

「さてと、お前がここを狙って来るのは分かってたぞ。サツにつき出してやるから覚悟しな。」

「や、やだ、やだよお…警察は、やだよお…。お願いします。許してください…。」

「そう言った他の子供にお前は何をした？虫がよすぎるぞ、てめえ。」

男性だか女性だか見分けがつかない美しい人は嫌がる不審者を踏みつけている足に体重を掛けながら縄で縛り上げ、身動きをとれなくした後、麗美に近付き、手を差し伸べる。

「大丈夫か？怖かったらろ？」

優しく笑いかけた人の美しさを見て呆気に取られたが、すぐに首を縦に動かす。

「あ、あの、ありがとうございます…。」

麗美は見惚れながらお礼を言うとその人の背後に近づく影があった。

「ねえ、あんた。こんな子供にまで色気使ってんじゃないよね？」

声が出た方を見ると赤い振り袖姿に髪の一房を赤メツシユで染めたボブヘアの少女が冷めた目で目の前の人を睨んでいた。

「おいおい、蘭。そんなわけないだろ？この子が無事かどうか確認しただけだったの。」

「…どうだか。」

無実だと言わんばかりに両手を上げる人に、疑わしげに目を細める蘭と言う女の人。

この二人はカッパルなのだろうか？そんな事を考えていると聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「麗美！良かった、無事だったか！」

昇太は麗美を見つけるとすぐさま抱き締めてきた。

「すまなかった！ほんつとうに怖かっただろ!？」

「しよ、しよー兄さん、あたいは、大丈夫やけん、く、苦しい…。」

「あ、ああ、悪い悪い。」

強く抱き締めすぎたせいでぐったりしかけた麗美は昇太の背中をタツプすると昇太は慌てて離れる。すると、その様子を見ていた美しい人は呆れたように昇太に注意した。

「つたく、子供は常に視界に入れとけ。」

「ああ、悪かった。助かったぜ、玲。」

「……………え？」

「いい、例、礼、玲。麗美は一瞬、昇太が何を言ったのか分からなかった。」

「あ、あの、こん人つて…。」

「ああ、紹介が遅れたな。こいつは、神前玲。元不良のボスだ。」

麗美は今日一番の大声が出た。

「あっはっはっ！死んだと思ってたのかよ！」

「もー！笑わんといてよー！」

麗美は今までの話で玲が死んでしまっていたと勘違いしていた事

を告白すると昇太は大笑いして、麗美は恥ずかしさに悶えながら昇太を叩く。

自己解釈で勝手に死人にされていた事に、玲と蘭は微妙な顔になっていた。

「さ、気を取り直して参拜に行くか！」

「お、降ろさんね！自分で歩けるけん！」

昇太は麗美を抱き上げるとそのまま歩いていった。

その後ろ姿を見送る玲と蘭。蘭はジトリと玲を睨むと口を開いた。

「玲…、もしかしたら本当に死んでたかもしれないんだよ？」

「…悪かったよ。」

玲は蘭に釘を刺され、気まずそうに目をそらす。思い出されるのは、玲にとつても蘭にとつても生きた心地がしない思い出だった。

玲が生還する事ができたのは、偶然が生んだ奇跡だった。

あの後、反撃された男がスマホを拾いに戻ってきて逆上し警察に通報。駆け付けた警官が目にしたのは、スマホとナイフを持った太った男とベンチで血を流しながら横たわっている美少年。どちらが怪しいかは明白で、男はそのまま連行、玲は病院へと搬送された。

その後、玲が意識を取り戻すまでの間、蘭とその関係者たちは数日間、元気がなかったが、それはまた別の話。

「…もう、あんなの二度とゴメンだから。」

蘭は拗ねたように玲の服の袖を引っ張る。もう離したくない。その思いを察した玲は苦笑いながら蘭を抱き締めた。突然の行動に蘭は驚き、もがきだす。

「ちよ、玲!?!何やってんの、いくらここら辺、人が少ないからって…!」
「…ばーか、何考えてんだよ。お前で暖を取りたいだけだったの。」
「だ、だからって、こんなところ、モカに見られでもしたら…!」

蘭が反論しようと睨んだ瞬間、玲の口と蘭の口がくっついた。

「…!?!」

呆気にとられながらも押し退けようとしなない蘭。

その時間は短かったかもしれない。長かったかもしれない。でも、お互いにとっては嫌な時間ではない。

そして、お互いの口が離れる。ぷはつと空気を求めてお互い口を開けると、その間に二人を繋ぐ糸が引いていた。

「…すまん。いくらお互い好きでも、これはマズいよな?」

少し静寂が流れ、玲は火照った顔を隠しながら気まずそうに蘭に謝る。

「……………バカ。」

それに対する蘭は顔を隠しながら小さく罵倒する。

「キス魔、変態、不良、ケダモノ、…ヘタレ。」

「おい、最後のは聞き捨てならねえぞ?ヘタレってなんだヘタレって。」

「何でもない。ほら、巴たち待たせてるからさっさと行く！」

「おい、待てよ！足早いつての、置いてくな！」

「止まるつもりはさらさら無いから！」

足早に去っていく蘭にそれを追い掛ける玲。その光景は、新たないっつも通りの一部となった。

「…あん人が、玲なんやね。」

参拝し終えた麗美は五人の女の子に囲まれながら、困ったように笑いながらも歩いている少年を見てそう呟く。

「あたい、あがんきれか人、初めて見たよ。笑った顔もすごか…。」

「…そうだな。でもな、あいつがああやって笑えるようになったのは、つい最近なんだ。」

「…え？」

それから、昇太の口から語られた内容は、麗美にとつては衝撃的すぎる内容だった。

こんな事があっていいのか。自分と同じぐらいの頃に親が死に、別の大人から暴力を振るわれ、売られ、そして人権を弄ばされた。自分の親の夫婦喧嘩や浮気よりもよっぽど酷い。途中から涙が溢れ、拭いても、拭いても止まらず昇太の身体に抱き付いて顔を押し付けた。

「…うんうん。だからな、自分だけが不幸だつて考えるのは止めな。」

「うん…、つて、しよー兄さん!?!な、何であたいの家庭事情を…!?!」

「おいおい、俺は不良のボスだった男だぜ？顔色見て察するくらい朝飯前だ。」

「ええ？嘘…。あたい、そんなに分かりやすか？」

昇太に見抜かれた麗美は思わず手で顔を覆う。

「それにな、別に両親について行かなくても良いんだぜ？お前だって立派な意思を持つてる人なんだからな。」

「え…：しよ、しよー兄さん、何でその事を…？」

「由美から聞いたぜ？」

「あ、あいつ…：！約束破って…！」

誰にも言わないという約束を破った少女を見つけるため、麗美は顔を真っ赤にして人混みの中へと走っていった。

「どこやー！どこ行った由美ー！あたい言わんといてって言いよったよねー！」

その後ろ姿を見送る昇太。すると、横から巴が話しかけてきた。昇太が視線を向けるとそれぞれ色とりどりの振り袖姿の蘭たちの姿があったが、玲だけがコートを着ていた。

「よつ昇太。麗美ちゃんは？」

「由美を探しに行ったぜ。お前らは参拝済ませたみたいだな。」

「うんー！これからも、みんないつも通りでいられますようにって願ったんですー！」

「ええ？モカちゃんはいつまでもやまぶきベーカリーのパンを食べられますようにって願ってただけど…。」

「でたらめ言うなモカ。」

「れーくん。ジョークだよ、ジョーク。」

「そうか…：んで、玲。お前は何願ったんだ？」

「…：教えねー。」

「あ、昇太さん。玲くんのお願いはね、由美ちゃんと友梨ちゃんに新しい友達ができますようにって願ってたよー！」

「お、おいつぐみ！何漏らしてんだ!？」

「あーご、ごめん玲くん！ついうっかり…。」

わいのわいのと騒ぎまくるAfterglowと玲。その声をBGMに昇太は麗美の方に視線を戻すと、屋台の食べ物を頬張っている由美に噛み付く麗美と、それを宥める友梨の姿があった。

(…もう、叶っちゃったっほいな。)

これからも、新しいいつも通りは巡っていく。

番外編 蘭誕生日

季節は春。桜が咲き、暖かな陽気と気持ちの良い日射し。そんな天気の商店街の一角にある定食屋。そこへ一人の少女が入ってきた。

不自然に長い前髪にヘアピンが止めてあり、紫の綺麗な瞳が片目だけ覗く。奥の個室のドアを二回ノックすると少しだけ開けたドアの隙間からピンク髪の少女の顔が見える。

「…ソイヤ？」

「おー。」

「よし、入って。」

まるで時代劇のようなやり取りをする二人。合言葉を言った少女は目の前で開かれたドアに入ると、そこには深刻な面持ちの少女たちと、一人のサングラスを掛けた男がいた。

「…よし、全員揃ったな。」

サングラスを掛けた男は両肘を机に置き、口の前で手を組む姿勢のまま口を開いた。

「では、これより『玲と蘭の仲を進展させる作戦会議』を始める。」

「おー。パチパチ〜。」

男、昇太の一声に銀髪の少女、青葉モカがパチパチと拍手をする。それに釣られてか、何人かがまばらな拍手をする。

「では、まず今回の会議の目的を再確認するぞ。ひまりちゃん。」

「はいー。」

昇太が名指した少女、上原ひまりは元気良く手を挙げると立ち上

がる。

「この会議の目的は、玲と付き合うようになった蘭の進展があまり変化がないことを憂いだ我々が、きつかけ作りをするための会議です！」

「その通りだ。だが、前はきつかけ作りになり得るシチュエーションを模索していたが、あれから成果はどうだ？」

「ボクと由美が考えたうっかり転ばせてくつつける作戦は尽くさざりて避けられたし、由美が飛び付いても少しよろめく程度だったもんね。」

「モカちゃん考案の一緒にパンを食べたら幸せ大作戦も空振りでした…。しょぼーん…。」

「私の店で二人きりの状況をようやく作り出す事ができて、いい雰囲気だったのに、日菜先輩が入ってきて台無しになってしまいました…。」

「私が蘭の可愛いところを纏めた写真見せながら蘭の事どう思ってるのか聞いてみたら、大切な幼馴染みだって言っていたけど…求めてた答えと違いました…。」

「アタシの悪漢に襲わせる作戦はやっぱダメか…？」

「巴、あいつは鋭いから半端でやると演技だってバレる可能性があるし、だからといって演技に熱入れすぎたら玲が演者を病院送りにする可能性が高いから駄目だ。」

「…それに去年の奴で襲われたりナンパされるの慣れちゃった感じするよね。」

「…私が蘭ねえに玲とちゅーしたらって聞いたら顔を真っ赤にして怒られた。」

「いや…それ怒られても当然だと思うよ、由美。」

「でも、蘭って結構ヘタレだよ。」

「いや、玲も同じだぞ？俺が蘭との交際どうなってるんだって聞いたら目をそらして黙りやがったんだよ。」

「どつちもどつちだね…。」

蘭を除くAfterglowの面々と由美、友梨、昇太の七人があらゆるシチュエーションを作るように手回ししていたが全て玲の鋭さや身体能力、そして意外と恋愛に奥手なせいで今現在も蘭とは友達以上恋人未満な関係だ。見ていてとても爪を噛みたくなる。

「はあ、このままじゃ、ダメな気がするんだよなあ…。」

「ああ〜！もうどうすりゃいいんだよ〜!？」

昇太はガツクリ項垂れて、巴は髪の毛をかきむしる。玲と蘭の関係が良好なのは結構なのだが、ずっとそのままと言うわけにはいかない。どうしたものかと思案していると、ひまりの不敵な笑い声が聞こえた。

「ふっふっふ…。安心してください。実は最近、遊園地のチケットを貰う機会があつたんですよ！」

「ま、マジかひまりちゃん!？」

「おー、ひーちゃんナイスー。」

ひまりがドヤ顔をしながら取り出したのは遊園地のチケット二枚だった。思わぬ朗報にモカたちは顔を明るくする。しかし、昇太はまだ難しい顔をしている。

「おい、どうしたんだよ昇太。嬉しくないのか？」

「…で、これを蘭と玲にどうやって渡すんだ？」

「…ああ、確かに…。」

昇太の言葉にひまりは引つ込んでいく。おそらく直球で二人で行ってこいと渡しても玲と蘭は別にいいと言いつい出しかねない、何かあると勘ぐってしまいかねないのだ。

「ま、また新しい問題が…。」

「もう、二人ともめんどくさいよ。」

「モカちゃん！そんな事言わないの！」

友梨は天井を仰ぎ見、モカはうんざりしながら溢れた言葉につぐみ
が突っ込みを入れる。もうどうすればいいのか。お手上げの雰囲気
が出来上がりつつある中、天井を仰ぎ見していた友梨が何か閃いた。

「待って…ねえ、ボク、良い案を思い付いたんだけどさ…！」

蘭の誕生日前日。玲は待ち合わせ場所である遊園地の入り口前に
立っていた。

（やれやれ…由美の奴、年相応になってきたけどタイミングが悪いぞ
…。）

こうなったのは四日前に遡る。

玲は不良を辞めた後、探偵になった。商店街の大人たちにより提供
された空き部屋を事務所兼寝床とし、今日も一日誰も来ないだろうな
と思案していた時、由美が来たのだ。

「玲。ひまねえから遊園地のチケット貰った。今度の休みの日に一緒
に行きたい。」

二枚あるチケットを見せびらかしながらせがむ由美。だが、玲は眉
間にシワを寄せた。何故なら事務所を閉める日が蘭の誕生日のだつ
たからだ。

「…なあ、そのチケットの有効期限、いつまでだ？」
「四月十一日。」

間髪いれずに答えた由美に玲は頭を抱える。その日からまた事務所を開けなければならぬからだ。由美には楽しんで貰いたい事と、蘭の祝われて照れ隠しながら喜ぶ顔が見たいという葛藤がせめぎあう。だがどちらか一つを選ばなければいけないと悩み抜いた末に選んだのは由美と一緒に遊園地に行くことだった。

(はあ…蘭からロリコンとどやされるんだろうな…。)

ため息を吐きながら空を見上げる。埋め合わせに何か蘭の大好物でも買っておこうかと考えていると、

「あれ？玲、何やってんの？待ち合わせ？」

チケットを持った幼馴染みが目の前に立っていた。

「あ？そういうお前も誰かと待ち合わせか？」

「うん。実は、由美がひまりと一緒に遊園地に行くって言ってたんだけど、当日に友梨に手伝って貰いたいことがあるって言われてさ、アタシが代わりに行ってって。」

「ふーん。俺は、由美に遊園地に行きたいってせが、まれ…。」

何かがおかしい。そう感じた玲はすぐさまポケットからスマホを取り出し、由美に連絡を取る。突然スマホを取り出した玲の様子から察した蘭もひまりに電話しようとしてスマホを取り出す。二回の着信音の後、由美が電話に出た。

『やつほー。玲、楽しんでる?』

「やつほー。じゃねえよ由美。お前、嘘ついたな?」

『うん。嘘ついた。』

全く後ろめたい感情がない声がスマホから聞こえ、玲は口元がヒクつく。

「そ、そうか。じゃあ、何で、嘘ついたんだ?正直に答えろ。」

『だって、蘭ねえと付き合ってるのいつまでもうじうじしててイラついたんだもん。』

「なっ…!?!」

『だから今日は一日蘭ねえと一緒に楽しんで。私からは以上。じゃあね。』

「あつ、ちよつ、まつ…!」

玲の制止の声を聞かずに通話を切る由美。あの野郎と愚痴りながら蘭の方を見ると、蘭も玲と同じような表情をしていた。

「…俺たち、嵌められたな。」

「…そうだね。」

「……………」

「……………」

「なあ、その、入るか。ここまで来ちまったし、これ今使わなきゃいけないし…」

「……………うん。正直、誘導されてるのすごく、腹立つけど、ね。」

「……………なあ。手、繋ぐか?」

「…ん。」

お互いにモジモジしながら手を繋ぐ二人。その様子はまるで初々しいカップルだった。実際その通りだが。

玲と蘭の初デートはぎこちなかった。何故なら、お互いに素直じゃなく、意地っ張りで、そして恋愛に関しては奥手なのだ。端から見れば微笑ましいが本人たちは気が気でない。

「よ、よし、最初はおそこ、行ってみるか？」

「や、やだ！やだやだやだやだ!!!お化け屋敷じゃん!!!」

「な、ならあの絶叫マシンに…!」

「こ、怖いって!」

「じゃ、どこなら良いんだよ!?!」

「そ、それはあんたが決めて!」

「はあ!?!」

そうやって前途多難なアトラクション選びの結果、

「コーヒーカップかよ…。」

「…ごめん、玲。あたしのわがままで…。」

「いいっての、別に気にしてねえし。」

最終的にコーヒーカップに落ち着いた。巨大なコーヒーカップに向かい合って座る玲と蘭。アトラクション始動のアラームが鳴ると動き出す。すると、玲は蘭を見てこう言った。

「…で、どうやるんだ？」

「…は？」

今、何と言ったのか。蘭は玲が言った言葉の意味の理解に数秒遅れた。玲はそんな蘭の視線が恥ずかしかったのか頬を人差し指で掻きながら話す。

「その、俺、こういうの初めてでな。どうすればいいのかわかんねえんだよ。」

玲の発言に蘭は納得すると同時に忘れてしまっていた事を思い出す。

口にするのも憚られる闇の中で生きてきた。

ずっと不良の頭領として生きてきた。

だから、遊園地の事はよくわからない。

「分かった。教えてあげるよ。まずはね、ここにハンドルがあるでしょ？それを回したらこのカップも動くの。」

「…なるほどな。そういうアトラクションか…。」

玲は納得したようにカップの中央にあるハンドルを掴むと勢いよく回す。玲が回すと同時にカップも回転し始める。

「…っ、意外とっ、重いなっ。」

「後は慣性で回せば速くなるから。」

「そっか。ならっ…！」

玲は年相応の笑みを浮かべ、ハンドルを握ると、更に回し始めた。

「ちよ、ちよつと玲？速くない!?!」

「どこまで速くなるか試してみようぜ！」

まずい、火を付けてしまった。蘭がそう思い、止めようとしたが既に遅かった。

「ちよ、ちよつと！止めてよ玲！怖いって！」

「おお！案外楽しいなこれ！」

「すまん…調子に、乗りすぎた…。」

「いや、あたしも、悪かった…。」

コーヒーカップを降りた二人はぐったり気味だった。玲は勢いよく回しすぎたせいで気分が悪くなり、蘭は絶叫マシンと化したコーヒーカップに振り回されて精神を消耗していたのだ。

お互いにダメージを受けた二人はどこか休める場所がないか探す。もしこのままジェットコースターに乗るような真似でもしたら悲惨な結果になりかねないからだ。

「ねえ、あそこは、どうかな？」

未だに回復できてない蘭が指さした先にあったのは巨大な観覧車だ。玲もゆったりと外から景色を眺める観覧車なら大丈夫だろうと考え、賛同する。

だが搭乗直後、それが仇だったことを思い知らされることになる。

「…ね、ねえ、近いんだけど。」

「そ、それはこっちの台詞だろう？」

二人が乗った観覧車のゴンドラは二人乗りだったが、予想よりも向かい合っている椅子と椅子の間が狭く、ずっと見つめ合い、お互いの足と足を挟んで密着している状態になってしまったのだ。

（れ、玲の足って、細いけど、意外と硬い…じゃなくて！あ、あたしの足が当たってるし、玲もどこか緊張気味だし…は、恥ずかしい！）

（あ…、ら、蘭の太ももって…こんな柔らかくて、暖かいんだな……って！何考えてるんだ!?セクハラじゃねえか!!ええい止める止めろ!す、少し動かすか…。）

玲は頭を振って蘭の太ももに挟まれていた自分の足を動かそうと
した。が…

「やんっ！ちよ、ちよつと、玲、動かないでよ…！くすぐりたい…！
んっ…。」

「お、お前も変な声出すなよ…!?!」

まるで少しアダルトなラブコメのような展開にお互い気が気でない
状態になってしまう。

結局、体は休まったが二人とも精神が参ってしまい降りる頃にはフ
ラフラになっていたのだった。

ぐだぐだな遊園地デートを終えた二人はそのまま帰る事になった。
正直、観覧車に乗った後どうしたのか記憶がほとんど無い。玲の中に
ある本能を理性で押さえ付けるのに精一杯だったからだ。ようやく
探偵事務所前に辿り着いた玲は蘭と別れる。

「じゃ、また明日な…。」

「うん…。じゃあね…。」

何とか理性を保てた玲は事務所に入るとそのままソファに崩れ落
ちる。

(あつつぶねええ……。蘭ってあんなに可愛かったか？今日はもう寝
よう。寝て明日に向けて養えなきやな…。)

玲は観覧車で聞いた蘭の声を思い出し悶々としながらも、明日、蘭の誕生パーティーに向けての英気を養う為に自室へ向かおうと顔を上げる。窓に目を向けると、いつの間にか外は土砂降りの雨が降っていた。

「いつの間に降ってきたんだ？まあいい、さっさとシャワーを浴びて…」

すると、ノックをする音が聞こえた。来客だろうか？玲は丁重にお断りしようと扉を開けると、

「玲…雨宿りさせて…。」

びしょ濡れの蘭が立っていた。おそらく帰宅途中に雨が降ってしまいUターンしてきたのだろう。肩を上下させながら呼吸し、ジャケットの下に着ているシャツも水を吸って肌にはり付いている。そのため、下着が透けて見えている上に、呼吸に合わせて胸が動いている。そんなあられもない姿を見た玲は慌てて視線を反らす。収まりかけた劣情をまた煮えたぎらせるのには充分すぎる破壊力だったからだ。

「らっ…!?わ、分かった！入れ！シャワー使っ方がいいからさっさと入れ！目のやり場に困る！」

突然慌てた玲に蘭は不思議に思ったが、濡れてしまった自分の服を見て全てを察してしまった。一気に顔が赤くなった蘭は咄嗟に透けているシャツを隠して玲に怒鳴る。

「どっ、どこ見てんの!?エッチ！スケベ！変態！」

「お叱りはちゃんと受けるから！さっさとシャワーをしろ！風邪引くだろ!！」

目を隠しながらも蘭にシャワーがある部屋を指さし、早くシャワーを浴びて暖まるよう促す。指で遮られて真っ暗な視界の中、足音がシャワー室へと走っていく音が聞こえる。扉を閉めた音がした後、玲はすぐさま代わりの服を用意するのだった。

「ふう…。」

シャワーを浴び、暖まった蘭は玲が用意した部屋着を着た後、何となく玲の事務所を見渡した。

(ここが、玲の職場…。)

実を言うと蘭を含めたAfterglow全員は玲の職場に入ることがない。休みの日はどこかの依頼を受けているのか空けていることが多く、休みも平日なのだ。

玲は知力は年齢に合っていない為、学校には行かなかった。いや、行く必要がないと言った方がいい。一時期、生徒会長となった氷川日葉が玲と一緒に通いたいと独断で共学化しようと画策し、教師一同に叱られヘソを曲げていたのは記憶に新しい。

(こんな場所、なんだね…。)

そんな事を考えながら事務所をうろついていると、玲の席だと思われる机にフラワーアレンジメントが置いてあった。赤と黒の二色で構成されており、どことなく生け花を模したようなアレンジメントだ。

(これって…?)

どうも飾ってあるようには見えない。そう感じた蘭は気になって近づく。

「おーい、蘭。随分遅いけどもしかして服が合わなかったか？」

「うわあ!？」

すると、背後から玲の声が聞こえた。思わず叫んで跳び跳ねる。

「うお!?!ビックリするだろうが…って、それは…!？」

玲も連鎖的に驚くが、机の上に視線を向けると余裕を無くして素早く隠す。

「…見たか？」

「うん。見た。」

玲の言葉に蘭は素直に答える。すると、がっくりと項垂れだした。

「…もう、しょうがねえかあ…。」

蘭が怪しいと思いつつながら見てると玲は腹を括ったのか先ほど隠したフラワーアレンジメントを取り出す。

「その、一日早いけど、誕生日プレゼント。お前のイメージで、その…作っただけ…。」

玲にしては菌切れが悪い。目を反らしてないことから嘘ではないのだろう。

「だ、ダメ、か？」

どことなくオドオドした幼馴染みの姿に蘭はクスリと笑う。

「ううん。嬉しい。作ってくれて、ありがとう。」

「そ、そうか…。よかった…。」

蘭の笑顔を見てホツとする玲。二人の間に和やかな空気が流れ始めた。二人の心に余裕ができたからだろうか、玲はあることに気付いた。

「お、もう雨が上がってるな。今なら帰れるぞ。」

いつの間にか、外でぎざぎざと降っていた雨は止んでおり、静寂に包まれていた。でも、蘭は首を横に振った。

「ううん。もう父さんには玲のところまで泊まってくつて言ってる。」

「…は？」

「その…あたし、玲の住んでるところ、泊まってみたかったから…その…いい？」

玲に対して素直になりつつある蘭は恥ずかしがりながらも家主である玲に許可を求める。いつもとは違う男物の部屋着を着ているせいで見えそうで見えない胸元、少しぶかぶかになってる袖やらで玲の本能はもう抑えられなかった。

素早い動きで蘭の後ろにある壁をドンと叩き、行く手を遮るように、そして蘭の耳元で甘く囁いた。

「いっせ…、蘭。」

「そ、それで!どうなったの!？」

「も、もういいでしょ!この話はこれでおしまい!」

「ええー!?そりやないよ蘭く!」

翌日のC i R C L Eのラウンジを借りた誕生パーティー。そこで主役の蘭は駄々をこねるひまりに粘着されていた。他の者たちはとようと、つぐみはずつとポポポと目玉焼きができそうな位顔を火照らせ、モカはニヤニヤしながら玲と蘭を見、巴はもつともつと蘭に引っ付いてせがむひまりを引き剥がしていた。そのわちやわちやの外側で玲と昇太は見守っていたが、

「…なあ、玲。ちよつと外で休憩しようぜ。」

昇太に促されこつそり退散する玲。そしてC i R C L Eから出てベンチに座らされた玲は昇太と向き合う。

「…で、やったのか?」

玲の両肩に手を置き、サングラス越しに見える真剣な眼差しで玲に周りに聞こえないよう声を潜めながら詰問する。だが、玲は首を横に振った。

「…やってねえ。」

「…いや、いやいやいや。蘭から聞いた話の流れじゃやる流れだろ。何でだ?」

「…確かに、蘭の身体を触ったし、キスもした。でも、やらなかった。その、どうしても過去の記憶が、な。」

「…ああ、そうか…。」

気まずそうに俯く玲。それを見た昇太はそれ以上追求しなかった。玲の純潔は、あの地獄で既に散らされているのだ。その時の記憶を思い出してしまい、行けないだろう。

急かせすぎたか。

焦れたい原因に納得した昇太は反省する。

(…でも、それだけでも十分な進歩か。)

おそらく、昔のままだったらキスをする勇氣すら沸かなかっただろう。そう考えた昇太は元氣なく項垂れる玲の肩に手を置く。

「ま、ゆっくり進んでいこうや。俺らも応援してっからよ。でもな、告白ぐらいはしとけよ。」

あの二人の間に割り込むのは無理だろう。だが、二人を裂こうとする者は現れるかもしれない。そうならない為にも、自分たちは守つていこう。そう決意するのだった。

「じゃ、戻るか。パーティーはまだ始まったばかりだからよ！」

昇太に促され、ラウンジに戻る。

ラウンジに入るとそれに気付いたモカたちが蘭を押しってくる。何事だろうかと思っていると、蘭が玲の顔を見てモジモジしながら、辿々しく口を開いた。

「あ…あの…その…………やっぱ無理！恥ずかしいって！」

「蘭く。早く言わなきゃ。れーくんが誰かに取られても知らないよ〜？それはやでしょ〜？」

「わ、わかったって！言えばいいんでしょ言えば！」

何やらモカに説得された蘭は玲の前に歩いて行くと、ぶつかるよう

に抱き付く。そして、玲の体に顔を埋めたまま、

「……………大好き。」

耳を研ぎ澄ませてなくてはいけなほど小さな声で告白をした。すると、玲はガバツと蘭の背中に手を回し抱き締める。

「……………ああくそ。先越されちまった…。俺も大好きだ。」

「…ありがとう。」

ようやく告白しあった二人にひまりは黄色い悲鳴をあげ、つぐみは両手で顔を隠しながらも指の隙間から覗いており、モカはほっこりした顔、巴は抱き合っている二人を見て恥ずかしいのか頬を赤らめながら頬を掻き、昇太は困ったように笑っていた。

玲の記憶に、また優しい記憶が刻まれたのだった。

番外編 巴誕生日

蓮昇太が宇田川巴と初めて会ったのは巴が中学生になりたての頃だった。

いつか商店街の希望を担うホープとして顔合わせをしようと昇太の父親が言い出した事で出会ったのだ。

昇太は巴の噂はよく耳にしていた。今後の祭り名物の太鼓奏者として申し分無い人物だと。

そして、親に連れられて来た公民館で噂の宇田川巴らしき人物を見つけた。赤髪で側には妹らしき少女と手を繋いでいる。間違いない。そう直感した昇太は話し掛けに行った。

「よお！あんたが、宇田川巴か？」

「ん？あんたは…。」

「俺の名は蓮昇太。気軽に昇太って呼んでくれよ。」

そう言つて、昇太は男友達にやっていた相手の胸に拳を当てる。当たってしまった。昇太は失念していたのだ。商店街の太鼓奏者と聞いて真つ先に思い浮かんだ人物像が男性だった事に。女性だと、毛ほども考えていなかった事を。

「ど…。」

「ん？どした？」

「どこ触ってんだお前!？」

「ぶっ!？」

顔を赤らめた巴に殴り飛ばされる昇太。予期せぬセクハラをされた巴はノックアウトされた昇太を更に追撃するように蹴り始めた。その騒ぎはお互いの保護者が引き離すまで続いた。

昇太と巴の初会合はこんな感じで最悪と言っても過言ではないほどだったのだ。

昇太は後に父親から巴が女性であると教えられ無遠慮に女性の胸を触ってしまった罪悪感で頭を抱え、巴も昇太は気さくで優しい人物だと言うことを聞かされ、挨拶をしに来てくれた人物を殴り飛ばしてしまった罪悪感で頭を抱えたのだった。

それから、二人は何度か会う機会があったが…

「あ…ど、どうも…。」（怒ってる？怒ってるよな？）

「あ…こっちこそ…。」（怖がらせてしまったか？気まずいな…。）

その度に互いの機嫌を窺ってしまいぎこちない会話をするようになってしまったのだ。しかも二人とも罪悪感があるのがより一層気まずくさせてしまう。

ある時、昇太は巴の好物で関係が良くなるのではないかと考え振る舞ったことがある。

「そ、そうだ！俺、ラーメン作ってみたんだが、お前好きだろ？あ、べ、別に狙ってる訳じゃないんだ！」

「い、いやいや！そんな事考えてないから！そ、それでその、ラーメン食わせてくれよ。」

「お、おう！これだ。食ってくれ。」

「じゃ、じゃあ、いただきます…。…………。」

ぎこちないなりに会話が進む二人。巴が箸を取ってくれたおかげで昇太の顔に余裕が生まれる。巴は麺を箸で摘まみ、そのまま口へと運ぶ。

「…………。」

「ど、どうだ？。」

味を確かめるように目を瞑る巴に昇太は息を飲む。そして、

「塩っ辛い……。」

「あ……うん……ごめん……。」

この頃料理人を志している昇太なりの心遣いだったのだが、その技術が未熟なせいでまたも微妙な空気を流してしまう。そんな空回りを続ける日々だった。しかし、あることがきっかけでその関係が改善される出来事が起こる。

「あ……ど、どうしたんだ？なんかいつもより深刻そうな顔してよ。」

また店にやって来た巴の顔を見た昇太はいつもとは違う顔をしていた。まるで表情という蓋で抑えていた怒りが沸騰しているような顔だった。

また何かやらかしてしまったか？そう考えた昇太はいつも以上に恐る恐る尋ねると巴は昇太の肩に手を掴んできた。バン！と女の子にしては強力な肩叩きに体が跳ね上がる。そして巴は昇太の顔を見て叫んだ。

「頼む！助けてくれ！」

「……はい？」

聞いた話によると、妹のあこがいじめを受けていると言った内容だった。

どうやら加害者は前々からあこをいじめのターゲットに入れていたが姉という抑止力が存在したため動けなかった。しかし、その姉が小学校を卒業してしまい、後ろ楯が無くなったのをいいことにいじめ始めたらしい。最初はちよつとぶつかるといった感じだったが徐々にエスカレートしていき、今は髪を引っ張り回したり、泥玉を投げつ

けられる位になっているらしい。それで巴はあこの異常に気付いたのだ。その事を両親に話し、担任に報告したが、「子供のやることだから」の一言で片付けられた。

「…なるほどなあ。そりゃ辛いな。」

「でも、アタシじゃもうあこを助けられない…！どうすりやいいんだよ!? 教えてくれよ！昇太あ！」

手を伸ばしたいのに届かない。そのもどかしさに巴は涙声で喚きながら机を叩く。その様子を、昇太は真剣な表情で解決の糸口を探す。

「いくら子供のやることでも、やり過ぎは自殺や不登校に繋がる。…それに教師によっては加害者に問い詰めるんじゃないかと被害者に原因があつたんじゃないかと疑う事もある…。」

「なあ、教えてくれ…。どうすりやあこを助けられるんだ？」

目の前にいる少女は藁にもすがる思いで昇太に尋ねる。

昇太は深く考え込んだ後、解決の糸口を思い付いた。

「よし。俺に任せな。親父と俺のツテで何とかして見せる。」

その数日後、あこがいじめられている映像が動画サイトに投稿された。それは見事に大炎上し、学校側は記者会見を行う羽目になったのだ。

昇太は考えたのだ。もし学校が守らないなら不特定多数の人間に守ってもらおうと。少々やり過ぎな気もしたが知り合いが溺愛している妹の人生に多大な影響を与える可能性があつたから妥当だ。そう割り切ることにした。

それから一週間後、あこがようやく学校に通えるほど回復したと聞き、昇太は安堵の息を漏らすのだった。

「いやー、ありがとな。お前のお陰であこがまた笑えるようになったよ。」

土曜日、巴は昇太の父親の店で昇太にお礼を言った。その隣にはあこがいる。

「いいってことよ！困ってる人は放っておけない性分だからよ！」

「…ほんとに、ありがとな。アタシだけじゃあこを救えなかった。昇太にや、感謝しかないよ。」

「…おう。」

「ホントに…えぐっ、ありが、ひぐっ…。」

「お、おねーちゃん。あたしはもう大丈夫だから…！」

「あー、あー、もう泣くな泣くな。ほれ、俺のラーメン食って元気だな。」

泣き出す巴に慌てて慰めるあこ。そして昇太はラーメンを差し出した。巴は涙をぬぐいながらラーメンを啜る。

「どうだ？」

「塩っ辛い…。」

「まだまだ精進が必要かあ…。」

「でも…、美味しい…。」

「…そうか。じゃ、もつと旨いラーメンを作れるよう研究すつからよ。楽しみにしときな。」

「よー、巴！誕生日おめでとー！」

「よっ、昇太！待ってたぜ！」

今日もこの日がやって来た。誕生パーティーを開催してるラウンジに出前用の箱を持った昇太が現れ、巴は待ってましたと言わんばかりに喜ぶ。Afterglowの面々は今回もかと言いたげな表情をする。

「…？昇太、何を持ってきたんだ？」

ただ一人、首をかしげる玲。すると、昇太は自慢気に箱を開け、取り出したのはどんぶり一杯のラーメンだった。玲は思わず困惑する。

「…おい、何だよこれ。」

「何ってラーメンだろ。」

玲の質問に昇太はさも当然のように答える。

「そうじゃねえ。何でケーキとかある中でお前はラーメンなんだよ？」

「あー、そっか。れーくんは知らないか。」

「実はね、巴ちゃんの誕生日に昇太さんが研究したラーメンを食べて評価させてもらうのが恒例になってるんだ。」

「確か、中学の頃からだっけ？」

「そーそー、トモチんいつも厳しいんだよね。」

「今回はどうなのか、見ものだよね！」

蘭たちがそう話している間にも昇太はラーメンを巴の側にあるテーブルにラーメンを置く。そして、巴は箸を手に取り、手を合わせた。

「いただきます。」

巴がそう言うのと箸をスープに沈め、そして持ち上げる。スープに浸された麺が現れ、巴はそれを口へ滑らせた。

昇太は息を飲む。しばらく味を確かめるように口を動かし咀嚼する。

(…何だよこの空気。)

何故か口を出すのも憚られる緊迫した空気が流れ、玲は心の中で突っ込みを入れる。長いようで短い時間。そして、咀嚼し終えた巴は目を開く。

「ど、どうだ？」

昇太が巴に感想を求める。巴は腕を組んで悩むような動作をしてしばらくした後、頷き口を開いた。

「まだまだイマイチだな！」

「ちくしよおおおおお!!!」

巴の感想から昇太は大きな賭けを外したギャンブラーのように地団駄を踏む。見守っていたひまりたちからも「あーっ！」と声が上が

る。

「ちくしょう…今度こそ…今度こそは行けると思っただのに…!」
「まだまだ旨いとは言えないな!でも確実に去年より美味しくなってるぜ!もつと自信もてよ!最後までしつかり食ってやつからな!」
「と、巴えええ…。ヴあああああああ!!!」

落ち込む昇太に巴は慰めるように肩を叩く。慰められた昇太は情けないぐらいに大泣きをしてしまう。そんな風景を呆れた目で見ると玲は大泣きしている昇太に視線が集中しているのをいいことにさりげなくラーメンのスープを飲んでみた。

(…これって…。後で昇太に耳打ちしとくか。)

誕生パーティーがお開きとなり、それぞれ帰路に着く。

「いやー、家に帰った後もあこに祝われるんだらうなあ…。」

巴は独り言を言いながら歩いていく。その顔には満足げな表情が浮かんでいた。それだからだろう。後ろから近付く気配に気づかなかった。

「よっ、巴。」

「うおわあ!?!」

話し掛けられキュウリに驚く猫のように飛び上がった巴が振り向

くとそこには玲が立っていた。

「れ、玲!?!急に話しかけんよ、ビックリするだろ!」

「悪い悪い。で、お前。あの感想、嘘だろ?」

玲は謝りながらも鋭い目で巴を射抜く。すると巴は分かりやすいくらいにビックリと体を震わせた。

「な、何のことだよ?」

「昇太のラーメンの感想だよ。イマイチっての、嘘だろ?」

玲は目を細め、じろりと巴を睨み付ける。

「や、ヤダなあ〜!あれは本気だったの!お前も知ってるだろ?アタシがラーメン好きだって事。だから…その…」

「……………」

「…はい。嘘吐いてました。物凄く美味しかったです…。」

何とか建て直そうとした巴だったが、玲の氷のように冷たい懐疑的な視線には勝てず、素直に白状した。玲は直ぐ様、鋭い視線を解き、巴に嘘を吐いた理由を聞く。

「はあ、別に責める訳じゃないが、何で嘘を吐いたんだ?」

「その…実はな、最初出されたときからもういつもと違うなって気付いてたんだ。それで口にした瞬間、めちゃくちゃ美味しかったんだ。…でもな、もし、アタシが美味しいって言ったら、昇太は満足しちゃって作ってくれなくなるんじゃないかって、思ってたな…。」

申し訳なさそうに証言する巴。巴は自分にとってのいつも通りが無くなるのではと危惧していたのだ。玲はやれやれと言いたげに息を吐くと後ろを振り向く。

「だとき。昇太料理人？」

「…え？」

巴は耳に入ってきた言葉に釣られ、顔をあげる。すると、そこには先ほど以上に滝のような涙を流す昇太がいた。

「ど、ども”え”ええ…。」

「あ！しょ、昇太!?!いや、その、これは別に、」

「お前が旨いっで言っでも作っでだよお…。」

「巴、嘘を吐いた罰だ。昇太と一緒に帰りな。じゃ、俺はこれで。」

「お、おい!?!玲！置いてかないでくれえ!!」

悪戯っぽく笑みを浮かべた玲はそのまま走り去る。残されたのは、自分と自分より年上の癖にグズっている知り合いだけだ。巴はしばらく茜空を仰ぎ見て途方に暮れた後、決意したように昇太と向き合い頭を下げた。

「スマン！あのラーメンすっげえ旨かった！嘘を吐いたのは悪かったよ。許して…」

巴が精一杯謝罪の言葉を述べていると頭に手が置かれる感触があった。

「俺はな、お前が嘘吐いて失望して泣いてたんじゃねえんだよ…。ずずっ。嬉しかったんだよ…。すんっ。」

「昇太…。」

「あの時、塩辛いって言われてからどうやったら旨くなるのか、研究を続けてよ。何度も鍋をひっくり返したくなったことか…。ようやくその苦勞が報われて幸せだぜ！旨いって言ってくれたなら俺はもっと精進するぜ！」

「昇太あ……ありがとなあ!!」

商店街の一角。そこで二人の男女が暑い抱擁をしあってお互いの友情を確かめる。来年もまた、自分の為だけの特別ラーメンを作ってくれるだろう。それも変わらぬいつも通りとなつたのだった。